

2004 年度 修士論文

指導教員： 末田清子教授

論文題目

『日本語の発話：異文化間コミュニケーションの視点から』

Japanese speech: From a perspective of intercultural
communication

青山学院大学国際政治経済学

国際コミュニケーション専攻

新崎隆子

『日本語の発話：異文化間コミュニケーションの視点から』

目次

序章 本論文の概要

- 1. はじめに・・・1
- 2. 研究の意義・・・2
- 3. 研究方法・・・5
- 4. 本論文の構成・・・8

第1章 日本語コミュニケーションスタイルの特徴・・・10

- 1.0. はじめに・・・10
- 1.1. 言語と文化・・・11
- 1.2. 日本人の言語コミュニケーションの背景・・・12
- 1.3. 日本語のコミュニケーションスタイル・・・14
- 1.4. 日本語文の構造的特徴・・・15
- 1.5. 異文化間コミュニケーションにおける日本人の発言・・・18
- 1.6. 1章のまとめ・・・19

第2章 主語の消失と提示の遅れ・・・21

- 2.0. はじめに・・・21
- 2.1. 行為の主体を目立たせない日本語・・・21
- 2.2. 文章の主語表現・・・26
- 2.3. 異文化間言語コミュニケーションにおける日本語の主語表現・・・29
- 2.4. 主語表現とメッセージの伝達効率・・・31
- 2.5. 2章のまとめ・・・38

第3章 前置き表現のストラテジー・・・40

- 3.0. はじめに・・・40
- 3.1. ポライトネスとしての生垣表現・・・40

3.2.	テーマ・・・	47
3.3.	フレーミングの視点から見た日本語の発話・・・	54
3.4.	3章のまとめ・・・	58
第4章	ストーリーテリング・・・	60
4.0.	はじめに・・・	60
4.1.	日本語発話に見られるストーリー性・・・	60
4.2.	物語の特性・・・	63
4.3.	情意の伝達とストーリーテリング・・・	65
4.4.	4章のまとめ・・・	68
第5章	日本語発話スタイルの実際：2つの予備調査・・・	70
5.0.	はじめに・・・	70
5.1.	予備調査 1.質問に答える日本語発話と聞き手の理解への影響・・・	70
5.2.	予備調査 2.質問をする際の日本語母語話者と英語母語話者の比較・・・	80
5.3.	5章のまとめ・・・	91
第6章	発話スタイルと聞き手の受けとめ方：	
	2言語2スタイルの音声ニュース聞き取り比較調査・・・	93
6.0.	はじめに・・・	93
6.1.	先行調査実例・・・	95
6.2.	本調査：日本語音声ニュース聞き取り比較調査・・・	101
6.3.	本調査：英語音声ニュース聞き取り比較調査・・・	123
6.4.	6章のまとめ・・・	135
第7章	グローバル時代のコミュニケーションスタイル・・・	138
7.0.	はじめに・・・	138
7.1.	意図を明示しない日本語の発話スタイル・・・	140
7.2.	日本語の発話スタイルはどのように受けとめられているか・・・	141
7.3.	異文化間コミュニケーションにふさわしいスタイル・・・	148
7.4.	7章のまとめ・・・	156

結び . . . 158

文献目録 . . . 160

資料編 . . . 1－58

掲載図表一覧

序章

表 1.	日本で開かれた国際会議に招待された外国人講演者に占める 英語母語話者（NS）と英語非母語話者（NNS）の比率	3
------	---	---

第 6 章

表 6-1	日本語ニュース聞き取り調査： Part I A に対する感想	107
表 6-2	日本語ニュース聞き取り調査： Part I B に対する感想（全体）	109
表 6-3	日本語ニュース聞き取り調査： Part I B に対する感想（前半）	110
表 6-4	日本語ニュース聞き取り調査： Part I B に対する感想（後半）	111
表 6-5	日本語ニュース聞き取り調査： Part II B に対する感想	112
表 6-6	日本語ニュース聞き取り調査： Part II A に対する感想	114
表 6-7	日本語ニュース聞き取り調査： A タイプが好きである理由	115
表 6-8	日本語ニュース聞き取り調査： B タイプが好きである理由	116
表 6-9	英語ニュース聞き取り調査： Part I A に対する感想	130
表 6-10	英語ニュース聞き取り調査： Part I B に対する感想	131
表 6-11	英語ニュース聞き取り調査： Part II B に対する感想	132
表 6-12	英語ニュース聞き取り調査： Part II A に対する感想	133
表 6-13	英語ニュース聞き取り調査： A タイプが好きである理由	134
表 6-14	英語ニュース聞き取り調査： B タイプが好きである理由	134
図 6-1	日本語ニュース聞き取り調査： 参加者 43 人中タイプの 違いを感じた者の内訳	102
図 6-2	日本語ニュース聞き取り調査： 1 本目のニュースで 違いを感じた者の比率	103
図 6-3	日本語ニュース聞き取り調査： 2 本目のニュースで 違いを感じた者の比率	103
図 6-4	日本語ニュース聞き取り調査： パート別コメント数	103
図 6-5	日本語ニュース聞き取り調査： Part I A に対する感想	104
図 6-6	日本語ニュース聞き取り調査： Part I B に対する感想	104
図 6-7	日本語ニュース聞き取り調査： Part II A に対する感想	105
図 6-8	日本語ニュース聞き取り調査： Part II B に対する感想	105
図 6-9	日本語ニュース聞き取り調査： タイプ別好み	106

図 6-10	英語ニュース聞き取り調査：	参加者 30 人中タイプの 違いを感じた者の内訳	127
図 6-11	英語ニュース聞き取り調査：	1 本目のニュースで 違いを感じた者の比率	127
図 6-12	英語ニュース聞き取り調査：	2 本目のニュースで 違いを感じた者の比率	127
図 6-13	英語ニュース聞き取り調査：	パート別コメント数	127
図 6-14	英語ニュース聞き取り調査：	Part I A に対する感想	128
図 6-15	英語ニュース聞き取り調査：	Part I B に対する感想	128
図 6-16	英語ニュース聞き取り調査：	Part II A に対する感想	129
図 6-17	英語ニュース聞き取り調査：	Part II B に対する感想	129
図 6-18	英語ニュース聞き取り調査：	タイプ別好み	129
図 7-1	格調、分かりやすさ、親しみやすさの関係		145
図 7-2	日本語母語話者の受けとめ方		146
図 7-3	英語母語話者の受けとめ方		147

序章 本論文の概要

1. はじめに

異文化間における言語コミュニケーションは、発話者と聞き手が共通の言語に関する知識をもっていなければ成り立たない。最近では英語が国際的な言語として言語の壁を越えたコミュニケーションに使用されているが、現在、英語を話す人口 20 億人のうち非母語話者は 17 億人¹に過ぎず、世界の人たちが共通の言語を使って自由に話ができるようになる時代が、予見できる将来に到来するとは思えない。

一方で、金融や貿易の分野に始まり、通信技術の発達が一掃をかけたグローバル化は今や社会の多くの側面に広がる複合化された現象となり、個人の価値観にさえ影響を与えるようになった²。インターネットや電子メールを介して個人レベルの情報交換を日常的に行える技術ができたことは、異文化間コミュニケーションの促進にとって大きな進歩と言ってよいだろう。しかし、このような書きことばによるコミュニケーション技術の発達スピードに比べて、話しことばによる異文化間相互理解の研究ははるかに遅々としているように思える。日本政府は学校教育における実用英語の習得を重要視しているが³、英語の運用能力を身につけることが、日本人の異文化間コミュニケーション能力を高めることに等しいとは思えない。

本論文は、プロ会議・放送通訳者として、話しことばによる異文化間コミュニケーションの現場⁴におよそ 20 年間携わってきた筆者の視点から、公の場面での日本語母語話者の発話スタイルを、通訳を介してのコミュニケーションを切り口に分析し、それが異文化の聞き手にどのように受けとめられているかを探ろうとするものである。さらに、直接的な異文化間交流が増えるグローバル時代において、言語や文化の異なる人たちが参加する公の場面にふさわしい発話スタイルに関する提案を行い、日本が世界の人たちによりよく理解される方法

¹ 本名（1999）参照。

² Giddens(2000)参照。

³ 2002 年 7 月 12 日、文部科学省は『英語の使える日本人』の育成のための戦略構想を発表。

⁴ Sueda（1999）は、人は複数の社会的アイデンティティを持っておりアメリカ人と日本人でも異文化間コミュニケーションになるとは限らないと述べているが、ここでは言語や発話スタイルの異なる人たちの間でコミュニケーションが行われる場所と定義する。

を示すことが狙いである。

2. 研究の意義

近年、グローバル・レベルでの直接対話によるコミュニケーションの機会が増える中で、文化的背景の異なる人たちを相手に、発言の意図を、誤解を起さずに伝える技術の必要性が高まっている。

国際観光振興機構（J N T O）調査情報室によると、2003 年度に日本を訪れた外国人の数は 512 万人で 1 月から 11 月までの観光客数は 276 万人であった。残り 236 万人はビジネスその他の目的で訪日したと考えられる。このうち何人が国際会議やビジネスミーティングなどに参加したかは不明であるが、日常会話を超えた話し合いや議論を持った外国人の数は数百万人に及ぶと見られ、そのほとんどが通訳者を使ったと考えられる。

2003 年の春に日本で開催された世界水フォーラム(The Third World Water Forum)では、3 月 16 日から 23 日の会期中に、京都府、滋賀県、大阪府の 3 都市、7 会場合わせて 182 の国及び地域から 2 万 4060 人の外国人が参加した。メイン会場では日本語と国連の 6 公式言語（英語、スペイン語、フランス語、ロシア語、中国語、アラビア語）の同時通訳が行われ、350 の分科会では日本語と英語の同時通訳が行われた。動員された通訳者の数は日本語と英語の間の通訳でおよそ 130 人、国連公式言語の通訳でおよそ 50 人であった⁵。筆者は日英の通訳者として 4 日間分科会の同時通訳を行った。英語で発言した外国人の大半は非母語話者で、研究者だけでなく N G O のメンバーや大学生、一般市民も参加していた。母語への通訳サービスがつかない分科会でも、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジア、ロシア、南米からの参加者は英語で活発な意見交換を行い、通訳サービスがあるにも拘らずほとんど発言しない日本人参加者と対照的であった。

筆者は 20 年近く会議通訳を務めてきたが、最近日本で開かれる国際会議では圧倒的に非母語話者の英語が多くなったと感じている。英語と日本語のプロ会議通訳者で 10 年のキャリアを持つ H.O.さん（39 歳）によると、2003 年に引き受けた仕事のうち一般市民に公開された会議・シンポジウム 17 件に招待された外国人講演者及びパネリストは 123 人で、そのうち 35 人が母語話者（28%）、84 人が非母語話者（68%）と推定された。母語話者と非母語話者の

⁵ 世界水フォーラム事務局、2003。

区別は名前、出身国、経歴に関して得られた情報と会議中に聞いた英語を基に推定したが、判断のつかなかった人が4名いた。また、17件のうち、5件は母語話者がまったくいなかった。表 1.⁶に、会議名および英語の母語話者および非母語話者の比率を示す。

表 序-1. 日本で開かれた国際会議に招待された外国人講演者に占める英語母語話者（NS）と英語非母語話者（NNS）の比率⁷

	Name or purpose of the conference	Total number of foreign speakers	NS	NNS	Unknown
1	Threat to human security	9	3	5	1
2	Seeking Peace in an Age of Turmoil	6	0	5	1
3	International Symposium Commemorating the Opening of Okinawa Churaumi Aquarium	3	2	1	0
4	Future of Japan-US Alliance	4	4	0	0
5	Symposium commemorating the Opening of the International Exchange Center of Philosophy	10	4	5	1
6	International Symposium Diagnosis, Treatment and Regeneration for Sustainable Urban Systems	4	2	2	0
7	Terrestrail Digital TV in Europe and the U.S	4	4	0	0
8	International Symposium on African Day 2003	5	0	5	0
9	Norway-Japan Joint Symposium on Future Strategies Toward Gender Equality	4	0	4	0
10	International Symposium on Refugees in Africa	12	0	12	0
11	International Conference on Globalization with a Human Face	22	5	17	0
12	Asian Intellectual Property Symposium 2003	3	2	0	1
13	Public Forum on the 80th Anniversary of the Great Kanto Earthquake and International Disaster Reduction Day	2	2	0	0
14	International Symposium on Future of Earth	4	1	3	0
15	Building Capacity in Asia and Oceania	25	5	20	0
16	International Symposium on Odor Measurement	3	1	2	0
17	UN Day "Working for the UN"	3	0	3	0
	Grand Total	123	35	84	4

英語を使った異文化間の直接対話の広がりについて本名(1999)は次のように述べている。

英語は世界で最も広範囲に使われ、最も有効な国際共通語といえよう。一説によると、英語の話し手は20億人にもおよぶ。このうち、英語を「母語」とする人々は3億人、「公用語」とする人々は10億人、さらに「外国語」、あるいは「国際語」とする人々

⁶ 2003 年に日本で開かれた 17 の国際会議に招待された外国人講演者のデータ。プロ会議通訳者 H.O.氏から提供された資料から 2003 年度に筆者が作成。

⁷ NS: native speaker, NNS: non-native speaker.

は7億人にもなる。世界の人口が60億人として、3人に1人が程度の差こそあれ英語をいろいろなふうに使っている勘定になる。 本名(1999、p.10)

今や国際会議は、**non-native** の話す英語を比べる絶好の機会になったとも言える。筆者が経験する国際会議は同時通訳を使う会議なので、英語の苦手な日本人スピーカーがいるというのが前提だが、一般的に日本人の発話スタイルは英語であれ、日本語であれ異文化間対話の場面に適応できないという強い感想を持っている。日本人は反応が遅く、何が言いたいのかはっきりしない。外国人参加者が表面的には敬意を示しつつもうんざりした表情を浮かべていることも多い。時間の限られたシンポジウムでは、議論の輪からはじき出されてしまうこともある。日本人が異文化間対話に参加する多くの場面に立ち会ってきた経験から、筆者はこのような現象は英語を話す能力の問題というよりも、日本人独特の発話スタイルによるものと考えに至った。

経済のグローバル化と国際競争の激化に対応するために、日本政府は「英語を使える日本人を育成するための戦略構想」⁸を立ち上げ、実践的英語教育に力を入れている。国際コミュニケーション能力を強化する必要性が英語教育の問題にすりかえられているのである。しかし、英語ができれば異文化間対話は可能になるのか。日本語で話している時に反応の遅い人が、英語に切り替えさえすればタイミングよく的確な回答を与えることができるようになるのか。「何がどうした」という発言の要点が、日本語から英語になったとたんに明瞭に表現されるようになるのか。英語教育を拡大しても、日本人のコミュニケーションスタイルを分析し、意思伝達のプロセスの特徴を明らかにしなければ、異文化間コミュニケーション能力は強化されないと考える。

日本人の話しことばが「あいまい」で、言いたいことがはっきり分かりにくいという感想は日本人同士の会話においても持たれることが多く、Maynard(1997)や 徳永 (1994) など語用論の視点からの指摘があり、また Hinds(1986)、Tokunaga(1996)など日本語と英語の比較研究も行われている。異文化間コミュニケーション研究は、Barnlund(1973)、Hall and Hall(1987)、Scheff(1990)、Sueda and Wiseman(1992)、Ting-Toomey and Oetzel(2002)や Kowner(2002)など、文化的背景がコミュニケーションスタイルに及ぼす影響に焦点を当てた研究が多く、異なる文化を持つ者同士がお互いの発話スタイルを実際にどのように感じているかに関する直接的な研究としては、Bardovi-Halig(2001)、Kotani(2001)、直塚 (1980)、大橋 (1995)、

⁸ 2002年7月12日、文部科学省発表。

Watanabe(1993)、などがあるが、いずれも個人的な発話を取り上げており、公的スピーチを研究したものは、筆者の知る限り見当たらない。

本研究では、国際会議や放送など公の異文化間コミュニケーションにおける、日本語発話を取り上げる。日本語から英語への同時通訳を観察することで、日本語発話のメッセージ伝達プロセスを検証し、さらに、同時通訳の手法を用いて日本語の発話スタイルと英語の発話スタイルに対する聞き手の受けとめ方を比較する。

英語母語話者が日本語の発話スタイルをどのように受けとめているかを調査するためには、参加者に日本語を聞き取る能力があることが前提となるが、日本語スタイルを維持した英語への同時通訳を用いた聞き取り調査を行うことで、言語から切り離れた発話スタイルのみを聞き手の視点から比較することができる。また、メッセージの伝達効率や聞き手の理解度は、これまでスピーチなどを聞き終わった後で質問に答えるという聞き取りテストでしか測れなかったが、これでは、音声情報を聞いている時の理解の様子をリアルタイムで観察することはできない。また、文章の内容が最初から明示されるスタイルと、重要な情報が文末に置かれる発話スタイルに対する聞き取り理解の差異は観察できない。日本語を母語とし、高度な英語の能力を備えた通訳者が行う同時通訳を観察し、通訳者がリアルタイムで日本語の発話情報をどのように理解しえたかを見ることで、聞き手の負担を探る手がかりが得られる。本研究には、異文化間のコミュニケーションにおいて、日本語の音声コミュニケーションスタイルが相手にどのように受けとめられているかを明らかにし、日本語発話者の意図をより正確に伝えるための新しいコミュニケーション技術を探る意義があると考ええる。

3. 研究方法

3.1. 研究設問

本研究は先行研究と実験調査により、次の3つの研究設問の答えを探ろうとするものである。

1. 日本語の発話は、なぜ発話の意図を明らかに示さないスタイルを取るのか。
2. 日本語の発話スタイルは異文化間コミュニケーションの場面でどのように受けとめられるか。
3. 円滑な異文化間コミュニケーションに適した発話スタイルとはどのような

うなものか。

3.2. 研究で扱う発話の種類

本研究は、国際会議や放送番組での発言、TV ニュースなど、公的な性質を持つ音声情報で以下に示す特徴を供えた言語コミュニケーションを扱うものとする。

- ① コミュニケーションの参加者は、外国人を含め日常的な情報交換の場を共有しない者を含み、暗黙の了解による意思疎通に頼ることができない。
- ② 音声で表現され、聞いて理解されることを前提とする発話。
- ③ 情報、知識、意見、考えなど、まとまった内容を持つ発話。
- ④ 話し手が聞き手に対して、しぐさや表情などの非言語的手段ではなく、言語表現により内容を伝えたいという意図を持っている。

3.3. 研究手法

本研究では、日本語の発話スタイルに対する聞き手の受けとめ方を調べる実験調査により、日本語母語話者と英語母語話者を比較した。この本調査を行うに当たり、その準備として2つの小規模な予備調査を行った。予備調査の目的は、公的なスピーチではあるが話し手が聞き手を強く意識する発話において、先行研究で明らかになった日本語発話の3つの特徴(主語の消失と提示の遅れ、前置き表現のストラテジー、ストーリーテリング)がどのように現れるかを観察することである。予備調査1は、聞き手に自分の意図を伝え、説得したいという動機に基づく発話、予備調査2は相手から情報を引き出す目的で行われる発話を扱った。本調査では、不特定多数の聞き手に客観的な事実を伝えるという、話し手と聞き手との関係性の薄い中立的な発話を使い、聞き手の受けとめ方を調べた。予備調査2と本調査の実施手続きについては高橋・渡辺・大淵(1998)を参考にした。

以下に、二つの予備調査の概要とその必要性、および本調査の概要と分析方法を示す。

3.3.1. 予備調査1. 日本語発話に対する日本語母語話者の聞き手の理解

予備調査1では、NHKが放送したインタビュー番組における政治家の発言

と、その英語への同時通訳を比較し、日本語母語話者である通訳者が聞き取り損ねた部分が日本語発話の特徴と重なるかどうかを観察した。先行研究⁹は、日本語の発話が母語話者間においても、分かりにくいと感じられることを示唆しているが、筆者の知る限り、何故そう感じるのかについてまで言及している研究はない。そこで、日本語母語話者である通訳者による同時通訳を観察することにより、日本語の発話を母語話者の聞き手がリアルタイムでどのように理解しているかを調べた。

日本語が母語であるが英語とのバイリンガルに近い環境で育ち、高度な同時通訳技術を有する者が日本語を英語に同時通訳するとき、内容が正確に理解できたものについては遅滞なく英語への通訳を行うことができる。しかし、内容がすぐに把握できない発話では訳語の遅れや誤解が生じ、通訳に支障がでる。このリアルタイムの聞き取りのプロセスは通訳者だけでなく、日本語母語話者である聞き手すべてが共有するものであり、すぐに分からない発言は情報の処理が遅れ、理解の修正を必要とするため、聞き落としや誤解を引き起こすと思われる。この予備調査の結果を踏まえ、本調査では日本語発話に対する日本語母語話者の反応だけでなく、「分かりにくい日本語」の特徴を備えた発話スタイルの英語の発話を用意し、英語母語話者がどのように受けとめるかを比較する。

3.3.2. 予備調査 2. 同一場面における日本語母語話者と英語母語話者の発話スタイルの比較

この調査では、同一の状況において相手からの情報を求める際の発話スタイルが母語の違いによってどのように異なるかを調べた。先行研究で日本語発話スタイルの特徴を分析し、予備調査 1.では日本語発話の特徴と日本語母語話者である聞き手の反応について調べたが、異文化間の理解についてはほとんど触れていない。日本語母語話者同士でも分かりにくいことから、非母語話者が聞き手であればなお分かりにくいであろうという推定に留まっている。先行研究（Sueda and Wiseman,1992.など）には「恥」の概念など文化的な差異に注目した異文化間比較研究は多いが、筆者の知る限り「情報の分かりやすさ」に焦点を当てた研究は見つからない。

この予備調査では、日本人、アメリカ人、イギリス人のジャーナリストに、ある状況を想定したインタビューを依頼した。参加者には「コミュニケーションスタイルに関する調査」と説明し、質問をする相手の状況設定をあらかじめ

⁹ Maynard (1997) など。

書面で知らせた。調査では筆者がインタビューを受ける人物の役割を演じたが、相手の質問に対して答える以上の働きかけはしていない。インタビューをテープに録音し、事後に発話の意図の明示という観点から質問の仕方を分析した。また、インタビューを受けた日本人母語話者の感じ方にも注目した。情報を求める発話スタイルが日本語母語話者と英語母語話者でどのように異なるかを調査することは、この後の実験調査で、日本語の特徴を備えた発話スタイルに対する日本語母語話者と英語母語話者の受けとめかたの比較を行う上で、有用であると考えた。

3.3.3. 本調査

本調査では、異なったスタイルで提示された音声情報の受けとめ方を調べた。

スタイルも言語も日本語の発話と、スタイルも言語も英語の発話、および日本語の発話スタイルで作成された英語の発話、英語の発話スタイルで作成された日本語の発話からなる2言語2スタイルの音声ニュースを用意して、日本人とアメリカ人大学生を対象に聞き取り調査を行なった。

日本人大学生の調査は国内の大学の教室に筆者が出向き、調査用紙を配布して「ニュースの聞き取り調査」と説明した上で行った。アメリカ人大学生の調査はアラスカ大学の教職員に依頼して実施した。日本とアメリカの調査条件ができるだけ同等になるように、対象者はそれぞれ日本語、英語の母語話者に限定し、実験の教示は書面で行って口頭での説明が最小限になるようにした。参加者のコメントは書面で受け取り、野外観察の分析手法として開発された KJ 法¹⁰を用いて分析した。分析結果に基づき、日本語と英語の発話スタイルに対する、日本語母語話者と英語母語話者の受けとめ方について考察を行った。

4. 本論文の構成

本論文は3つの部分から構成される。第1章から第4章までは、先行研究を中心に日本語の発話スタイルの特徴を分析し、その中から異文化間コミュニケーションの場面で聞き手の理解を妨げられる特徴を選び出した。第1章では日本語コミュニケーションスタイルの特徴を文化的視点から明らかにし、異文化間の理解に支障となる3つの特徴を提示する。次に続く3つの章では、第1章で指摘した3つの特徴のそれぞれに詳細な考察を加える。すなわち、第

¹⁰ 川喜多(1967) 参照。

2 章は主語の消失と提示の遅れ、第 3 章は前置き表現のストラテジー、第 4 章はストーリーテリングを取り上げる。

2 番目の部分は実証研究を試みた第 5 章と第 6 章である。第 5 章では、本調査の準備として行った 2 つの小規模予備調査の結果を分析する。予備調査 1. では、公の場面での日本語発話の実例として、テレビで放送された国内向けの日本人政治家の発言とその英語同時通訳を比較した。日本語発話の 3 つの特徴が日本語母語話者である同時通訳者の理解の妨げになっているかどうかを観察する。予備調査 2. は設定されたインタビュー場面における日本人、イギリス人、アメリカ人ジャーナリストの質問の仕方を「分かりやすさ」の視点から分析する。第 6 章では、この研究の本調査である実験調査結果の分析を行う。日本語の発話スタイルと英語の発話スタイルに対する聞き手の受けとめ方を観察し、日本語母語話者と英語母語話者の違いを明らかにする。

3 番目の部分は本論文の結論として、第 7 章に日本語母語話者が異文化間コミュニケーションの場面で発言する際に適した発話スタイルの提言を行う。

第1章 日本語コミュニケーションスタイルの特徴

第1章の目次

1.0. はじめに

1.1. 言語と文化

1.2. 日本人の言語コミュニケーションの背景

1.3. 日本語のコミュニケーションスタイル

1.4. 日本語文の構造的特徴

1.5. 異文化間コミュニケーションにおける日本人の発言

1.6. 1章のまとめ

1.0. はじめに

近年、世界中の人たちが直接対話を行う機会が急速なスピードで増加している。言語を介した異文化間の交流はコンピューター画面のようなバーチャル世界にとどまらない。EU の拡大に見られるように、人、もの、金の自由な動きは今後ますます加速されるであろう。異言語間の理解を可能にするため、国際共通語としての英語の役割が重要視され、「使える英語」の普及をめざす文部科学省の戦略構想に沿って、小学校のカリキュラムに英語教育が導入された。しかし、単に母語を英語に置き換えるだけで異文化間コミュニケーションは成立しうるのだろうか。

筆者は 20 年間、多くの国際会議の同時通訳を行ってきたが、異文化間コミュニケーションの場面において、日本語の話者が他の言語を母語とする話者に比べて、正確な意図の伝達に失敗し誤解を招くことが多いという感想を抱いている。その原因は何であろうか。この疑問に対する答えを探すためには、まず、日本語母語話者における言語コミュニケーションの特徴を調べるところから始めなければならない。本章では Maynard (1997) を軸に、日本語コミュニケーションスタイルの特徴を明らかにし、異文化間環境において発話の意図の伝達に障害を及ぼすと思われる原因を探る。

1.1. 言語と文化

言語と文化の関係については有名なサピア・ウォルフの仮説(Sapir-Whorf Hypothesis)がある。末田・福田(2003)は「人間は自分たちの社会にとって表現の手段となっているある特定の言語によって多く支配されており、基本的に言語を使うことなく現実に適応することが可能だと考えるのは幻想である」(p.77)とするサピアとウォーフ(1995)を引用し、言語がその言語を話す人の思考を支配するとする言語決定論(linguistic determinism)と思考に影響を与えるとする言語相対論(linguistic relativism)の二つの解釈があると説明している。末田・福田(2003)は現在では後者の解釈が主流であり「概念は社会的に構築されたもので、文化によって違う」とする文化相対主義の基盤となっているとしている。

Maynard は Wertsch (Maynard,1997)を引いて「よく似た社会経験を共有する者には共通の思考の構造やプロセスがある」(p.4)とし、さらに Bakhtin(Maynard,1997)の social language という概念を取り上げて「言語の社会性」という側面を示唆している。この点について Wertsch (1991)は次のようにのべている。

Certain patterns of speaking and thinking are easier, or come to be viewed as more appropriate in a specific setting than others. (Wertsch 1991, p. 38)

ある特定の話し方や思考はある特定の状況においてより適切だとみなされる。¹¹

Maynard は“Any language is indirectly and diffusely associated with the ways its speakers think of themselves and their societies”(Maynard 1997, Preface)と述べ、言語は話し手の自己認識や社会観と関連しているとしている。筆者も、このように言語が文化や社会に共通の思考構造の中で発達し、また使い手の思考に影響を及ぼすことによりさらに共通の思考構造を作り上げる働きをとするならば、言語は使い手の独特の自己認識や社会観と密接な関連性を持つだけでなく、その社会に特有なものの考え方を反映する「社会的言語」として重要な機能を持つことになると思う。しかし、もし言語が文化的背景を抜きにしては解釈しえないものであるとすれば、外国語を話す又は同時通訳を介しての異文化間の言語コミュニケーションは信頼のできないものになってしまう。

¹¹訳は筆者による。

では、日本で毎日のように開かれている国際会議で、外国語や通訳を介して行われている無数の異文化間言語コミュニケーションは何を伝えているのだろうか。文化や社会的言語を異にする者同士のコミュニケーションがしょせん不可能だと諦めていては、グローバル時代を生きることにはできないのである。日本人は異文化間言語コミュニケーションにおいて如何に、また何を伝えることができるか。この問いに答えるために次節では日本人コミュニケーション行動の背景にある文化的特徴を明らかにする。

1.2. 日本人の言語コミュニケーションの背景

Maynard(1997)は日本人の根本的な文化的特徴を self(自己)の概念に求めている。「日米の文化比較において認められる最も顕著な違いは自己 (self) と社会の関係についての理解である」(p.18) ¹²とし、日本人は社会との関係性において自己概念を形成するが、子供は社会への適応を促すトレーニングを受け、成長するにつれて個性を表現するようになる。つまり、社会が基礎になって自己が作られると述べる。これに対し、アメリカ人は成長の過程で独立した自己の概念を発達させる。その self の概念は根本的なものであり、社会に適応することよりも個性を発揮することの方により重点がおかれるとする。

Maynard(1997)は日本及び日本人の特徴としてよく指摘される「集団志向」「恥を重んじる」「直感的、感情的」「和の精神」「ハイ・コンテクスト」の5つをあげているが、筆者はこの5つを二つのグループに分けた方が良いと考える。「集団志向」「恥を重んじる」「和の精神」の3つは、社会との関係において自己を捉える日本人が、集団の中における自分の位置を重要視することを表している。しかし、他の二つ「直感的、感情的」と「ハイ・コンテクスト」は自己概念そのものではなく自己概念の言語表現に関する特徴と位置付けたほうがより適切である。

Maynard(1997)は「日本語は米語に比べて、感情的表現が豊かであり、それは話者の心理的、社会的、状況的コンテクストとの関係によって影響される」と述べている(p.83)。これに対し、アメリカ人はイントネーションや顔の表情など非言語コミュニケーション手段を用いることが多く、これらの手段を使うことの少ない日本人を「感情をソトに表さない」と感じているという。

Hall and Hall(1987)は社会におけるコミュニケーションのスタイルを「ハイ・コンテクスト」と「ロー・コンテクスト」という角度から特徴づけた。

¹² 訳は筆者による。

A high context (HC) communication or message is one in which most of the information is already in the person, while very little is in the coded, explicit, transmitted part of the message. A low context (LC) communication is just the opposite; i.e., the mass of the information is vested in the explicit code.

Hall and Hall (1987, p.8)

ほとんどの情報がすでに既知のものであるために記号化する必要がない「ハイ・コンテキスト・コミュニケーション」と明示的な記号化が必要な「ロー・コンテキスト・コミュニケーション」に分けると、家族や友人、同僚など広範な情報ネットワークを持ち、緊密な人間関係を持つ日本、アラブ、地中海諸国の人たちは「ハイ・コンテキスト」に属するという。これに対し、Maynard(1997)は日本でもコメントや対人関係に関する情報はよく言語化されていると反論し、いわゆる **low-context society** とされるアメリカやヨーロッパ諸国とは、ただ言語化される情報の種類が違うだけであると指摘している。

Maynard(1997)はこの他にも、日本人の特徴としてあげられる「ウチ」と「ソト」、や「オモテ」と「ウラ」、さらに土居(1971)の「甘え」の概念にも触れ、これらの概念は他の文化にも見られる普遍的なものであり、日本人のステレオタイプとして誇張されることを警告している。

Maynard(1997)は一貫して、日本人の行動や言語における表現の特徴を「性格的特徴」と混同しないよう気をつけている。例えば日本の文化において集団に属することが重要視される傾向があることは認めるが、日本人の社会的行動の特徴を見るには集団のメンバー間の関係性に注目する方がよい。「ウチ」と「ソト」の区別はすべての文化に存在するものであり、日本語はこの区別をはっきりと表現するコミュニケーション戦略をとる。さらに土居(1971)が **psychological and emotional dependence** と説明した「甘え」はアメリカ人にも見られるが、それをコミュニケーション行動に表現することが子供っぽいとされているために抑制されるのに対し、日本人の間では感情の自由な表現を許す社会契約の一部と考えられている。つまり、日本人は他の誰かからそれを受け入れたいとする欲求のサインを受け取ったときに、甘えを表現するのだとしている。

緊密な人間関係を持つ日本社会では暗黙の了解が重要な意味を持つ。情報が誰にでも分かる記号になっていない社会は、ソトから入ろうとする者にとって敷居の高い社会である。このような社会に住む人たちはどのようなコミュニケーションを行っているのでしょうか。Maynard(1997)は、それを分析する手が

かりはコンテキストとの **relationality** にあるという。次節では、日本語のコミュニケーションスタイルを **relationality** の側面から検証する。

1.3. 日本語のコミュニケーションスタイル

Maynard(1997)は日本語の文章では、話者がこれから何を話すか(トピック)を述べ、その後で自分のコメントを加えるという構造が支配的であると述べている。

Sentence structure is dominated by the topic-comment relationship, where the topic, what is being talked about, is followed by the speaker's comment on it.

Maynard (1997, p.1)

と述べ、さらに、行為の主体(agent)は文法的な機能を与えられてはいるが、トピックのような他の要素がそれと同等に重要であるとしている。

This gives some Japanese expressions a nonagent orientation(knowing the agent of an action is less critical).

Maynard (1997,p.1)

また、名詞句が頻繁に使われ、発話者のコメントを表す手段として使われていることから、Maynard(1997)は日本語の特徴を“**rhetoric of commentation**”と呼んでいる。

この指摘は、筆者が国際会議の場面で観察した日本人の発言スタイルと一致する。外国人が英語で「あなたの意見はどうか」という直接的な質問をしても、日本人はまず「X Xにつきましては」とトピックを提示し、「ゆゆしきことだと思っております」とか「前向きに取り組もうと思っております」のような答え方をすることが多い。しかも最初のトピックの提示部分が大変長く、質問に答えるというよりは、自分が述べたトピックに対するコメントと言う形を取る。

以下は筆者が日本で開かれた国際会議で聞いた日本人発表者の発言をもとに、作成した一例である。

こういった保安対策の舞台だけではございませんで、G8 において、あの首脳レベルでも非常に大きな関心事になっておりまして、先ほどの検査対策についても合意事項として実施期限という風に申し上げましたけれども、こういう形で非常に熱心な取り組みが進められているのは私としてもたいへん喜ばしいことだと考えております。

このような **topic-comment structure** と **nominal predicates** の使用に見られる特徴を Maynard(1997)は日本人の **relationality** に対する独特な認識によって生み出されたものだとし、次のように述べている。

Likewise, although verbal predicates occur in Japanese,... nominal predicates are also prominent, where the event as a whole is portrayed in a nominalized expression, and the speaker's personal evaluation and attitude are added as comments. These features of Japanese indicate that relationality plays a part not only in how participants behave in communication but also in how participants form concepts.

Maynard (1997, p.21)

Maynard(1997)は「誰が誰に何をした」という **verbal predicate** を「誰が誰に何をしたこと」のように名詞化することで、話し手はその出来事と自分の間に距離を置くことができ、同時に **formality** や **politeness** などの **relational cue** を用いて自分の姿勢を表すことができと述べている。また、英語には **rhetoric of commentation** の特徴は見られず、特にアメリカ人は関係性を示すのに言語表現ではなく、イントネーションや表情など非言語メッセージを使っているとする。そして、日本人は自分と社会の関係性を重要と考え、それを言語表現で示す特徴があると結論づけている。

では、そのような特徴を持つ日本語を母語とする人たちが異文化間コミュニケーションの場面に遭遇した場合、どのようなことが起こるのか。次節では、異文化間コミュニケーションの視点から日本語文の構造的特徴を論じる。

1.4. 日本語文の構造的特徴

Maynard(1997)が指摘する日本語文の特徴の中から、特に異文化間コミュニケーションの場面で問題になると思われるものを選んだ。

1.4.1. 文章構造における省略

Maynard(1997)は、日本語の文章では、事前の了解や暗黙の理解によって言わなくても分かることは省略するのが普通であり、不必要なことまで言うのはむしろ言語スキルの貧しさの表われと受けとめられると指摘する。筆者は、主語や動詞なしにことばが交わされる日本語を母語とする人と、それらなしには文章が成立し得ない英語の話者がコミュニケーションを図る場面では、適応の

ための相互的な努力が必要だと考える。

1.4.2. トピック

Maynard(1997)はトピックを“the element in a sentence that is talked about”と定義し、次のような具体例を示している。

1. I saw that movie already.

2. That movie, I saw (it) already. (Maynard, 1997, p.106)

1が英語の構造で、2が日本語に多く見られる topic-comment の構造としている。この文章は日本語に訳すと「その映画なんだけれど、もう見たよ」のようになる。Maynard(1997)はトピック構造を単文レベルで論じているが、筆者は、異文化間コミュニケーションの場面で重要なのは発話の全体的構造であるので、トピックの概念を拡大し、発話の「テーマ」という視点から捉える方がより現実的であると考ええる。

1.4.3. 名詞化

名詞化(nominalization)について、Maynard (1997) は日本語の談話の中に頻繁に出てくる言語操作のひとつであると述べて、具体的には「何々すること」のように先行する節を（形式）名詞で受けて、全体を名詞句にする操作であると説明している。さらに、池上（1991）は、日本人は「誰が何をした」という表現よりも「ある事象が起こった」という表現を好むと述べている。これは、筆者が国際会議の同時通訳の場面でたびたび遭遇し、通訳に困る表現である。たとえば、「残念ながら、この政策は打ち切られることになりました」など、あたかも自分とは無関係の自然現象について話すような言い方が多く、編集する時間的余裕のない同時通訳では、原文どおり“**Unfortunately, this program will be terminated.**”のような英語になるが、このような文章がいくつも続くと、行為者（agent）を特定したくないという意図があるのではないかという疑念を生ずる可能性がある。

日本語を理解できる外国人が、通訳を通さずに直接日本語の発言を聞く場合は、「日本語」という言語の文化的背景や特徴を承知している、若しくは、自分の母語と異なる特徴をもつ可能性を想定している。しかし、同時通訳を通して聞いた場合、耳に入るのは英語である。自分がコップを壊したことを「コップ

が壊れた」と表現した場合「日本語の発話」という前提のもとならば誤解が生じないが、言語だけを英語にして“The cup is broken.”と訳した場合には、普通は行為の主体(agent)を明確に示すという英語の特徴に違反することになり、発言者の意図が誤解されるのではないかと懸念する。

1.4.4. 自分のことについて語る

Maynard(1997)はしばしば、日本人は感情を表すのに、ジェスチャーなどの非言語的手段よりも言語表現を使うと指摘している。そして、Watanabe(Maynard, 1997)を引用し「日本語がもっとも日本語らしいと思えるのは、話者の態度や姿勢(attitude)を表す表現がたくさん挿入されている時である」(p.193)¹³と述べている。それは命題的な情報を表現する様態を通して、話者は自分自身のストーリーを語っているようだとし、次のように述べている。

Sharing emotional vulnerability enhances the sense of involvement in the interaction. The significance of the prepositional meaning diminishes; the personal narrative, brimming with personal and interpersonal feelings, gains ascendancy over mere facts. Maynard (1997, p.194)

国際的なシンポジウムの席で、日本人のパネリストや参加者が本論から離れて、個人的な経験を話し始めることがある。「あなたの会社には何人の従業員がいますか」という単純な質問に、「今思えば、会社を立ち上げた20年前は・・・」と長い苦労話が始まる。自分がどれだけ苦労し、頑張ってきたかを切々と語り、最後に「今は従業員が200人になりました」と結ぶ。これは、Maynard(1997)が指摘するように、sense of involvementを高める狙いがあり、事実に関する情報よりも、自分の気持ちや相手との感情的な交流が優先されていると考えられる。

Maynard(1997)は、このような自分の感情や姿勢の表現を重視するコミュニケーションスタイルは、relationalityを重視する文化背景に基づくものであるとしている。このようなスタイルが異文化間コミュニケーションに持ち込まれると、非日本語話者を戸惑わせることになる。「従業員の数を尋ねたのに、何故すぐに答えないのだろうか。何故、ここで昔の話が出てくるのだろうか」という疑問を持つのは、むしろ当然だと思われる。

¹³ 訳は筆者による。

では、実際に異文化間コミュニケーションにおいて日本語発話スタイルはどのように受けとめられているのだろうか。次節では、日本語の感覚で良かれと思って行った発話が、予想外の影響をもたらす可能性について論じる。

1.5. 異文化間コミュニケーションにおける日本人の発言

日本人の母語による発言スタイルが、非日本語話者にどのように受けとめられているかを示す研究は少ない。Maynard(1997)は英語を学んだ日本人が“I think”を使い過ぎる傾向を指摘し、アメリカ人に「くどい」(repetitive)、「自己主張しすぎ」(opinionated)という印象を与えていると述べている。Maynard(1997)は、日本人が“I think”を多用するのは、日本語のコミュニケーション・ストラテジーをそのまま当てはめて、「こう思う」を付け加えれば、協力的で友好的な感じを与えると思うからだ、アメリカ人には率直な話しの方が協力的だと受けとめられるとしている。つまり、異文化間コミュニケーションの場面では、意図は同じでも、使用されるコミュニケーション・ストラテジーが異なるために、誤解が生まれる可能性がある」と指摘しているのである。

Kotani(2001)はアメリカの大学に学ぶアメリカ人学生と日本人学生の会話を観察する実験で、日本人とアメリカ人では“I’m sorry.”を使う目的が違うことを明らかにした。日本人は謝罪というよりは相手に負担をかけてしまったことに対する謝意と恩義の交じり合った感覚を表現するために“I’m sorry.”を使うため、アメリカ人が「謝る必要がない」と感じるような時にも“I’m sorry.”を頻繁に使うことから、「本心がわかりづらい」「不誠実である」という否定的な印象を引き起こす可能性がある」と指摘している。

Sueda & Wiseman(1992)は embarrassment (当惑するような状況)におけるコミュニケーション上の対応に関する日米比較を行い、個人の対応を決定する要因として文化、当惑の種類、および社会的地位の違いの三つを指摘した上で、文化がもっとも強い影響を与えると示唆した。当惑するような状況に直面すると、アメリカ人は日本人に比べて、弁明する(justification)、事実を説明する(statement of the fact)、ユーモアを使う(humor)、攻撃的な態度(aggressiveness)にでるなど自律性を維持する方略(autonomy-preserving strategies)を多く使っていることが分かった。弁明し、笑い話にして緊張を和らげ、誰かのせいにして責任を免れるなどの戦略は個人主義的文化を反映するが、一方、集団主義的文化を持つ日本人は、個人よりも自分の所属するグループの見方や目標を重要視することが確認された。

さらに謝罪などの了解を求める方略については、強い文化的影響は認められ

ないとしながらも、当惑する状況の種類によっては対応に差異があったとしている。すなわち、日本人は人違いをした時(misidentification)よりも期待に応えられなかった時(failed expectation situations)の方がより多く謝罪を使っている。そしていずれの状況においても、アメリカ人よりもよく謝罪をしているとしているとし、この傾向は日本人の相互依存的な対人関係(interdependent relationship)のスタイルを反映していると述べている。

この Sueda & Wiseman(1992)の研究は日本人とアメリカ人が当惑する状況を共有した際に、お互いにどのようなコミュニケーション行動を取るか、その時どのような相互反応や誤解が生ずるかを予測する上で、重要な手がかりを与えている。

1.6. 1 章のまとめ

本章では、日本語のコミュニケーションスタイルの特徴について Maynard(1997)を中心に先行研究を概括した。その結果、これまでに指摘された特徴は、筆者が20年近く国際会議やシンポジウムなどの異文化間コミュニケーションの場面で観察してきたものと多くの点で一致することが分かった。

日本語から英語への同時通訳をする際に、一番困るのは、「何がどうした」という主述部の提示が遅れることだ。発話文が完結した後で通訳を行う逐次通訳に比べて、発話の順序に従いリアルタイムで行う同時通訳では、文章の構成要素がどのような機能を果たしているか、話者が全体的な発話の意図をきちんと示す表現を選択しているかどうかでコミュニケーションの質を決める。

一般聴衆に向かって行うスピーチは暗黙の了解に頼ることのできる「ウチ」のコミュニケーションのようなわけには行かない。従って、同時通訳者が困るようなスピーチは外国人だけでなく、「ソト」から来た日本語母語話者にとっても理解しにくいものではないかと考える。

以下の章では、異文化間コミュニケーションの場面で特に問題になると思われる次の3つの特徴についてさらに詳しく論じる。

1. 主語の消失と提示の遅れ

文章構造の省略のうち、とくに主語の消失と提示の遅れは、行為の主体(agent)がはっきりしないという点で理解を阻害する。

2. 前置き表現のストラテジー

発話の本題に入る前に、まずトピックの提示に長い時間をかけ、ま

た動作を名詞化して、自分と距離をおくような表現スタイルは、求められている答えをストレートに出さないという特徴を作っている。

3. ストーリーテリング

日本人は、事実に基づく情報よりも、感情的なやりとりを重視する傾向があり、しばしば唐突と思えるような脱線が起こる。

第2章 主語の消失と提示の遅れ

第2章の目次

2.0. はじめに

2.1. 行為の主体を目立たせない日本語

2.2. 文章の主語表現

2.3. 異文化間言語コミュニケーションにおける日本語の主語表現

2.4. 主語表現とメッセージの伝達効率

2.5. 2章のまとめ

2.0. はじめに

国際会議など、言語や文化を異にする人たちがコミュニケーションを行う場面で、日本語の発言が分かりにくいとされる原因の一つは、主語が明示的に表現されないことである。水谷（1979）が「外国人の学生にとっては、このように、いわゆる主語の表われない文は苦手である」（p.36）と述べているように、筆者も日本語を英語に同時通訳する際、主語のない文章にはたびたび悩まされてきた。

曖昧で分かりにくいとされる日本語の表現形式は異文化間コミュニケーションにどのような支障を及ぼしているのだろうか。本章では、第1節で池上（1982）や野田（2004）を中心に、先行研究を比較することによって、日本語における主語表現の特徴を探る。第2節では異文化間コミュニケーションの場面における日本語発言の実例、日本語から英語への通訳例を紹介しながら、独自の分析を試み、最後に主語表現の機能や効果という観点から、異文化間コミュニケーションの場面における日本人の発言の伝達性について考える。

2.1. 行為の主体を目立たせない日本語

池上（1982）は同じ出来事を表現する場合でも、英語は行為の主体を明らかにしようとする傾向があるのに対し、日本語ではあたかも自然に起こったことのように表現することが多いとして次のように特徴をまとめた。

- ① 英語は出来事に関与する特定の個体に注目し、それを際立たせる形で表

現するが、日本語はその出来事を全体として捉え、関与する個体を全体の一部として表現する。

② 英語は出来事に関与する動作主としての人間に注目するが日本語はなるべく目立たせないような形をとる。

③ 日本語には行為の主体を目立たせないようにする文法的手段がある。

以下に具体例をあげ、上記①②③について池上（1982）の主張を概説する。

2.1.1. 個体を際立たせる英語と全体の一部にする日本語

池上（1982）は、出来事における個体表現の日英比較を行い、英語表現には個体への志向性があるのに対し、日本語表現には連続体への志向性が見られるとして、英語には複数形があるが、日本語にはない点、また、店で買い物をする時に「ふたつ下さい」でよいのに「ふたつほど下さい」と意味の輪郭をぼかす日本語の特徴を指摘している。

また、現象を述べる表現には<モノ>的捉えかたと<コト>的捉えかたがあると分析している。

<モノ>的な捉え方と<コト>的な捉え方というのは、ごく一般的なレベルで対立する現象の2つの捉え方であり…例えば、鐘の鳴る音が聞こえ始めた時、<鐘の鳴る>のが始まったというのは<コト>的な捉え方であり、<鐘>が鳴り始めたというのは<モノ>的な捉え方である。…<モノ>的な表現では特に注目の対象として選ばれ前面に押し出される<もの>は、<コト>的な表現では出来事全体を構成する1つの部分に過ぎず、しばしば影の薄い存在になる。 池上（1982, pp.81-82）

池上（1982）は<モノ>的な表現は注目の対象が前面に押し出されるが、<コト>的な表現では出来事全体の一部として扱われ、以下の例文の二つの和訳を比較して、英語は<モノ>的な表現への志向性があるが、日本語は<コト>的な志向性があると結論づけているとして、文例をあげて以下のように解説している。

Instead of a *pointing finger*, the image of an arrow has been adopted.

和訳 1. 差し示す指の代わりとして、矢印が採用された。

和訳 2. 指で差し示すことの代わりとして、矢印が採用された。池上 (1982, p.82)¹⁴

1 は英語の原文の<モノ>的な表現形式を日本語でそのまま忠実に再現してみせたわけであるが、日本語の語感としては「硬い」と感じられる。一方、2 の方は同じ部分を<コト>的に翻訳し直したわけであるが、この方が日本語として「こなれた」表現のように感じられる。

池上(1982, pp.82-83)

「何が起こった」とはっきり言わず、その出来事を全体的な現象の一部として表現するのが自然で違和感のない日本語と受けとめられることが分かった。それが、主語の消失や提示の遅れの主原因なのであろうか。池上 (1982) は、出来事における個体表現の日英比較を行い、英語表現には個体への志向性があるのに対し、日本語表現には連続体への志向性が見られ、また、現象を述べる表現には<モノ>的捉えかたと<コト>的捉えかたがあると分析している。以上から「何が起こった」とはっきり言わず、その出来事を全体的な現象の一部として表現するのが自然で違和感のない日本語と受けとめられることが分かったが、それが主語の消失や提示の遅れの主原因なのであろうか。

2.1.2. 動作主としての人間を目立たせる英語と、目立たせない日本語

池上 (1982) は、日本語が出来事に関与する特定の個体を全体の一部として捉える<コト>的表現を好むことを、動作主としての個体をまったく表現しない顕著な傾向と結びつけている。動作主は話者と話者以外の二つの可能性があるが、話者の表現に関して、徳永 (1994) は Jacobsen (徳永、1994) を引用し、次のように述べている¹⁵。

(日本語では) 動作主を明示しない言い方が圧倒的に多いのではないと思われる。特に次のような話者が他者に利益を与えると言うような状況を表現する場合には、その動作の行為者を明示しない表現が自然である。

(1-a) Have you found an apartment yet?

(1-b) アパートはもう見つかりましたか。

(2-a) Did someone by any chance turn in a lady's watch?

¹⁴ 和訳はカタカナで示されていたのを筆者がひらがなに変えた。

¹⁵ 本章に掲載する文例の番号は、引用文献中の番号ではなく、筆者がつけたものである。

(2-b) ひょっとして婦人用の時計が届いているでしょうか。

(3) ご飯できてますよ

(4) 靴、磨いてありますよ

(5) ビールが冷えています

日本語では、動作主が明示されないときはその動作主は話者自身であることが多い。

この動作主を明示しないということは、特に話者が他者のためにする行為を示す表現に多い(後略)。

徳永 (1994, p.102)

徳永はさらに以下の例文を掲げ、英語の文章で<モノ>的に示されている出来事を直訳した日本語の文章は、語用的に不自然な不適格文であるとしている。

(6-a) Mr. Tanaka sold me the bicycle.

(6-b) 田中さんが私に自転車を買りました。

(7-a) Mr. Tanaka hit me.

(7-b) 田中さんが私を殴りました。

徳永 (1994, p.103)

徳永(1994)は、日本語らしい表現は動作主あるいは所有者としての話者を極力表さないことであるとしているが、その原因は日本語において話者の表現が弱いからではなく、むしろ強いからだと言っている。「日本語では、話者が強く表出する言語で話者を表出しない表現方法を選ぶということである。その理由はおそらく日本社会が伝統的に「無私」を美德として重んじ、己を表に出す自己主張を諷めてきた文化と深いかわりがあるのではないか」(p.107)と指摘し、日本語が「話者中心言語」であるという根拠として、「くれる」「行く」「来る」を「話者中心動詞」として挙げている。また、山下(1986)も、「日本語は「話し手」中心の仕組みを持った言語です。ですから、いたるところで好むと好まざるとに拘らず自己の主観がむき出しになります。このことは、実際のことばの運用を控えめにさせます」(p.163)と述べている。

つまり、徳永(1994)と山下(1986)は、日本語はきわめて人間くさい言語なので、主観のむき出しを緩和するために、わざと行為者としての話者を際立たせないような表現を選ぶというのだが、この点について池上(1982)は「英語は<人間>的な項を際立たせて表現する傾向の強い言語であり、一方、日本語は<人間>的な項をあまり目立たせないままにとどめる志向性がある」(p.88)と述べている。池上の分析をまとめると以下のようなになる¹⁶。

¹⁶ 池上(1982, pp.88-93)を筆者が要約した。

A. 人間的な項の表現は英語に多く、日本語には少ない。

<所有>の表現に関して、<所有>を表す特別の語を持つ<HAVE 言語>と、<存在>を表す語で<所有>を表す<BE 言語>のふたつがあるが、英語は典型的な<HAVE 言語>であり、日本語は本来的に<BE 言語>である。

(8-a) John has two children.

(8-b) ジョンには二人の子供がいる。

日本語では、英語の主語 John にあたる項は<場所>の提示の働きをしているが、英語では<人間>的な項が強調されている。英語では<人間>的な項が関与しない場合にも<所有>の表現が使われる。

(9) This room has two windows.

B. 日本語では非人間的な<存在>の表現が<所有>に転用されるが、英語では人間的な<所有>表現が<存在>の表現に転用される。

(9) This room has two windows.

C. 英語は<モノ>志向が強いために<人間>的表現が多く、日本語は<コト>志向が強いために<人間>的表現が少ない。

(10-a) You have stains on your coat.

(10-b) コートにしみがついているよ。

池上（1982）は、「ヨーロッパ国の表現における…特色を、かりに人間本位的と言うならば、日本語におけるものは、むしろ自然本位的あるいは非人間的ともいえる…」(p. 110)とし、徳永（1994）や山下（1986）の主張と対照的な結論を導いているのは興味深い。

2.1.3. 日本語には動作主の特性を弱めて表現する文法的手段がある

池上（1982）は、英語は主語となる項が述語となる動詞の形を規定し、平叙文から疑問文を導き出すような統語論的操作のときも主語の表現が必要であるのに対し、日本語の「ハ」や「ガ」を伴う項は、文の他の部分に対して英語の

主語のような支配権を持っておらず、表現しなくても構わないとしている。日本語の場合は、何が到着するかが会話の参加者にとって明白である場合は「到着した？」という言い方が可能だが、英語では “Arrived?”とは言えない。

(11-a) 荷物ハ着イタ？ (着イタ？)

(11-b) Has it arrived? (??? Arrived?) 池上 (1982, p.74)

池上 (1982) はさらに、日本語では主語よりも述部が文の中核をなしているとし、「ハ」の機能は英語の主語の項を提示するのではなく「主題」を表示する機能を持っており、主題化された項は文全体を修飾する「場所の副詞句」のようなものであり、従って、その表現は文法上任意的であるとして以下の例文をあげ、「東京は」は主語ではなく、省略されても文の基本構造には影響がないと説明する

(12) 東京ハ物価ガ高イ。 池上 (1982, p.85)

池上(1982)は動作主の特性を弱める他の文法的手段として、＜自発＞の「レル」「ラレル」の効果を指摘し、以下の例文を示している。

(13) 私ハソウ思ウ。

(14) 私ニハソウ思ワレル。 池上 (1982, p.102)

また、「ナル」という語の使用によって出来事を個人の意思と離れたところで起きたように表現するという特徴を示している。

(15) 私達ハコノ度結婚スルコトニナリマシタ。 池上 (1982, p.103)

これらの先行研究から、日本語が出来事における動作主を表現しない傾向を持つことは明白と言えるだろう。では、日本語を母語とする話者は何を手掛かりに文章の主語を理解するのだろうか。次節では野田尚史(2004)を中心に、文章の主語表現を見ていくことにする。

2.2. 文章の主語表現

野田尚史 (2004) は主語の手掛かりを 3 つのレベル (文の中、句の中、複文・

連文の中)に分け8つの例を示している¹⁷。

(1) 文の中で、文のモダリティによる

① 働きかけ文から分かる主語

命令や勧誘など、話し手から聞き手への働きかけがある文章では、主語が見えなくてもその人称が決まる。

1. 命令・依頼文 「君は」座りなさい。
2. 提案文 「君が」やってみたらどうですか。
3. 勧誘文 「私も君も」行きましょうよ。
4. 申し出文 「私が」調べてみましょうか。
5. 質問文 「君は」きのう早く帰ったの？

② 外面表現文から分かる主語

外から見た様子を述べる文章では、基本的に主語は三人称である。

1. 推量表現 疲れただろう。
2. 推定表現 この辺に住んでいるようだ。
3. 推論表現 もう手配しているはずだ。
4. 様態表現 悲しそうだ。
5. 伝聞表現 もうすぐ始めるって。

野田(2004)は述語だけでなく、「見るからに」や「よほど」のような副詞的成分も主語の手掛かりになるとして、次のように整理している¹⁸。

③ 内面表現文から分かる主語

心の中の意志や感情を述べる文章では、主語は基本的に一人称に決まる。

1. 意志表現 そろそろ寝ようっと。
2. 感情表現 うれしい。
3. 感覚表現 お腹がすいた。
4. 思考表現 思う。
5. 希望表現 行きたい。

(2) 句の中で、話し手と動作参加者の関係による。

¹⁷野田(2004, pp.24-26)を筆者がまとめた。

¹⁸野田(2004, pp.29-31)を筆者がまとめた。

④ 尊敬表現・謙譲表現から分かる主語

1. 大丈夫だとおっしゃいました。 (主語は一人称ではない)
2. 大丈夫だと申し上げました。 (主語は一人称、またはその側の人間)

⑤ 受益表現から分かる主語

動詞に「てあげる」「てもらう」「てくれる」がついた恩恵の授受を表す表現がある場合には、主語が表われなくても一人称に近い側か遠い側かがわかる。

1. レンタカーの予約をしてくれた。
2. レンタカーの予約をしてあげた。
3. レンタカーの予約をしてもらった。

⑥ 方向表現から分かる主語

動詞に「てくる」などがついた表現は動作が一人称に近い側に向かうのか、一人称に遠い側に向かうのかを表すので、主語の手掛かりになる。

- ・夜遅く電話をかけてきた。 (動作は一人称の側に向けて取られる)

(3) 複文・連文の中で・・・近くにある主語との関係による

⑦ 主文の主語から分かる節の主語

1. 小学生のとき、私は札幌に住んでいた。
2. ほめられて、気分がよくなった。

⑧ 前の文の主語から分かる後の文の主語

- ・田中は思いつくままにメロディを作った。そのあと、それに歌詞をつけた。

野田(2004)は8つの主語の手掛かりがない文章においては、消失した主語は「一人称」になるとたびたび指摘している。そしてまとめとして次のように述べている。

ここまでみてきたように、日本語には見えない主語を知る手がかりがたくさんある。そのような手がかりがあるからこそ日本語では主語が現れないことが多くてもよいのである。

野田尚文(2004, p.31)

野田(2004)は日本語に主語が表われなくても問題はないと言い切っている

が、通訳を使う異文化間コミュニケーションの場においても問題はないのだろうか。また、日本人が英語を話す場合に、主語の消失という母語の特徴が **transfer** するために支障が起こることはないのだろうか。次節では、情報の伝達を目的とする日本語発話の実例を引きながら、異文化間コミュニケーションの場面における伝達性を検討する。

2.3. 異文化間言語コミュニケーションにおける日本語の主語表現

日本語の発言では英語と異なり、一人称である「私は」がほとんど出てこないのが普通である。以下は典型的な日本語の発言例である¹⁹。

(16-a) 日本に帰ってから、本当に多くの方々の支援を頂き、感謝しています。

(17) 今は、北朝鮮に残してきた子供たちのことが一番気がかりです。

これは北朝鮮に拉致された被害者の発言だが、このようなあいさつ文では英語の **I am grateful, I am happy, I am honored** に見られるような一人称が省略されるのが普通だ。それと同時に、それが本人のことだということを示すための様々な方法が使われている。これらの文章を聞き手の理解と関連して分析すると以下のようなになる。

「日本に帰ってから」 話しているのが拉致被害者であることを皆が知っている。

「支援を頂き」 「頂く」は向こうからこちらへという動きを示すので、本人が得た支援であることは明白

「感謝しています」 特に断りが無い限り、発言者の気持ちを表す。

「北朝鮮に残してきた子供たちのことが」 発言者に関する知識を持つ聞き手には、本人の子供であることが明白。

「気がかりです」 心理や感情を示す述語の場合の主体は話者であると推測される。

日本語では一人称を省略するのが普通なので、しゃべっている人が拉致被害者であることが分かっている場合は、聞き手の理解には全く支障は起こらない。しかし、もしこの発言が被害者の父親や母親のものだったとしたらどうだろう。

¹⁹ 実際に報道された発言を基に筆者が作成した。

(18-a) (娘が) 日本に帰ってから、(娘に) 本当に多くの方々の支援を頂き、(私達は) 感謝しています。今は、(娘が) 北朝鮮に残してきた子供達のことが(私にとって) 一番気がかりです²⁰。

話者が誰かを特定できないこの発言が、異文化間コミュニケーションの場面でなされたとき、情報はどのように伝わるだろうか。

① 日本語を母語としない人が聞いた場合

「日本に帰ってから」

誰かが、または何かが日本に帰って来たという過去の出来事があり、それから以降のこと、もしくは、これから日本に帰った上でという未来のことと理解する。

「本当に多くの方々の支援を頂き感謝しています」

「頂き」が話者中心の動詞であるという知識がある人は、話し手本人もしくはその身内の話だと気づき、この時点で、その前の「日本に帰ってきた」の主語も本人もしくはその身内であり、過去の出来事だと理解の修正・追加を行う。しかし、話者が特定されない限り、その理解は中途半端である。

② 同時通訳者が聞き手の母語(英語)に訳す場合

通訳者に発言者が拉致被害者であることが分かっている場合は、最初から、主語として“I”を選択し、次のように訳すであろう。以下は、筆者が作った、時間的制約の中で可能と思われる同時通訳例である。

(16-b) Since I returned to Japan, I have received warm support from a number of people. I am very grateful for them.

この通訳では、発言とほぼ同時に通訳が終わるため、通訳者は次の文章の通訳をすぐに始めることができ、意味の取り違いや取りこぼしの可能性が少なく、聞きやすい通訳をノーマルなスピードで行えるので、聞き手も効率よく情報を受け取ることができる。

しかし、明らかに拉致被害者ではないが、特定されない話者の発言の時には「日本に帰ってから」を聞いただけでは主語を選べないので待つことになる。

²⁰ 省略部分を括弧内に示す。

次の「本当に多くの方々の支援を頂き」を聞いて「頂き」を手掛かりに一人称を選択する。その次の「感謝しています」でも、話者の特定ができない場合は、主語として“we”を選択し通訳を始める。

(18-b) We are very grateful for having received warm support from a number of people since they returned to Japan.

間違いではないが非常に曖昧な文章で、動作主を目立たせる英語を母語とする聞き手は欲求不満を感じるだろう。このような文章がひとつだけでなく随所に出てくるような発言やスピーチに対しては、聞く意欲を失ってしまう可能性がある。

また、通訳の効率にも影響がある。この英語の訳文を提示するためには普通のスピードで5秒掛かるため、通訳者がこの部分の通訳を終えた時には次の「今は、北朝鮮に残してきた子供達のことが一番気がかりです」の発言が終わっている。通訳者は、最初の文章の通訳をしながら、同時に次の文章を聞いて理解し、主語を始め英語の文章構造や単語の選択を決定しなければならない。取り込んでいる情報と口から出している情報のズレが大きくなるほど、通訳者の記憶の負担が重くなり、その結果、誤解や情報の取りこぼしが起こる可能性が高くなり、仮に、パーフェクトに情報の言語転換ができて、遅れを取り戻すために早いスピードでしゃべるので、通訳を聞いている人が理解できず、やはり情報は伝わりにくい。

音声言語表現は、「時間の不可逆性」と「持続時間の非常な短さ」と「情報の一回性」という特徴を持つ（山下 1986）。従って、情報は聞こえてきた順番にできるだけ不明な部分が少ない方が聞き手は負担が少なく、正しく理解しやすい。それは、日本語を母語とする聞き手、日本語を外国語とする聞き手、同時通訳を介して聞く外国人のいずれの場合にも当てはまることである。主語を明示しないことで、情報の伝達効率が落ちる可能性は否定できない。次節では、国際会議で行われた実際の発話を例に挙げ、同時通訳と比較することで、聞き手の理解度を分析する。

2.4. 主語表現とメッセージの伝達効率

本節では、日本語発言のメッセージ伝達効率を調べるため日本語の主語表現を①主語の脱落、②主語の提示が遅い、③主語表現の主題化に三つに分け、国際会議における日本人の自発的な発言例を分析する。文例は実際の発言をもと

に匿名性を保つ加工をしているが、言い間違いや言い直しはそのままにしている。同時通訳例は実際に行われたものではなく、時間的制約を考慮して可能と思われるものを筆者がつけた。日本語の原文と、同時通訳を訳出のタイミングに合わせて表記したものと、普通の表記の二組を示す。

① 主語の脱落

主語の脱落はA「話者」の表現の脱落と、B「話者」以外の動作主の脱落の二つに分けられる。

A 話者の脱落

(19-a, b) 原文と同時通訳の流れ

それで日本に帰ってきますと

I returned to Japan

バブル、

to find it in a bubble economy.

そういう風に研究して、

I studied

アメリカからずっと来て、

in the U.S.

ヨーロッパも見て、

looked around Europe,

日本に帰ってきますと、

And came back to Japan,

日本は何か、マネーゲームが進んでいて・・・

Then, Japan was engaged in money games.

(19-a)

それで日本に帰ってきますとバブル、そういう風に研究して、アメリカからずっと来て、ヨーロッパも見て、日本に帰ってきますと、日本は何か、マネーゲームが進んでいて・・・

(19-b) (同時通訳例)

I returned to Japan to find it in a bubble economy. I studied in the U.S., and looked around Europe, and came back to Japan. Then, Japan was engaged in money games.

この例では、話者を表す一人称が消失していると判断して通訳が支障なく行われた。

(20-a, b) 原文と同時通訳の流れ

小泉内閣云々というテーマは、

The Koizumi administration is a theme

昨年の秋に決めたんですが、

I decided to choose in autumn last year.

当然依頼された時に、

When I was asked to talk

その時はちょっと新鮮だと思ったんですが、

I thought it would be something fresh

最近あんまりどうも新鮮ではなくなってきました、

However, recently, it seems no longer fresh,

ちょっとテーマも変わったわけです。

so I changed it slightly

(20-a) 小泉内閣云々というテーマは、昨年の秋に決めたんですが、当然依頼された時に、その時はちょっと新鮮だと思ったんですが、最近あんまりどうも新鮮ではなくなってきました、ちょっとテーマも変わったわけです。

(20-b) (同時通訳例)

The Koizumi administration is a theme I decided to choose in autumn last year.

When I was asked to talk, I thought it would be something fresh. However, recently, it seems no longer fresh, so I changed it slightly.

以上二つの例文では、日本語では特別な理由がないかぎり一人称を明示しないのが普通なので、聞き手の理解の妨げになるとか、通訳者が主語の選択に著しい困難を感じるとは思えない。

B 話者以外の動作主表現の脱落

(21-a, b) 原文と同時通訳の流れ

あの各現場の航空レベルにおいても

In every level of air navigation authority

空港保安委員会というものを

airport safety committees

現場機関同士で組織をして、

are organized

現場における措置について調整をしているといった分担関係になっております。

coordinating measures in the field.

(21-a) あの各現場の航空レベルにおいても空港保安委員会というものを

現場機関同士で組織をして、現場における措置について調整をしているといった
分担関係になっております。

(21-b) (同時通訳例)

In every level of air navigation authority, airport safety committees are
organized, coordinating measures in the field.

(22-a, b) 原文と同時通訳の流れ

ま、こういった事を考えますと

Thinking about these things,

小手先の対応で克服できるはずがありませんから

it would be difficult to overcome them with simple
measures

じっくりと取り組む必要があります。

We have to take time and study them carefully.

(22-a) ま、こういった事を考えますと小手先の対応で克服できるはずがありません
からじっくりと取り組む必要があります。

(22-b) (同時通訳例)

Thinking about these things, it would be difficult to overcome them with simple
measures. We have to take time and study them carefully.

例文 21 や 22 のように、脱落した主語が話者以外の行為の主体を表すと考えられる場合は、文脈を手掛かりに複数の可能性の中から主語を選択しなければならないので、聞き手の理解の負担が大きく、通訳者の訳語操作の度合いが大

きくなる。

② 主語の提示が遅れる

(23-a, b) 原文と同時通訳の流れ

地域で住んでいる 60 歳の障害者と

Sixty-year-old people with disability living in
the community,

同じ年齢層の普通の人たちとどう違うかという

and how different they are from
healthy people of the same age

データはまずゼロなんですね。

We have no data about it.

(23-a) 地域で住んでいる 60 歳の障害者と、同じ年齢層の普通の人たちとどう違うかというデータはまずゼロなんですね。

(23-b) (同時通訳例)

Sixty-year-old people with disability living in the community, and how
different they are from healthy people of the same age. We have no data
about it.

(24-a, b) 原文と同時通訳の流れ

入院、入所している、施設に入所している人も、

People in residential care facilities

自宅あるいはグループホームにいる人たちも、

and those at home or group homes.

それぞれ少数ずつではありますがけれども、

Though, the number is few,

情報はあります。

we have some information about them.

(24-a) 入院、入所している、施設に入所している人も、自宅あるいはグループホームにいる人たちも、それぞれ少数ずつではありますがありますけれども、情報はあります。

(24-b) (同時通訳例)

People in residential care facilities, and those at home or group homes.

Though, the number is few, we have some information about them.

例文 23 と 24 に見られるように、主語が文末に来る場合は、それまで聞いた情報を記憶に留めなければいけないので、聞き手の負担は最大になり、文章の理解が遅れるため、次の文章の取り込みに支障をきたす。

③ 主語表現の主題化

次の発言例では、「は」や「が」という日本語の主語を導く助詞が使われているものの、それは文章全体の主題を表す働きをしており、「何が」「どうした」という情報を効率よく伝えられているとは思えない。

(25-a, b) 原文と同時通訳の流れ

このへんについては

About these issues

諸外国においては

in foreign countries

それぞれの歴史的な経緯があって

there are different historical backgrounds.

いろいろとこう役割分担

They play their roles

それぞれの国情において行っているわけでございまして

depending on their domestic situations.

何がいい、何が悪いと言うのはなかなか言い切れないわけでございます。

It is difficult to say what is good and

what is bad.

(25-a)

このへんについては諸外国においてはそれぞれの歴史的な経緯があって

いろいろとこう役割分担それぞれの国情において行っているわけございまして、何がいい、何が悪いと言うのはなかなか言い切れないわけございます。

(25-b) (同時通訳例)

About these issues, in foreign countries, there are different historical backgrounds. They play their roles depending on their domestic situations. It is difficult to say what is good and what is bad.

この例文では、「このへんについては」がこの発話の主題（テーマ）を表している。その後に続く要素が文全体においてどのような機能を果たすのかがすぐに分からないため、“there are”という日本語的な現象を表す表現になっている。

(26-a, b) 原文と同時通訳の流れ

それで、向こうでやったリサーチは、

Then, researches I did there

日本はまず系列が良くない。

show Japan's Keiretsu system is not good in the
first place

アメリカの技術を日本は真似して改良する。

They say Japan imitates American technology and
improves it.

そういう日本に安全保障上

Do we have to protect Japan,

援助する必要があるのかという、

or assist it?

議論がありました。

This was what Americans said in those days.

(26-a)

それで、向こうでやったリサーチは、日本はまず系列が良くない。アメリカの技術を日本は真似して改良する。そういう日本に安全保障上、援助する必要があるのかという、議論がありました。

(26-b) (同時通訳例)

Then, researches I did there show Japan's Keiretsu system is not good in the first place. They say Japan imitates American technology and improves it. Do we have to protect Japan, or assist it? This was what Americans said in those days.

この例文では「向こうでやったリサーチは」が発話のテーマを表している。しかし、聞いてすぐに判断を迫られる同時通訳では、「主語」と取るのが普通であろう。「主語」のつもりで英語の名詞句にして、動詞をつなごうと考えたが、日本語の述部がすぐに来ないため、“show”という無難な動詞を選択している。しかし、これで正確な訳になったかどうかは疑問である。おそらく、この文章は「アメリカで、リサーチをやっていたときに、日本の系列がよくない、何でもこんな国を守らなきゃいかんのかという議論を散々聞かされた」と解釈するのが正しいと思うが、先を聞かずにリアルタイムで同時通訳する際には、限界がある。また、このような発言が続くと、通訳を通さず直接日本語を聞いている日本人の聴衆にとっても理解するための負担が重くなる。

以上の分析から、日本語の主語表現にはいくつかの特徴があり、異文化間音声言語コミュニケーションにおいて理解の妨げになるだけでなく、語用上の習慣を共有する母語話者の理解を損ねる可能性があることが示唆された。

2.5. 2章のまとめ

異文化間の音声言語コミュニケーションの場面において、日本語を母語とする人たちの発言が分かりにくいとされる原因を探るために、英語との比較を通じて日本語の主語表現と情報の伝達効率の関係を調べた。その結果、日本語には出来事に関与する個体、行為の主体、動作主としての人間を目立たせない特徴があり、その背景には日本社会が伝統的に自己主張を諫めてきた文化的背景があると思われる。

日本語の発言を英語に同時通訳する際、日本語に動作主が誰かを示す表現がない、または、その提示が大幅に遅れるということがしばしば問題になる。本節では①主語の脱落（話者、話者以外の動作主）、②主語の提示の遅れ、③主語表現の主題化の三つに分けて分析した。その結果、話者を表す「私は」の脱落については、日本語の普通の語用として受け入られているため日本語を母語とする同時通訳者の支障にならないことが分かった。しかし、話者以外の動作主表現は、事前の情報でコンテキストが十分理解されているまたは、話し手の意

図を示す別の手掛かりがない場合は、かなり困難であると考えられる。また、主語表現がテーマを表している場合は、テーマとしての処理が適切であると通訳者が気づくまでにかなりの時間を要するため、その後の通訳効率が落ちる可能性があることが示された。

すでに述べたように、同時通訳者が行う情報処理のプロセスは、翻訳と音声訳出という作業を除けば、ふつうの人の発話理解プロセスと同じである。日本語を母語とする経験豊かな同時通訳者が即座に処理できない表現は、一般の母語話者が聞いていても不明度が高く理解の妨げになるはずである。情報伝達を目的とする発話としては不適切であり、国際会議など異文化間コミュニケーションの場面では聞き手の不満や誤解につながる可能性が高いと言えよう。次章では、主語の消失や提示の遅れ以上に、聞き手の理解に影響を与える日本語の「前置きストラテジー」を取り上げる。

第3章 前置き表現のストラテジー

第3章の目次

3.0. はじめに

3.1. ポライトネスとしての生垣表現

3.2. テーマ

3.3. フレーミングの視点から見た日本語の発話

3.4. 3章のまとめ

3.0. はじめに

国際会議や放送番組など、公の場面で行われるスピーチや討論の同時通訳をしていると、日本人は「何がどうした」という **subject-predicate** の文章構造の前に、何らかの「前置き表現」を使うことが多いのに気がつく。文章の主節 **subject-predicate** の先送りの原因になっている「前置き表現」とは何であろうか。また、それはどのようなコミュニケーション・ストラテジーとして使用されているのであろうか。本章では、ポライトネスとしての生垣表現 (**hedges**)、テーマ、発話場面のフレーミングの三つを取り上げる。

3.1. ポライトネスとしての生垣表現

大塚 (1998) はテレビ討論番組における「前置き表現」 (**preface**) について以下のように述べ、賛成意見を述べるときには相手に対する積極的面子への配慮、反対意見を述べるときには相手の消極的面子に対する配慮がなされていると述べている。

日本語では、自分の意見を主張することが当然のこととして認められるような場面においても、意見を直接述べるのではなく、前置き表現を用いて意見をあたかもオブラートに包んだかのようにして提示していることが分かる。 大塚 (1998, p.128)

大塚（1998）が例としてあげた前置き表現は次のようなものである²¹。

1. 同意を表明する時

先ほど、Dさん、Dさん言われたように
ま、これは使い道は今おっしゃったように、
私たちの考え方、だいたい共通してて

2. 反対意見を述べる時

またどっかの週刊誌に酔っ払って書かれるかもしれないけども、
野党にばかり文句言って申し訳ないんですが、
はっきり言って、あのう、絡んでるんじゃないですよ、
あの、若干誤解あるかもしれませんが

3. 意見を求める時

古い話で本当に申し訳ないんですが
ちょっと失礼ですが
あまりI党いじめること、好きじゃないんだけど、ちょっとお聞きしたいけども、

4. 質問に答える時

あの、私の私見ですけれども、

大塚（1998）は前置き表現を A.会話のストラテジーとしての前置き表現、
B.モダリティとしての前置き表現、C.語用論から見た前置き表現、の三つに分けて論じている。

A. 会話のストラテジーとしての前置き表現

大塚は畠（大塚、1998）の提唱した、外国人が日本人と円滑なコミュニケーションを図ろうとする時に必要な24のストラテジーのうち、「意見を述べる」ことに関係するものを選び、「前置き表現」の機能を論じている。

（1）「意見を述べる」ことに関係するストラテジー

a. 反対意見を切り出す技術

①原則—反対意見は直接はっきり言わないことを原則とする。ソフトニングが必要である。ただし、くだけた場面ではこの限りではない。

²¹大塚（1998, p.123-128）を筆者がまとめた。

- ②まず相手の意見に賛成して次に反対意見を言う。
- ③相手の意見の一部に賛成しながら反対意見を言う。
- ④はっきり、直接言う。

b. 重要な発言を切り出す技術

- ①原則—直接言わずに、前ぶれをおく。

大塚 (1998, p.119)

B. モダリティとしての前置き表現

大塚 (1998) は、前置き表現は意見の内容そのものではなく、意見の言い方に関するものなので、モダリティと考えることができるとして、中右実 (1994) の分類に言及している。中右はモダリティを命題内容に対する話し手の態度を表す **S** モダリティと談話における発話に対する話し手の態度を表す **D** モダリティに分類している。**D** モダリティはさらに、談話 (テキスト) 形成のモダリティ、発話様態のモダリティ、情報取立てのモダリティ、対人関係のモダリティ、感嘆表出・慣行儀礼のモダリティに下位分類されている。このうち、大塚 (1998) が「前置き表現」に当たるものとして注目したのが発話様態のモダリティである。これについて、中右 (1994) は「これは直後に続く話し手自身の発話行為を限定し、発話内容や発話様式について前書き・但し書きなど、なんらかの留保条件を言い添える働きをする」(p.60) と定義し、以下のような例を挙げている。

率直に言って、大雑把に言って、まじめな話、内緒の話だが、正直なところ、極論すれば、包み隠さず言えば、手前味噌だが、自慢じゃないが、 中右 (1994, p.60)

C. 語用論から見た前置き表現

大塚 (1998) は「前置き表現」については語用論的には“Hedges” (生け垣表現) と捉えることができるとして、Yule の定義“Cautious notes expressed about how an utterance is to be taken.”(Yule, 1996, p.130) を示している。Yule(1996) は“Hedges”をポール・グライス (Paul Grice) の協調の原則 (Cooperative Principle) から外れる危険性があることを示すために使われる表現であるとする。グライス (1989) は言語コミュニケーションの参加者は協調的であることが必要として、会話における 4 つの格率 (maxim) を提案した。以下にその原

文と和訳²²を示す。

The cooperative principle: Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.

The maxims.

Quantity:

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
2. Do not make your contribution more informative than is required.

Quality: Try to make your contribution one that is true.

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

Relation: Be relevant.

Manner: Be perspicuous.

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief (avoid unnecessary prolixity).
4. Be orderly.

Grice (1989, pp.26-29)

協調の原則

会話への貢献をその会話が生じた段階で、参加している会話の受け入れられた目的や方向によって、要求された通りにせよ。

会話の格率

1. 量の格率

- (1) 貢献は必要なだけ情報量のあるものにすること。
- (2) 貢献は必要以上に情報量のあるものにしないこと。

2. 質の格率

- (1) 偽りであると思っていることを言わないこと。
- (2) 十分な証拠のないことは言わないこと。

²² 和訳は末田・福田 (2003, pp.93-94) による。

3. 関連性の格率関係のあることを述べること

4. 様態の格率

- (1) 不明瞭な表現を避けること
- (2) あいまいさを避けること
- (3) 手短に述べること
- (4) 順序良く述べること

Yule(1996)は協調の4つの原則のそれぞれに対して、話し手が違反するかもしれないという認識を持ち、そのことを相手に断るための **hedges** として次のような例を挙げている²³。

1. 質の格率

- I may be mistaken, but I thought I saw a wedding ring on her finger.
(私が間違っているかもしれないが、彼女が指に結婚指輪をはめているのを見たと思う。)

2. 量の格率

- I won't bore you with all the details, but it was an exciting trip.
(詳しく説明してうんざりさせるつもりはないけれど、とても楽しい旅行だった。)

3. 関連性の格率

- Oh, by the way. (ところで) 会話の途中に関係のない話を挟むときに使用する。
- I don't know if this is important, but some of the files are missing.
(大事なことかどうか分からないが、ファイルのいくつかが紛失している。)

4. 様態の格率

- I'm not sure if this makes sense, but the car had no lights.
(つじつまが合うかどうか確信はないが、その車にはライトがなかった。)

大塚(1998)は、様態の格率に違反する可能性を見越して使用する生垣表現のうち、ポライトネスに関係するものに注目した。Brown & Levinson(1987)は **face** (面子) を「人間一人ひとりが主張したい社会的な自己イメージ」(the

²³ Yule(1996, p.38-39) から、筆者が例を選んでまとめた。訳は筆者による。

public self-image that every member wants to claim for himself)と定義し、negative face (消極的面子、他人の行動に邪魔されたくない) (the want of every 'competent adult member' that his actions be unimpeded by others)とpositive face (積極的面子、人からよく思われたい) (the want of every member that his wants be desirable to at least some others)の二つの側面からポライトネスを論じている。その中で、面子を傷つける恐れのある行動 face-threatening acts (面子威嚇行動、FTA) について5つのストラテジーを述べている。

Possible strategies for doing FTAs. (FTA ストラテジー) ²⁴

1. Do the FTA without redressive action. (FTA をそのまま行う)
2. Do the FTA with positive politeness. (相手の積極的面子に斟酌した方法をとる。積極的配慮)
3. Do the FTA with negative politeness. (相手の消極的面子に斟酌した方法をとる。消極的配慮)
4. Do the FTA off record. (間接的に表現する。比喩、皮肉など)
5. Don't do the FTA. (FTA を全く行わない)

このうち積極的配慮に関してはさらに 15 のストラテジーがあり、消極的配慮としては 10 のストラテジーがあるが、そのうち2番目に「疑問文や生垣表現を使え」がある²⁵。

Negative politeness

Strategy 1: Be conventionally indirect.

Strategy 2: Question, hedge.

Strategy 3: Be pessimistic.

Strategy 4: Minimize the imposition.

Strategy 5: Give deference.

Strategy 6: Apologize.

Strategy 7: Impersonalize S and H ²⁶ .

²⁴ Brown & Levinson (1987, p.69)の図式を筆者が文章化した。和訳は大塚 (1998, p.122) による。

²⁵ Brown & Levinson (1987, p.131)の図式から、抜粋した。

²⁶ S: speaker, H: addressee.

Strategy8: State the FTA as a general rule.

Strategy9: Nominalize.

Strategy10: Go on record as incurring a debt, or as not incurring H.

しかし、Brown & Levinson(1987)が hedges としてあげている例は、perhaps, sort of, if you can, など断定を避ける表現で、日本語の「たぶん」、「というか」「できれば」などの短い副詞に当たるものが多く、日本語の「前置き表現」に相当するものはごく一部である。

This may not be relevant, but...(p.169) (これは関係ないかもしれないが)

Excuse me if I mention this while I'm thinking of it...(p.169) (今考えているところだけど、ちょっと言ってもいいかな)

I hate to have to say this, but...(p.171) (こんなことは言いたくないのだが) ²⁷

大塚(1998)は日本語の母語話者は、意見を述べることが求められるような場面であっても、率直に意見を述べ、自己主張をすることは相手の面子を脅かす恐れがあると感じており、ポライトネスの原則に従おうという意識を言語化したものが前置き表現であると述べている。さらに、「このような態度は控えめであることが美德とされる日本社会では評価されることであろう。しかし、異文化間コミュニケーションという枠組みで見た時、それは必ずしもコミュニケーションを円滑に進めるための戦略として機能しないかもしれない」(p.130)と結論づけている。

しかし、大塚(1998)の示した日本語発話の例文は、いずれも意味を明瞭に伝えており、「前置き表現」の使用も聞き手の理解の妨げになるとは思えない。この程度の生垣表現はどの言語にも共通に見られるものであり、日本語を学んだ外国人や英語への同時通訳を介して聞いた人が、論旨を見失ってしまうことにはならないだろう。

文字と異なり、音声は消えてしまうものなので、ある一定の時間以内に情報を咀嚼できなければその部分の理解が損なわれ、次の情報を受けとめることができない。日本語の発話で聞き手の理解に支障が起きるような「前置き」はもっと長いものである。次は、異文化間コミュニケーションの場面で聞き手の理解の障害になる subject-predicate の先送りをテーマの観点から検討する。

²⁷ 和訳は筆者による。

3.2. テーマ

3.2.1. テーマとレーマ

談話分析の理論はヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなどいくつかの大きな流れがあるが、本節では、日本語の語順、とくに「何がどうした」という文章の中心的内容の提示の仕方に焦点を当てるため、プラーグ学派が提唱し、後にオーストラリアの Halliday に受け継がれたテーマ(theme 提題)とレーマ(rheme 題述)の関係に注目する。泉子・メイナード(1997)によると、テーマ・レーマはプラーグ学派がコミュニケーション上の体系を説明するために考案した FSP(Functional Sentence Perspective)という法則の根幹をなしている。FSP では発話を情報の出発点であるテーマと情報の中心、レーマの2要素に分け、発話はテーマからレーマへと進行するとした。

Halliday はテーマを以下のように定義づけている。

The theme is what is being talked about, the point of departure for the clause as a message; and the speaker has within certain limits the option of selecting any element in the clauses as thematic. (メイナード、1997、p.100)

つまり、テーマとは「メッセージの出発点であり、文がそれについて述べるもの」とされている。メイナード(1997)は、一般的にテーマは古い情報や既に知られている情報をマークし、レーマは新しい情報、まだ知られていない情報をマークするというのが通説になっているとする。

「テーマ」はアメリカでは topic ということばに入れ替えて使用され、やがて、話し手の視点、話に参加するもの同士が既に共有している情報を含む概念としてテーマと区別されるようになった。メイナードによると、主・述関係以外の文構成に興味を持った Chafe(1976)は情報の中身よりも、その送られ方を重要にする言語表現(packaging 現象)に注目し、トピックはそのひとつだとした。

以下に、パッケージング現象の具体例を示す。

新しい情報(新情報)、古い情報(旧情報)(given or new)

焦点と対照(focus or contrast)

非限定と限定(definite or indefinite)

文の主語(subject of the sentence)

文のトピック(topic of the sentence)

話し手の視点と共感(speaker's point of view and the speaker's empathy)

メイナード(1997, pp.100-101)

Chafe(1976)はトピックが旧情報をマークする手法であるとしているが、旧情報と新情報を以下のように定義している。

Given(or old) information is that knowledge which the speaker assumes to be in the consciousness of the addressee at the time of utterance. So-called new information is what the speaker assumes he is introducing into the addressee's consciousness by what he says. Chafe (1976, p.30)

これについてメイナードは「実際の会話の場では、話し手が知っているだろうと想定した情報を旧情報というのであり、ある情報が新しいか古いかはあくまで会話の当事者の認識によるという事実には注意する必要がある」(メイナード、1997、p.101)と述べている。

Chafe は、英語ではトピックの使用が限られているが、中国語などでは重要な機能を果たすとする。この中国語風トピック (topic, Chinese style) を“limit the applicability of the main predication to a certain restricted domain”(Chafe,1976: p.50)と定義している。

Downing(1991)は、Halliday のテーマ論は不十分だと批判し、Chafe の概念を応用してテーマには少なくとも3種類の framework を設定するものがあるという²⁸。

1. participant Themes, which set up individual frameworks.

(コミュニケーション参加者、当事者の枠を設定するテーマ)

2. spatial, temporal and situational Themes, which set up circumstantial frameworks.(コンテキストの枠を設定するテーマ)

3. discourse Themes, which set up subjective and logical frameworks.

(談話上の機能を果たすテーマ)

Downing, Angela (1991, p.128)

メイナード (1997) はさらに、BBC 放送のラジオ・ニュースの文頭語を調べた Gomez(1994)の研究を紹介し、テーマには三つの種類があると報告されたと述べている。

²⁸和訳はメイナードによる。

1. 単一テーマ(unmarked theme): Mr. Norman Willis²⁹が文の単一主語として紹介された後、he とか Mr. Willis などの指示表現を使ってテーマ化されて出てくる。
2. マークされたテーマ (marked theme): 文中にひとつ以上のテーマが出てくる場合で、例えば Inspector Peter Dawson said that at this stage, the police have no idea why the accident happened. の at this stage。
3. 特殊テーマ(special theme): テーマが特別な言語ストラテジーによってマークされた場合、例えば、As for Winnie, she's currently in the next pool, の As for Winnie。

メイナード(1997, p.120)

Gomez(1994)は、調査したニュースは単一テーマが 82%を占め、固有名詞、代名詞、普通名詞だったと報告しており、メイナードは「ラジオ・ニュースは簡潔明瞭を目的としていることから、テーマは単一で現れ、テーマ展開パターンも単純な形が多いとも言える」と解説している。

筆者は、日本語発話において、主述関係の表現が先送りされる際に、文頭に置かれる「前置き」は Chafe(1976)の「中国風トピック」の定義が一番近いと考える。「前置き」はこれから話すことについての前提、了解、コンテキストの設定という機能を果たしていると思われる。さらに、Gomez(1994)が、BBC 放送のニュースでは単一テーマが 82%を占めていたと述べているのは大変興味深い。つまり、ニュースの文頭の 8 割以上が固有名詞、代名詞、普通名詞で占められているということだ。日本語のニュースではテーマはどのように表現されているのだろうか。次節では筆者が調べた NHK テレビニュースを検証する。

3.2.2. 日本語ニュースにおけるテーマ

筆者が 2003 年 3 月から 6 月までに無作為に集めた NHK テレビニュース放送 63 本の文頭表現を調べたところ、単一テーマで始まるものは 33 本で全体の 52%に当たり、メイナード (1997) の報告した BBC の 82%と比べてかなり少ないことが分かった。

英語では形容詞句や節が名詞の後に置かれるという統語上の差異を考慮し、日本語ニュースでは文頭に形容詞句が来るものも単一テーマとして扱った。以下にその例文を示す。下線部は単一テーマに当たる名詞を示す。

²⁹ 例文に使用されている固有名詞。

(1) 単一テーマの例

1) アメリカ国防総省は4日、新たに6万人規模の陸軍部隊を対象に、ペルシャ湾岸地域へ派遣を命じたことを明らかにしました。

2) イラクの大量破壊兵器に関する国連の査察団は先の安全保障理事会で委員長が指摘した射程150キロを超えるミサイルをめぐって連日活発な査察活動を行っています。

3) アメリカを訪れている韓国のノ・ム・ヒョン大統領はまもなくブッシュ大統領と初めての首脳会談を行います

(2) 単一テーマ以外の文頭表現

文頭にすぐ主部がでない文章でよく見られる表現はA.長い形容詞節、B.旧情報をしめす「で」「について」「の中で」、C.主述部の目的を表す「のために」「をめざして」の3種類がある。下線部は該当箇所を示す。

A. 長い形容詞節の例

4) 大手ハンバーガーチェーンの日本マクドナルドの創業者で30年以上に渡って経営のトップにあった代表取締役会長の藤田田氏が、今月で会社のすべての役職から退くことになりました。

5) 商店主など個人で事業を行っている人や年収が二千万円を超える会社員らが、去年一年間に得た所得を申告する確定申告の受け付けが今日から始まりました。

B. 旧情報を示すもの

6) ニュージーランドの登山家ヒラリー卿による初登頂から明日で50年になる世界最高峰のエベレストで、今日ネパールのヘリコプターが墜落し、これまでに二人が死亡、八人がけがをしました。

7) アメリカ中西部で、天然痘に似たサル病の病気、「サル痘」にヒトが感染し

た問題で、CDC・疾病予防センターはこれまでに33人にサル痘とみられる症状が出ていることを明らかにしました。

C. 主述部の目的を表すもの

- 8) 放送に対する視聴者の意見や苦情により適切に対応することなどをめざして、NHKと民放連・日本民間放送連盟は放送の倫理に関する現在の二つの組織を統合して、今年の7月に新しい組織を設置することになりました。

日本語のニュースの冒頭に見られるテーマ表現は、Downing (1991) が掲げた三つの framework (コミュニケーション参加者、当事者の枠を設定するテーマ、コンテキストの枠を設定するテーマ、談話上の機能を果たすテーマ) の内、コンテキストの枠を設定するテーマに当たることが分かる。メイナード(1997) は、このようなテーマは「文がそれについて述べるもの」を提供するわけではなく、読者にテキスト理解のヒントを与える機能を果たしているとしている。

メイナード(1997)の言うように、BBC のニュースが「簡単明瞭」を目的として、単一テーマを多く使用しているとしたら、日本語のニュースはしばしば「簡単明瞭」よりも「テキスト理解のヒントを与えること」を重視しているということにならないだろうか。Maynard(1997)は日本語文の構造的特徴として topic-comment の構造を挙げ、topic は「コト」や「モノ」によって客体化された名詞化表現で表されると述べている。上記した日本語ニュースの文頭表現は名詞化されてはいないが、メイナードの言う topic-comment の構造に当てはまると思われる。

欧米におけるテーマの研究者は、テーマには主述部の理解を促すための framework という機能があるとするなど、あくまで文章の意味は主述部にあると考え、日本の学者もその考えを踏襲して、主述部以外の要素はモダリティやコンテキストを与える機能とみなしていると思われる。しかし、ここに挙げた日本語ニュースのリード文を見ると、テーマ表現の方が主述部よりも重要な情報を伝えているのではないかと思われる例がある。

- 4) 大手ハンバーガーチェーンの日本マクドナルドの創業者で30年以上に渡って経営のトップにあった代表取締役会長の藤田田氏が、今月で会社のすべての役職から退くことになりました。

この例文は、「大手ハンバーガーチェーン・日本マクドナルドの藤田田会長が、今月で辞任することになった」でも事実は正確に伝わる上、聞き手にとっては文章が短く理解しやすいと思われる。しかし、このニュースの焦点は「藤田会長が辞任する」という主述部以上に、「藤田氏は日本マクドナルドの創業者」「30年以上に渡って経営のトップにあった」にあるようだ。

- 5) 商店主など個人で事業を行っている人や年収が二千万円を超える会社員らが、去年一年間に得た所得を申告する確定申告の受け付けが今日から始まりました。

この例文もまず「確定申告の受け付けが今日から始まりました」と述べてから確定申告の説明をした方がはるかに分かりやすい。何故、「商店主など個人で事業を行っている人や年収が二千万円を超える会社員」が先に来るのか。

筆者は、この2つの例文に使われたテーマ表現は、「このニュースを聞く価値」を表していると考える。「こんな重要な職責にあった人に関する情報」「商店を経営している人に関する情報」と情報の性質をまず知らせることで、聞き手の関心を引く、または聞き手に聞くかどうかの選択をさせる機能があると思われる。

- 6) ニュージーランドの登山家ヒラリー卿による初登頂から明日で50年になる世界最高峰のエベレストで、今日ネパールのヘリコプターが墜落し、これまでに二人が死亡、八人がけがをしました。

この例文も「エベレストで、今日ネパールのヘリコプターが墜落した」で事件を伝えるには十分である。しかし、ニュースの値打ちは「ネパールのヘリコプターが墜落した」ことではなく、「ニュージーランドの登山家ヒラリー卿による初登頂から明日で50年になる世界最高峰のエベレスト」に関する情報という点にある。

- 7) アメリカ中西部で、天然痘に似たサル病、「サル痘」にヒトが感染した問題で、CDC・疾病予防センターはこれまでに33人にサル痘とみられる症状が出ていることを明らかにしました。

この例文のテーマ表現は、あきらかに主述部の理解のヒントを示す働きをしている。

- 8) 放送に対する視聴者の意見や苦情により適切に対応することなどをめざして、NHK と民放連・日本民間放送連盟は放送の倫理に関する現在の二つの組織を統合して、今年の7月に新しい組織を設置することになりました。

この例文は、主述部の理解を促す働きと、情報の値打ちを表す機能を持っている。

Maynard(1997)は、「誰が誰に何をした」という言い方を避けて「誰が誰に何をしたこと」と名詞化し、話し手がその出来事と自分の間に距離を置く日本語の文章構造は、日本人の *relationality* に対する独特な認識によって生み出されたと述べたが、筆者はニュースのテーマ表現にも関係性を重要視するコミュニケーションスタイルが表れていると考える。日本語のニュースの冒頭に見られる聞き手との *relationality* を示す表現は広い意味で Gumperz(1982)の言う *Contextualization cues* に相当すると思われる。*Contextualization cues* について Gumperz(1982)は以下のように定義している。

That is, constellations of surface features of message form are the means by which speakers signal and listeners interpret what the activity is, how semantic content is to be understood and how each sentence relates to what precedes or follows. These features are referred to as contextualization cues... ...a contextualization cue is any feature of linguistic form that contributes to the signaling of contextual presuppositions. Gumperz (1982, p.131)

Gumperz(1982)は会話におけるコンテキストの共有の必要性を指摘し、会話においては話の背景や前提を示す信号が無意識のうちに示されており、聞き手がこの信号を正しく受けとめない場合には、発話の誤解が起こるとしている。

BBC に比べて日本語のニュースが主述部の前に、聞き手との間にコンテキストの共有を確立するための表現を多く使っていることは何を示すのだろうか。筆者は、日本語の聞き手は情報の値打ちを自分との関係性に照らして測る傾向が強いためではないかと思う。冒頭を聞いて、聞き手はそのニュースが自分にとって関係があるかどうかを判断した上で、初めて主述部を受け入れるのではないか。そうだとすれば、主述部にメインの情報がある言語を話す人がトピックに重要な情報がある日本語を聞いた場合、情報の軽重について受けとめ方のズレが生じることになる。

筆者は国際会議で日本語を英語に同時通訳する際に、一連の言語表現が文章の中でどのような機能を持つのかが分からず苦慮することがある。不思議なのは、通訳をしないで聞いているときは意味不明だとか支離滅裂だと思わない日本語発話でも、英語に通訳をしようとしたとたんにその分かりにくさに気づくことである。それは、おそらく、文章のメイン部分は主述部にあるという思い込みがあるからだろう。日本語を聞きながら、主述部を探し、英訳しようとするが、前置き表現が長々と続き、主語も動詞もなかなか出てこないで「日本語話者はなぜはっきりものを言わないのか」と苛立つのだが、本当に言いたいことが主述部ではなく、コンテキストの共有や聞き手との関係性を示す「前置き」にあるとしたら、日本語が発言の意図をはっきり伝えないという見方は完全に間違っていることになる。これは文化によって、**verbal communication** で伝えるべき事柄の優先順位が異なることを示唆する。

異文化間コミュニケーションにおいて、特定の **verbal communication** の場面に対する認識や捉え方がずれていたとしたら、そのギャップは主述部の位置の移動などの単純な言語操作で埋まるとは思えない。それは、文章構造の要素における重点の違いだけでなく、相手に向かって話すという行為そのものの位置づけの違いにまで関係することかもしれない。この点を明らかにするため、次節では、日本語の発話を、談話の枠組み（フレーミング）の視点から分析する。

3.3. フレーミングの視点から見た日本語の発話

ここではアメリカの大学で学ぶ日米の学生を対象に **speech act** の選択について調べた **Watanabe (1993)** を軸に、フレーミングの視点から日本語の発話を検証する。フレームはもともと、絵画の額縁や写真のフレームのように、ある事物を空間的に周りの環境から切り離す「枠」のことだが、様々な専門分野で比喩的に使われている。**Ensink & Sauer(2003)** は **frame** が言語学、人類学、社会学、人工知能、などの分野で使用され、談話分析では **frame** と同じ意味で **perspective, schema, keying, contextualization** などのことばが使われているために混乱があると述べている。**Ensink and Sauer (2003)** は談話分析における **Frame** を次のように定義している。

‘Frame’ refers to the fact that discourse participants need a shared sense of the way in which the discourse is framed, i.e. an overall sense of the function of the discourse in the social situation.

フレームは談話の参加者が談話の枠組み、すなわち社会的状況における談話の機能について全般的な理解を共有する必要があることを示すものである³⁰。

Ensink and Sauer (2003, p.2)

Watanabe (1993)は異文化間コミュニケーションを研究する際に、フレームの理論から発話を分析することが有用であると述べている。Watanabe は先行研究でフレームは次のように定義されると解説している。

「コミュニケーションがどのような意図に基づくかを示す上位メッセージ」
(Tannen1948)

「社会的事象とそれに対する自分の主観的係わり合いを支配する原則」
(Goffman1986)

「人々、事物、事象、状況および相互反応の方法に関する一連の期待」(Tannen 1985)
Watanabe (1993, pp.178,179)

Tannen(1986)は、会話に参加している者は、提示された言語情報を「期待」に基づいて「解釈」しており、ことばの意味は聞き手の解釈を通してやりとりの間に決定されていくと指摘している。また、Gumperz(1982)は contextualization cue ということばを用いて「文脈の presupposition を知らせる働きをする言語形式の特徴」(Gumperz,1982, p.131)³¹と定義し、例として code, dialect and style switching, lexical, syntactic option, formulaic expression, conversational opening and closing, and sequencing strategies の選択をあげている。また、このような cue には情報は含まれているが、その意味は implicit であると述べている。

Watanabe(1993)は、言語だけでなく文化によるフレーム化の差異が異文化間の誤解につながる可能性に注目し、アメリカの大学で学ぶ日米の学生を対象に speech act の選択について調べた。実験では4人ずつで構成される4つのアメリカ人グループと3つの日本人グループが、20分程度のディスカッションを行った。リーダーは決めずに、3つのトピック³²を与えて自由に話し合うという設定であった。

結論として、米国人学生が、直ちに話し合いをはじめるのに対し、日本人学

³⁰ 訳は筆者による。

³¹ 訳は筆者による。

³² ①日本語を学ぼうと思った理由(米国人学生)または、アメリカに留学した理由(日本人学生)②米国人にとって日本語は欧州言語より習得が難しいという意見に賛成か反対か、またその理由はなにか、③日本人と米国人の間で起こりそうな誤解について議論せよ。

生は発言順序や役割分担などの発言の枠組み設定に時間を費やしていることが分かった。一番年長の男子学生がリーダーを務め、話し合いはその締めくくりの挨拶によって終了する。Watanabe(1993)は、このことから、日米でグループ討論に対する異なるフレーム化が行なわれていると指摘する。すなわち、日本人は討論を共同作業と考え人間関係に配慮した **facework** を多く使用しているのに対し、米国人は目的達成のための個人的な活動の集合と捉えていると述べている。

筆者も国際的なシンポジウムの同時通訳をする際に、人間関係の配慮が討論の目的よりも優先されているのに気がつく。シンポジウムとは「二人またはそれ以上の人が、同一の問題の異なった面を示すように講演あるいは報告し、各々意見を述べ、聴衆または司会者が質問し、講演者がこれに回答するという形式のもの」(広辞苑第4版、1991)であるが、筆者の経験したシンポジウムは講演部分だけで終わってしまうものがある。それは、例えば講演者がひとり 10 分の持ち時間を見捨て、40 分もしゃべるからである。シンポジウムの価値は、パネリスト同士や聴衆も参加して意見を戦わせることにあるのだが、特に日本人パネリストは自分の言いたいことを一方的に言っておしまいということが多い。講演者がシンポジウムの意義を理解していないだけでなく、日本人の議長が発言の時間管理を全くしないからである。これは、他人の話をさえぎるのが大変失礼なこととされる日本の文化を反映している。

また、初めて日本で講演をする外国人、特にアメリカ人は自分の話に何の反応も示さない日本人の聴衆に戸惑いを見せることがしばしばある。ジェスチャーを交え笑顔で語りかけても無表情。ユーモアも受けない。「質問があればいつでもどうぞ」と言っているのに誰も手をあげない。たまりかねて「ここまでの話で何か分からないところはありませんか」と言っても、「とてもよく分かった」という意思表示もなければ質問もないので、講演者は「聴衆に好意的に受けとめてもらえない」という感想を抱く。ところが、終わると、日本人参加者は口々に「素晴らしい講演で感激した」というので、外国人はびっくりするのだ。アメリカ人の講師がアメリカ人の聴衆に向けて話す場面では、途中でたくさんの質問がでることも珍しくなく、講演は講師と聴衆の **interaction** を交えて進んでいくのが普通だからである³³。

水谷修(1979)は平均的な日本人は人間関係がまずくなるのを恐れ、議論を避ける傾向があると述べている。会議を開かなければならない場合は、議論によって何かを生み出そうと考えるよりも、根回しを徹底的にやることで会議の

³³ 直塚(1980)参照。

結果を期待する方向に持っていこうとする。すでに分かっていることしか出ず、お互いの意思の確認という働きしか持っていない会議を口先では形骸化しているといいながら、参加者は満足しているという。

日本人とアメリカ人は「講演会」や「シンポジウム」というコミュニケーションの形式について異なる **framing** をしていると思われる。それは、先生が一方的に講義し、生徒はおとなしく聞いているという日本式教育と、先生と生徒がディスカッションをしながら学習を進めるアメリカ式教育の相違から来ているのかもしれない。相互協調・相互依存が個人の世界観の根幹に位置し³⁴、他人のスピーチをさえぎったり、異論をさしはさんだりすることが失礼だとされる文化を持つ日本人が「会議」や「討論」についてアメリカ人と異なる **framing** をするのは当然だ。日本国内で開かれる国際会議の主催者はコミュニケーション場面に対するフレーミングの異文化間の差異に配慮する必要がある。

このようなフレーミングの相違により、異文化間でどのような誤解や認識のズレが生じているかを示すものとして、謝罪の場面の日米比較を行った Kotani(2001)の研究がある。Kotani(2001)はアメリカの大学に学ぶ米国人学生と日本人学生の会話を観察する実験に基づき、英語会話において日本語話者が“I’m sorry.”を使用する場合は、謝罪というよりは相手に負担をかけてしまったことに対する謝意と恩義の交じり合った感覚を表現していると述べている。また、米国人学生に日本人学生の“I’m sorry.”の使用について尋ねたところ、「日本人は米国人よりも多く、“I’m sorry,”や“Excuse me.”を使用し、何も悪いことをしていない場合でもこのような表現を使う」「日本人が“I’m sorry.”と言う時は本当に悪いと思って謝罪している時と、単なる儀礼や自分の立場を悪くしないための方便の二種類がある」という回答があった。また、日本人学生の方もこの指摘に概ね同意しており、「自分に非が無い状況でも謝罪するのが適切な状況がある」³⁵と答えている。

日本人学生に、自分に非がなくても“I’m sorry.”という必要性を感じる理由について尋ねた結果、相手の気分を良くすることが重要視されていることが分かった。Kotani(2001)は、日本人は謝罪することによって、「事態をまるく収めることができる」「気分を害している相手への配慮を示すことができる」と考えており、このような「本音」と「建前」の使い分けを問題とは考えていないと結論している。さらに、米国人学生の反応については「日本人の politeness を表す」という肯定的な受けとめ方がある反面、「本心がわかりづらい」「不誠実である」という印象を抱いていると指摘している。Kotani(2001)はさらに、

³⁴ 抱井（2004）参照。

³⁵ 原文は英語。訳は筆者による。

日本人が多用する「すみません」には英語の“I’m sorry.”と“Thank you.”の二つの概念が含まれていると述べている。

3.4. 3章のまとめ

筆者は、国際会議の同時通訳の経験から、日本語の発話では主述部が先送りされることが多く、何が言いたいのがなかなか分からないという感想を持っていた。そこで、主述部の前に話される「前置き表現」の機能に注目し、ポライトネスとしての生垣表現(hedges)、テーマ表現、発話場面のフレーミングの3つの角度から調べた。

その結果、前置きにはポライトネスとしての生垣表現が多く使われているが、その使用によって極端に主述部が先送りされ聞き手の理解を阻害する可能性は薄いことが分かった。また、生垣表現は日本語に限らず、どの言語にも見られるものであり、異文化間コミュニケーションの障害になるとは思えない。

日本語発話において主述部の先送りの主な原因になっているのは、テーマ表現である。これは、社会において relationality を重視する日本人の独特な認識に関係している。情報が提示される際に、聞き手が一番関心を持つのは自分との関係性であることから、情報の性質を示すテーマ表現が使われる。これは、その情報を聞く価値を表し、主述部を受けとめる前提とも言え、時には主述部よりも重要な意味を持つ。長い形容詞などの前置きを省けば主述部に関する理解が容易になるが、聞き手は「何のためにこの情報を聞くのか」があいまいになるために、違和感を持つと思われる。

また、このようなテーマ表現によって主述部が先送りされることについて「分かりにくい」という感想を持つのは、日本語を欧米の言語と同様、主述部にメインの内容がある言語であるとする思い込みのためとも考えられる。日本語発話においてテーマを表す前置きが主述部と同様、またはより重要な情報を伝えるとしたら、それは文化によって、言語コミュニケーションで伝えるべき事柄の優先順位が異なることを示唆する。

異文化間コミュニケーションにおいて、特定の言語コミュニケーションの場面对する認識や捉え方がずれていたとしたら、そのギャップは主述部の位置の移動などの単純な言語操作で埋まるとは思えない。そこで、最後に日本語の発話場面をフレーミングという観点から調べた。その結果、人間関係を大切にする文化を持つ日本人は、討論や会議に関して独特のフレーミングをしており、異文化間のコミュニケーションの場面で認識のズレや誤解が起きていることが分かった。日本語発話の前置き表現ストラテジーには強い文化的影響が認めら

れる。次章では、国際会議などの異文化間コミュニケーションでしばしば問題となる日本語発話における **story-telling** に着目し、発話における日本人の感情表現を分析する。

第4章 ストーリーテリング

第4章の目次

4.0. はじめに

4.1. 日本語発話に見られるストーリー性

4.2. 物語の特性

4.3. 情意の伝達とストーリーテリング

4.4. 4章のまとめ

4.0. はじめに

筆者はこれまで、国際会議やシンポジウムなどの公の席で日本語母語話者が唐突に個人的な話を始める場面にしばしば遭遇してきた。たとえば、質疑応答の時間に質問に立った人が、名前や所属を告げる際に、自分の経験や苦労話を物語のように長々と話し、肝心の質問がなかなか出てこないことがある。また、質問をされた人が、答えを言う前に、長い物語を語ることも多い。そのため、聞き手は話し手の意図が理解できず、議論の効率が落ちてしまう。筆者の経験から、文化や母語に拘らず、外国からの参加者にこのような傾向はあまり見られないように思う。日本人は自分を物語るのが好きなのであろうか。本章では、日本語発話の特徴のひとつであるストーリーテリングを取り上げる。

4.1. 日本語発話に見られるストーリー性

Watanabe(1993)は、アメリカの大学で学ぶ日米の学生を対象に *speech act* の選択について調べた研究で、「何故アメリカに留学したか」または「何故日本語を勉強しているか」の理由を述べる際、日本人学生は時系列的で詳細なストーリー形式を使用するが、米国人は簡潔な報告の形式をとると指摘する。以下にそれぞれの例文を示す。

(1) 日本人学生（みなこ）の発話³⁶

ええと、私は小さい頃から、外国に行きたいっていう気持ちはあったんですよね。で、私の父が、もう何ていうか、アメリカびいきっていうか、あの、うちの父自身がこっちで勉強したくて、で、U of M, University of ミシガンと、あと、UCLA とに、あの、研究しに行ったりとかして、もう、とにかく、そっちの方に、あの、私たちのことも行かせたいってゆうか、そういう感じだったので、それで徐々にこっちの方に行こうかなって感じになってきて。

Watanabe (1993, p.194)

(2) アメリカ人学生(Jill)の発話

And my dad went over to Japan to set up exchange programs and he really liked it. So, I decided to take Japanese.

Watanabe (1993, p.194)

この二つの発話例を比較し、Watanabe(1993)は、「いずれの学生も父親の影響について述べているが、Jill の説明は大変簡潔なのに対し、みなこは父親が留学した動機、留学先の大学名、子どもへの期待など詳細に述べている。Jill は So(だから)という論理的な接続詞ひとつで父親と自分の行動の関係を示しているが、みなこは自分がどのように影響を受けたかを細かくのべており、全体がストーリー形式になっている」³⁷ (p.195) と指摘する。Watanabe(1993)は、日本人学生が、時系列的に過去の出来事を詳しく述べるのは、「理由の説明」を「ストーリー」というフレームに当てはめているからだと分析している。

Watanabe(1993)はさらに日本人とアメリカ人学生は argumentation strategy にも違いが見られたとしている。日本人は一回の発言が長く、複数の論点を一度に提示し、しかも、自らが賛否両論を示すことで意見の対立を回避する傾向があるのに対し、米国人は、一回の発言が短く一つの論点を述べ、反対意見が起こることを受容していると述べている。

以下に示すのは「多くの人アメリカ人にとって日本語はヨーロッパ言語を学ぶよりも難しいと思っている。あなたはこの意見に賛成か反対か。その理由は何か」というトピックにたいする発言例である。

³⁶原文はローマ字による会話分析の記録になっている。筆者が日本語の話しことばに書き直した。

³⁷ 原文は英語。日本語は筆者がまとめたもの。

(3) 日本人学生（かずお）の発言³⁸

そうだな、やっぱり、難しいと思う。特に、何ていうかな、うちの場合は、あ、そこで、HNU³⁹でやっぱ、日本語のコースとかってあるんですね、アメリカのこっちから向こうに行ってとかのコースとかがあって、でけっこう *intensive* にやって…基本的なストラクチャとか身につくけど、結局、漢字の量とかも追いつかないし、それでいくらその上の方のコースまでいっても、…例えば、新聞読むとこまでいかない。だから、私たちだったら、そんなバーツとかこっちの英字新聞とか読めないけど、一応、バーツとか見て分かるけど、こ、こっちの人が、例えば、アドバンスドのレベルにいる人が、じゃあ、それだから、じゃあ、新聞読める、渡して読んでみなさいって行ったらたぶん読めないと思うんですよね。だから、そうゆうところ難しいと思うし、と、あと、ニュアンスとか・・・どこまで分かるのかなってゆう気がする。

Watanabe (1993, pp.199-200)

(4) アメリカ人学生（Stan）の発言⁴⁰

Okay. I think it's harder than European languages, at least writing-wise, especially with the kanji. Kanji are especially hard to learn. This is because there are about nineteen hundred Chinese characters and they are more complicated in terms of writing and reading than hiragana and katakana, the two Japanese syllabaries.

Watanabe (1993, p.202)

Watanabe(1993)は、かずおは日本語が難しいということを、基本的な構造、漢字、読み、ニュアンスの4つの側面から述べているが、Stanは「漢字が難しい」というひとつの論点だけを示していると指摘する。Watanabe(1993)はアメリカ人学生の議論では一度にひとつの論点が述べられ、参加者による短いやり取りを通して議論が進むことを示した。

このような場面は筆者も通訳現場でたびたび経験している。質疑応答の際、日本人講演者は質問に直接答えず、テーマとの関係がすぐには分からないようなストーリーを語った後に答えを言う、あるいは途中で質問を忘れてしまって答えない。または、質問に答えるが、それをきっかけに別の意見の発表を始める。聴衆として参加した人のストーリーテリングとしては質問をする前に、長

³⁸原文はローマ字で会話分析の記録になっている。筆者が日本語の文章に書き直した。

³⁹ HNU は Higashi Nihon University。

⁴⁰ 原文は一部を本文に組み込む形で紹介しているが、日本人学生と比較するために、筆者が一回の発言の形に書き直した。

い意見の発表をする、または、質問ということで話し始めるが、結局質問が出ずに終わることも多く、実質的な議論が行なわれないことも多い。

これは Watanabe(1993)の指摘する日本人のコミュニケーションスタイルの特徴に合致する。Watanabe(1993)は、ことばの非相互性(non-reciprocality of language use)と対立的コミュニケーションを避ける傾向 (a tendency toward non-confrontational communication) は、面子(face)を重視する社会的背景と関係があると述べており、実験により、ひとつの証拠を示したと言える。

日本人は何故このような発言スタイルをとるのか。このような物語という発話形式にはどのような意味があるのか。次節では、ストーリーテリングの特性に注目する。

4.2. 物語の特性

ブルーナー（1990）は物語が他の形態の談話や経験を組織化する他の様式とどう異なるのかについて分析し、物語には「時系列性」「事実に基づくかどうかに関心なこと」「正当とされるものからの逸脱性を処理するユニークな方法」(p.71)の三つの特徴があると述べている。和訳⁴¹は narrative の訳語に「物語」、story には「ストーリー」を当てているが、このふたつのことばは同じように使われていると思われる。

ブルーナー（1990）は、物語は事象や登場人物などいくつかの要素を含んでいるが、それらの要素自身は意味を持たず、全体的な時系列プロットの中でそれが置かれる場所によって意味を与えられており、物語は語るための心内的構造を持っているため、「事実」と「想像上のこと」の区別を意識しないとしているが、この点について、筆者は、物語を語ることに意味があるのであり、語られたことが「事実」なのか「語り手の想像なのか」は重要視されないということだと解釈した。

筆者が特に興味を持ったのは3番目の特徴、「正当とされる文化パターンからの逸脱を緩和し、あるいは少なくとも理解可能にするような意図的な状態を見出すこと」（ブルーナー、1990、p.71）である。人々が通常の行動を取る、あるいは Grice の協調の原則に従った会話をするときには、それに対する理由は問われない。しかし、通常から外れた行動や会話に出くわし、「どうしたのか」とたずねると相手は理由を含むストーリーを話すだろうというものだ。つまり、ストーリーは例外的な行動に意味を与えるように仕組まれているという。

⁴¹ 訳は岡本・中渡・吉村による。

メイナード（1997）は Labov and Waletzkey の個人的経験物語(personal narrative)の研究を引用し、個人的経験物語は「過去の経験で現実起こった出来事のいきさつをそれと同じ順序で言語表現に言い換えて表現したもの」と定義されているとする。ハーレムのギャング仲間の若者たちから集めたデータに基づき、Labov and Waletzkey は個人的経験物語の構成要素を次のように説明した。

要旨(Abstract)：何の話か

設定(Orientation)：誰がどこでいつ何をしたか

出来事(Complicating action)：起きた事件は何か

評価(Evaluation)：話し手の気持ちはどうだったか、話の意味は何か

結果(Result or resolution)：結局どうなったか

結語、締めくくりのことば(Coda)

メイナード(1997, p.36)

このうち、「評価」は、話し手がなぜその話をその場でする必要があると思うかを説明する部分で、個人的経験物語の必須要項とされている。メイナード(1997)は、「報告」は、なるべく客観的に、話し手の評価を加えずに語るのに対して、個人的な経験談は話し手の気持ちを伝える手段として語られることが多いと説明している。

しかし、メイナード(1997)は「個人的経験談は話し手が話す値打ちがあると評価するから行われる」とした Labov の視点には、個人的経験談が話し手と聞き手の間の会話において果たす機能の視点が欠けていると批判し、後に、van Dijk が「個人的な話は、情報を伝えるためだけでなく、忠告を与えるため、相手の行動を促進するため、注意を促すため、そして相手に自分をほめてもらうため、といった動機に基づいている」(メイナード、1997、p.38)と指摘したことを紹介した上で「個人的経験談は会話の流れの中で意見を言うときの理由付けのために語られる」(メイナード、1997、p. 40) とした Schiffrin (1987) の研究にも触れている。

以上に示したストーリーテリングについての先行研究はいずれも、個人的な会話における経験談のことであって、筆者が問題にしているような国際会議などフォーマルな場面で行われるスピーチや質疑応答の際に用いられるストーリーテリングとは異なるが、その機能や効果はよく似ていると思われる。日本人が、客観的な「報告」ではなく、話し手の気持ちを表すストーリーを好んで使う背景には何があるのだろうか。次節では、対人関係における日本人の依存性と日本語における情意の伝達機能の側面からストーリーテリングを分析する。

4.3. 情意の伝達とストーリーテリング

4.3.1. 日本語表現と他者依存性

鈴木（1975）は他者に共感を求める日本語の発話行動について、以下のように述べている。

私たち日本人は、絶えず自分の本当の気持ち、意のあるところを誰か適当な他人に分かって貰うことを求めているらしい。他の人に賛成してもらいたい、同意して欲しい、共感を味わいたいという願望は私たちの他人との関係の中で、手を変え品を変えて各種の行動に現れてくる。何もかもぶちまけてしまいたい、すっかりしゃべって胸がせいせいするというような態度、日本の犯罪者の自白率が驚くほど高いという事実、外交の舞台でしばしば問題になる日本人の機密や秘密を保持することの難しさ、それらはすべて、重大な問題を一人心にしまって、その重みにじっと耐えていくという固く閉ざされた自我のしくみが、私たち日本人にはきわめて弱いのではないかと思われる。

鈴木（1975, pp.182-183）

鈴木（1975）は日本人における他人への依存性の強さを示すエピソードとして、日本人の自殺の原因に関する新聞記事とそれに対するアメリカ人学生の反応を紹介している。記事の内容は「自分の心を打ちあけてとことん話のできる相手が誰もいない悩み」が中高生の自殺の原因として大きな比率を占めているというものだった。アメリカ人学生たちは「本当に大切なことは、友人はもちろん両親にも話したことはない。個人が本当に個人である部分は、他人に言えない部分であって、それを明かすことは自分の存在を危険にさらすようなものだ。だから何もかも心をすっかり打ちあける他人がいらないことで自殺するなど愚の骨頂だ」というような反応を示したという。

鈴木は、日本人は相手の立場でものを考え、自己を拡大して他者を取り込むという傾向があるために、対話が苦手であるとする。

対話とは元来、求心的に収斂する固い自我を持つもの同士が、自己に拮抗し、対立する他者との意見の調整をはかり、利害を調節する機能を果たすものとしての言語なのであるから、相手を自己の立場の原点としてのみ考える拡散型自我構造を持つ日本人には最も異質なものである。

鈴木（1975, p.188）

鈴木（1975）の指摘を受けて、4.1.で紹介した Watanabe(1993)の例文を見

直すと、日本人学生の発話には、聞き手の理解や共感を促す **modality** が多く使われていることに気づく。以下に、それぞれの発言のうち、理解や共感を促す **modality** の見られる箇所を抽出し、下線部で示す。

みなこの発言⁴²

外国に行きたいっていう気持ちはあったんですよね。

もう何ていうか、

アメリカびいきっていうか

私たちのことも行かせたいってゆうか、

そういう感じだったので、

行こうかなって感じになってきて。

かずおの発言⁴³

やっぱり、

何ていうかな、

やっぱ、

日本語のコースとかってあるんですね、

渡して読んでみなさいって行ったらたぶん読めないと思うんですよ

Maynard(1997)は、日本語は **modality** を使って自己を語り、感情的な脆弱性を共有することで **interaction** に対し感情的に関わっているという感覚 (**sense of involvement**) を高めるとし、日本人のリアリティにおいては多くの意見が述べられ、流動的で絶えず変化する **relationality** には複数の視点が共存すると述べている。ストーリーテリングの多用は **relationality** を重視し、他者への依存性が高い日本の文化を反映したものであり、その表現には感情を表す **modality** が多く使用されていることが分かった。次項ではストーリーと論理的な説明の差異に焦点を当てて、日本語発話にストーリーが多く用いられる理由を探りたい。

4.3.2. ストーリーの情意表現性

メイナード（2000）はアリストテレスの修辞学に触れ、ロゴス、エトス、パトスの三種類を次のように紹介している。

⁴² 本稿 p.61 参照。

⁴³ 本稿 p.62 参照。

ロゴス：理性にのっとった論理的な議論(rational arguments)の意味。

エトス：話し手、または話の中に登場する者の人格を指す。特にどのぐらい信用できる人間か、という意味で。

パトス：話し相手、聴衆の感情にアピールするような説得術を指して言う。

メイナード (2000, p.2)

三つの要素のうち、特にパトスについて、メイナード (2000) は Cooper の指摘に沿って次のように述べている。

感情には、当人が相手に理解して欲しいと願う気持ちがあり、相手に理解してもらうことで、相手の行為や状況にも変化が生じるだろうと期待しながら経験される。つまり、感情は主体の内面経験だけでなく、人間の相互行為を通して経験される。

メイナード (2000, p.3)

メイナード(2000)は、日本語を研究することで、指示と命題(reference and predication)に中心を置くロゴス主義の言語学に対するひとつのイデオロギーを示すことができるとする。すなわち「日本語がパトス的な要素をコード化し、＜トピック・コメント＞関係に潜む＜付託的＞な情意を伝えることを願望するという嗜好性は日本語の原理として認められる」(メイナード、2000、p.380)と指摘する。第3章でも述べたように、日本語の発話を英語に同時通訳するとき、筆者は日本語が非常に分かりにくいという感想を持つことが多いのだが、それは、ロゴスという観点に立って命題を探そうとするからではないかと考える。

以下に示すのは、筆者がある国際会議で実際聞いたスピーチの冒頭部分で、話し手は知的職業を持ち、ある運動を進める団体のリーダーである。ロゴスとして捉えれば、大変分かりにくい、パトスの表現と考えれば、情意を伝える力の十分ある発話である。

今、仲間がたくさん日本人にいますということで、これは事実だと思いますが、結局私が今日あるのはそういう仲間たちがあーじゃないか、こうじゃないかと、しょっちゅう周りで議論しておりまして、その人たちが自分はこの道でいこうというのをそれぞれやってきてくれて、それに私ども支えられながら、というか、あるいは教えられながら、あまり年をとってもおれないというような気持ちで今日まで

ております⁴⁴。

他人に向かって話をするのがロゴス、エトス、パトスの三つの要素から成るとすれば、そのうちのどれを優先させるかが文化によって異なってもおかしくない。しかし、異文化間コミュニケーションにおいては、少なくともそれがロゴスの場なのかパトスの場なのかについての共通認識がなければ、効率のよい相互理解は望めないだろう。

中根（1967）は「ウチ」と「ソト」を区別する日本社会の特徴に触れ「場の共通性によって構成された集団は、…枠によって閉ざされた世界を形成し、成員のエモーショナルな全面的参加により、一体感が醸成されて、集団として強い機能をもつようになる」（中根、1967、p.70）と述べ、さらに日本語の会話を次のように述べている。

日本人の「話せる」とか「話ができる」という場合は、気が合っているか、一方が自分をある程度犠牲にして、相手に共鳴、あるいは同情をもつことが前提となる。すなわち、感情的合流を前提として、はじめて話ができるのであるから、お互いに相手について一定の感情的理解を持っていなければならない。

中根（1967, p.180）

中根(1967)は、「日本人は論理よりも感情を楽しみ、インテリ層を含めて日常的に論理のゲームを楽しむことがない」とし「日本人、日本の社会、日本の文化というものが、外国人に理解できにくい性質をもち、国際性がないのは、論理より感情が優先し、それが重要な社会的機能をもっているということにその原因があるのではないか」（中根、1967、pp.181-183）と結論付けている。

4.4. 4章のまとめ

筆者は、国際会議などにおいて、客観的な事実に関する情報の交換や、専門知識に関する議論が行われている時に、日本人が唐突に個人的経験談を持ち出す場面をたびたび経験している。外国人から “How many employees do you have in your company?” とたずねられた日本人の社長が「今から 20 年前、私が工場を開いたときは、あたりはまだ田んぼばかりでした。従業員はわずか 5 人。全財産をつぎ込んだ事業が本当に成功するかどうか自信がありませんでした」から始まる長い経験談を披露した末に、「おかげさまで現在では 200 人の

⁴⁴ 発言の匿名性を維持するために筆者が一部修正している。

従業員を抱えるまでになりました」と答える。あるいは、国際シンポジウムで聴衆の一人が質問に立ち、「私がこの分野の研究を志してヨーロッパへの留学を思い立ったのは今から 30 年前のことで・・・」と延々と苦勞話をして、最後に「このような経験をどう思いますか」と尋ねる。

これらの経験談には事実に関する情報が含まれているが、報告ではなくストーリーという形式が選択されていることから、話し手の力点は聞き手の共感を得ることに置かれている。「相手に分かって欲しい」「親しい気持ちを抱いて欲しい」「褒めて欲しい」という気持ちを込めたストーリーテリングは、**emotional vulnerability** を晒すことで相手の警戒心を解き、「ソト」の者を「ウチ」に引き込もうとするストラテジーだと考えられる。しかし、同一文化内のコミュニケーション場面だけでなく、異文化間コミュニケーションの場面においても、このストラテジーが日本語母語話者の期待するような効果をあげるかどうかは疑問である。次章では、日本語発話の特徴の中から異文化間コミュニケーションの阻害要因になるとと思われる「主語の消失と提示の遅れ」「前置き表現のストラテジー」「ストーリーテリング」の視点から、二つの予備調査の結果を考察する。

第 5 章 日本語発話スタイルの実際：2 つの予備調査

第 5 章の目次

5.0. はじめに

5.1. 予備調査 1. 質問に答える日本語発話と聞き手の理解への影響

5.2. 予備調査 2. 質問をする際の日本語母語話者と英語母語話者の比較

5.3. 5 章のまとめ

5.0. はじめに

本章では、本論文の本調査である「日本語発話スタイルに対する聞き手の受けとめ方」に関する実験調査の準備として行われた二つの予備調査の結果を分析する。予備調査 1. は、質問に答える発話場面を取り上げ、先行研究で明らかになった日本語発話の特徴（主語の消失と提示の遅れ、前置き表現のストラテジー、ストーリーテリング）が聞き手の理解にどの程度の負担を与えているかを調べる目的で行った。テレビで放送された国内向けの日本人政治家の発言を取り上げ、英語への同時通訳と比較することにより、日本語発話の特徴が聞き手としての同時通訳者の理解にどのような影響を及ぼすかを観察した。

予備調査 2. は聞き手に対して質問をする場面における日本語発話の特徴を観察し、英語母語話者と比較するために行った。特定のインタビュー場面を設定し、日本人、イギリス人、アメリカ人の調査協力者の質問の仕方を比較した。

5.1.0. 予備調査 1. 質問に答える日本語発話と聞き手の理解への影響

NHK 総合テレビで放送された党首討論会⁴⁵のうち小泉純一郎自民党総裁と菅直人日本民主党党首⁴⁶の発言と、多重放送で同時に流れた英語同時通訳を比較した。同時通訳者は事前に、インタビュアーの予定する質問のアウトラインを与えられているだけで、各党首の発言については一切事前の準備ができない状況であった。従って、選挙の争点など全般的な知識はあるが、発話はすべてその場で理解しなければならなかった。ここでは、日本語の発話の表現形式と

⁴⁵2003 年 10 月 28 日 午後 7 時半より放送。

⁴⁶ 2003 年 10 月現在。

発話の意図伝達との関係を明らかにする目的で、同時通訳を分析する。発言例は、インタビュー어의質問とそれに対する答えの順序で示し、答えの部分のみを分析の対象とした。

5.1.1. 小泉氏の発言と英語同時通訳の比較

小泉氏の発言を以下に示す⁴⁷。

KJ-1 小泉純一郎氏

Q. 今回の選挙についてですね、小泉さんは最近になりまして、政権を選択する選挙だと言う言い方をされているんですけれども、これはまさに民主一騎打ちという認識を持っていられるのでしょうか。

A. そうですね。小泉改革の進めてきた改革路線。安定勢力の元に改革の芽が出てきた。これを本物にするか。それだったら、小泉内閣応援してくださいと。小泉退陣した方がよろしいというんだったら、野党を応援してくださいと。小泉、首相を続けて3年間、改革を本物にしてくれというんだったら、自民党を応援してくださいと。そういう選択を問う選挙だと思っています。

次に小泉氏の回答とその同時通訳例を時系列的に示す⁴⁸。

そうですね。小泉内閣の進めてきた改革路線。

Well, yes. The Koizumi Cabinet has been promoting

安定勢力の元に 改革の芽が出てきた。これを本物にするか。それだったら
reforms and with the stable majority. We feel that the reform is now on the way.

小泉内閣応援してくださいと。

Whether to consolidate the achievements or not will be the question.

小泉退陣した方がよろしいというんだったら、

So, if the people feel that we should continue,

⁴⁷ KJ は小泉氏の発言場面、Q は聞き手の質問。A は小泉氏の答えを表す。

⁴⁸ Z は発話のタイミングを示す。なお、同時通訳の英文のみを章末の注釈（1）に示す。

野党を応援してください。小泉、首相を続けて3年間

They should support us. If they support the opposition, they should vote

改革を本物にしてくれと言うんだったら

for the opposition. For three years, the Koizumi Cabinet has been promoting reforms

自民党を応援してくださいと。そういう選択を問う選挙だと思っています。

But if the people support such

(沈黙) 49

reforms, then they will vote for us.

最初の文章は「小泉内閣の進めてきた改革路線」という体言止めの典型的なテーマ表現で始まっている。通訳者は名詞節ではなく“The Koizumi Cabinet has been promoting reforms.”と主述部として処理しているが、日本語ではテーマに重要な内容伝達機能があることを踏まえ、適切な通訳になっている。この発言は、直接話法を使ったストーリーテリングの手法を使っているが、それは二行目の「小泉内閣応援してください」を聞くまで分からない。また、「安定勢力の元に改革の芽が出てきた」の部分の主語ははっきりとしていない。英語同時通訳では We が使われているが、通訳者が主語は話者を含む改革派だと判断したためだと思われる。話者が直接話法で呼びかけている文章だと気づいてからは、So, if the people feel・・・のように、はっきりとその意図を表現する訳になっているが、最初は、発話の意図が見えず苦勞している。

ここで注目すべき点は、この発言の最後に来る「そういう選択を問う選挙だと思っています」の結論が、この部分を聞くはるか以前の第4センテンスで“Whether to consolidate the achievements or not will be the question.”のように英訳されている点である。

「これを本物にするか」という疑問文が「これが選挙のカギを握る命題である」という意図を効果的に伝えたためだと思われる。もし、ここが、「これを本物にするのであれば、小泉内閣を応援してください」になっていれば、通訳者は if 構文を使い、文字通りの訳をつけたと思われる。

なお、最後の「そういう選択を問う選挙だと思っています」は訳されていないが、おそらく、通訳者は「すでに訳した」という判断で省略したのだろう。

49 通訳者は小泉氏の発言が終わった後も通訳を続けている。

この例文では、テーマを示す名詞句が主述部として処理され、ストーリーテリングに気づくまでやや時間が掛かっているものの、発話の意図を先取りした訳出が成功している。

次の小泉氏の発言（K J - 2）では、ストーリーテリングのために、発話の意図の明示が大きく遅れている。

K J - 2 小泉氏

Q. (年金改革の負担と給付)について、大まかな水準はどのくらいのものなんですか？

A. これは人生 80 年の時代になりました。もう 80 歳までは長生きの部類に入りません。人生 50 年の時に 65 歳から支給する年金を、そういう時代から人生 80 歳の時に 65 歳から支給という時代と大きく変わってまいりました。しかし、年金と医療と介護、これはもうきちんと公的社会保障制度として守っていかなきゃならないと思います。ただ現状では維持できませんので、給付水準はやっぱり 50 パーセント程度でしょうね。

次に小泉氏の回答部分の同時通訳例を時系列的に示す⁵⁰。

これは人生 80 年の時代になりました。

① Well, people live in an average of eighty years.

もう 80 歳までは長生きの部類に入りません。 人生 50 年の時に 65 歳から

② So even if you are eighty,

支給する年金を

you're not considered long living

そういう時代から 人生 80 歳の時に 65 歳から支給という時代と

So, the pension has to be reformed, because right now the pension is
given

大きく変わってまいりました。 しかし年金と医療介護

from the age of 63. So the situation has changed a lot.

⁵⁰ なお、同時通訳の英文のみを章末の注釈（2）に示す

これはもうきちんと公的社会保障制度として守っていかなきゃならないと思います。

So, as a social security system,

ただ現状では維持できませんので 給付水準は

we have to defend the pension system. But at this point we cannot

やっぱり 50 パーセント程度でしょうね⁵¹ . . .

protect it or manage it. So the benefits will be given to a level of 50 percent

. . .

in payment for an average, compared with the average income.

質問に対し、再びストーリーテリングを使っているが、先ほどの手法が直接話法を用い、短い文章を重ねて効果的に意図を伝えていたのと異なり、これは明らかに時間稼ぎのためと思われる。「給付水準がやっぱり 50 パーセント程度でしょうね」という答えをすぐに出さないのは、痛いところをつく質問だからである。通訳者は、発言の意図が分からず、①で不完全な英文を作るミスをしたがすぐに、②で立ち直り、「年金改革の理由を説明しようとしている」ことを示そうとして原文にはない“Pension has to be reformed.”という文章を挿入し、次のセンテンスを **because** で処理しようとしたが、日本語の原文が意味的にも統語的にも破綻していたために、取りきれず、「大きく変わってまいりました」で追いついている。この部分は、普通に聞いていた日本語話者も同じ理解のプロセスをたどったと思われる。

5.1.2. 小泉氏の発話の分析

(1) 主語の消失と提示の遅れ

小泉氏の発話には動作主表現の消失や提示の遅れは随所に見られるが、同時通訳者が、主語の選択において著しく困難をきたす場面は少なく、文脈の中に主語を示す手がかりが含まれていることを示唆している。

(2) 前置き表現のストラテジー

小泉氏は 13 回の質問に対し、テーマ化機能を持つ「は」で始まる文章を一度も使わず、文頭の生垣表現(**Hedges**)もほとんど使わない。文頭に長い形容詞句のついた名詞をもってくることもなく、述部を示す動詞が比較的早く

⁵¹ 小泉氏の発言は続いているが、ここまでの部分の同時通訳が遅れて提示された様子を示す。

でる。

(3) ストーリーテリング

小泉氏は発言の意図の明示を先延ばしにするストーリーテリングを使っているが、質問者にではなく視聴者に直接話しかけるスタイルをとるため、聞き手の感情に訴える効果がある。そのため、「答えをはぐらかされている」という印象が薄い。

全体的に小泉氏は前置き表現のストラテジーの使用が少ないため、文章が短く、主述部が比較的早く示されて明瞭な印象を与える。しかし、実際は発話の意図を先延ばしにするストーリーテリングが使われており、ひとつひとつのフレーズの意味は明瞭でも、論旨が明快とは必ずしも言えず、英語の同時通訳を聞いている人には、焦点のはっきりしない発言という印象を与える可能性がある。次は、小泉氏とはかなり異なる特徴を持つ菅直人氏の発言を検証する。

5.1.3. 菅氏の発言と同時通訳

まず、菅氏の発話を示す⁵²。

KN-1 菅直人氏

Q：菅さん、昨日ですね民主党として 200 の大台に乗せたいということをおっしゃってましたけれども、参議院では過半数を獲得できない状況が続きます。そうしますとやはり連立政権を組むということは現実的な手段になると思うんですけれども、菅さんが描いていらっしゃる連立のパートナー、それはどこでしょうか。

A：まあ、参議院の過半数と言う問題は一時、自民党政権でも過半数割れがあったわけですが、まあ、きちんとした法案であれば、たとえその時点の野党でもですね、賛成をしていただくことはある訳で、我々野党の間でもそうですから、やはり衆議院での過半数というものを確保することがいずれにしても政権獲得の道だと・・・

次に菅氏の発言と同時通訳を時系列的に示す⁵³。

まあ、参議院の過半数と言う問題は、一時自民党政権でも

The majority within the Upper House

⁵² KN は菅氏の発話場面。Q は聞き手の質問。A は菅氏の答えを示す。

⁵³ Z は発話のタイミングを示す。なお、同時通訳の英文のみを巻末の注釈（3）に示す。

過半数割れがあったわけですが まあ、きちっとした法案であれば
was such that LDP was not able to make that one time.

たとえその時点の野党でもですね

At that point, even if we are not the opposition party

賛成をして頂くことはあるわけで、我々野党の間でもそうですから

or if there is an opposition and we are a ruling party,

やはり衆議院での過半数と言うものを

I am sure we will be able to actually secure cooperation.

確保することがいずれにしても政権獲得の道だと⁵⁴ . . .

But of course, it is important to secure the

.

majority within the Upper House, because that will give us the ruling,

.

we will be able to rule the government.

この発言は、「連立のパートナーはどこか」という質問への答えである。インタビューの場合は、質問がコンテキストを設定するテーマの役割をしているので、聞き手はそのテーマに合わせた発言を期待している。しかし、菅氏は、聞き手が質問の「前置き」として発言した「参議院の過半数を確保できない」とした点を新たなテーマとして提示し、「自民党政権でも一時そういうことがあった」と自らの顔を立てる **facework** を行なっている。同時通訳者は、この **facework** を理解し、正しく訳しているが、その次の「まあ、きちっとした法案であれば」と新たなテーマ表現がでた時点で、意図を取り損ねている。「その時点の野党でもですね」の主語が提示されておらず、「自民党が過半数を割った時」の話だと考えれば民主党を含めた **we** と取るのが自然であるが、その後に「賛成をして頂く」という表現が続くため菅氏は「与党」の立場を取っているように聞こえる。ところが、その次は「我々野党の間でもそうですから」という表現がでてきて、やはり菅氏は「野党」の立場を取っていることが分かるが、こ

⁵⁴ 菅氏の発言は続いているが、ここまでの部分の同時通訳が遅れて提示された様子を示す。

の間、通訳者は主語の選択に大変、苦慮している。しかし、もし菅氏がこの時点で「参議院の過半数割れは大きな問題ではない」と、発話の意図を明確にしていれば、通訳者が衆議院 Lower House を Upper House と誤訳することもしなかったと思われる。

次に、発話の意図を正しく理解するために、背景知識が必要であることを示唆する発言例を紹介する。

KN-2 菅氏

Q：民主党は税金の使い道を正すんだということをおっしゃっています。まあ、その一つ柱が公共事業の見直しだと思いますが、しかし地方などに行きますとやはりその公共事業に依存して生活をしている人たちがたくさんいらっしゃいます。やはり短兵急にあまり公共事業の見直しということを急いでやるとですね、実際にそういう人たちの生活が苦しくなる、経済がむしろ痛手を被ってしまうという意見もありますよね。そこら辺の心配にどのようにこたえられますか。

A：あの、それは逆だと思っています。例えば熊本県の河辺川ダム 2000 億余り、あの付帯工事含めると 4000 億ですが、私は上流の五木村の皆さんと話をしましたが、一時的な公共事業よりも山を保全するといった公共事業、自然回復型の公共事業だと永久にいわば続くと、雇用効果も高いと、そういう意味では従来型のコンクリートの塊を作る自然破壊型の公共事業よりももっと雇用効果の高い、ある意味では経済効果の高い自然回復型の公共事業に基本的に移していくという考えですから、逆に心配ではなくてより効果があると思っています。

次に菅氏の発言と同時通訳を時系列的に示す⁵⁵。

あの、それは逆だと思っています。

例えば熊本県の河辺川ダム 2000 億余り

Well, I think the reverse is true.

With Kawabegawa dam

⁵⁵ Z は発話のタイミングを示す。なお、同時通訳の英文のみを巻末の注釈（4）に示す。

あの付帯工事含めると 4000 億ですが

there have been 200 billion yen, and also

私は、上流の五木村の皆さんと話をしましたが

400 billion yen with incidental works, included.

一時的な公共事業よりも

And I have been discussing this issue with interested parties,

山を保全するといった公共事業、自然回復型の公共事業だと

but it will be best to secure the environment

自然回復型の公共事業だと永久にいわば続くと、

rather than to place our priority

雇用効果も高いと、そういう意味では

on a single project, on a transient project.

従来型のコンクリートの塊を作る自然破壊型の公共事業よりも

And, hence we will have to deviate away from

もっと雇用効果の高い、ある意味では経済効果の高い

the conventional, construction-based public works, but rather to look toward a public

自然回復型の公共事業に基本的に移していくという考えですから
works project which will have more of an impact on resuscitating and stimulating

逆に心配ではなくてより効果があると
the economy. And also, to secure and maintain, conserve the nature.

思っています。

That will be more of an impact.

菅氏は質問に対して、即答をしているが、元の質問が長く、多くの項目を含んでいるため「それは逆だと思っています」という表現だけでは「何がどのよ

うに逆なのか」ははっきり分からない。その後に続く文章は「例えば」で先行されているので、聞き手にはストーリーテリングが始まることが分かるだろう。

「2000 億」には単位がないが、通訳者は文脈から工事費用であると理解し 200billion yen と「円」を付け加えている。しかし、それが、予算なのか、これまでに使われた費用なのか、単なる見積もり金額なのか分からないため、通訳は“there have been...”のような中立的な表現を使わざるを得ない。次の「上流の五木村の皆さん」については、通訳者は文字通り訳さず、そのことばの示す上位概念「利害関係者」ととらえ“interested parties”と訳して、発言の意図を明示しようとしている。

この後、通訳者は「話をしましたが」の「が」を逆説の “but”としているが、これは、「五木村の皆さん」を「多額の投資によって利益を受ける人たち」と解釈したためだと思われる。この「が」を単に文章を継続するために使われる助詞だと解釈していたら、その後に続く文章に出てくる「一時的な公共事業よりも山を保全するといった公共事業」が、そのときの話し合いで五木村のダム反対派が言ったことなのか、菅さんの主張なのかに関する判断が遅れ、後で「自然破壊型の公共事業よりも」の訳語で“we”という主語を選ぶ決断はつかなかったと思われる。

菅氏の発言は、ストーリーテリングと自分の意見の表明の切り替えがはっきりせず、五木村のディスカッションの話がまだ続いていると受けとめられてしまう可能性があり、最後の「思ってます」を聞いて、やっと菅さんの主張であり質問への答えだったことが確信される。結果的に、通訳者は発言の意図を正しく理解していたが、それは、事前に公共事業に関する民主党の立場を勉強していたからだと思われる。

5.1.4. 菅氏の発話の分析

(1) 主語の消失と提示の遅れ

消失した主語の手がかりを文脈に見出すことができず、通訳者は大変苦勞している。これは、聞き手に文脈を理解させるテーマ表現がはっきりしないためだと考えられる。

(2) 前置き表現のストラテジー

菅氏は、13 回の質問に対し 5 回、テーマ化機能をもつ「は」で答えを始めており、「あの今道路財源としてですね」、「あの、今…年金についても考えているのはですね」のような表現を合わせると、テーマを提示する表現で発話を始めている比率が半分以上を占め、テーマ化表現をほとんど使わない小泉

氏とは際だった違いを示す。また、菅氏がテーマの提示のないまま話し始めた場合は、発話の意図を掴みにくい。主述部の提示を先送りにする前置き表現は、名詞句の羅列が多く、典型的な「トピック＋コメント」のスタイルを取っている。

(3) ストーリーテリング

菅氏の発言にはストーリーテリングが多く、ストーリーとそれに対するコメントの切り替えがはっきりしない。小泉氏のような視聴者に直接語りかけるストーリーテリングは見られない。菅氏のストーリーテリングは発言の意図を表す表現の機能や位置付けが明白ではなく、しばしば迷走する。

菅氏の発言は、コンテキストの手がかりをはっきりと示さないために、聞き手のリアルタイムの理解が損なわれていることが分かる。全体を聞けばなんとなく言いたいことは分かるが、伝達効率のよい発話とは言いがたい。また、文章の多くが破綻しているが、このような日本語の発話は国際会議などの公的なコミュニケーションの場面で日常的に耳にするものである。従来の日本語研究は「破綻文」を例外として研究から除外する傾向があるが、これを個人の発話能力の問題として片付けている限り、実態に即した研究は行えないと考える。

5.1.5. 予備調査 1.のまとめ

「主語の消失と提示の遅れ」「前置き表現のストラテジー」「ストーリーテリング」の三つの視点から、テレビのインタビュー番組に出演した日本人政治家ふたりの発言を同時通訳者の理解を手がかりに分析した。その結果、コンテキストがはっきりと示されている場合は、「主語の消失と提示の遅れ」によって聞き手の理解が損なわれることは少なかった。また、バイリンガルの通訳者は、文頭にテーマ表現を置いて主述部を先送りする「前置き表現のストラテジー」を正しく理解しており、名詞句を文章化するなど適切な処理を行っていた。しかし、発話者の視点がぶれるなど、テーマの設定が不適切な場合は、理解できず、発話の意図を伝えられなかった。また、「ストーリーテリング」は聞き手の感情に働きかける効果を持つ反面、失敗するとだらだらと話が迷走する大きな要因になっていることが分かった。

次の予備調査 2.では日本人、アメリカ人、イギリス人⁵⁶ジャーナリストのインタビューの仕方を観察し、日本語の発話に見られる特徴が英語発話にも見られるかどうかを検証する。

⁵⁶ 英語母語話者の間でも地域によって発話スタイルの差があると推定されたため、ここでは2つの英語母語国の人に参加してもらった。

5.2.0. 予備調査2. 質問をする際の日本語母語話者と英語母語話者の比較

これまでは、自分の考えを述べる場面や、相手の質問に答える際の日本語の発話を観察してきたが、ここでは、相手から情報を引き出そうとする時の発話を分析する。相手の顔を立てるための婉曲表現や生垣表現(hedges)を多く使い、行為を自然現象のように表現する日本語発話の特徴は、相手に積極的に関わらなければならない質問の場面でどのように現れるのだろうか。また、それは英語母語話者とはどのように異なるか。ここでは、同じ場面を想定して行われたインタビューを観察することにより、日本人、アメリカ人、イギリス人の調査協力者の発話スタイルを比較する。

5.2.1. 予備調査の目的と対象

予備調査2.では質問者がどのような順序で話題を切り出し、相手の気持ちに踏み込んで情報を引き出そうとするかを観察し、英語母語話者との比較を通して日本語発話の特徴を分析する。事前に3人の日本人にヒアリングを行った上で予備調査のフォーマットを決め、日本人、イギリス人、アメリカ人ひとりずつ計3人の調査を行ったが、日本人とイギリス人がジャーナリストのバックグラウンドを持っていたのに対し、アメリカ人は大学教授で、そのインタビューの仕方が他の2人と明らかに異なっていると感じたため、もうひとりアメリカ人ジャーナリストの調査を追加し、先に行ったアメリカ人教授のデータは事前ヒアリングとして参考資料の扱いとした。

①事前ヒアリング 各 30 分 (国籍、年齢、職業、調査の場所、日時)

日本人男性 (50 歳) 公立高校教員 (自宅)	2004 年 5 月 1 日
日本人男性 (82 歳) 元会社員 (自宅)	2004 年 5 月 2 日
日本人女性 (75 歳) 主婦 (自宅)	2004 年 5 月 3 日
アメリカ人男性 (48 歳) 大学教授 (研究室)	2004 年 5 月 11 日

②予備調査 各 20 分 (国籍、年齢、職業、調査の場所、日時)

日本人男性 (59 歳) 放送関連会社、元テレビ放送記者 (勤務先)	2004 年 5 月 12 日
イギリス人男性 (49 歳) フォトジャーナリスト (勤務先)	2004 年 5 月 11 日
アメリカ人男性 (50 歳) ジャーナリスト (勤務先)	2004 年 6 月 16 日

5.2.2. インタビューの条件設定と事前ヒアリング

調査では、イラクで人質になって解放された女性に対するインタビューを想定して、尋ねたい質問を3つ用意した上で調査者（筆者）をその女性だと思ってインタビューしてもらうことにした。事前ヒアリングでは、事前に情報を与えず資料も用意しなかった。インタビューをする相手の状況設定を口頭で説明し、想定インタビューをしてもらった。最初の男性（50歳）にはインタビューをする立場を「雑誌記者」と「友人」の二つに分けた。「人に報告することを目的とした場合」と「個人的に尋ねる場合」の二つを調べたかったためだが、参加者から「尋ねる相手を想定している上に、聞く立場まで想定するのは難しい」という指摘があったので、他の2人の日本人には「あなた自身の立場でインタビューしてください」という形にした。

また、最初の男性には、聞きたい3つの質問と何故聞きたいのかというのを口頭で説明してもらったが、後半の想定インタビューと重なる部分が多かったため、他の2人には簡単に紙に書いてもらった上でインタビューに移った。しかし、質問を書いた直後にインタビューをしてもらおうと、書いたものを読む傾向が観察された。自然なことばづかいがゆがむ可能性もあると感じたため、本調査では事前に調査書を送付し、記述してもらうことにした。

事前ヒアリングでは、会話記録はテープ録音を使用せず、調査者がその場で書き取ったが、調査者をインタビューの相手と想定しているのに、調査者がメモを取っていると質問しにくいという指摘があったので、予備調査2.ではテープ録音を行うことにした。事前ヒアリングでは、最後に加えたアメリカ人大学教授を除き、調査者がインタビューの相手役を演ずることはなく、参加者は一方的に質問をするだけであった⁵⁷。

5.2.3. 予備調査の実施

ジャーナリストとしての経験のある日本人、イギリス人、アメリカ人⁵⁸を対象に、状況を設定した想定インタビューを依頼した。インタビューする相手は調査者（筆者）が務めた。日本語と英語で調査書を作成し、面接日の数日前にEメールで送付した。ただし、調査に対する質問や確認事項があるなどの理由で、事前に記入したくない者は面接の時に書き込んでもよいことにした。

⁵⁷事前ヒアリングの記録は添付資料（1）に示す。

⁵⁸ 調査協力者は日本語母語話者と英語母語話者の発話サンプルの提供者と位置づけしており、日本人、イギリス人、アメリカ人の代表とはみなしていない。

調査を始める前に、調査の目的を口頭で説明し、インタビューのやり方について不明な点がないよう準備した。参加者は全員が調査の主旨やインタビューをする相手の状況を理解していた。また、実際のインタビューのつもりで行い、相手（調査者）の答えに合わせて自由に質問を変えてよいということで全員が合意した。会話をテープに録音し、調査の結果を研究に使用することについても、完全な同意を得ることができた。

全員が相手に対する3つの質問とその理由を書きとめた紙を用意した後にインタビューを始めた。尚、調査結果の分析は質問者の発話に限定し、相手（調査者）の答えは分析の対象にしなかった⁵⁹。

5.2.4. 予備調査の結果

調査結果は相手から情報を引き出すための直接的な質問が出てくる位置と、その表現法を中心に観察した。

（1）日本人調査協力者

質問1．呼びかけ（あの、高遠さん）

相手に対する配慮（PTSDもようやく回復されたとのこと）

謝意（今回インタビューさせてもらうことになった）

相手に関する既知情報の提示（あの時こういうことをおっしゃった）

質問（今もそういうお考えで変わらないかどうかを聞きたいんですけど）

質問2．前の答えに対する理解（分かりました）

前の答えに対する自分の意見（しかし・・・いろいろあると思うんですけど）

質問（ま、ご自身で・・・反省すべき点があったら聞きたいんですけども）

質問3．相手に関する既知情報の提示（ま、あの、特に解放されてから・・・批判の声がありましたけれども）

自分の意見（あの、やはりニュースの取材・・・というような面もあるとは思いますが）

⁵⁹事前に用意した調査用紙を添付資料（2）、インタビュー記録を添付資料（3）に示す。

質問（自己責任を追及する批判の声。・・・どう思われますか）

質問 4． 質問（ま、あの、これからも人道支援活動っていうのは続けていく
と？）

（２） イギリス人調査協力者

質問 1． 呼びかけ(Let's begin the interview.)

質問の始まりを示す(Here is the first question.)

相手の経験に関連のある自分の意見(In the Vietnam War...and the
end of the war.)

質問(Do you think ...?)

質問 2． 質問の始まりを示す (The second question.)

相手に関する既知情報の提示 (On your release..."resistance
fighters".)

質問 (Would you care to comment on that?)

質問 3． 前の答えに対する理解(You seemed to have some insights there.)

質問(During this ordeal, did you...kidnappers?)

相手への配慮(Difficult question?)

質問 4． 前の答えに対する理解(You said something...to look back on the
situation.)

質問の始まりを示す(I'll go to the last question.)

質問(If you had been more successful...more sympathetic?)

自分の意見(Japanese public...to respond to success and failure.)

質問 5． 相手にとって新しいと思われる情報の提示(President Bush...between
allies and Iraqis.)

質問の始まりを示す(Perhaps this question is...)

質問(Do you think they respond more to the failure?)

質問 6． 質問(More drama in failure?)

（３） アメリカ人調査協力者

質問 1． 質問(In spite of your traumatic experience...why do you want...work
there?)

質問 2． 前の答えに対する理解 (They may need you.)

相手の答えに反する自分の意見 (But there are...they didn't need you.)

質問 (How do you reconcile with them?)

自分の意見 (Ah, children need you, but...don't want you there.)

質問 (How do you feel about that?)

質問 3. 前の答えに対する理解 (OK.)

質問の始まりを示す (Very basic question.)

質問 (Wouldn't you be afraid of return?)

質問 4. 質問 (When you return, would you take cautions...?)

質問 5. 謝意 (Thank you.)

質問の始まりを示す (Next question.)

相手に関する既知情報 (The Japanese public has...the larger mission of Japan.)

質問 (How would you respond to such criticism?)

質問 6. 質問 (Weren't you aware...not to go to Iraq?)

質問 7. 前の答えの確認に関する質問 (But you said earlier.... But now... you weren't aware of that.)

前の答えの確認 (You said....because you were a hostage.)

長い前置きのある質問 (Despite the fact...once again that Japanese mission in jeopardy?)

質問 8. 質問 (So you'll go back...and terrorists acts subsided?)

質問 9. 前の答えに対する理解 (OK.)

自分の意見 (I think...in the future.)

前の答えを確認する質問 (But this is not...and then you'll return?)

質問 10. 相手の答えに反する自分の意見 (All these things...there'll be less need for people like you.)

質問 11. 相手の答えに反する自分の意見 (But there are people..)

質問 (Why do you go to Iraq?)

質問 12. 質問 (How do you describe your expertise?)

質問 13. 前の答えに対する理解 (OK.)

謝意 (Thank you.)

質問の始まりを示す (Final question.)

質問 (Do you think you were making a difference in Iraq?)

質問 (If so, what was your contribution?)

質問 14. 質問 (Concretely, what was your contribution?)

質問 15. 質問 (Finding home for children, isn't that something Iraqis could do?)

質問 (Why does that require...through Iraqis?)

質問 16. 前の答えの確認 (But you said...)

質問 (What was your source of funding?)

質問 17. 質問 (Individuals, where?)

質問 18. 質問 (How you got these contribution?)

質問 19. 前の答えの確認 (The one you were concrete about was...through Iraqis.)

質問 (Anything else?)

5.2.5. 考察

イラクで人質になり解放された女性は実在の人物であり、このインタビューを行ったのは解放されてから2ヶ月ほど経った頃である。3人の参加者はこの事件をよく知っていたが、その知識は一般のニュース報道から得たもので、専門的な知識ではない。しかし、全員にジャーナリストの経歴があることから、関心は深いと想像される。また、調査終了後、全員が普段行うやり方でインタビューを行ったと述べた。

この人物に対する興味やインタビューの報道的価値に対する考え、個人の性格、また研究目的の想定インタビューという設定や調査者と面識があったか初対面かなどについて調査協力者間のばらつきはあるが、相手の答えを引き出す発話スタイルについて、貴重な情報を得ることができたと考える。これに基づいて、「直接的な質問の位置」「質問の表現」「インタビューを受けた側の印象」の三つの側面から考察を加える。

(1) 直接的な質問の位置

相手に関する既知情報、新情報や自分の意見を述べてから直接的な質問をするスタイルは全員が使っている⁶⁰。また、簡単な謝辞や、理解の表明の後、または何も言わずいきなり質問をするスタイルも全員に見られる⁶¹。しかし、その頻度を比べてみると、前置きのストラテジーを使わず、いきなりストレート

⁶⁰ 日本人：質問 1、2、3、イギリス人：質問 1、2、3、5、アメリカ人：質問 2、5、7、9、11

⁶¹ 日本人：質問 4、イギリス人：質問 6、アメリカ人：質問 1、3、4、6、8、12、13、14、15、17、18

に質問をぶつけるスタイルはアメリカ人に際立っている。これは、相手の答えを受けて、次々と当意即妙に質問を重ねるスタイルを取っているためだと考えられる。そのため、質問文は大変短く、聞きたいことを率直に表している。これは、事前ヒアリング扱いとしたアメリカ人大学教授の記録とも共通する。

日本語母語話者と英語母語話者の間の際立った違いは、“Next question.”のような「質問の始まりを示す表現」の使用に見られる。イギリス人⁶²やアメリカ人⁶³は意見と質問の間を区別して相手の注意を引くためにサインを出している。イギリス人の質問1は、直接的な質問文の前に自分の意見が示されているが、その前に“Here is the first question.”と言うことで、次に続く発話の機能を知らせている。一方、日本人は「まず、最初の質問です」というような言い方は一度もしていない。事前ヒアリングの日本語母語話者の記録を見ると、50歳の男性高校教員が質問1⁶⁴と質問3⁶⁵で、質問の開始表現を使っているが、他の二人の日本語母語話者は使っていない。

質問の位置については、アメリカ人が前置きをおかずいきなり質問する傾向が強く、アメリカ人とイギリス人が前置きストラテジーを使うときは、質問に移行する際に質問の始まりを聞き手に知らせる表現を使っている。日本人は前置きストラテジーを使い、質問の開始をはっきり示さずに質問に移る傾向が強いことが分かる。

(2) 質問の表現

質問文を、具体的な情報の提示を要求する強さで比べると、アメリカ人の質問がもっとも積極的である。質問はどれも具体的かつ限定的であり、相手の答えをいくつか先まで見越した上で、情報をひとつひとつ引き出すという感じであった。イギリス人はアメリカ人と日本人の中間で、丁寧ではあるが具体的である程度限定した情報を要求している。

日本人の質問は「そういうお考えで変わらないかどうかを聞きたいんですけども」「反省すべき点があったら聞きたいんですけども」「これにたいして、どういう風に思われていますか」「・・・続けていくと？」という非常に丁寧な表現になっており、英語にすると“Would you mind if I ask you...?”に当たると思われ、最も答えを限定しない聞き方と言える。また、全体的に話し方がゆっくりで、「あの」という間投詞も多く、慎重にことばを選んでいく。

⁶²質問 1、2、4、5

⁶³ 質問 3、5、13

⁶⁴ 「まず、最初にお聞きすることですが」

⁶⁵ 「最後の質問です」

質問 1. では「PTSD もようやく回復されたということで、あの、今回、インタビューさせて頂くことになりましたけれども」と相手に配慮した表現を使っている。質問 2. には、明らかに相手の答えに対する反論や批判がこめられているが、間接的な表現でそれが強く出ないように配慮している。「事件に巻き込まれた」「事件の被害者になった」「ラッキー、アンラッキーな面いろいろあると思うんですけれども」という表現は、「あなたが悪いと責めているのではないが」という生垣表現 (hedges) になっている。また、「反省すべき点はないのか」という質問文の前にも、「ま、ご自身で、現時点ですね」という生垣表現があり、「こうすれば良かった、ああすれば良かった」という口語表現を挟むことで質問のインパクトを和らげている。

質問 3. では、インタビューの中心的话题であり、相手が最も触れられたくないと思われる「自己責任論」に関する質問をしている。「ま」や「あの」という間投詞が多くなっているが、一番強い生垣表現(hedges)は「あの、やはりニュースの取材、あるいはこういった人道活動とか、この件の、何と言うんですか、いわゆる本当に意味のある活動をするためには、そういったところにも飛び込んでいかなければいけないというような面もあるとは思いますが、」である。この質問は「マスコミでああなたの自己責任を問う声が盛んに報道されているが、それをどう思うか」というものだが、1 行で言える質問に 8 行が費やされている。いわば、相手の気持ちを傷つけないために質問の 7 倍の発話が前置きストラテジーに使われていることになる。また、質問も「どういう風に思われていますか」という形にして、相手がどのようなことでも話せるようになっている。

事前ヒアリングで観察された日本人の質問も「どう思われますか」「教えてください」「反論を聞かせて欲しいと思います」「率直なご意見を聞かせてください」(50 歳男性)、「今はどんな風に思われますか」(75 歳女性)「ボランティアとしておいでになった特別な動機は何でしょうか」「どんな苦労がありましたか」「お気持ちはどうだったですか」「気持ちを聞かせてください」(82 歳男性)のように、要求する答えを限定せず、相手が何を話してもよいような形を取っている。以上から日本人の質問は答えを限定しない傾向を持ち、自分の欲しい情報を率直に求めるアメリカ人の質問の仕方とは際立った違いがあることが分かった。

(3) インタビューを受けた側の印象

調査の当初の目的には、インタビュースタイルが相手に与える心理的影響の考察は含まれていないが、今回の調査を通じて筆者が受けた個人的印象を述べ

ておきたい。筆者は、国際会議の同時通訳経験から、発話の意図を最初から明瞭に伝えない日本語の発話は分かりにくく、聞き手に誤解を与えるとして批判的な見方をしていた。一方、一般に英語の発話、特にアメリカ人の発話ははっきりしていて意図がつかみやすく好ましいと感じていた。しかし、今回、インタビューを受ける側に立った経験を振り返ってみると、日本人の質問にはこちらの気持ちに対する配慮が感じられ、大変丁寧で心地よいと感じた。また、イギリス人の質問も丁寧で違和感はなかった。

アメリカ人の質問は、聞きたいことがストレートに伝わって一番答えやすかったが、短い質問を畳み掛けられるとまるで尋問をされているようで、だんだん不愉快な気分になった。途中で「この人は調査に参加するのが嫌だったのではないか。意地悪をされているのではないか」という思いすら抱いたが、調査終了後、相手は非常に友好的な態度に戻り、心配が杞憂だったことが分かった。

日本人に対するインタビューでは、答えを限定しない日本人の質問は、答える側に大きな自由度を許すために相手を立てているという印象を与えるが、答えを限定するアメリカ人の質問は冷たく敬意を払っていないと受け取られる可能性がある。アメリカ人の発言を聞きなれていて、その発話スタイルに好感を持っている筆者ですら、実際にインタビューを受けて不愉快な気分を味わった。この点について西光は次のように述べている。

一般に日本人が英米人と話すと…何かしら頭をおさえつけられて、同じトピックに集中させられるという感じを持つことが多い。これは、日本人は簡単に次から次へと話題が移りやすいが、英米人の場合には話題の転換を何らかの手段で相手に知らせるという違いから出ているようである。(中略) 英米人は注意を自分本位で集中させ、したがってかなりしつこいという違いから発しているようである。

(Hinds, 1986, pp.47-48)

今回の調査は参加者数が少ないので、調査結果に個人の性格の違いが反映されるのは否定できないが、日本人がアメリカ人にインタビューを行う、またはその逆の場合、母語による質問のスタイルの違いが双方に誤解を与える可能性があると考えられる。今後、より多くの参加者を対象とした調査が必要である。

5.2.6. 予備調査 2.のまとめ

相手から情報を引き出すという積極的な関わり合いの必要な場面での日本語の発話が英語の発話スタイルとどのように異なるかを調べるために、状況を想

定したインタビューによる調査を行った。参加者は日本人、イギリス人、アメリカ人の合計3名という限られたデータではあったが、日本人の質問の仕方には英語母語話者と異なる特徴が認められた。また、それは、先行研究や、予備調査1.で分析した放送番組における日本人政治家の発話など、これまでに検証した日本語発話の特徴に一致していた。

日本人によるインタビューでは、聞き手は相手の立場や気持ちに配慮した前置きのストラテジーを用い、答えを限定しない質問の形式を取る。聞き手は一貫して話し手の意見を拝聴するという姿勢を保つことから、主導権はインタビューをされる側に置かれていると言えよう。アメリカ人によるインタビューでは、聞き手はあまり前置きのストラテジーを使わず、直接的で具体的な質問を行い、前置きを使う場合は質問の始まりを示す表現を使って相手の注意を促し、質問がきちんと伝わるように配慮している。質問は相手の答えを限定するような形式が使われており、主導権はインタビューをする側にあると言える。

本調査終了後、アメリカ人の質問に比べて日本人の質問には答えを限定しない **Open Question**⁶⁶が多い理由について、日本人調査協力者の意見を求めたところ、次のようなコメントを得た。

日本人から発言を引き出すには工夫が必要だ。マイクロフォンに向かって積極的にしゃべってくれる人は少ない。**Closed Question**では「はい」とか「いいえ」と言うだけで、それ以上は何も話してくれない。できるだけ、話しやすいようにもっていく必要がある。たぶん、アメリカ人の場合は、ほうっておくといくらでもしゃべるので、インタビューの方向性をコントロールするために、**Closed Question**が多くなるのではないか⁶⁷。

このコメントは、他人に向かって自分の意見を述べることに對する日本人とアメリカ人の基本的な姿勢の違いを示唆している。**Watanabe(1993)**は日本人学生とアメリカ人学生のディスカッションに対する取り組み方の違いを **framing**の視点から研究し、グループ・ディスカッションにおいて、アメリカ人と日本人は文化的な違いから、相手に対して異なる期待を持っており、それが誤解や不満の原因になっていると指摘している。**Watanabe(1993)**はさらに、**frame analysis**が異文化間コミュニケーションのメカニズムの解明において強力な手

⁶⁶ **Open Question** はリーダーズ英和辞典(2000)では「回答者の自由な意見を求める質問」とされている。和田(1995)は、英語の疑問文を **Yes-No** 疑問文、**WH**-疑問文、選択疑問文、付加疑問文の4つに分け、**Open Question**を **WH**-疑問文、**Closed Question**を **Yes-No** 疑問文と呼んでいる。江川(1964)も英語の疑問文を4つに分類しているが、**Yes-No** 疑問文を一般疑問文、**WH**-疑問文を特殊疑問文と呼んでいる。

⁶⁷ 大垣嘉彦、談話、2004年5月12日。

がかりになるとしている。

今回のインタビュー調査の結果からも、日本人とアメリカ人はインタビューにおける聞き手と話し手の役割に関して異なる期待を抱いていることが分かった。さらに、その背景には他人に向かって自分の意見を述べるという行為に対する文化的な価値観の違いがあることが示唆された。

5.3. 5章のまとめ

先行研究で明らかになった日本語発話の特徴を、実際の発話において確認するために、二つの予備調査を行った。予備調査1は、質問に答える際の発話、もうひとつは質問をする際の発話に焦点を当てた。その結果、テレビで放送された政治家の発言には、先行研究で概括した日本語の3つの特徴がすべて含まれていた。さらに、同時通訳の観察を通して、不適切な前置き表現のストラテジーやストーリーテリングが聞き手の理解を妨げており、このような特徴を持つ発話を聞き手が正しく理解するためにはコンテキストの共有が必要であることが示された。

また、予備調査2からは、日本語の発話は相手に質問をするという場面においてさえ、聞き手の意図を明瞭に伝えることよりも人間関係の維持を優先することが確認された。次章では、日本語特有の情報の伝え方が異文化環境においてどのように受けとめられるかを実験調査の結果を踏まえて論じる。

注釈：政治家による発言の英語同時通訳

(1) K J - 1 - A

Well, yes. The Koizumi Cabinet has been promoting reforms and with the stable majority. We feel that the reform is now on the way. Whether to consolidate the achievements or not will be the question. So, if the people feel that we should continue, they should support us. If they support the opposition, they should vote for the opposition. For three years the Koizumi Cabinet has been promoting reforms. But if the people support such reforms, then they will vote for us.

(2) K J - 2 - A

Well, people live in an average of eighty years. So even if you are eighty,

you're not considered long living. So, the pension has to be reformed, because right now the pension is given from the age of 63. So the situation has changed a lot. So, as a social security system, we have to defend the pension system. But at this point we cannot protect it, or manage it. So the benefits will be given to a level of fifty percent in payment for an average, compared with the average income.

(3) K N - 1 - A

The majority within the Upper House was such that LDP was not able to make that one time. At that point, even if we are not the opposition party or if there is an opposition and we are a ruling party, I am sure we will be able to actually secure cooperation. But of course, it is important to secure the majority within the Upper House, because that will give us the ruling, we will be able to rule the government.

(4) K N - 2 - A

Well I think the reverse is true. With Kawabegawa dam, there have been 200 billion yen and also 400 billion yen with incidental works, included. And I have been discussing this issue with interested parties, but it will be best to secure the environment rather than to place our priority on a single project, on a transient project. And, hence we will have to deviate away from the conventional, construction-based public works, but rather to look toward a public works project which will have more of an impact on resuscitating and stimulating the economy. And also, to secure and maintain, conserve the nature. That will be more of an impact.

第 6 章 発話スタイルと聞き手の受けとめ方：

2 言語 2 スタイルの音声ニュース聞き取り比較調査

第 6 章の目次

6.0. はじめに

6.1. 先行調査実例

6.2. 本調査：日本語音声ニュース聞き取り比較調査

6.3. 本調査：英語音声ニュース聞き取り比較調査

6.4. 6 章のまとめ

6.0. はじめに

本章では、日本語特有の情報の伝え方が異文化間環境においてどのように受けとめられるかを明らかにするため、先行調査実例を概括し、さらに日本語ニュース放送とその英語への同時通訳を使った実験調査の結果を分析して、異文化間環境にふさわしい日本語話者の発話スタイルを探ることとする。日本語発話のスタイルが異文化間コミュニケーションの場面でどのように受けとめられているかに関する研究はあるがその数は多いとは言えない（Kotani,2001、直塚、1980）。それは、母語話者と同等のレベルで日本語を理解する他言語母語話者が少ないためである。日本語を理解することができなければ日本語で行われた発話のスタイルに関する感想を持つことはできない。また、日本語ができたとしても、理解能力が低ければ、その観察は日常会話レベルに留まり、国際会議やシンポジウム、放送番組やニュース放送の日本語を正確に聞き取り、そのスタイルについて感想を持つことはできない。

では、日本語と他言語の完全なバイリンガルの人たちを多数集めれば研究できるのだろうか。日常会話を超えたバイリンガルレベルに達している人たちの数は少ないと思われるが、仮にそれが実現したとしても、その人たちは、バイリンガルの環境で生活してきたのだから、日本語の発話スタイルを異文化の視点から観察することは容易ではない。人間同士のコミュニケーションにおいて音声言語コミュニケーションが極めて重要な役割を果たすことは衆目の一致するところでありながら、ことばの壁があるためにその研究は難しい。

これまでの、日本語母語話者の言語コミュニケーションに関する研究は概ね

4 つに大別される。ひとつは、日本語そのものを研究する言語学(池上、1982)、2 番目は特定の語句や品詞の使い方に関する日本語母語話者と多言語母語話者の違いに焦点を当てたもの(徳永、1994)、3 番目は、日本語母語話者が使う英語を手がかりに英語母語話者との違いを明らかにしようとするもの(Kotani, 2001)、最後は日本語母語話者と多言語母語話者のグループを別々に作り、同じ言語活動の課題を与えて観察し比較するもの(Watanabe, 1993)である。この中では Kotani(2001)の研究が日本語話者の“I’m sorry.”の使い方に対して、アメリカ人の英語母語話者がどのような受けとめ方をしているかを報告しているが、それは日本人の、“I’m sorry.”の使い方に注目し、そこから文化的な相違を探ろうとするものであって、日本語発話の受けとめ方を調べたものではない。

筆者は国際会議の同時通訳を務めた経験に基づき、日本語による発話を言語から切り離し、発話スタイルのみを抽出して異文化間研究を行うことは可能だと考えた。同時通訳者が日本語による発話を英語に直した文章は、言語は英語だが構造は日本語に近い。発言を区切って訳す逐次通訳では、英語として自然な情報やことばの順序に直すことができるが、話し手とほぼ同じ速度で通訳する同時通訳では情報の編集はできずことばの順序の入れ替えにも限界があるからである。

同時通訳を介して発言する日本語話者は、異文化間環境であることをあまり意識せずに自由に日本語で話すことを許される。その際見過ごされているのは、外国語に訳されるのは個々の「ことば」であって、発話のスタイルまでは変えられないということである。日本語を英語に同時通訳をした場合、英語の音声聞く英語母語話者や非母語話者はそれを「英語の発話」のつもりで聞くのではないだろうか。しかし、日本語の発話には本論文で考察してきたような特徴があるため、同時通訳によって「英語の発話スタイル」に転換するのは困難である。従って、同時通訳の英語はどんなにベテランの通訳者であっても日本語のスタイルに英語をのせたものになる。例えば、主語が明示されなければ、英語として不自然な受身文が続くことになる。

国際会議など音声言語による異文化間コミュニケーションの場面には、それにふさわしい発話スタイルがあるのだろうか。あるとすればどのようなスタイルが望ましいだろうか。日本語母語話者が普段の発話スタイルのまま英語への同時通訳を使って言語だけ入れ替えても、異文化間コミュニケーションは成功せず、さらに、日本語のスタイルに英語をのせた文化的に交雑した発話が、聞き手に誤解を与える危険性すら懸念される。

本章ではまず、先行調査事例として NHK 放送文化研究所がまとめた『ニュースの英語放送通訳に関する調査報告書—在日外国人にどう受けとめられてい

るか』(1999)を概括する。後段では本研究の本調査として行われた日本語と英語のニュース聞き取り調査を紹介し、その結果の分析を行う。

6.1. 先行調査事例

先行調査事例として柴田・最上・塩田(1999)『ニュースの英語放送通訳に関する調査報告書—在日外国人にどう受けとめられているか』を取り上げる。

NHK 放送文化研究所が行った「ニュースの英語放送通訳に関する調査」は日本語のニュースを英語に通訳したテープを用いたグループインタビューと在日外国人を対象とした2カ国語放送の利用に関する質問紙調査(有効回答数218件)から構成されるが、本章で取り上げるのは主にグループインタビューの結果である。

6.1.1. NHK 放送文化研究所の調査

調査対象者は3つのグループに分けられ、ひとつは英語以外を母語とする在日外国人5人(ドイツ人、インドネシア人、メキシコ人、フィリピン人、スウェーデン人)、2番目は英語を母語とし日本語を流暢に話す在日外国人5人(アメリカ人3人、イギリス人、プエルトリコ人)、3つ目は英語を母語とし日本語をあまり理解しない在日外国人4人(アメリカ人2人、カナダ人2人)であった。実験に用いた英語のビデオ・テープは1998年12月3日から7日までの「正午のニュース(NHK 総合テレビ)」から、ニュース項目を5つ選定して一本のビデオテープ(7分程度)に編集し、現役の放送通訳者(日本人)が英語に通訳したものである。

ここで注目すべき点は、英語テープ作成のプロセスである。会議通訳などの経験5年、放送通訳の経験7年を持つ日本人プロ通訳者に日本語ニュースの原稿を渡し、1時間準備をさせた後、映像に合わせて吹き込みをさせていることである。翻訳文は他者のプルーフを受けず、すべて通訳者に任されている。柴田らは、このプロセスは、実際のバイリンガルニュース作成の条件と比べて厳しいものと位置づけ、以下のように述べている。

放送での日英語の通訳過程にはさまざまなものがあるが、準備する時間が十分にある場合、比較的一般的なものとして以下のような過程があげられる。

- ① 通訳者(日本人)が日本語原稿を英語に翻訳する。

- ② ニュース製作責任者（いわゆる「デスク」、日本人）が英語原稿をチェック（助言・修正）する。
- ③ 英語のネイティブスピーカーがその原稿を読み上げる」

柴田・最上・塩田（1999, p.4）

この通訳過程の記述には事実誤認があると考えられる。翻訳に携わる者は「ライター」と呼ばれ、主に翻訳を本業とする者である。翻訳された英語の原稿チェックはまず、英語母語話者が行い、その後に日本人が日本語と英語の原稿を比較して内容をチェックし、英語母語話者のナレーターが読み上げる。また、スタジオには2人の同時通訳者が待機し、原稿が間に合わない箇所についてその場で音声を聞きながら同時通訳をするというのが実際のプロセスである⁶⁸。

しかし、柴田・最上・塩田（1999）は「通訳者」と「翻訳者（ライター）」の区別をせず、二つの業務を兼務する者を「通訳者」としている。また、実験に使用した英語のニュースは、放送時間7分程度のものを日本語の原稿を基に「通訳者」が1時間で準備したとされているが、これは実際の翻訳業務に比べてかなり短い準備時間である。英語を母語とする専門家のプルーフもなく、ネイティブによるナレーションも使用されていない。また、緊急事態など事前にまったく準備ができない同時通訳のシミュレーションにもなっていないので、実際に放送されている英語ニュースとはかけ離れたものである。従って、現在放送されているニュース英語放送が在日外国人にどのように受けとめられているかを明らかにするという調査目的には不適切なビデオ・テープが使用されたと言えよう。

6.1.2. NHK 放送文化研究所の調査結果と結論

グループインタビューの記録には日本語のニュースや発話のスタイルに関するコメントが多く含まれていた。インタビューは英語で行われているが、報告書にはその日本語訳のみが掲載されていた。

リノス：日本語のニュースを見たことがないからわからないが、おそらく日本語のニ

⁶⁸ NHK の午後 7 時のニュースに合わせて製作される英語版ニュースのスタッフは、30 分の放送に対し、ライター 7 人、同時通訳者 3 人、リ・ライター（プルーフ・リーダー）2 人、日本人プルーフ・リーダー 2 人、英語母語ナレーター 2 人から構成される。このうち翻訳業務を行うライターは午後 5 時から作業を始めるので、30 分の放送内容をすべて翻訳したと仮定すると、放送開始までにライター一人がこなす一時間あたりの翻訳量は放送音声 2 分相当となる。（情報提供：NHK 情報ネットワーク・バイリンガルセンター Executive Producer 大垣嘉彦氏、2004 年 11 月 25 日）。

ユース自体もあいまいだから英語に翻訳してもあいまいになるんだと思う。けれど、ヨーロッパやアメリカの人たちは要点を明確に伝えてもらいたいんです。(中略)問題は翻訳だけでなく違ったニュースの提供のしかたなんじゃないかと思う。

柴田・最上・塩田 (1999, p.21)

ジェフリー：(前略) アメリカ人にとって、どうして日本人はあいまいな表現をするのか、どうして本音で言ってくれないのか、本音とタテマエみたいな…ニュースと同じではっきり言わない。こちらはもっと知りたいし、情報を得たいのに…。

柴田・最上・塩田(1999, p.39)

キース：(前略) よく日本語は受動態を使っているが、英語は能動態が中心なので、ストレートに言う。

柴田・最上・塩田 (1999, p.40)

マギー：“He said that their opinion were heard.”とあるけれども、誰の意見について言っているのかよく分からない。

柴田・最上・塩田(1999, p.50)

次に、グループインタビューで特に問題が指摘されたニュース項目の一部と、その英語通訳文を示す。

日本語ニュース原文 (柴田・最上・塩田、1999, p.70) ⁶⁹

宮沢大蔵大臣は、閣議の後の記者会見で、今年度の経済成長率について、マイナス1.8%という政府見通しを、さらに割り込む可能性が高いという認識を示しました。この中で、宮沢大蔵大臣は、景気の現状について「景気回復の胎動を感じるなどといった発言が出始めたのは多少の変化だが、私の感じは別で、あまり変わっていないと思う」と述べ、年内にも景気が底入れするという経済界の一部の見方に対して、慎重な見解を示しました。

英語通訳文 (柴田・最上・塩田、1999, p.67)

Prime Minister⁷⁰ Kiichi Miyazawa told in the news conference after the cabinet meeting that this year's economic growth rate will be lower than the minus 1.8%, which is even lower than the government prospective. In this, Mr. Miyazawa

⁶⁹ 下線部はグループ・ディスカッションで問題が指摘された部分を示す。

⁷⁰ 誤訳と思われるが原文のまま示す。

commented on the present economic situation. He said that some say that the signs of economic recoveries is seen, but he thinks there is much unchanged. Thus, he is cautious about a part of the business world's view on bottoming out within this year.

このニュース項目の通訳については文法的な誤りや発音についてかなり批判が寄せられたが、注目すべきなのは、調査者が「宮沢蔵相が、景気が良くなると思っているのか、悪くなると思っているのか、どちらだと感じたか」という問いに、参加者が「良くなると思っている」「不明だといっている」「どっちでもない」「ノーコメントだ」「悪化すると思っている」のように様々な解釈をしていることだ。これは、「慎重な見解を示しました」を“**He is cautious about...**”と訳したことが原因と見られ、調査者が「ここでの意味は“**He denied...**”なんです、そういう風には受け取れないですか」と尋ねると「もっとはっきり言うべきだ。そんなあいまいな言い方ではなく」⁷¹（柴田・最上・塩田、1999, p.37）という反応があった。また、このニュースの「経済界の一部の見方」のように、行為者がはっきり示されない箇所を、通訳者が“**some say**”とあいまいな英語で処理しているところでは“**some**”って誰ですか」⁷²（柴田・最上・塩田、1999, p.31）という感想が複数寄せられていた。

この報告には「ニュースに要求されるもの」と「ニュースの日本語」の2つの結論が導かれている。「ニュースに要求されるもの」としては内容重視か英語らしさについての結論が出ず、今後の調査の必要性を述べるに留まっているが、2番目の「ニュースの日本語」には本論文と関係のある重要な示唆がなされているので引用する。

今回は日本での日英語放送通訳を扱った。ここで、もとの日本語に問題があることによって、通訳された英語が分かりにくいものになっている例がみられた。「通訳・翻訳に適した日本語原文」というものがあるはずであり、そこからかけ離れると「不自然な英語」として訳されてしまうのであろう。

また、在日外国人の中には日本語で情報収集が可能な人も多数存在する。彼らにとっても「理解しやすい日本語」とそうでないものがある。この「理解しやすい日本語」と先ほどの「通訳・翻訳に適した日本語原文」はかなりの部分で重なり合うのではないだろうか。また、この「理解しやすい日本語」は、日本人にとって仮に冗長に感じられることはあっても、「理解しやすい」ことに変わりはないだろう。

⁷¹ ジェフリーの発言。

⁷² ゼリデスの発言。

このような意味で、分かりやすい日本語のありかたを究明しそれをニュースで用いることは、極めて重要だと考える。 柴田・最上・塩田（1999, p.84）

筆者は、柴田・最上・塩田（1999）が、「理解しやすい日本語」と「通訳・翻訳に適した日本語原文」がかなりの部分で重なり合うのではないかと指摘した点に注目した。通訳するためには何よりも原文の理解が不可欠であり、「通訳者」という聞き手にとって理解しにくい発話は、通訳もやりにくいはずである。また、他人の話を聞くプロである通訳者にとって理解しにくい発話が、聴衆にとって分かりやすいものとは思えない。

しかし、一方で、内容の分かりやすさに対し、自然な日本語への要求もある。藤井（1996）は、日本語の新聞記事の構成は、大切な情報から順番に出していく逆ピラミッド型をしており、それは放送や活字メディアを問わず、世界のニュース報道に共通しているとする。しかし、その一方で、藤井（1996）は外山（1976）を引用し、逆ピラミッド・フォーマットは、結論を最後に述べる日本語本来のピラミッド構造と衝突する危険性があるとしている。

藤井（1996）はある英語のニュースとその日本語訳を比較して次のように述べている。

[実例 E-1]⁷³の場合、2つのセンテンスを順序どおりに翻訳すると、「日本で多発的にテロ事件があり、6人が死亡し、3,000人以上が被害を受けました。テロ事件が起こったのは東京の地下鉄で、被害者は猛毒神経学の中毒に陥ったものです」となろうが、日本人の受け手は第2センテンスを奇異と感ずることであろう(中略)日本語ニュースでは、状況説明の一部として、「いつどこで」に関する情報が第1センテンスで報じられるのが一般的な慣習であるからである。

藤井（1996, pp.169-170）

藤井（1996）は、日本人の受け手の奇異感を減じるためには情報の再編成・統合アプローチによって、次のような日本語訳にすべきだとしている。

東京の地下鉄で猛毒神経ガスによるテロ事件が多発的に発生し、6人が死亡し、3,000人以上が被害を受けました⁷⁴。 藤井（1996, p.169）

⁷³ 実例 E-1 の英文：A series of terrorist attacks in Japan has left six people dead and more than three thousand injured. They were poisoned by a deadly nerve gas on the Tokyo subway network. 藤井（1996, p.166）

⁷⁴ 原文は下線付き。

このことから、日本語のニュースでは情報のエッセンスを迅速に伝えることが重要視される一方で、元来は下方重心型の日本語の構造との折り合いをつけることが求められているといえる。この点について外山（1976）は次のように述べている。

日本語の構造は富士山型をしているのに、新聞文章は逆三角形型、逆さ富士の形をしている。新聞がおびただしい部数を誇っており、どこの家庭でも最低一紙は購読されているのに、読者が新聞から深い影響を受けることがすくなく、ほんとうにおもしろいという感じをうけていないとするならば、この三角形の向きが日本語の感覚と逆になっていることがひとつの原因であるかもしれない。（外山、1976、pp.39-40）

「分かりやすさ」と「日本語らしさ」はどの程度対立するものなのか。異文化間環境で、日本語を直接聞くまたは同時通訳を介して聞く他言語母語話者にとっても分かりやすく、かつ、日本語母語話者にとっても違和感のない日本語発話の文章構成はありうるのか。次の二つの節では、本論文の本調査として実施した日本語音声ニュースと英語ニュースの聞き取り比較調査の結果を分析する。この調査では NHK 放送文化研究所の調査と異なり、文章作成及びナレーションを含め、実際の放送にふさわしい質の高い音声テープを用意した。

まず、最初に、日本語ニュースの聞き取り調査の結果を分析する。ここでは、日本語ニュースの標準とされる NHK のニュースと、情報の並べ方を英語ニュースのスタイルに変えた日本語ニュースの試作品を作成して日本人母語話者に聞かせ、その感想を記録した。

6.2. 本調査：日本語音声ニュース聞き取り比較調査

日本語を母語とする日本人大学生を対象に、標準的な日本語のニュースと、英語ニュースのスタイルに変えた日本語ニュースの聞き取り比較調査を実施した。調査は、音声テープの聞き取りと調査書への書き込みを行う一斉調査と、その後参加者6名に対して、より詳しい感想を聞くグループインタビューの2つから構成される。

6.2.1. 調査方法

青山学院大学国際政治経済学部で「通訳の理論と方法」の授業をとる学部3年生43名（男性8名、女性35名）を対象に二つのスタイルで制作された2本の放送用ニュースの聞き取り調査を行った。二つのスタイルとは「NHKのニュース」と「音声多重放送用に制作された英語ニュースを日本語にバック・トランスレーションしたもの」である。それぞれをAタイプ：日本語で書かれ、語順や情報の提示の仕方が伝統的な日本語のニューススタイルのもの、Bタイプ：日本語で書かれ、語順や情報の提示の仕方が英語のニューススタイルに近いものと位置付け、元NHKアナウンサーに吹き込んでもらった音声テープを用意した。

調査では、口頭の説明に加え「調査の主旨」と「調査のやり方」を書いた調査用紙を配布し、書面による情報も与えた⁷⁵。調査では、まず調査用紙を配り実施方法に関する質問を促した。参加者が実施方法を理解していることを確認した上で、長野県知事選挙に関するPart IのニュースのテープをA、Bの順番に流し、二つのニューススタイルの違いを感じたかどうか(感じた、感じない)、違いがあると感じた人は、何故そう感じたのか、その理由を用紙に記入してもらった。

小笠原諸島のエコツーリズムに関するニュースを扱ったPart IIを始める前に「AはNHKのニュース、Bは新しいスタイルのニュースです」という解説を加えた。これは、ニュースが比較的長く、印象を記憶できないという懸念があったので、参加者の注意を喚起したかったことと、「違いがある」と聞く前と聞いた後で反応に違いが出るかを見たかったからである。

2本目のニュースは1本目とは逆にB、Aの順序で流した。それは同じ内容のニュースを2回聞いた場合には、2回目に聞いたものの方が理解の程度が増

⁷⁵調査用紙を添付資料(4)、4本の日本語ニュース原稿を添付資料(5)に示す。

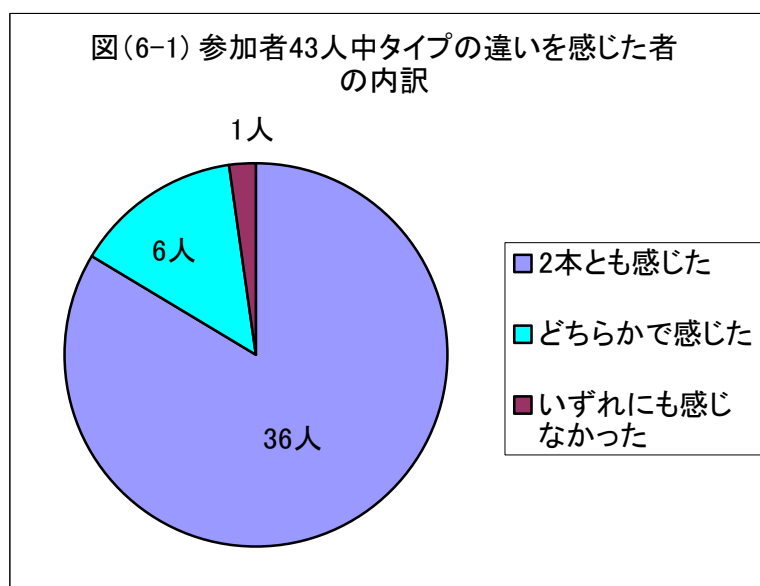
すという、データをゆがませる要因を補正するためである。一本目と同じく、違いを感じたかどうか、違いを感じた理由は何かを尋ね、最後にAタイプとBタイプのどちらが好きか（B、A、どちらも同じ）、またその理由は何かを記入してもらった。

6.2.2. 一斉聞き取り調査の結果

一斉聞き取り調査の結果は KJ 法（川喜多、1967）に基づいて分析した⁷⁶。以下に調査結果の概観、KJ 法による分類（PartI：A, B, PartII：B, A）⁷⁷、及び、好みに関する分析結果を示す。

6.2.2.0. 調査結果の概観

（1） Aタイプと Bタイプの差異に関する認識

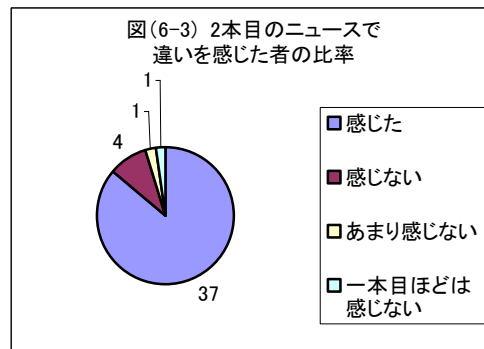
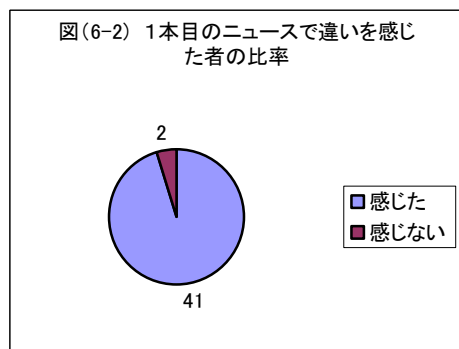


1 本目と 2 本目のニュースの両方で A と B の違いを「感じた」と答えたのは 43 人中 36 人、どちらかで「感じた」としたのは 6 人、いずれにも「感じない」と答えたのはひとりだった。1 本目のニュースは「感じた」と答えたのが 41

⁷⁶調査の生データを添付資料（6）に示す。

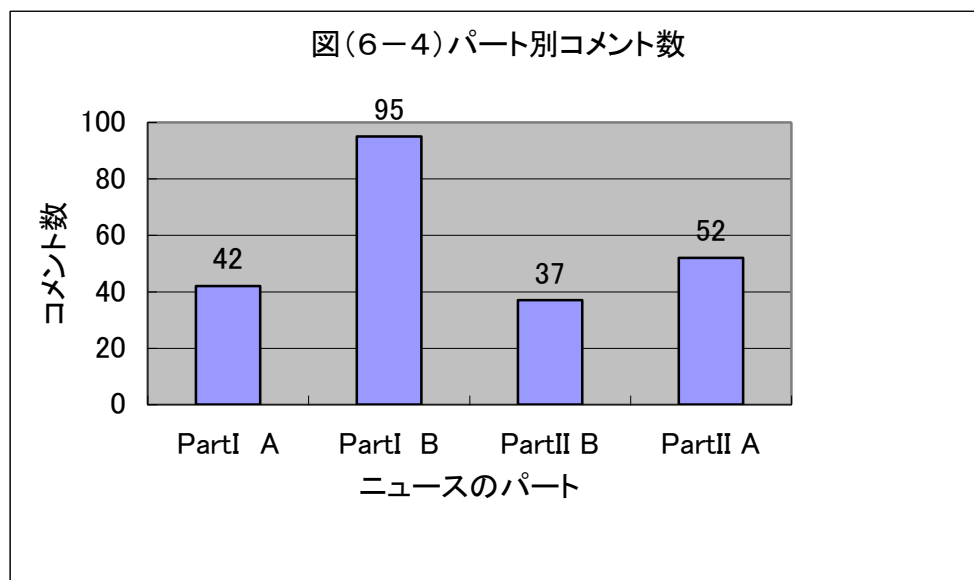
⁷⁷ 調査結果の分析は聞き取ってもらったニュースの順番に沿って、PartI の A,B, PartII の B,A、好みの順序で解説する。

人⁷⁸「感じない」は2人だった。2本目のニュースで違いを「感じた」のは37人、「余り感じない」1人、「一本目ほどは感じない」1人、「感じない」4人であった。



(2) コメント数⁷⁹

各パートで出された AB の違いに関するコメントの数に大きなばらつきがあった。PartI も PartII も、後で聞いたものに対するコメントの方が多かったが、PartIB のコメントが特に多く、PartIA に比べて 2 倍以上になっている。これは、参加者の関心の高さを表していると考えられる。



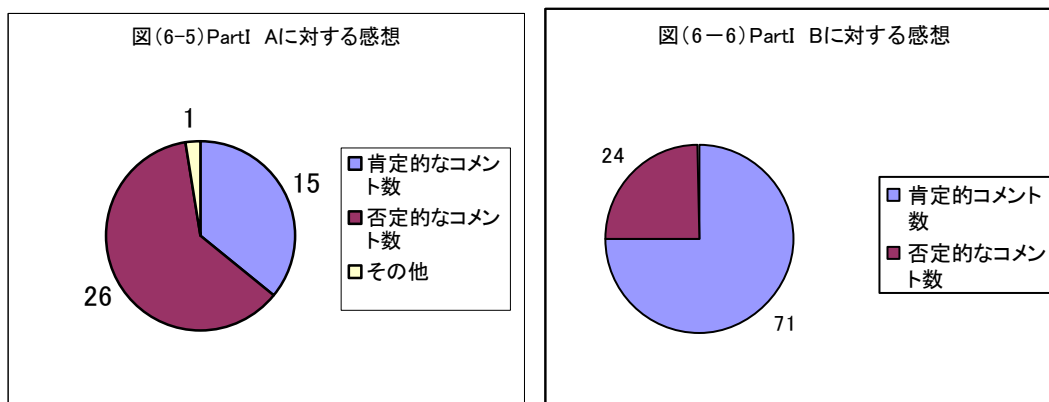
⁷⁸ うち一人は「感じない」と記しているが、AとBの違いについて具体的に記述しているので、「感じた」の群に入れた。

⁷⁹ 参加者の感想文を KJ 法（川喜多、1967）に従って意味のある表現の単位ごとに分析し抽出したもの。

(3) AタイプとBタイプが違うと感じる理由

A Bの違いについて一番多かった記述は「Bの方が分かりやすい」だった。その他は、「内容をつかみやすい」「易しい表現」「子供に話しているような感じ」などが複数あった。Aについては「硬い」「文章が長くて理解しにくい」「流れがよい」「落ち着いている」などの感想が複数あった。

(3) -1 Part I A と B に対する感想



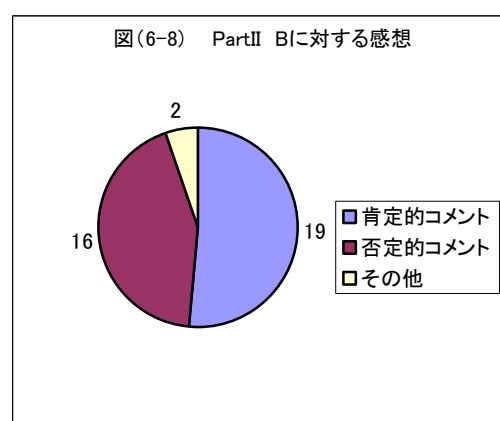
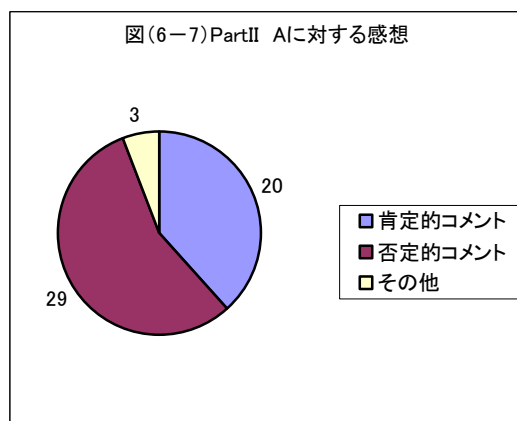
PartI A に対する感想

総コメント数	42
肯定的コメント数	15 (35.7%)
伝説的な NHK のニュース	9
分かりやすい	6
否定的コメント数	26 (61.9%)
感じが悪い	9
分かりにくい	17
その他	1

Part I B に対する感想

総コメント数	95
肯定的コメント数	71 (74.7%)
好感が持てる	22
分かりやすい	49
否定的コメント数	24 (25.3%)
感じが悪い	14
内容に違和感	6
分かりにくい	4

(3) -2 Part II の A と B に対する感想



PartII A に対する感想

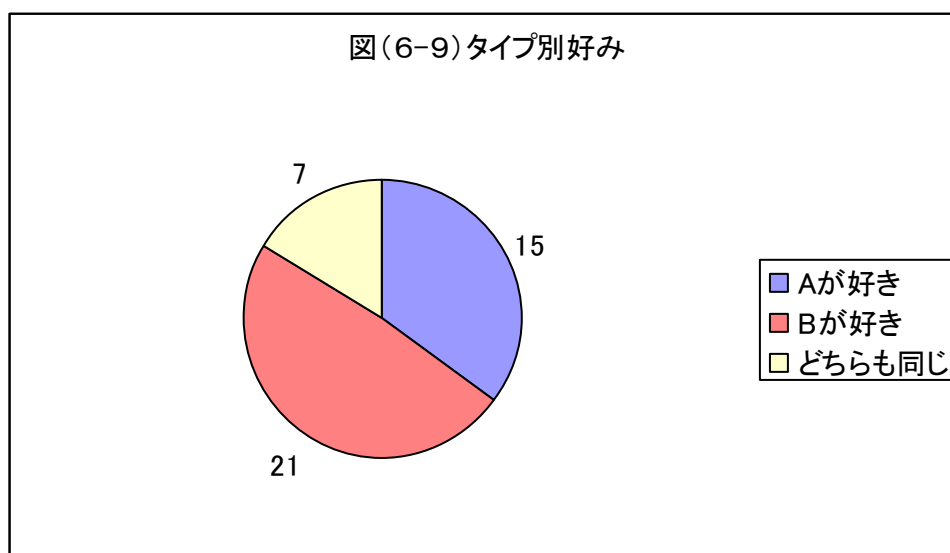
総コメント数	52
肯定的コメント数	20 (38.5%)
好感がもてる	8
伝統的な NHK のニュース	4
分かりやすい	8
否定的コメント数	29 (55.8%)
感じが悪い	10
分かりにくい	19
その他	3

PartII B に対する感想

総コメント数	37
肯定的コメント数	19 (51.4%)
好感が持てる	5
分かりやすい	14
否定的コメント数	16 (43.2%)
感じが悪い	8
内容に違和感	3
分かりにくい	5
その他	2

(4) タイプ別好み

タイプ別好みは人数を表す。



6.2.2.1. KJ 法⁸⁰による PartI,PartII の分析

(1) PartI A の分析

PartI A の感想は、「感じが悪い」「伝統的な NHK のニュース」「分かりにくい」「分かりやすい」の 4 つに分類できる。「かたい」ということばが良く使われているが、感想文全体のニュアンスから、「硬くて冷たい」、「硬くてきちんとしている」「硬くて難しい」の三つに分けられると判断した。「分かりにくい」という分類が一番大きく、「文章や修飾語が長い」「難しい」などがその要因になっていると思われる。その一方で「分かりやすい」という評価もあるが、「ニュースらしい」という前向きな評価と合わせても、全体的には否定的な受けとめ方の方が多かった。

表 (6-1) PartI A

Part I A				
大分類	中分類	小分類	表現	番号
感じが悪い	感じが悪い	堅い雰囲気	堅い雰囲気	211
		冷たい	感情のないニュース	182
			白黒のイメージ	183
			無機質に感じた	421
		読み方が気になる	文の前の方にアクセントがある	91
			ひとつひとつの話が短い	112
			文節で細かく区切った読み方	291
			文節ごとでイントネーションが下がる	292
ラジオのような感じ	293			
伝統的なNHKのニュース	ニュースらしい	堅い感じ	格式ばった言い回し	41
		聞き慣れたニュース	堅い感じ	361
			田中氏の呼び方が適切	42
			抑揚のつけ方が聞きやすい	51
			いつもTVやラジオで聞くものと変わらない	331
		NHKのニュースという感じ	362	
		客観的	事実焦点を当てているのが分かる	71
		とても客観的	181	
内容が適切	選挙活動の中継のように感じた	141		
分かりにくい	難しい	堅くて難しい	堅い文章	171
	分かりにくい	頭に入っていない	堅く難しく感じた	172
			堅い？という感じ	391
			意識して聞かなければ分からないかも	23
			途中で集中力が切れてしまった	113
			内容が頭に入っていない	114
			聞き取りづらい	213
		最初は何がトピックなのか、分かりにくかった	352	
		間が多い	111	
		修飾語が長い	ひとつの単語を修飾する言葉が多い	231
			文ではなく、形容詞節で説明している	294
			英文を関係代名詞で長くしたような日本語	311
		名詞にかかる言葉が長すぎる	371	
		淡々としている	淡々としている	21
		文章が長い	単に情報を伝えているだけ	22
文をつなげすぎている	212			
分かりやすい	分かりやすいように工夫	分かりやすいように工夫	初めから経過について話し出す	351
			田中氏の呼び方についてはAタイプが好き	43
			長野県知事の紹介は選挙においては重要	82
			先に誰がどういう人かということを説明	321
			話題性に重点を置いている	322
			対立候補の人物像を取り上げている	402
			長野県知事の紹介を長々としていた	81
			選挙重視	401

⁸⁰ 川喜多 (1967)。KJ 法はキーワードを書き込んだ名刺大のカードを机の上に広げて分類をするが、ここでは、並べ替えの便利さを考えエクセルを用いた。コメントの表現が肯定的か否定的な意味を持つかの解釈は、感想文全体の解釈に基づいて行ったので、同じことばでも分類が異なっている場合もある。
番号はコメントの A/B 別通し番号で、例えば 211 は参加者 21 番の A に関する 1 番目のコメント表現を表す。

(2) Part I B の分析

Part I B に対する感想で際立っているのは、全体的なコメントの多さ (Part IA の 42 に対し 95) で、その中でも「分かりやすい」という反応の多さが際立っている。「分かりやすい」という直接的な感想以外に「文章が短い」「論理的」「結論が先に述べられている」「簡単」「易しい」という表現が使われている。また、「好感がもてる」も多く、「親しみやすい」「丁寧」などがその理由に挙げられている。

一方で、「感じが悪い」「内容に違和感」「分かりにくい」という否定的なコメントも見られる。筆者が特に注目したのは、「子供っぽい」という感想である。短い文章や平易なことば遣いが「子供向けの話し方」と受けとめられるのは、日本語の発話が関係性⁸¹を重要視していることと関係があると考えられる。つまり、「相手が噛み砕いた易しい話し方をするのは、自分の理解力を信じていないからだ」と感じて「大人として対等に扱われていない」と解釈する傾向を反映したものではないだろうか。「分かりやすい話し方」に対して、日本語の母語話者が人間関係上のマイナスイメージを抱いているとすれば、「分かりやすさ」に価値をおく文化の人たちとの対話において、それが障害になる可能性も考えられる。

⁸¹ メイナード (1997) 参照。

表（６－２）PartI B 全体

Part I B				
大分類	中分類	小分類	表現	番号
感じが悪い	感じが悪い	子供っぽい	内容が子供に話すような感じ	172
			Aよりも子供向け	273
		読み方が気になる	抑揚がある	263
			抑揚のつけ方がよくない	51
			アクセントが文の後ろの方にある	91
	不自然	文章が不自然	ニュースという観点から言えば間延びしている	203
			文末が聞き取りづらい	261
			声が小さい	262
			田中氏の呼び方が気になる	43
			田中さんの「さん」が気になる	333
好感がもてる	感じがいい	親しみやすい	接続詞が多く使われすぎる	204
			動詞の繰り返しが多い	232
			一文が短い	332
			英文を直訳した感じ(日本語らしく変える前)	331
			大衆レベル	41
			柔らかい	151
			優しい	152
			柔らかい文章	171
			親しみを感ずる	181
			話題となっている人の動きが伝わってくる	182
			話題となっている人の温かさが伝わってくる	183
			カラーのイメージ	184
			くだけた印象	193
			柔らかい雰囲気	213
			親しみやすい	362
			お屋のワイドショーの中でのニュースコーナーという感じ	363
	内容が適切	丁寧	丁寧な感じ、印象	212
			心遣いが感じられる	422
			落ち着いている	92
		読み方がいい	標準語に近い	93
			声が明るい	241
			発音がはっきりしている	254
		内容が適切	抑揚がついている	291
			口調が聞きやすい	253
			長野県の政治・経済の現状報告を取り上げている	402
		情報の順番がよくない	現状重視	401
			文脈の順番が面白くない	62
			長野県についての紹介が選挙よりも主にされている	81
	内容に違和感	内容が気になる	選挙についてあまり言及していない	82
			田中氏の経歴に関わる内容のように感じた	141
			田中さんの側からしゃべっていると感じた	153
	ニュースらしくない	ニュースらしくない	ニュースというよりは丁寧な会話のように聞こえた	381
分かりにくい	分かりにくい	文章が短い	文章が短い	52
			文章が短すぎる	11
	分かりにくい	分かりにくい	文がフツフツ切れている	61
			結局何が言いたいのかが明確でない	71
			簡単な単語	32
			言葉が噛み砕かれている	271
			簡単な言葉で話している気がした	392
			言葉遣いが易しい	131
			説明の仕方が易しい	132
			やさしくかみ砕かれていた	173
			内容が易しくまとめられている	272
			文章が易しい	281
分かりやすい	易しい	結論が先	先に結論を述べている	252
			誰が当選したかを知らせてから、どんな人かを説明	321
		論理的	最初に結論を述べている	342
			最初に当選を伝え、経過は後で述べた	353
			論理的	192
		論理的	話の展開が一つの流れを持っている	242
			文が短い	31
			一文一文が短い	101
		文章が短い	さっぱりと一文が短い	231
			一文が短い	282
			一文が短い	292
		文章が短い	説明が形容詞節ではなく、後ろの文になっている	293
			一文が短い	311
			簡潔	351
	分かりやすい	分かりやすい	一文が短い	371
			普段の話しことばに近い	201
			聞きやすい	21
			誰にでも分かりやすい	42
			言葉や表現が分かりやすい	102
			内容を理解しやすい	103
			聞きやすい	111
			分かりやすい	121
			ことばづかいが分かりやすい	133
			説明の仕方が分かりやすい	134
			田中氏や長野県の財政の背景が耳に入ってきてやすい	161
		分かりやすい	内容が一回で理解できる	174
			聞きやすい	191
			分かりやすい	202
			分かりやすい	211
			分かりやすい	221
			内容が記憶に残りやすい	243
			聞きやすい	251
			分かりやすい	301
			分かりやすい	312
			分かりやすい	341
			言葉が分かりやすい	352
			全体的に見て、分かりやすい	354
			分かりやすい	361
			分かりやすい	372
			分かりやすい	391
			分かりやすい	421

表（６－３）PartI B 前半

Part I B				
大分類	中分類	小分類	表現	番号
感じが悪い	感じが悪い	子供っぽい	内容が子供に話すような感じ	172
			Aよりも子供向け	273
		読み方が気になる	抑揚がある	263
			抑揚のつけ方がよくない	51
			アクセントが文の後ろの方にある	91
			ニュースという観点から言えば間延びしている	203
			文末が聞き取りづらい	261
			声が小さい	262
	不自然	言葉遣いに違和感	田中氏の呼び方が気になる	43
			田中さんの「さん」が気になる	333
		文章が不自然	接続詞が多く使われすぎる	204
			動詞の繰り返しが多い	232
			一文が短い	332
			英文を直訳した感じ(日本語らしく変える前)	331
好感がもてる	感じがいい	親しみやすい	大衆レベル	41
			柔らかい	151
			優しい	152
			柔らかい文章	171
			親しみを感じる	181
			話題となっている人の動きが伝わってくる	182
			話題となっている人の温かさが伝わってくる	183
			カラーのイメージ	184
			くだけた印象	193
			柔らかい雰囲気	213
			親しみやすい	362
			お昼のワイドショーの中でのニュースコーナーという感じ	363
		丁寧	丁寧な感じ、印象	212
			心遣いが感じられる	422
		読み方がいい	落ち着いている	92
			標準語に近い	93
			声が明るい	241
			発声をはっきりしている	254
			抑揚がついている	291
			口調が聞きやすい	253
	内容が適切	内容が適切	長野県の政治・経済の現状報告を取り上げている	402
			現状重視	401
内容に違和感	内容に違和感	情報の順番がよくない	文脈の順番が面白くない	62
			長野県についての紹介が選挙よりも主にされている	81
		内容が気になる	選挙についてあまり言及していない	82
			田中氏の経歴に関わる内容のように感じた	141
			田中さんの側からしゃべっていると感じた	153
	ニュースらしくない	ニュースらしくない	ニュースというよりは丁寧な会話のように聞こえた	381
分かりにくい	分かりにくい	文章が短い	文章が短い	52
		文章が短かすぎる	文章が短い	11
			文がブツブツ切れている	61
		分かりにくい	結局何が言いたいのかが明確でない	71

表（６－４）PartI B 後半

分かりやすい	易しい	簡単	簡単な単語	32
			言葉が噛み砕かれている	271
			簡単な言葉で話している気がした	392
		易しい	言葉遣いが易しい	131
			説明の仕方が易しい	132
			やさしくかみ砕かれていた	173
			内容が易しくまとめられている	272
			文章が易しい	281
		論理的	先に結論を述べている	252
			誰が当選したかを知らせてから、どんな人かを説明	321
			最初に結論を述べている	342
			始めに当選を伝え、経過は後で述べた	353
		論理的	論理的	192
			話の展開が一つの流れを持っている	242
	分かりやすい	文章が短い	文が短い	31
			一文一文が短い	101
			さっぱりと一文が短い	231
			一文が短い	282
			一文が短い	292
			説明が形容詞節ではなく、後ろの文になっている	293
			一文が短い	311
			簡潔	351
			一文が短い	371
		分かりやすい	普段の話しことばに近い	201
			聞きやすい	21
			誰にでも分かりやすい	42
			言葉や表現が分かりやすい	102
			内容を理解しやすい	103
			聞きやすい	111
			分かりやすい	121
			ことばづかいが分かりやすい	133
			説明の仕方が分かりやすい	134
			田中氏や長野県の財政の背景が耳に入ってきてやすい	161
			内容が一回で理解できる	174
			聞きやすい	191
			分かりやすい	202
			分かりやすい	211
			分かりやすい	221
			内容が記憶に残りやすい	243
			聞きやすい	251
			分かりやすい	301
			分かりやすい	312
			分かりやすい	341
			言葉が分かりやすい	352
			全体的に見て、分かりやすい	354
			分かりやすい	361
			分かりやすい	372
			分かりやすい	391
			分かりやすい	421

(3) PartII B の分析

Part II では、Part I とニュースタイプの順番を入れ替えて、まず B タイプを聞いてもらった。Part I の時と比べて、コメント数が減り (95→37)、大分類の「分かりやすい」も縮小した (コメント数: 49→14)。これは、A、B を聞く順序を入れ替えたことと関係があると思われる。この点について、ある参加者が興味深い指摘をしているので引用する。

Bの方が聞き取りやすい。Part I ではAを先に聞いたのでAとBの内容の理解度が明らかに違った。Part II では先にBを聞いたため、内容を把握している部分が大きいか、Aを聞いても特に違和感（内容を理解するという意味）はなかった。⁸²

「好感が持てる」(5) と合わせると肯定的なコメント数は 19 で、「感じが悪い」「内容に違和感」「分かりにくい」の否定的なコメント数 16 と比べると、ほぼ半々の受けとめ方になっているのが分かる。

表 (6-5) PartII B

Part II B				
大分類	中分類	小分類	表現	番号
感じが悪い	感じが悪い	子供っぽい	子供に対して話している感じ	301
			少し幼稚	331
			子供っぽく感じられる	421
		読み方が気になる	トーンが高い	411
			文と文の間がそれほど空いていない	292
			文末が聞き取りづらい	261
			声が小さい	262
			抑揚がある	263
好感がもてる	感じがいい	読み方がいい	ゆっくり	291
			人のアナウンスという気がする	183
	伝え方がよい	親しみやすい	主観が入れやすい	133
		文章構造が適切	冒頭に「村長」や「都知事」といった「人」が主語になっている	132
		情報が適切	情報量が多い	272
		内容が不適切	場所の説明ばかり	81
内容に違和感	内容に違和感	ニュースらしくない	ニュースというよりもむしろドキュメンタリー番組やディスカバリーチャンネルを見ているような気がした	72
		不自然	詳しく物事を伝えている	41
		情報が多すぎる	文章が短い	11
分かりにくい	分かりにくい	文章が短かすぎる	補足説明を分けてひとつの文にしている	12
			一文一文が切れている	201
			ロジカルでない	71
		論理的でない	内容を把握しづらい	202
		分かりにくい	最初に事実、トピックをはっきり述べている	351
		論理的	短い文をたくさん話している	211
分かりやすい	分かりやすい	文章が短い	一文が短い	231
			文が短い	181
			分かりやすい	101
			具体的	102
		分かりやすい	大きな内容で区切っている	111
			頭に入りやすい	112
			理解しやすい	121
			言葉の表現が分かりやすい	131
			整理しやすい	182
			言葉が噛み砕かれている	271
			誰にでも分かりやすいような言葉使い	281
			簡潔	341
			理解度はAもBも同じ	52
			AとBは文脈、リズムが違う	61

⁸² 参加者 39 番。A と B の好みについてのコメント。

(4) PartII A の分析

総コメント数は Part IA に比べてかなり多いが、これは、A と B を聞く順序を入れ替えたためだと思われる。Part I では後で聞いた B の総コメント数が多く、Part II でも後で聞いた A の総コメント数が多くなっている。これは、ふたつのタイプの違いを比較するのに、最初に聞いたものをベースにして後に聞いたものの特徴を探そうとするからだろうと思われる。

肯定的コメントと否定的コメントが全体に占める割合は Part IA とあまり変わらず、ここでも「分かりにくい」というコメントが目立った。しかし、肯定的なコメントの中身には Part IA で見られなかった「説得力がある」「心地よい」など「好感がもてる」という分類が加わっている。また、ふつうは「文章が長い」は「分かりにくさ」と結び付けられているが、Part IA では見られなかった「文章が長いが自然」という肯定的なコメントがひとつあった。また、「文章が長い」という単純なコメントだが、好みの欄で「Part II は A が好き」としているため肯定的と解釈したコメント⁸³もあった。

⁸³ 添付資料 (6) 参加者番号 21、Part II および好みのコメント参照。

表（６－６）PartII A

Part II A				
大分類	中分類	小分類	表現	番号
感じが悪い	感じが悪い	読み方が気になる	トーンが低い	411
			助詞で文を切っている	111
			文が切れている感じ	112
			スピードが速い	291
			文と文の間の長	292
	冷たい	客観的	人の見解が入っていない	187
			人の意見が入っていない	186
		淡々	淡々と情報を言っているだけ	21
好感がもてる	説得力	説得力がある	無機質的	131
			人の感情が入っていない	185
		文章が長い	説得力がある	91
			大人に対して話している感じ	301
			一文が長い感じがいい	211
	読み方がいい	心地良い	リラックスした状態で聞けた	51
			テンポがいい	421
		伝え方がよい	石原知事のやり取りが行われるバックグラウンドに重点	141
伝統的なNHKのニュース	ニュースらしい	情報が多い	細かい情報を含めたニュース	161
			さまざまな情報を含んでいる	232
		硬い	堅苦しいスタイル	162
	フォーマルな印象	客観的	熟語が多い	271
			客観的	184
		漢字の熟語が多い	短くできるところは短い漢字言葉に直して伝えている	41
分かりにくい	文章が長い	修飾語が長い	形容詞が前に来ている	192
			主文の前にある接文が長すぎる	221
		文章が長い	一文が長い	182
			一文が長い	191
			文が長い	231
			一文が長い	251
			一文が長すぎる	311
			文章が長い	351
	難しい	難しい	言葉が難しい	171
			文語体のよう	181
	分かりにくい	頭に入ってこない	難しい言葉が比較的多い	121
			意識しなければ分からないかも	22
			「言いたいこと」(point)を回りにくく言っている感じ	31
			気を抜いて聞いていると何のニュースが分からなくなってしまう	32
			頭の中で整理しにくい	183
			分かりにくい	222
分かりやすい	流れがつかみやすい	結論が後	前半の内容すら忘れてしまう	312
			理解しづらい	353
	文章が自然	結論が先	トピックを述べるまでの時間が長い	352
			補足説明を同じ文の中でしている	11
	分かりやすい	分かりやすい	文章が長いが自然	151
			最初の一文で全体が要約される	241
			協定を結ぶことについて、その目的や対象が明確	81
			分かりやすい	82
			Bを先に聞き、内容がわかっているため、Aの方が簡潔に感じた	172
			Bを先に聞き、内容がわかっているため、Aの方が分かりやすく感じた	173
			聞きやすい	201
			理解度はAもBも同じ	52
			AとBは文脈、リズムが違う	61
			二番目以降の文で部分を説明していく感じ	242

6.2.2.2. AタイプとBタイプのうちどちらが好きか

「AとBのどちらが好きか」についてはA：15人、B：21人、どちらも同じ：7人であった。好みの理由を、Aが好き、Bが好き、どちらも同じの三つのグループに分けて分析した。好みの理由を分析するには、形容詞など短い表現の単位ごとではなく、ある程度まとまった文章を見る方が適切であると考え、KJ法⁸⁴は使用せず、文章単位で抽出した。

(1) Aタイプが好きである理由

Aが好きだとする理由は、「いつも聞きなれているニュースだから自然で分かりやすい」ことにまとまっている。

表（6－7）Aタイプが好きである理由

好み	参加者	理由	番号
A	1	Aの方が話の流れをつかみやすい	11
		NHKらしい	41
	4	長々と説明されるよりは、端的に伝えられた方がさっぱりする	42
		格式ばった言い方のほうが雰囲気がありスタイリッシュ	43
	5	自然と耳に入ってくると感じた	51
	6	結果と順番がちゃんとしていて分かりやすい	61
		Bは情報が羅列してあったように思う	62
	7	Aの方が流れがスムーズかつロジカルで、頭に内容が入って来やすい	71
		ニュースは事実のみを明確かつ迅速に知りたいので、Bは少し鬱陶しさを感じた	72
		ただ、もしかすると、単に聞きなれているからそう感じるというの少しはある	73
	8	Aはある事柄についての論点がはっきりしていると感じたから	81
	13	NHKのような堅さが今は逆にレアで好きだから	131
	14	事実を端的に伝えるだけでなく、至った経緯を筋道を立てて述べているように思う。	141
		考えさせられることが多いのはAだと感じる	142
	15	Aの方が自然	151
		耳に入ってきて意味も理解しやすい	152
	20	聞きなれているから	201
		内容を把握しやすいから	202
	26	文頭から文末まで全部聞き取りやすいから	261
	27	ニュースらしく、詳しく述べられている気がした	271
		慣れているからかも知れないが聞きやすい	272
	32	ひとつの文から次の文へ論理立って組み立てられているように感じるから	321
	41	落ち着いている気がして、聞きやすかった	411
	41	自然だった	412
	42	Aの方がテンポがよく、聞きやすかった	421
	42	Bは主旨がずばっと述べられていないのでイライラした	422

⁸⁴ KJ法（川喜多、1967）参照。

(2) Bタイプが好きである理由

Bが好きである理由は「分かりやすい」というのが圧倒的に多い。

表(6-8) Bタイプが好きである理由

大分類	中分類	小分類	表現	番号
好感が持てる	興味深い	興味深い	パーソナルな話など興味の湧く情報を付け加えているから	331
			退屈しない	402
	感じがいい	親しみやすい	Aは少し気が重い	22
			どちらかというと市民寄り	403
		読み方がいい	Bの方がテンポがよい	163
			いつまでも聞いていられそう	171
		若者向け	学生の自分からするとBだが、年齢が上がるにつれ、Aの方が聞きやすくなる気がしなくもない	182
分かりやすい	的確	的確	必要最小限の情報を的確に伝えているところがよい	222
			Bの方が聞いてすぐ内容が理解できるので最後まで聞きやすい	231
			しかし短時間で何が起ったかをざっと知りたい時はBの方が好き	241
			Aは要点をつかみにくい	252
			Aの方は注意して聞いていないと要旨がつかみにくい	332
			何が言いたいのかがすぐに分かり、聞いていて頭の整理がしやすい	341
			内容をつかみやすい	351
			Bの方が結論・言いたいことが分かりやすいから、明確で聞きやすい	401
			簡潔でよい	301
			何のニュースだか、最初の二言三言で分かったから	181
			簡潔で初めにトピックがはっきり述べられていて、その後の理解がしやすい	112
			現状認識が正確	162
		短い	細かく話を切りながら話していたから	23
		易しい	アカデミックにニュースを聞きたい時は(日本語の学習など)、Aタイプの方が好き	242
	分かりやすい	分かりやすい	Aは箇条書きのように感じるが、Bにはストーリー性を感じる	192
			Bの方が何か聞きやすい	21
			分かりやすいから	101
			Aは抽象的で難しい言葉を使っているの、ニュース内容がいまいちつかみにくい	102
			Bはあまり難しい表現は使わずに、具体的にニュース内容を伝えているのでとても分かりやすかった	103
			理解しやすい	121
			耳で聞いた言葉が頭に入ってくる感じを受けたから	161
			聞いていて分かりやすい	191
			Bの方が分かりやすい	221
			Aは一文が長く、長すぎると主語を忘れてしまったり、つながりが分からなくなってしまうから	251
			聞いていて情報を整理しやすいから	291
			Aは耳に入ってきてそのまま通り抜けてしまう気がする	292
			分かりやすいから、スラスラ頭に入れることができる	311
			Aは集中していないと内容を理解できない	312
			文章はAの方がきれいだけど、分かりやすさ、聞きやすさで見るとBの方が好き	371
			Aは文の構成を頭の中で組み立てていると、聞いているだけで疲れてしまう	372
			Bの方が聞き取りやすい	391
			Part I ではAを先に聞いたのでAとBの内容の理解度が明らかに違いました	392
			Part II ではBを先に聞いたため、内容を把握している部分が多いせいか、Aを聞いても特に違和感は無かった	393
			Aは理解するのに集中力を要するが、Bはずっと頭に入ってくる	111

筆者が特に興味を持ったのは Part I で「Bの方が分かりやすい」と答えた人のうち5人が「Aの方が好き」としている点である。以下に各参加者の「好み」に関するコメントと、PartI を聞いた後の最初のコメントを括弧内に示す。

4 番：

好み：A。NHKらしい。長々と説明されるよりは、端的に伝えられた方がさっぱりする。格式ばった言い方の方が雰囲気がありスタイリッシュ。

(A は格式ばった言い回しだが、B は大衆レベルに下げて誰にでも分かりやすくしている。田中氏の呼び方が気になった。これは A タイプが好き。)

13 番：

好み：A。NHK のような硬さが今は逆にレアで好きだから。

(ことばづかいや説明の仕方が、B の方が易しく分かりやすい。(「田中さん」や熟語を使わずに「勝ちました」など)

20 番：

好み：A。聞きなれているから。内容を把握しやすいから。

(B の方が普段の話ことばに近いので分かりやすかったが、ニュースという観点から言えば間延びしている感じがした。B は接続詞が多く使われすぎていると思う)

27 番：

好み：A。ニュースらしい。詳しく述べられている気がした。慣れているからかもしれないが聞きやすい。

(B はことばがかみくだかれていた。内容も易しくまとめられていた。そのため、A よりも子供向けに感じた)

42 番：

好み：A。A の方がテンポがよく、聞きやすかった。B は主旨がずばっと述べられてないのでイライラした。B の方が子供っぽく感じられた。A はテンポがいい。

(A は無機質に感じた。B は分かりやすく述べられていて心遣いが感じられる)

また、Part I で B を分かりやすいとした 3 人が好みについては「どちらも同じ」と答えている。

21 番：

好み：同じ。政治の話題の時は B の方が良かったけれど、環境問題の方は A の方が好き。きっと内容で、すでに私の中で身構えてしまって、堅くて暗い印象がある A だと苦手意識があったのだと思う。

(B は分かりやすく丁寧な感じ・印象 (田中さんは・・・されました) という点から？ 柔らかい雰囲気。A は硬い雰囲気。文をつなげすぎていて聞き取りづらい)

28 番：

好み：同じ。(理由の記述はなし)

(B の方が、文章がやさしく感じた。一文が短い気がした)

36 番：

好み：同じ。それぞれのタイプにあった話題があると思う。ニュース番組でも政治や社会の話題は A のような硬い感じだが、スポーツや娯楽になると音楽もセットも変わり分かりやすさを重視する気がする。

(A は硬い感じがして B は分かりやすい、親しみやすかった。A は NHK とかで B はお昼のワイドショーの中でのニュースのコーナーという感じ)

「B の方が分かりやすいが A の方が好き」である理由としては「NHK らしい」「NHK のような硬さが好き」「聞きなれている」「ニュースらしい」「テンポがいい」をあげており、「B の方が分かりやすいが、好きな程度は同じ」の人は「政治の話題は B、環境の話題は A が好き」「それぞれのタイプにあった話題がある」としている。

6.2.3. 調査後の詳細インタビュー

43 名の学生に対するニューススタイルの比較調査を行った後、6 名⁸⁵に集ってもらい、グループインタビューの後、ニュースの原稿を渡して改めて A タイプと B タイプの比較をしてもらった。A タイプと B タイプに関する印象を聞いたところ、2 名が強く B タイプを支持した。

⁸⁵ 参加者番号 7、10、25、33、40、42。添付資料 (7) に示す。

33 : Bの方が好きである。何の情報かよく分かる。田中知事の個人情報が入っている
ので、よく理解できた。

25 : Bが好きである。Aは結論が見えてこない。

2名はBタイプに批判的であった。

42 : 文法が気になった。

10 : 文法的に変である。

残り2名はそれぞれのタイプの長所と短所を述べていたが、全体としてはやや
Bタイプに批判的だった。

40 : Bは結論を最初に述べているのは良いが、日本語らしくない。長野県知事選挙の
ニュースでは、Aの方が選挙に直結した情報を伝えている。

7 : Aタイプは主語の部分が長い。Bはそれぞれの文章の意味に強弱がなく、どれも
対等の重さの文章という感じで、論理的ではない。

次に、国際会議など、日本語以外の言語を話す人たちが同席する場所での発言
という視点から考えた場合にAとBのどちらの構成が望ましいかをたずねたと
ころ、Bに批判的な4人からは「日本人なのだからきちんとした日本語を話す
べきだ」(40)という意見が多かったが、Bを支持した2人は「国際的な場面
では、分かりやすさを最優先すべきである」という強い意見を述べた(33、25)。

意見交換をした後の感想文から、参加者の評価は「分かりやすさ」と「きち
んとした日本語」の二つの概念を中心にしたものであることが伺える。「分か
りやすさ」については、6人中5人⁸⁶がはっきりとBが分かりやすいと答えてお
り、Aの方が分かりやすいとしたのは1人⁸⁷だった。興味深いのは全員が「き
ちんとした日本語」に対する強いこだわりを示したことである。「Bが日本語と
して変である」という評価は次のようなことばで表現されている。

(1) Bが分かりやすいと評価した者⁸⁸

● (英語から日本語に翻訳しなおしたものと) 種明かしされた後に本文を読むと、確

⁸⁶ 10,25,33,40,42

⁸⁷ 7

⁸⁸ 末尾のカッコ内に参加者番号を示す。

かに日本語らしい文章ではない。(10)

- B の文章は稚拙で教養のある人が話している感じがしない。(10)
- A の文章に慣れている日本人が、もし会議などの公の場で、何の説明もなしに B の文章を聞いたら、バカにされている気がする。(10)
- B の方が少し幼稚に聞こえる (33)。
- ここで話し合った国際会議などを除いて、**native speaker** にはその母国語の形式をとって伝えるべきである。(25)
- A タイプは日本語上級コース向けの日本語。(40)
- B は子供っぽいと感じた。(42)
- 日本語から英語に通訳するときは B タイプの方が分かりやすいが、英語をしっかりと話せない日本人が B タイプのような原稿を書けるかどうかが疑問。(42)

(2) A が分かりやすいと評価した者

- B は論点がずれる。(7)
- B が外国人向けと知らずにテープを聴いたとき、何だか侮辱されたような気がした。
(7)
- 国際会議に出席する半分が日本人であるなら、そう感じてしまう人が少なからずいるかも知れない。(7)
- 学会などは知的なイメージを大切にしていって、表現が稚拙では？と感じる。
- しかし、国際化しつつある現在では日本人のそういうプライドを変えるほうが正解かもしれない。

分かりやすさの評価とは無関係に、参加者が B タイプを正当な日本語と認めていないことが分かる。また、グループ・ディスカッションの初めに、B タイプが英語を日本語に翻訳したものだと言明したことが「変な日本語だ」という評価につながった可能性も考えられる。異文化間コミュニケーションに対する配慮という点では全員が、情報の伝達効率を優先し伝統的な日本語の発話スタイルを変えるべきだと述べている。

- 国際会議で B タイプのような日本語を使用すべきであるという意見は理にかなったものだと思う。(7)
- 会議で B の文章を話すかは、会議の目的によると思う。(10)
- テーマに対する知識や理解が乏しい時に理解を助けるためのツールとして A を用いるのは不親切。(10)

- お互いある程度の内容の理解があれば、A の文章でも問題ないかもしれない。(10)
- 英語と日本語という文化背景が違う以上、何に重点を置いて伝えるかということが異なってくる。(25)
- 国際会議などの場で、B のような日本語で話すべきであるという考えに賛成です。(33)
- 訓練または心がけで B の日本語で話すことは可能になると思うので、国際会議のような「国際的な場」であれば、日本語 B で話してもまったく問題ないと思う。(33)
- 現実問題、同時通訳ですべてのプロセスをこなすのは無理なので、話し手の配慮が欲しいと、自分が通訳ならそう思う。(33)
- 日本人が持っている問題意識と、外国人のものは違うのではないか。よって、内容が異なっても仕方ないかも知れない。(40)
- 日本語から英語に通訳するときはたしかに B タイプの方が分かりやすい。(42)

6.2.4. 分析結果

調査結果の暫定的な分析から、日本人も「英語スタイルのニュース」である B タイプの方が分かりやすいと感じることが示唆された。しかし、「分かりやすさ」が必ずしも「好きである」ということにつながっていないことから、日本語での発話は日本の文化的特徴を反映したものの方が自然だと受けとめられていることが窺われる。筆者が特に注目したのは B タイプに対し「子供に話すような感じ」「侮辱されているような気がする」という強い否定的な感想が寄せられたことである。これは、正当な日本語に対する強いこだわりと、言語コミュニケーションにおいて他者との関係性⁸⁹を重視する文化を反映していると考えられる。

また、Part II においては Part I ほど、B が A に比べて分かりやすいという評価が際立たなかったが、これは、Part II では B、A の順序で聞いたために、後で聞いた A の理解が容易だったことに加え、ニュースの内容が「エコツーリズム」という比較的なじみやすい話題を扱っていることと関係があるかも知れない。一斉聞き取り調査では、Part I に比べて Part II では B に対する否定的コメントが増えたが、Part I の終わりに A タイプが NHK のニュースで B タイプが新しいニュースの形式であるという説明を行ったことが影響を与えたかもしれない。

この調査から日本語母語話者にとって日本語のニューススタイルは英語のスタイルに比べて内容は分かりにくい、自然で心地よく感じられ、格調のある

⁸⁹ Maynard (1997) 参照。

きちんとした日本語だと評価されていることが分かった。

日本人母語話者が A タイプと B タイプに抱く感想は Bernstein(1996)の提唱した複雑コード(elaborated code)と制限コード (restricted code) の相違を想起させる。この二つの言語コード⁹⁰の性格を Bernstein(1996, p.183)は次のように説明している。

The simpler the social division of labour and the more specific and local the relation between the agent and the material base, the more direct the relation between meanings and a specific material base, and the greater the probability of restricted coding. The more complex the division of labour, the less specific and local the relation between an agent and the material base, the more indirect the relation between meanings and a specific material base and the greater the probability of elaborated coding. Bernstein (1996, p.183)⁹¹

末田・福田（2003）は、制限コードは文法構造が比較的単純で、使用する語彙の範囲が狭いという特徴があり、共通の基盤を持ち暗黙の了解に頼ることのできる人たちの間で使用されるが、複雑コードは共通基盤がない人たちの間のコミュニケーションに使われ、文法構造が複雑で使用する語彙の範囲が広いと解説している。社会的分業による単純な階層社会で、身近で具体的な話が多ければ詳しく言わなくても分かるが、社会的分業が複雑になると、きちんと説明しないとお互い分からないということであろう。Bernstein(1990)はさらに、中産階級の子供は複雑コードと制限コードの両方を使い分けるのに対し、労働者階級の子供は制限コードしか使わないことが実験により観察されたと述べ、子供の話し方は知能よりも社会階級と関係があると指摘している。

今回の調査で日本語母語話者が B タイプを「分かりやすい」と評価しながらも「子供っぽい」「侮辱されているような感じ」という表現で強い違和感を示したのは、B タイプは知的レベルの低い話し方だという意識があるためだと考えられる。それは、文章構造が単純な制限コードが労働者階級で使われていることと重なるように見える。

このような「分かりやすさ」と「格調の高さ」に関するアンビバレンスは、他言語話者にも見られるのだろうか。次節では、英語母語話者を対象に行ったニュース聞き取り調査の結果を分析する。

⁹⁰Bernstein (1990) は code について次のように定義している。

“A code is a regulative principle, tacitly acquired, which selects and integrates relevant meanings, forms of realizations, and evoking contexts.”(p.101)

⁹¹出典は Bernstein (1981,p.332) と示されている。

6.3. 本調査：英語音声ニュース聞き取り比較調査

6.3.1. 調査方法

日本語のニューススタイルに対する英語母語話者の受けとめ方を調べるために、アラスカ大学で英語を教える Ms. Helena Spector 氏に依頼して、大学の授業を取っている英語母語話者 30 名に、2 つの異なるスタイルのニュース 2 本を使って一斉聞き取り調査を行った。調査方法は日本語ニュースの聞き取り調査と同じであり、使用した音声テープは以下のとおりである。⁹²

Part I：長野県知事選挙のニュース

A タイプ：NHK のニュース原稿を英語に同時通訳したスタイル。実際の同時通訳ではなく、ことばの流れにそって忠実に英語に翻訳し、プロ英語ニュースナレーターの経験豊富なバイリンガルの日本人が吹き込んだもの。

B タイプ：NHK の音声多重室で製作し、実際に放送で使用された英文原稿を同じナレーターが吹き込んだもの。

Part II：小笠原のエコツーリズムに関するニュース

Part I と同じように A タイプと B タイプを用意した。

両タイプとも英語のニュースであるが、A タイプは日本語の語順を維持したもの、B タイプは英語のニュースの構成になっているものと位置づけた。調査のやり方は日本語ニュースの聞き取り調査と同様、Part I は A タイプ、B タイプの順番、Part II は順序を入れ替えて B タイプ、A タイプの順に聞かせた。ニュースのタイプについては事前に一切予備知識を与えていない。この調査は、筆者が現地に出向いて直接調査できなかったのも、実施に先立ち日本に留学しているアメリカ人大学生 4 人⁹³を対象に、テスト調査を行った。

⁹²調査用紙を添付資料（8）、使用したニュース原稿を添付資料（9）に示す。

⁹³ 1:男性 21 歳、2:男性 23 歳、3:女性 23 歳、4:女性 22 歳

6.3.2. テスト調査の結果⁹⁴

テスト調査は青山学院大学に留学しているアメリカ人大学生 4 人に対して行った。形式は、一斉聞き取り調査とまったく同じで、口頭で特別なインストラクションは与えていない。Part I と PartII の両方とも、4 人全員が A タイプと B タイプの違いに気づいたと答えている。参加者のコメントを PartI、PartII、好みの順に示す⁹⁵。

(1) PartI における A タイプと B タイプの違い

- A タイプは無味乾燥(dry)で事実のみ(factual)を伝えているが B タイプは描写的(descriptive)(1)
- A タイプは情報がばら撒かれていて(scattered about)つながらない(unconnected)が率直(straightforward)。B はより誠実で(honest)特定の主張を持っている(vindicative)。(2)
- A タイプは構造にまとまりがない(more fragment)。B タイプは全体としてまとまりが良い(more connected as a whole)。(3)
- A タイプは日本語のニュースの直訳(directly translated the Japanese news into English)のようで、B タイプの方がはっきりと(clearer)よく要約されていた(summarized well)。(4)

A タイプには scattered, や unconnected, fragment という表現が使われ、B タイプには honest, more connected, summarized well, clear という表現が使われている。

(2) PartII における A タイプと B タイプの違い

- A は B よりも多くの情報を含んでいるが、B の方がニュースの中でもっと重要なポイントをついていた(more to the point)(1)
- 今回はそれほど大きな差はなかったが、A は情報が不連続で(disconnectedness about the information)、場違いでふさわしくなく(misplaced and out of order)、放送を混乱させ理解を難しくする(making broadcast confusing and hard to follow)。(2)
- A タイプはくだけた感じ(casual)、B はまとまっていて(more together as a whole)、

⁹⁴ 4 名のコメントの全文と筆者による和訳を添付資料 (10) に示す。

⁹⁵ コメントは筆者の和訳。カッコ内にもとの英語を示す。尚、末尾に参加者の番号を示す。

明瞭(more articulate)、ことば数が少ない(less wordy)。同じトピックだが捉え方が異なる(framed differently)。(3)

- A はたくさん形容詞を使っている(more adjectives)。読み手は物語を聞かせるような口調(more relaxed like telling a story)。A の最初の文は意味がない(didn't make much sense)。A の方がたくさん情報を得たような気がするが、2回目だったせいかどうか分からない。(4)

A タイプには disconnected, misplaced, out of order, confusing, hard to follow, casual, more relaxed, like telling a story, didn't make sense, のような表現を使っており、B タイプには more to the point, more together, articulate, less wordy などの表現が使われていた。

Part I, II とも一貫して、A は情報の連続性がなく、B はまとまりがよく明瞭という評価がなされている。しかし、Part II では「英語を母語としない人にはこちらのほうが理解しやすいかもしれない」⁹⁶、「A は、読み手が物語を聞かせるようにリラックスしていた」⁹⁷など、A に好意的なコメントが見られる。

(3) A と B のどちらが好きか

A と B に対する好みと、その理由を尋ねた質問については、4人中3人まで⁹⁸が「Bの方が好きだ」と答えたが、1人⁹⁹は「Part I は B が好きだが、Part II ではどちらも同じ」と答えた。

(3) -1 両方とも B の方が好きだとした理由

- B はポイントをついていて(more to the point)ニュースが早く伝わるが(express the news quickly)、A は不必要な情報が多く(too much unnecessary information)集中できない(harder to keep my attention)。(1)
- B の方が誠実に感じ(honest)考えさせられた(made me develop an opinion)が、A はレポートの中心が無いようで(there was not center)、ついていくのが大変(had to follow)。(2)
- B は面白く(interesting)直接的で(direct)ポイントをついている(to the point)が、A は回りくどく(beating around the bush)、きちんとした構造になっていない(not

⁹⁶ 参加者 3

⁹⁷ 参加者 4

⁹⁸ 参加者 1,2,3

⁹⁹ 参加者 4

structured well)。(3)

(3) -2 PartI は B が好きだが PartII では差が無いとした理由

- Part I では B の方がはっきりして(clearer)、情報がまとまっていた(summarized well)、が A は情報が散らばっていて(scattered)、ついていくのが大変(hard to follow)。(4)
- Part II ではどちらもはっきりしていて、よく分かった。(4)

このテスト調査では、英語母語話者は日本語ニュースの構成を「情報のまとまりが悪く、ついていくのが大変」と感じており、英語ニュースの構成を「分かりやすい」という理由で支持していることが示唆された。ただし、4 人のうちの 1 人が Part I に比べて Part II では差が目立たなかったとしているのは大変興味深い。このテスト調査の結果を踏まえて、アラスカ大学の教職員に英語ニュース一斉聞き取り調査を依頼した。

6.3.3. 英語ニュース一斉聞き取り調査

アラスカ大学の学生で、18 歳から 42 歳までの英語母語話者 30 名を対象に二つのスタイルで用意された英語ニュースの一斉聞き取り調査を行った¹⁰⁰。調査の方法は日本語ニュースの聞き取り調査とまったく同じである。調査の結果は KJ 法¹⁰¹に基づいて分析した。以下に調査結果の概観、KJ 法による分類 (PartI:A,B, PartII:B,A) 及び、好みに関する分析結果を示す¹⁰²。

6.3.3.0. 調査結果の概観

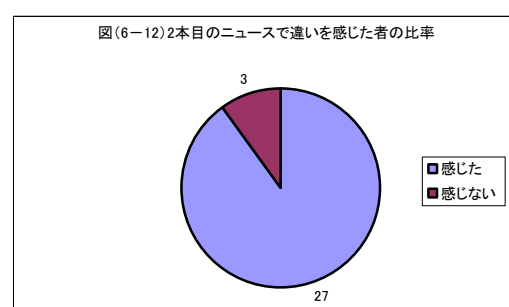
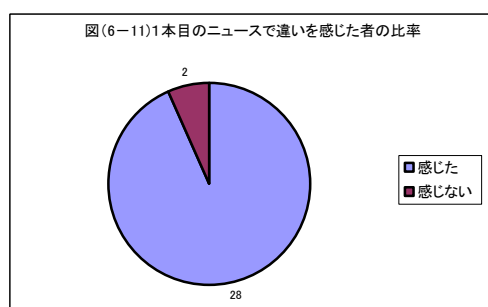
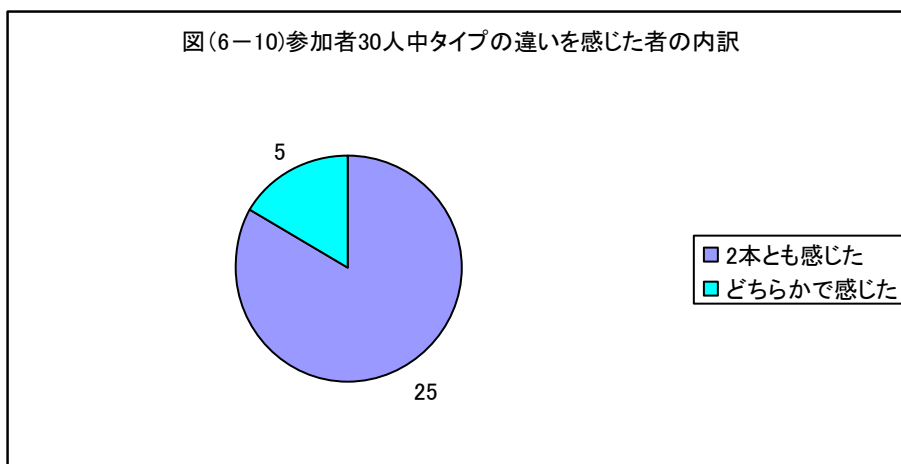
(1) A タイプと B タイプの差異に関する認識

一本目のニュースで A と B の違いを感じたものは 30 人中 28 人、二本目では 27 人であったが、両方とも違いを感じなかったという者はいなかった。

¹⁰⁰ 調査結果の生データは添付資料 (11) に示す。

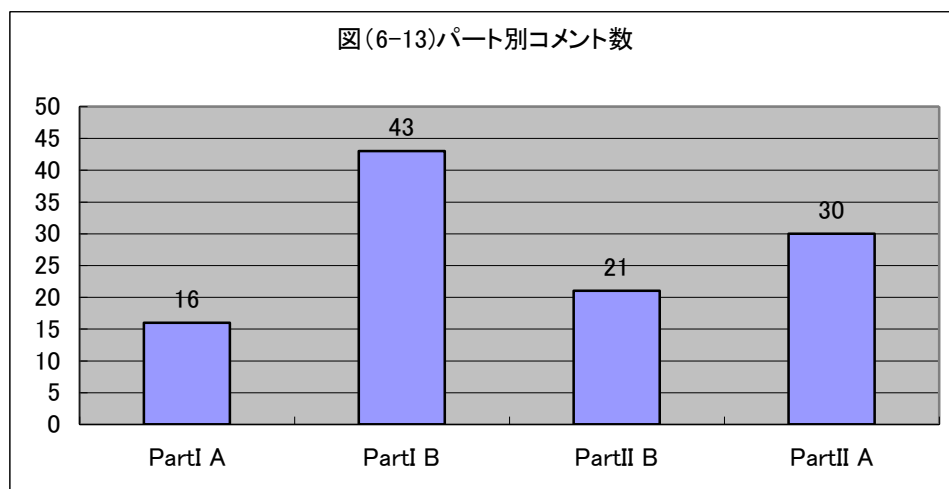
¹⁰¹ KJ 法 (川喜多、1967) 参照。

¹⁰² 調査結果の分析は聞き取ってもらったニュースの順番に沿って、PartI の A、B、PartII の B、A、好みの順序で解説する。



(2) コメント数¹⁰³

各パートで示されたコメント数は、日本ニュースの調査と同じく、後で聞いたものに対するコメントの方が多く、PartIBのコメント数が突出している。これは参加者の関心の高さを表すと考える。

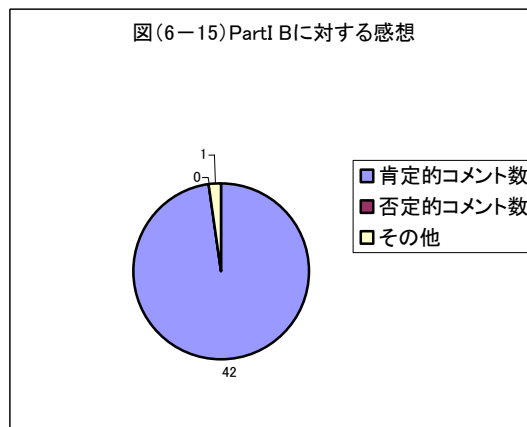
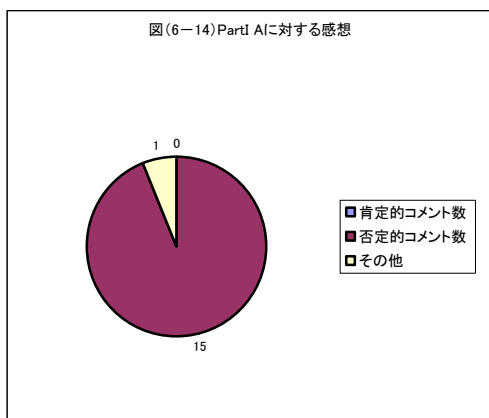


¹⁰³ 参加者のコメント文を KJ 法（川喜多、1967）に従って意味ある単位ごとに分け抽出したもの。

(3) AタイプとBタイプが違うと感じる理由

ABの違いについて多かった記述は、Aは“hard to follow”、Bは“easier to understand”だった。

(3) - 1 PartI A と B に対する感想



PartI A に対する感想

総コメント数 16

肯定的コメント数 0

否定的コメント数 15

Hard to follow 10

Boring 4

Biased 1

その他 1

PartI B に対する感想

総コメント数 43

肯定的コメント数 42

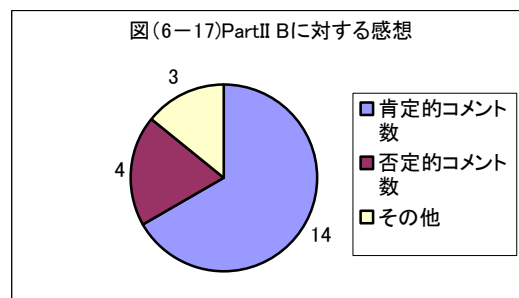
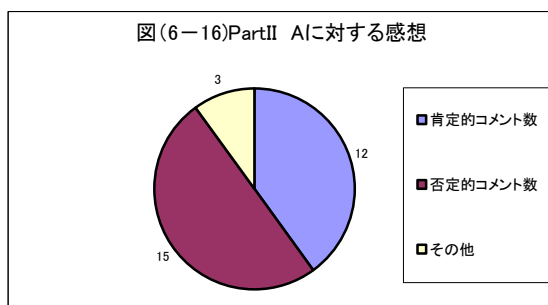
Easy to follow 29

More information 13

否定的コメント数 0

その他 1

(3) - 2 PartII AとBに対する感想



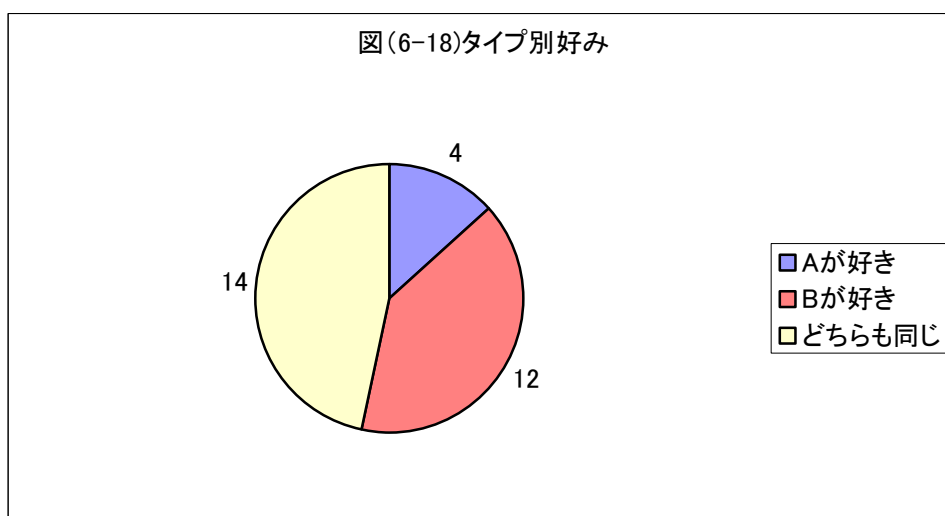
PartII A に対する感想

総コメント数	30
肯定的コメント数	12 (38.5%)
Easy to follow	4
More information	6
Subjective ¹⁰⁴	2
否定的コメント数	15 (55.2%)
Hard to follow	10
Boring	2
Lower value	3
その他	3

PartII B に対する感想

総コメント数	21
肯定的コメント数	14 (72.7%)
Easy to follow	10
More information	1
Objective	3
否定的コメント数	4 (14.6%)
Hard to follow	4
その他	3

(4) タイプ別好み(人数)



¹⁰⁴ Subjective ということばで分類したが、レポーターの助言が入っているという意味で、二つのコメントはこれを肯定的に捉えている。

6.3.3.1. KJ 法¹⁰⁵による PartI,PartII の分析¹⁰⁶

(1) Part I A

Part IA では、コメント数 16 のうち、「知事についてより多くのことを述べていた」という中立的なコメント以外は、すべて boring, hard to follow, biased などの否定的なコメントばかりだった。

表 (6-9) PartI A

大分類	中分類	小分類	表現	番号
boring	boring	boring	boring	52
			boring	132
	slow	slow	slow	131
			more pausing	133
hard to follow	hard to follow	hard to follow	very hard to follow	12
			I got lost and confused in the information.	142
		not good English	didn't speak very good English	221
		not specific	not specific	222
	not good news style	like a story	sounded like a story	191
	too long	more information	more information	41
		too long	way to long	51
			topic was quickly lost with the length	42
		wordy	a lot more technical words	11
			very wordy	141
biased	biased	biased	deceptive on smaller issues around the election	61
difference in focus	difference in focus	difference in focus	Talked more about the governor.	91

¹⁰⁵ KJ 法 (川喜多、1967) 参照。

¹⁰⁶ 分析はニュースを聞き取ってもらった順番に従い、PartI A,B, PartII B,A,好みの順に解説する。コメントの表現が肯定的か否定的な意味を持つかの解釈は、感想文全体の解釈に基づいて行ったので、同じことばでも分類が異なっている場合もある。

番号はコメントの A/B 別通し番号で、例えば 132 は参加者 13 番の A に関する 2 番目のコメント表現を表す。

(2) Part IB

Part IB では、コメント数 43 中、「順序が異なる」という中立的なコメント以外は、easy to follow, more information など、すべて肯定的コメントで、A タイプと対照的な反応が見られた。

表 (6-10) PartI B

大分類	中分類	小分類	表現	番号
easy to follow	easy to understand	to the point	straight to the point	31
			to the point	41
			more to the point	51
			straight to the point	212
		short	shorter	52
			shorter	62
			short	142
		easy to understand	easier to understand	32
			more clear	71
			explained much more simply	72
			easier to understand	81
			more clearly	111
			very clearly stated	141
			more understandable	191
			easier to understand	201
			easier to comprehend	211
			easier to understand.	233
			easier to understand	262
	better reading	slow	slower	121
			The speaker slowed down her reading	202
			Some words were said slowly	241
		fast	didn't take as many breaks during her sentences.	231
			spoke faster.	232
	easy to follow	easy to follow	described things a lot better	11
			easier to follow	12
			more pronounced	122
			more of a news brief	192
			English better	221
			better pronunciation	242
more information	more information	more information	more detail	61
			Talks about the Olympics	91
			how much debt the cities in	92
			more explanation	101
			more detail	112
			informative	143
			more description in the beginning	171
			different information not mentioned in Type A	181
			more detail	222
			more details	261
			more informative	281
			informative	291
			more informative	301
different order	different order	different order of information	in a different order	182

(3) Part IIB

Part IIB は、Part IB ほど全面的に肯定的な受けとめ方をされていない。総コメント数 21 中 easy to follow に分類されたのは 10 で、Part I では見られなかった hard to follow に分類されるコメントが 4 つ出ている。

表 (6-11) PartII B

大分類	中分類	小分類	表現	番号
hard to follow	hard to follow	too much information	too much information	81
		disorganized	not organized well	82
			the information is more scattered	111
		not good reading	The language accent is more noticeable	121
easy to follow	easy to follow	to the point	to the point	42
			Main points clear	141
		easy to understand	describes things better	11
			more understandable	71
			simple	191
			easy to understand	192
			Explained a little better	221
			the information was put better	181
		easy to follow	a lot easier to follow	12
			more loud	241
more information	more information	more information	Informative	41
objective	objective	objective	factual	43
			quoted from papers	44
			more based around facts	62
difference in focus	diffenrece in focus	difference in focus	wanted tourism but limit the visitors	301
short	short	short	delivered cut and short	62
fast	fast	fast	spoke faster	242

(4) Part IIA

Part IIA は Part IA と同じく hard to follow が多いが、easy to follow, more information など肯定的な受けとめ方が増えている。Part II では、「分かりやすさ」に関して A タイプと B タイプの差が縮まっており、これは、日本語母語話者に対して行った日本語ニュース聞き取り調査とよく似た傾向を示している。

表 (6-12) PartII A

大分類	中分類	小分類	表現	番号
boring	boring	slow	slower	131
			more pausing	132
easy to follow	easy to follow	better organized	more organized	111
			shows more of a picture	262
		easy to follow	starts with a more brief description to lead you in	151
			tries to get the people's attention	282
hard to follow	hard to follow	disorganized	more of a list of things	291
		hard to follow	hard to follow	12
			repetitive saying different things many ways	41
			Lost in information	141
			confusing	222
			not friendly	293
		hard to understand	harder to comprehend	231
		long	longer	272
		not good reading	more of an accent when reading	232
		not to the point	not to the point right away	101
lower value	lower value	less information	not informative	292
		meaningless	telling you nothing	11
			too much useless information	191
more information	more information	more information	more explanatory	211
			gives specific dates and places	212
			includes talk about government	213
			More details	261
			more detail	271
			more information	281
subjective	subjective	subjective	tells me I can visit, but be careful	51
			more educational	61
differece in focus	difference in focus	difference in focus	focus on government activity than the area itself	31
			did not want to do tourism on the island	302
difference in wording	difference in wording	difference in wording	worded the details different	161

6.3.3.2. A と B のどちらが好きか

A タイプと B タイプとどちらが好きかという質問に対しては、12 人が B タイプ、4 人が A タイプ、14 人がどちらでもないと答えている。

(1) A タイプが好きである理由

表 (6-13) A タイプが好きである理由

好み	参加者	理由	番号
A	2		
	3	The way they present the information.	31
	8	it gave you the most important facts.	81
	15	sounded better.	151

(2) B タイプが好きである理由

B タイプが好きと答えた理由には easier to listen to, easier to understand など「分かりやすさ」を評価した答えが多く、日本語ニュースの聞き取り調査の結果によく似ている。

表 (6-14) B タイプが好きである理由

B	1	described things better	11
		easier to follow	12
	5	more friendly	51
		easier to listen to	52
	7	more understandable	71
	10	Lots to the explanation of things	101
	12	slower on tape	121
		sound better to my ears.	122
	13	With the pausing	131
		slower voice.	132
		A monotone voice.	133
		more interested in listening to	134
	18	better information	181
	23	more fluent	231
		easier to understand	232
	25	I understood it much better.	251
	26	Easier to understand	261
		made its able to got the point of speech!	262
	29	more friendly	291
		informative.	292
	30	more informative in part 1 and in part 2	301
		it was a good idea to do tourism.	302

日本語の調査と大きく異なるのは「どちらでもない」とした参加者の数の多さである。このグループには、参加者 11 番のように、Part I は B タイプが分かりやすかったが、Part II は A タイプの方が良くまとまっていたとして結果的に「どちらでもない」とした参加者と、14 番のように Part I、II とも B タイプが分かりやすいとはっきり述べているのにも関わらず、好みを書かなかった参加者がいた。

6.3.4. 英語ニュース聞き取り調査のまとめ

英語聞き取り調査では、4 つの際立った特徴が見られた。1 番目は、先に行われた日本語の聞き取り調査と同様、参加者がふたつのタイプの違いをはっきりと認識したことである。2 番目は、圧倒的多数が B タイプを支持したことである。Part I の A と B の比較においては、ほとんど全員が A タイプを否定し、B タイプを支持した。Part II では、A と B に対する評価の差が小さくなるが、ほとんどが B タイプを支持している。

3 番目の特徴は、「感じがよいかどうか」に関するコメントがほとんどなかったことである。日本語母語話者が「感じがよいかどうか」に関して多くのコメントをしているのと対照的である。このことから、英語母語話者は音声ニュースを評価する際に「情報が伝わるかどうか」という点に集中しているのに対し、日本語母語話者は「感じがよいかどうか」も問題にしていることが分かった。これは公的なスピーチに対する期待の違いを表していると解釈できる。

4 番目の特徴は、Part I と II について熱心に回答しているのに、好みに空欄が多かったことである。これは、筆者が直接行った調査ではないこと、日本の国内ニュースについて知識があまりなく関心も低かったことが関係していると思われる。しかし、逆に言えば、調査に参加する動機付けが低い参加者が、予備知識のない内容の音声ニュースを一回聞いただけで、A タイプと B タイプの違いに気づいたこと、そしてその結果がかなりの部分、動機付けの高い日本語母語話者を対象とした調査結果と重なり合ったことには、重要な意味があると考えられる。

6.4. 6 章のまとめ

ニュース放送は新聞などの文字情報と異なり、聞き手が一回聞いただけで理解されることを前提として提供されている。明瞭に、迅速に情報を伝えることがもっとも重要視されるため、main points を最初に示す逆ピラミッド型の構

成が世界の標準である。一方、対人関係を重視する日本社会で形成された日本語の発話表現は、行為を現象のように扱い、トピックの提示や生垣表現などの前置き表現のストラテジーを使う。このような日本語の特徴は音声ニュースの伝え方にどのように反映されているのか、また、日本語をベースに発達したニュースのスタイルは、日本語母語話者や他言語母語話者の聞き手にどのように受けとめられるか。この2つを明らかにするために、日本語母語話者と英語母語話者を対照にした音声ニュースの聞き取り調査を実施した。

本調査で使用した4つのスタイルの音声ニュースは次のような性格を持つものと位置づけられる。

- ① 典型的な日本語のニュース放送（日本語のスタイルを持つ日本語のニュース）¹⁰⁷
- ② 英語のニュースを日本語にバック・トランスレーションしたもの（文化中立的な英語のスタイルをもつ日本語のニュース）¹⁰⁸
- ③ 典型的な日本語のニュースを同時通訳したもの（日本語の情報提示構造を維持した英語のニュース）¹⁰⁹
- ④ 外国語話者のために作られた英語のニュース放送（文化中立的な英語のスタイルを持つ英語のニュース）¹¹⁰

今回の調査結果から、3つの知見が得られた。ひとつは、日本語ニュースのスタイルは日本語母語話者にとっても、他言語母語話者にとっても「分かりにくい」と受けとめられていることである。あらかじめ作った原稿を読み上げるニュース放送の日本語は、日常の会話とは本質的に異なるものだが、NHKのニュースは文章の組み立て、発音、話し方のすべてにおいて、日本語の話しことばの標準と考えられており、日本人の話し方全般に対して大きな影響を与えていると思われる。今回の調査では「日本人が聞きなれていて自然だと感じる話し方」は「日本人にとっても外国人にとっても分かりにくい」側面があることを明らかにした点で意義深いと考える。

2番目は、話の内容と日本語の発話スタイルの関係である。日本語母語話者と英語母語話者の両方から、Part II で使用した小笠原のエコツーリズムのニュースには、日本語のスタイルを支持する傾向が見られた。客観的事実を伝えるPart I の長野県知事選挙のニュースに比べて、小笠原のニュースは主張を含ん

¹⁰⁷ 日本語ニュース A タイプ。

¹⁰⁸ 日本語ニュース B タイプ。

¹⁰⁹ 英語ニュース A タイプ。

¹¹⁰ 英語ニュース B タイプ。

だ物語のような性格をもつ。これは、本論文の第4章でとりあげた、日本語発話に見られるストーリー性（Watanabe,1993）と関係があるかもしれない。今後の研究で、例文の数を増やし、伝える内容と伝え方および伝わり方の関係をより詳細に研究したい。

3つ目は、英語母語話者が音声ニュースを「情報の伝達性」という視点から評価しているのに対し、日本語母語話者は「感じの良さ」特に「話し方の格調」に強い執着を持っていることである。「内容が分からなければ意味がない」という理解と「変な日本語は嫌だ」という感情の葛藤が見られた。「分かりやすさ」を犠牲にしても「きちんとした日本語」を求める背景には「聞きなれている」という慣習へのこだわりと共に、知的レベルの高い聞き手として扱われたいという欲求があると思われる。

公的なスピーチに対してこのような複雑な期待を抱く日本語母語話者は、異文化・異言語の人たちとのコミュニケーションにおいて、何に配慮すべきだろうか。次章では、本論文のねらいとして掲げた、グローバル時代のコミュニケーション・スタイルについて考察を行う。

第7章 グローバル時代のコミュニケーションスタイル

7章の目次

7.0. はじめに

7.1. 意図を明示しない日本語の発話スタイル

7.2. 日本語の発話スタイルはどのように受けとめられているか

7.3. 異文化間コミュニケーションにふさわしいスタイル

7.4. 7章のまとめ

7.0. はじめに

本研究は、「直接的な異文化間交流が増えるグローバル時代¹¹¹において、言語や文化の異なる人たちが参加する公の場面にふさわしい発話スタイルを提案すること」を目的として掲げ、以下の3つの研究設問に沿って行われた。

1. 日本語の発話は、なぜ発話の意図を明らかに示さないスタイルを取るのか。
2. 日本語の発話スタイルは異文化間コミュニケーションの場面でどのように受けとめられるか。
3. 円滑な異文化間コミュニケーションに適した発話スタイルとはどのようなものか。

本章では、本研究で得た知見を基に、異文化間環境で行われるパブリック・スピーチ¹¹²の誤解や理解の不足につながる要因を整理し、グローバル時代における異文化間コミュニケーションのスタイルについて提言を試みる。

本研究の焦点は、日本語による公的な性格のスピーチにおかれた。日本語の発話に関する研究は談話分析や異文化間コミュニケーション研究の分野でかなりの数の文献が発表されており、中には英語との対比を通じて文化的特徴を探ろうとするものもある。しかし、そのほとんどは個人的な会話や少人数のディスカッションを取り上げており、国際会議やシンポジウムなど文化的背景の異なる人たちが参加する公的な場面のコミュニケーションを取り上げた研究

¹¹¹ Giddens(1999) 参照。

¹¹² 国際会議やセミナーに加え、国際放送および国内の外国人に向けた放送番組を含む。

は、筆者の知る限り見当たらない。また、外国人を含む不特定多数の聞き手に向けた放送番組のスタイルに焦点を当てた研究もごく少数¹¹³である。

個人的発話に比べて、公的なスピーチの伝達性は発話スタイルに依存する割合が高い。個人間や少人数グループ内でのコミュニケーションは顔の表情や行動など言語以外の手がかりがあるため、発話スタイルのみが誤解の原因になることは少なく、仮に誤解を生じても修復できるチャンスがあるが、聞き手から遠いスピーチでは「話し方」が内容の理解や誤解に大きく影響する。

本論文では、日本語の発話の一般的特徴を分析した上で、日本語母語話者と英語母語話者を対象にした実験調査を行い、異文化間コミュニケーションの場面で行われた日本語の公的スピーチが聞き手にどのように受けとめられているかを論じた。調査では、3種類の性格の異なる公的スピーチを扱った。予備調査 1.では、「相手を説得したいという動機に基づく発話」に対する聞き手の反応を、同時通訳者の情報処理をリアルタイムで観察することにより分析した。予備調査 2.では「相手から情報を得ようとする発話」の特徴と、質問をされる側¹¹⁴の感想を調べた。予備調査で扱った発話はいずれも公的な性格を持つが、聞き手を強く意識しているという点で、先行研究で報告されている個人的な会話に近く、相手との関係性を重要視する日本語の特徴が出やすいと思われた。今回は予備調査という位置づけのため小規模で行ったが、それぞれ興味深い結果が得られたので、今後、サンプル数を増やした本格的な調査をしたいと考えている。

本調査では、ニュース放送における日本語のスタイルを取り上げた。予備調査で扱ったものと異なり、不特定多数の聞き手に事実を客観的に伝える公的性格の強い日本語の発話においても、相手との関係性を重視する日本語発話の特徴が見られるかどうか注目した。本調査は日本語母語話者と英語母語話者を対象とし、日本語の発話スタイルに対する感想を集め分析した。

予備調査と本調査の結果により、先行研究が論じた日本語発話の特徴が裏付けられた。日本語の発話は聞き手との関係性を重要視するため、公的な発言においても行為の主体を明示せず、核となる情報を提示する前に長い前置きをし、ときに本論から脱線する傾向を示した。これらの特徴は聞き手の情報理解にとって阻害要因になっており、日本語母語話者と英語母語話者の両方が、日本語の発話スタイルを分かりにくいと考える傾向を示した。

本章では、これまで論じてきた日本語発話の特徴を基に **Flesch(1963)の Plain English** を手がかりとして聞き手の分かりやすさに配慮した発話スタ

¹¹³ 柴田・最上・塩田（1999）、大塚（1998）参照。

¹¹⁴ インタビュー調査では、質問をされる人物の役割を筆者が務めた。

イルの特徴を整理する。さらに、「分かりやすさ」の必要性和「格調の高さ」の欲求を併せ持つ日本語母語話者に、異文化間環境にふさわしい発話スタイルが可能か、また、異文化間音声言語コミュニケーションにおいて配慮すべき要素について論じ、本論文の結論としたい。

7.1. 意図を明示しない日本語の発話スタイル

本論文では先行研究に基づき、日本語の発話には意図を目立たせないようにする「主語の消失と提示の遅れ」、「前置き表現のストラテジー」、「ストーリーテリング」の3つの特徴があると考えた。日本語の発話では、行為の主体をはっきり述べず、中心的な情報や概念の提示を後回しにし、さらに客観的な説明に感情的な表現を混ぜるため、聞き手に発言の意図が伝わりにくいと思われた。

先行研究で指摘された日本語の特徴は予備調査1の結果と一致し、言いたいことをはっきり言わない発話を聞き手が正しく理解するためには、コンテキストを共有する必要があることが示唆された。予備調査2では日本語母語話者と二人の英語母語話者¹¹⁵の質問の仕方を観察したが、日本語発話の3つの特徴がはっきりと認められ、特にアメリカ人調査協力者のスタイルとは際立った違いを示した。本調査では音声ニュースを使ったが、日本語発話の中でもっとも客観的で中立なものと考えられる発話でさえ前置き表現が多く、英語に比べて内容が伝わりにくいと感じとめられていることが分かった。

先行研究と本研究で行った調査の結果から、日本語の発話は言いたいことをはっきり表現しないスタイルを取るため、聞き手が正しく理解するためには話し手とコンテキストを共有する必要があることが示された。このことは特に異文化間コミュニケーションの場面で重要な意味を持つ。

異文化間コミュニケーションが同一文化内コミュニケーションと一番大きく異なるのは、参加者同士が必ずしも共通の文化背景に基づくルールを共有していないということである。日本社会は人々が共有する情報の多いハイ・コンテキスト文化¹¹⁶のため、日常的なコミュニケーションは暗黙の了解に頼る部分が多い。しかし、異なる発話スタイルを持つ人たちが集まる会議では共有する情報の少ないロー・コンテキスト・コミュニケーション¹¹⁷が想定される。日本語母語話者が異文化間コミュニケーションの場面で発言する際には、聞き手の暗黙の了解に頼れないことを考慮する必要があると思われる。

¹¹⁵ イギリス人とアメリカ人。

¹¹⁶ Hall and Hall(1987) 参照。

¹¹⁷ Hall and Hall (1987) 参照。

7.2. 日本語の発話スタイルはどのように受けとめられているか

7.2.1. 日本語発話スタイルの「分かりにくさ」

本研究で行った音声ニュースの聞き取りに関する実験調査から、日本語の発話スタイルに沿った音声情報は、たとえ完璧に同時通訳されたとしても、英語母語話者に「分かりにくい」と受けとめられていることが分かった。さらに、日本語母語話者に対して、同じ内容の音声情報を日本語スタイルの日本語と英語スタイルの日本語で作成したものを聞き比べてもらったところ、英語スタイルの方が「分かりやすい」という反応が多かった。これは、文章が短く、前置きをせずに本題をすぐに明示する英語スタイルの方が、聞き手への情報伝達効率が良いということを示唆する。

しかし、本調査の結果は、日本語母語話者が「分かりやすさ」だけでなく、「感じのよさ」や「話し方の格調」に強いこだわりを持っていることも示している。そこで、本調査から得られた情報¹¹⁸を「分かりやすさ」と「感じの良さ」の大きな二つのカテゴリーに分け、それぞれを Grice (1989) の「協調の原則・会話の格率」及び Brown & Levinson(1987)のネガティブ・ポライトネスの観点から整理した。

7.2.2. 発話の分かりにくさと協調の原則の違反¹¹⁹

本調査から得られたコメントの表現のうち、分かりにくさのカテゴリーに入るものを中心に¹²⁰、Grice (1989) の「協調の原則・会話の格率」と比較する。

協調の原則・会話の格率¹²¹

1. 量の格率

- (1) 貢献は必要なだけ情報量のあるものにすること。
- (2) 貢献は必要以上に情報量のあるものにしないこと。

¹¹⁸ コメントの後のカッコ内にパート別通し番号を示す。

¹¹⁹ 会話の格率の項目ごとに、実験調査で得られた否定的コメントを示す。日本語は日本語母語話者、英語は英語母語話者のコメントである。

¹²⁰ KJ 法による大分類のうち、日本語の調査は「分かりにくい」と「内容に違和感」、英語の調査は“hard to follow”, “biased”, “lower value”を含む。なお、「分かりにくい」および“hard to follow”以外の大分類に入るものは*で示す。

¹²¹ 和訳は末田・福田 (2003) による。

コメント

文章が長い。(PIIA-231)

途中で集中力が切れた。(PIA-113)

名詞に掛かることばが長すぎる。(PIA-371)

Too long. (PIA-51)

Very wordy. (PIA-141)

Repetitive saying different things in many ways. (PIIA-41)

2. 質の格率

- (1) 偽りであると思っていることを言わないこと。

コメント

田中氏の側からしゃべっていると感じた (PIB-153) *

Deceptive on smaller issues. (PIA-61) *

- (2) 十分な証拠のないことは言わないこと。

コメント

Telling you nothing. (PIIA-11) *

Too much useless information. (PIIA-191) *

3. 関連性の格率: 関係のあることを述べること。

コメント

選挙についてあまり言及していない。(PIB-82) *

田中氏の経歴に関わる内容のように感じた。(PIB-141) *

場所の説明ばかり。(PIIB-81) *

4. 様態の格率

- (1) 不明瞭な表現を避けること。

コメント

ことばが難しい。(PIIA-171)

文語体のよう。(PIIA-181)

More technical words. (PIA-11)

(2) あいまいさを避けること。

コメント

ロジカルでない。(PIIB-71)

頭の中で整理しにくい。(PIIA-183)

Not to the point right away. (PIIA-101)

Confusing. (PIIA-222)

Not specific. (PIA-222)

(3) 手短に述べること。

コメント

一文が長すぎる。(PIIA-311)

トピックを述べるまでの時間が長い。(PIIA-352)

Topic was quickly lost with the length. (PIA-42)

(4) 順序良く述べること。

コメント

回りくどい。(PIIA-31)

何がトピックか分かりにくい。(PIA-352)

More of a list of things. (PIIA-291)

The information is scattered. (テスト調査 PI-2)

分かりにくさと協調の原則の違反に関しては、日本語母語話者と英語母語話者のコメントはほぼ共通している。一方「感じの良さ」に関しては、英語母語話者からはほとんどコメントがなく、音声ニュースを「情報が伝わるかどうか」で評価していることが窺える。対照的に日本語母語話者からは「感じの良さ」に関するコメントが多く出された。日本語母語話者が「感じがよい」と分類したコメントを Brown & Levinson のネガティブ・ポライトネスと対応させると、そのほとんどが、「慣習的に間接的であること¹²²」、「なるべく押し付けない¹²³」、

¹²² Brown & Levinson(1987) Strategy1: Be Conventionally indirect.

¹²³ Strategy4: Minimize the imposition.

「敬意を払う¹²⁴」の戦略に分類されることが分かる。

7.2.3. 「感じの良さ」とポライトネスの関係

本調査から得られたコメントの表現のうち、「感じの良さ」のカテゴリーに入るもの¹²⁵を Brown & Levinson(1987)のネガティブ・ポライトネスと比較する。

戦略 1:慣習的に間接的であれ。¹²⁶

コメント

人の感情が入っていない。(PIIA-185)

人の意見が入っていない。(PIIA-186)

無機質的。(PIA-421)

淡々と情報を言っているだけ。(PIIA-21)

戦略 3:なるべく押し付けない。

コメント

親しみを感じる。(PBI-181)

柔らかい。(PBI-151)

くだけた印象。(PBI-193)

戦略 5:敬意を払う

コメント

子供に話すような内容。(PBI-172)

少し幼稚な感じ。(PBII-331)

バカにされている気がする。(詳細インタビュー参加者 10 番)

田中氏ではなく「さん」というのは気になる。(PBI-333)

格式ばった言い方の方が雰囲気がありスタイリッシュ。(好み A-43)

¹²⁴ Strategy5: Give deference. 訳は筆者による。

¹²⁵ KJ 法で分析した大分類の「好感がもてる」と「伝統的な NHK のニュース」を「感じの良さ」のカテゴリーに入るものとした。

¹²⁶ 調査はニュースを聞くという設定で行われたため、会話における直接表現の回避とは異なるが、客観的情報の提示を「人間的な感じがしない」と否定的に受けとめる背景には、「直接過ぎる」という感じ方があると判断した。

年齢が上がるにつれて A の方が聞きやすくなる気がする

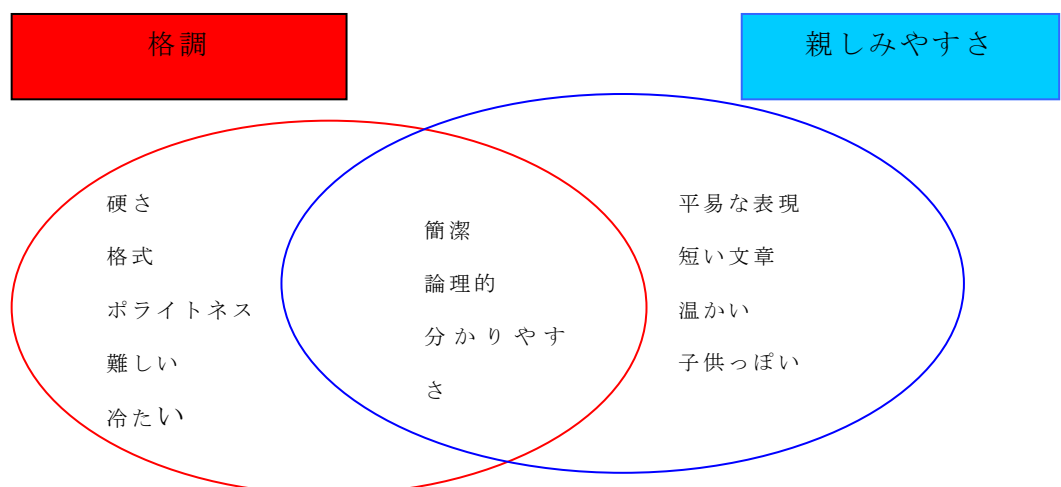
(好み B-182)

以上から、日本語母語話者は音声ニュースのように客観的に事実を伝える発話に対しても、「事実ばかりを淡々と伝えるのは冷たい」と感じ、平易で分かりやすいことばづかいは「柔らかく親しみやすい」が、一方で「幼稚で聞き手をバカにしている」という感想を持っていることが分かる。実験調査に参加した日本語話者が実社会での人間関係が少ない 20-23 歳の若い世代であることを考えると、広い年齢層の日本語話者が私的な会話のみならず、客観的な性格の公的なスピーチにおいても、ポライトネスの要素を期待していることが推察される。

7.2.4. 分かりやすさと格調の関係

日本語母語話者が求める「感じの良さ」には、平易で分かりやすい話し方に対する「親しみやすさ」と、硬いフォーマルな話し方に対する「格調の高さ」が含まれているが、実験調査のデータを見ると、「格調の高さ」と「親しみやすさ」は共に簡潔性や論理性、内容の分かりやすさを含んでいる¹²⁷。これを図式すると次のようになる。

図 7-1 格調、分かりやすさ、親しみやすさの関係

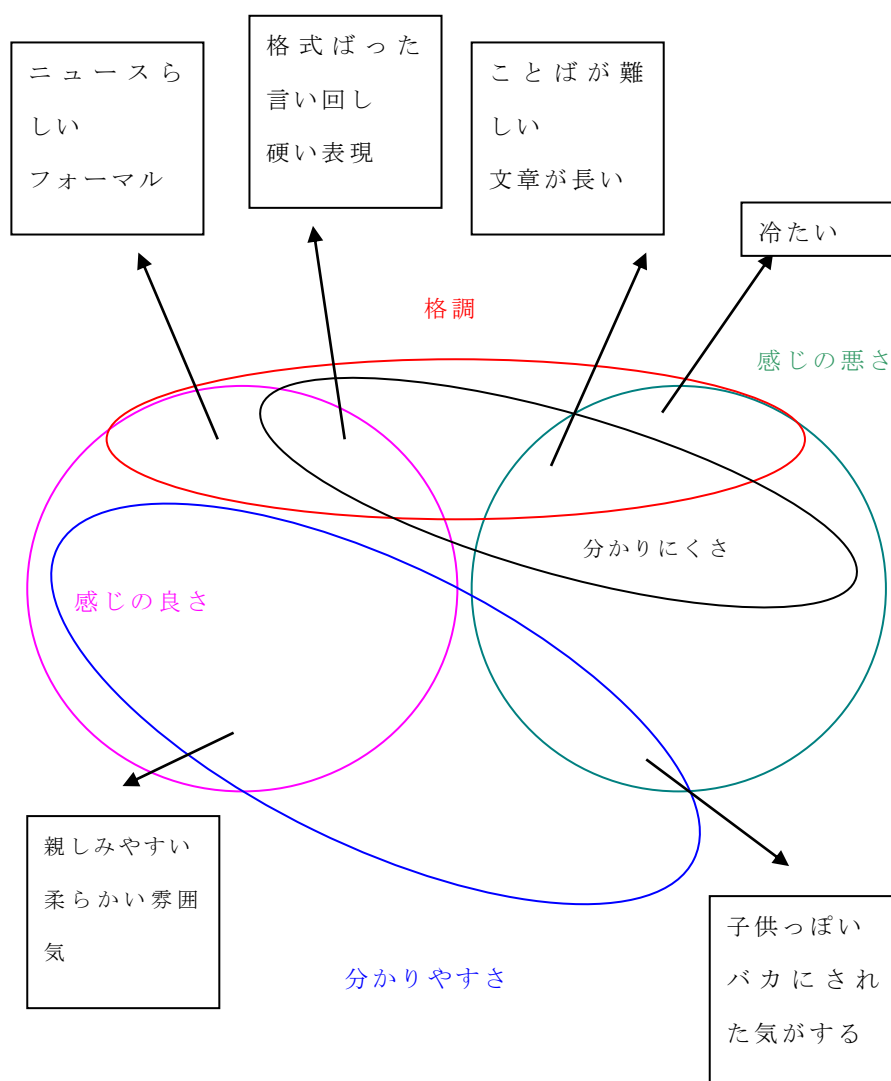


¹²⁷ 格調が高いと評価された A タイプを好きだとした理由のおよそ半分が分かりやすさのカテゴリーに入っている。親しみやすいと評価された B タイプでは好きだとする理由のおよそ 7 割が分かりやすさのカテゴリーに入っている。

この図の示すように、日本語母語話者は全員が情報の分かりやすさを求めており、これを中心に格調を重視する人の好みは左方向、親しみやすさを求める人の好みは右の方向に広がっているという解釈も可能である。しかし、調査結果を見ると、参加者の感想はこのようにきれいに割り切れるものではなく、もっと複雑に絡み合っているように思える。

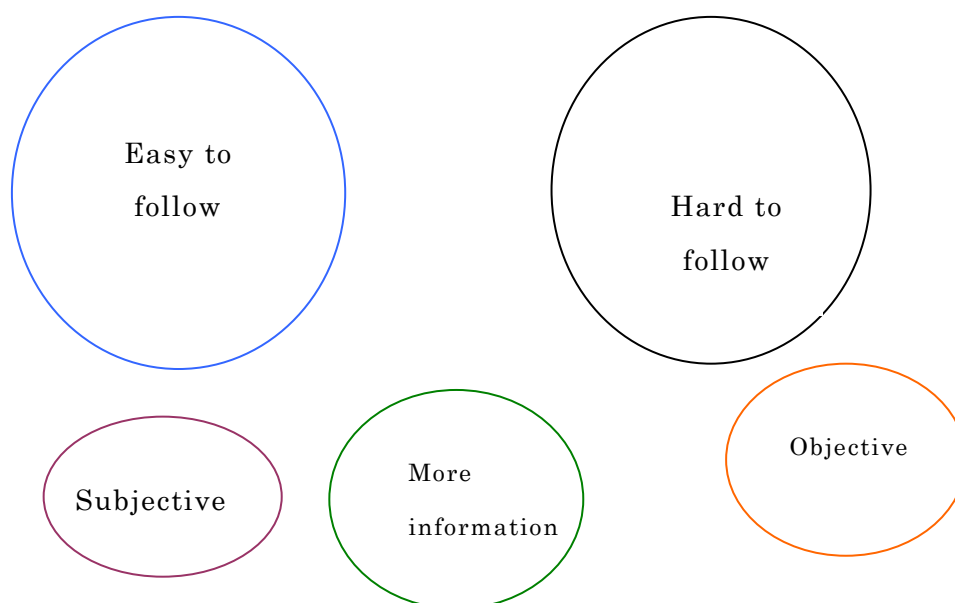
「格調の高さ」と「分かりやすさ」のそれぞれに「感じが良い」と「感じが悪い」の両面の受けとめ方がある。「格調が高いからニュースらしくて良い」、「格調が高いが冷たくて無機質」、「分かりやすいから親しみやすくてよい」、「分かりやすくて子供向けのニュースのように感じる」のように正反対の見方がある。これを図式すると次のようになる。

図 7-2 日本語母語話者の受けとめ方



日本語母語話者の受けとめ方はこのように複雑だが、英語母語話者からは、「感じの良さ・悪さ」に関するコメントがほとんどなく、内容が分かるかどうかに関心が集中していることが窺える。主なカテゴリーを図式すると以下のようになり、いずれも重ならないと思われる。

図 7-3 英語母語話者の受けとめ方



本調査の結果、音声ニュースを聞く際に英語母語話者が内容の分かりやすさを評価基準の中心に据えているのに対し、日本語母語話者はより複雑な受けとめ方をしていることが示された。これは、発話に対する聞き手の期待と解釈することができる。このことから、日本語母語話者が英語母語話者に向かって公的なスピーチをするときは、日本語または英語で直接話す、または通訳を介して話すのいずれに拘らず、相手が内容の分かりやすさに最大の関心を持っていることを考慮にいれるべきだと言える。

本調査の結果は発話に対する聞き手の期待が言語や文化によって異なる可能性を示唆した。それでは、英語母語話者のみならず、様々な言語や文化的背景を持つ人たちが集まる異文化間コミュニケーションの場面で発言する際に、日本語母語話者は何を心がければよいのだろうか。

次節では、異文化間コミュニケーションにふさわしい発話スタイルを探る。

7.3. 異文化間コミュニケーションにふさわしいスタイル

7.3.1. ロー・コンテクストを意識したスタイル

公的な異文化間コミュニケーションは個人的な対人コミュニケーションの要素がほとんど無いロー・コンテクストのコミュニケーションである。日本以外にも、暗黙の了解に依存する国や地域があるが¹²⁸、たとえハイ・コンテクストのコミュニケーションスタイルを持つ複数の国や地域の人たちが集まっても、その間のコミュニケーションがハイ・コンテクスト・コミュニケーションになることはありえない。お互いの文化を熟知していない限り、暗黙の了解に頼れる部分のごくわずかである。ましてや、情報の明示的な記号化が必要なロー・コンテクスト・コミュニケーションスタイルを取る社会の人たちにとって、日本語の発話スタイルが情報伝達手段としてよく機能するとは思えない。すなわち、日本語発話者が異文化間コミュニケーションに参加するためにはハイ・コンテクスト・コミュニケーションからロー・コンテクスト・コミュニケーションへの切り替えが必要なのである。

個人レベルの異文化間コミュニケーションでは顔の表情や仕草、行動などを近くで観察することができるため、言語コミュニケーションで生じた誤解を非言語的な手がかりによって修正できる可能性があるが、本論文で取り上げたパブリック・スピーチは話し手と聞き手が遠く、言語的手段の重要性が極めて高い。本研究の調査結果から、日本語の公的スピーチのスタイルはハイ・コンテクスト文化に合わせたものであり、通訳を使って言語を変えるだけでは文化的背景の異なる聞き手に必ずしも十分理解されないことが示された。

では、ロー・コンテクスト・コミュニケーションにふさわしいパブリック・スピーチのスタイルとはどのようなものであろうか。

7.3.2. 分かりやすい文章

アメリカでは 1970 年代以降、行政やビジネスで用いられる文書に関して Plain English（分かりやすい英語）の積極的な導入が始まった。染谷（1986）は、1978 年にニューヨーク州で Plain Language Law が制定され、保険契約書など一般の消費者を対象として企業が発行する文書をだれでも理解できる易しい英語で書くことを法的に義務付けたと述べている。

¹²⁸ アラブや地中海諸国。Hall and Hall (1987) 参照。

Plain English を理論的に体系化したのは Flesch(1963)で、ひとつの文章に使用される単語数 (words per sentence) と 100 個の単語当たりの音節数 (syllables per 100 words) を基にして読みやすさのスコア(reading score)を計る Readability Test Chart を開発した。Flesch(1963)は、このチャートに従って、読みやすさを Very Easy から Very Difficult まで 6 段階で評価している。Flesch(1963)は内容の難易度ではなく、単純に単語数と音節数だけで Plain English を定義づけ、effective writing に関して 25 のルールを示しているが、染谷 (1986) は特に重要なものとして以下の 10 を引用している。

- 1 . Prefer the familiar word to the far-fetched.
- 2 . Prefer the short word to the long.
- 3 . Prefer the concrete word to the abstract.
- 4 . Use verbs rather than nouns or noun phrases.
- 5 . Use the active voice and a personal subject.
- 6 . Use few articles, prepositions, and conjunctions.
- 7 . Keep your sentences short.
- 8 . Keep your paragraphs short.
- 9 . Begin with the main point; then give details.
10. Above all, write as you talk.

染谷 (1986、 p .154)

Flesch(1963)は「話すようなつもりで書けば、誰にでも分かりやすい文章を書ける」として「分かりやすい書きことば」を提唱したが、「誰にでも分かりやすい話し方」についてのルールは残さなかった。しかし、染谷 (1986) が選んだ 10 のルールを見ると、本研究で行った実験調査の結果とかなり重なる部分がある。以下実験調査¹²⁹から数例を示す。

「分かりやすい」というカテゴリーのコメント¹³⁰

簡単な単語。(PIB-32)

普段の話しことばに近い。(PIB-201)

誰にでも分かりやすいようなことばづかい。(PIIB-281)

¹²⁹ 日本語母語話者のコメントは日本語、英語母語話者のコメントは英語で表す。カッコ内に日本とアメリカの調査別にパートごとのコメント通し番号を示す。

¹³⁰ KJ 法の太分類「分かりやすい」および“easy to follow”に入ったもの。

文が短い。(PIIB-181)
最初に事実、トピックをはっきり述べている。(PIIB-351)
Straight to the point. (PIB-31)
Shorter. (PIB-52)
Very clearly stated. (PIB-141)
Simple. (PIIB-191)
Tries to get the people's attention. (PIIA-282)

「分かりにくい」のカテゴリーのコメント¹³¹

ひとつの単語を修飾することが多い。(PIA-231)
文章が長い。(PIIA-351)
ことばが難しい。(PIIA-171)
文語体のよう。(PIIA-181)
言いたいことを回りくどく言っている感じ。(PIIA-31)
トピックを述べるまでの時間が長い。(PIIA-352)
Very hard to follow. (PIA-12)
I got lost and confused. (PIA-142)
Not specific. (PIA-222)
Very wordy. (PIA-141)
Longer. (PIIA-272)
Harder to comprehend. (PIIA-231)
Not friendly. (PIIA-293)
Not to the point right away. (PIIA-101)

今回の実験調査と照らし合わせると、Flesch(1963)の Plain English の原則は Plain Language の原則として有効であり、書きことばだけでなく話しことばにも当てはまると言える。このような Plain Language を広める運動は、最近日本でも見られ、全国 47 都道府県のうちおよそ 3 分の 1 が住民への連絡文書の宛名に「殿」ではなく「様」を使うようになるなど、より生活用語に近い表現を使う傾向が見られる(染谷 1986)。さらに、1991 年に司法制度改革審議会が発表した意見書は 4 番目に「国民的基盤の確立」を掲げ、条件整備の一環と

¹³¹ KJ 法の大分類「分かりにくい」および“hard to follow”に入ったもの。

して「分かりやすい司法の実現」を提唱している。

わが国の基本的な法令の中には、民法の一部や商法など、依然として片仮名文語体や現代社会に適応しない用語を交えたもの、枝番号や条文引用の方法が著しく煩雑で不親切なものなどがあり、法律専門家以外には容易に理解できないものとなっている。

（中略）特に、文章が難解であるとの批判がなされる判決書については、これまでも、裁判所において分かりやすくするための工夫がなされてきたが、引き続き、国民の視点に立った検討が望まれる。また、法廷における関係者間のやり取りについても、傍聴をしている一般の国民にも理解できるような配慮がなされることが望まれる。

司法制度改革審議会意見書（2001）

司法制度改革審議会が、法律や判決文など文書だけでなく、法廷における関係者間のやり取りを一般傍聴者にも理解できるものにすることが望ましいとして「話しことば」の分かりやすさにも言及している点は興味深い。

7.3.3. 分かりやすい話し方

「分かりやすい話し方」の原則は、「分かりやすい文章」の原則とほぼ重なるが、音声面の配慮としては「間」が重要とされる。Flesch(1963)は「間」を“in-between space”と呼び、聞き手に理解する時間を与える必要性を指摘している。また、学生やビジネスマン向けに「話し方」や「プレゼンテーションの仕方」を指南する書物も聞き手に合わせた速度（藤沢、2002）を重要視している。

複数の聞き手に向かって、なんらかの情報を提供することを目的とするパブリック・スピーチは、相手が母語話者であるか否かに関わらず、「易しいことば」と「短い文章」を用い、ゆっくり話すことが目的にかなうと思われるが、日本語による公的スピーチの多くが、「難しいことば」と「長い文章」を用い、聞き手に情報を理解する時間をあまり与えないのは、聞き質されることが少ないからではないだろうか。日本社会では複数の人を前にして行われるスピーチの途中に、聞き手が質問をすることはめったにない。持ち時間をはるかに越えて延々としゃべるパネリストがいても、日本人の議長が話をさえぎることは少ない。学校では、先生が一方的に話し、生徒がおとなしく聞いているというのが伝統的な授業の形式である。退屈で内容が分らなくても、聞き手は話し手に敬意を払って拝聴するというのが、日本のパブリック・スピーチであり、話の途中でも、聞き手の質問を歓迎するアメリカの大学の授業と対照的である（直塚、1980）。

筆者が同時通訳を担当した日本政府主催の国際セミナー¹³²では政府代表の基調講演の後、アメリカ人参加者が特定の箇所について質問し、極めて率直に「全然、分らなかった」「I didn't understand it at all.」と発言した場面があった。日本人参加者であれば、満座の聴衆の前でこのような発言をすることは話し手の面子をつぶすことになるとして避けるのではないだろうか。

日本語のパブリック・スピーチでは、聞き手が話の理解の程度を問われることが少ない。話に関心をもち、内容を理解しようとするよりも、話し手に敬意を表することの方が、重要視される。一方、アメリカの大学では質問をせず、討論に参加しない者は何の意見も持たないとみなされ軽蔑される(直塚、1980)。

ここにはパブリック・スピーチに対する **frame** の極端な相違が見られる。提示された情報に対して聞き手の反応が期待される文化では、パブリック・スピーチは話し手と聞き手の間に活発な意見の交換が行われることが前提で行われる。意見を言うためには、まずスピーチの内容を理解する必要がある。従って、話し手は相手に分かるように配慮し、聞き手は不明な点について質問する。両者の力の上下関係は弱く、話し手は、聴衆の目線に合わせて話をするというイメージである。

一方、聞き手の反応を期待しないスピーチは上意下達や儀礼的性格が強く、聞き手が質問をすることが最初から期待されていない。話し手と聞き手の間の意見交換を前提としないスピーチでは、内容を理解していなくても聞き手が立場を脅かされることはなく、話し手が相手に分かるよう配慮する必要はない。力関係では話し手は聞き手よりも上位で、高い演壇や舞台の上から聴衆を見下ろすイメージである。

この点に関して抱井(2004)は、批判的思考の視点から次のように述べている。

日本文化においては、感覚的にあいまいな言語表現や、円滑な人間関係の維持を重視するあまり、文脈に基づいて相手に意味を推測させる、聞き手依存型のコミュニケーションが多用される傾向がある。そのため、日本には、自分の考えを、言語を使って明確に表現することに慣れていない人が多く、同時に批判的思考が育たないという悪循環に陥っているのではないかと思われる。抱井(2004、p.148)

本論文の実験調査で、日本語のニュースに対し日本語母語話者の中に「分かりやすさ」よりも「硬さ」「フォーマルな印象」「ニュースらしさ」を評価する

¹³² 2004年11月16日に東京で開催された総務省主催「自治体国際交流協力セミナー」。基調講演者は行政局自治政策課長。

反応を示した人たちがいたが、それは話し手と聞き手の相互反応や聞き手の批判を期待しないパブリック・スピーチの文化を反映していると推測される。聞き終わった後に、内容について意見を言わなければならないという設定で、AタイプとBタイプを聞き比べたら評価が違ったのではないだろうか。理解したかどうかを問われる立場になれば、もっと多くの参加者が、硬い表現が多く分かりにくいAタイプよりも短い文章を用いて分かりやすいBタイプを選んだのではないだろうか。パブリック・スピーチを行う者が分かりやすい話し方を選択するかどうかは、聞き手の反応に対する文化的、または場面的期待度に依存すると考える。話し手と聞き手の関係が対等で、聞き手の批判が歓迎され、両者の間に実質的な意見交換ができるような機会が増えれば、日本語のパブリック・スピーチは聞き手への分かりやすさを配慮したものになっていくだろう。

7.3.4. 格調と分かりやすさに配慮した表現

公的スピーチの聞き手が内容の分かりやすさを重要視していることは疑問の余地がないが、実験調査で示された日本語母語話者の「分かりやすい表現を使われると、子供扱いされたような気になる」という反応には十分配慮する必要がある。実際、日本国内で行われる国際会議では参加者の大半が日本語母語話者であり、外国人向けの英語ニュースも元の原稿は国内向けのものである。異なる文化背景を持つ人たちを意識したグローバルな発話スタイルを考える時には、日本語母語話者にとってもできるだけ違和感のないものを目指すべきであろう。格調の高い文章に權威を感じ、やさしい表現には「ありがたみ」が不足すると考える日本語話者¹³³にも受け入れられるような発話スタイルは可能だろうか。筆者は、NHKが1997年7月に放送を開始した「NHK手話ニュース845」¹³⁴のスタイルに注目した。

分かりやすい文章がすべて幼稚な文章というわけではないことを示すひとつの例として、NHKの手話ニュース845の文例を引用する。

手話ニュース

西武鉄道グループの「コクド」の堤義明会長が、今日、辞任する考えを表明しました。

社内のミスから西武鉄道の有価証券報告書を大幅に訂正した責任を取るとしています。

¹³³宮智（1998）参照。

¹³⁴ 放送時間は2004年11月現在、平日の午後8時45分から9時までと、月曜日から金曜日に当たる祝日の午後8時45分から50分までとなっている。

グループ全体の経営から退き、西武ライオンズのオーナーも辞任することになっています。 NHK 手話ニュース 845、2004 年 10 月 13 日、午後 8 時 45 分放送

同日午後 9 時からの NHK ニュースでは、同じニュースが次のように伝えられている。

一般視聴者向けニュース

西武鉄道グループの中核会社である「コクド」の堤義明会長は、社内のミスから、グループ企業が公表している有価証券報告書に大幅な訂正が必要になったこととして、この問題の責任を負って辞任する考えを表明しました。また、プロ野球西武ライオンズのオーナーも日本シリーズの後、辞任することを明らかにしました。

NHK ニュース、2004 年 10 月 13 日、午後 9 時放送

このふたつを比べると、内容がほとんど変わらないのに手話ニュースの方が分かりやすい。特徴的なのは、最初の文章（リード）が短く、主語（堤義明会長が）と述語（辞任する考えを表明しました）の距離が近いことである。一般視聴者向けのニュースの方は、リードが長く、主語（堤義明会長は）の後に、辞任に至った経緯を説明しているため、述語（辞任する考えを表明しました）がなかなか出てこない。また、主語につく修飾語も手話ニュース（西武鉄道グループの「コクド」の）に比べて、一般視聴者向けのニュース（西武鉄道グループの中核会社である「コクド」の）はやや長い。

手話ニュースは、映像と音声、画面上に現れる手話通訳者、字幕の 4 つの手段を使っている。聴覚障害者など音声を聞き取る能力に障害がある視聴者のためにニュースの伝達性を高める工夫がなされた結果、その文章スタイルは、本論文の実験研究で用いた B タイプに極めて近いものになっている。それは、話されるスピードに合わせて行われる手話通訳の同時性に対応する必要から生まれたものであろう。

同日放送された別のニュース項目で手話ニュースと一般視聴者向けニュースを比較する。

手話ニュース

大手スーパー・ダイエーの再建問題で、今日、大きな動きがありました。ダイエーは主力銀行側が強く求めていた産業再生機構の活用を受け入れました。大手スーパー・

ダイエーは、今日、経営の再建問題を協議しました。その結果、銀行側の要求を受け入れ、産業再生機構を活用する方針を固めました。そして、今夜、中川経済産業大臣に伝えました。ダイエーの経営問題は産業再生機構のもとで再建に向けて大きく動き出しました。

ダイエーの再建をめぐるのは、機構の活用か、民間の主導か、対立が続いていました。昨夜、UFJ 銀行など主力銀行 3 行の幹部がダイエーの高木社長と 5 時間に亘って会談しました。銀行側は「機構を活用しなければ支援には応じられない」と厳しく迫りました。今日、改めて機構を活用するかどうか回答するよう求めました。これを受けて、ダイエーは再度協議しました。その結果、産業再生機構に支援を要請する方針を固めました。銀行側の厳しい姿勢を崩すのは困難だとしています。これによって、ダイエーの経営問題は、産業再生機構のもとで再建に向けて大きく動き出しました。

NHK 手話ニュース 845、2004 年 10 月 13 日、午後 8 時 45 分放送

一般視聴者向けニュース

主力銀行から産業再生機構の活用を強く迫られていました大手スーパーダイエーは、銀行側の要求を受け入れ、産業再生機構を活用する方針を決め、今夜、中川経済産業大臣に伝えました。民間主導の再建を目指していたダイエーに対し、UFJ 銀行など主力銀行 3 行は、産業再生機構を活用しなければ、一切の金融支援や融資には応じられず、法的整理も辞さないなどと厳しく迫り、今日までに、機構を活用するかどうか、回答するよう求めています。

また、監査法人からは、銀行が金融支援をしない場合、今月 15 日に予定されている中間決算を承認できないと通告され、ダイエーは銀行側の厳しい姿勢を崩すのは困難だとして、今夜、7 時半からの臨時取締役会で、産業再生機構がダイエーの支援を正式に決めれば、ダイエーは機構のもとで、本格的な経営の合理化を進め、得意分野に事業を絞り込むなどとして、抜本的な経営建て直しを進めることになります。

NHK ニュース、2004 年 10 月 13 日、午後 9 時放送

手話ニュースは 12 行、一般向けニュースは 11 行でニュースの全体の長さ是不変変わらないが、手話ニュースではひとつひとつの文章が短く、使用された文章の数は 14 となっている。これに対し、一般向けニュースは文章が長く、わずか 3 つの文章で構成されている。特に最後の文章は 5 行もあり、聴覚障害のない視聴者でも音声を一回聞いただけでどのくらい理解できるかは疑問である。

普通のニュースと手話ニュースを「格調」という観点から比較すると、手話

ニュースの方は、文章を短く切りすぎていて不自然に感じられる部分もあるが、単語や表現は放送にふさわしい格調を保っており、知的レベルが損なわれているとは思えない。手話ニュースは、聴覚障害者だけでなく、高齢者や一般の視聴者、日本に住む外国人にも利用されている¹³⁵。筆者は、格調を落とさずに、分かりやすさを高めたパブリック・スピーチの手がかりを手話ニュースのスタイルに見出せるのではないかと考える。聞き手に伝わるかどうかを研究した結果生まれたこのスタイルは、音声情報の送り方について深い示唆を与えるものである。さらに、そのプロセスに、手話通訳者が関わったことは、コミュニケーション研究における通訳者の役割について新たな視点を与えるものだと考える。

しかしながら、ニュース放送は公的な異文化間コミュニケーションのごく一部である。不特定多数の聞き手に事実を客観的に伝える一方的なコミュニケーションは、公的なスピーチの中でもスタイルの変更がもっとも容易だと思われる。手話ニュースが分かりやすさと格調を両立するひとつの手がかりを与えているとしても、そこから、国際会議やシンポジウムでの発話スタイルにどうつなげていけばよいのか。予備調査で扱ったような、相手を説得し、相手から情報を引き出そうとする公的なスピーチでは、ポライトネスの要素がさらに重要視される上、個人的なコミュニケーションのように非言語的手段で補うことも難しい。今後、新たな実験調査を行い、シンポジウムなどでの日本語話者の発言が、他言語の母語話者にどのように受けとめられているかを調べる必要があると考える。

7.4. 7章のまとめ

本章では、本論文で明らかになった日本語発話スタイルの特徴を概括し、日本語母語話者が異文化間環境でパブリック・スピーチを行うのにふさわしい発話スタイルを検討した。先行研究で報告された日本語発話の特徴は、本研究で行った公的スピーチの調査でも見られ、「聞き手を説得する」、「聞き手から情報を引き出す」、「聞き手に客観的情報を伝える」の、目的の異なる3種類の公的スピーチのすべてに共通するものであった。予備調査では、日本語発話の内容を正しく理解するためには聞き手がコンテキストを理解している必要があることが示され、日本語の発話スタイルがハイ・コンテキスト・コミュニケーションであるとする先行研究を裏付けた。本調査では、日本語母語話者が日本語の

¹³⁵ 情報提供はNHK手話ニュース担当者による。視聴率は高いときで2パーセント。
(2005年1月4日)

公的発話の中でもっとも中立的と思われるニュースに対しても分かりやすさ、感じの良さ、格調など複雑な期待を抱く一方、英語母語話者の関心は内容が分かるかどうか集中していることが分かった。

以上の知見を基に、発話のスタイルや発話への期待が異なる人たちに対して日本語母語話者が行う公的スピーチにふさわしいスタイルを考えた。調査の結果、日本語母語話者と英語母語話者が共に「分かりやすさ」を求めていることから、聞き手の理解しやすいスタイルが第一の要件と思われた。実験調査のデータを分析した結果「分かりやすい話し方」の原則は Grice (1989) の「協調の原則」にほぼ一致することが分かったが、実際的な応用の手がかりとしては Flesch(1963)の Plain English に注目した。Plain English のルールは実験調査のデータともかなり重なる部分があった。さらに、「分かりやすさ」と「格調の高さ」の両方を求める日本語母語話者にも違和感のないバランスの取れた発話スタイルを探した結果、手話ニュースのスタイルにひとつのヒントを見出した。

本研究の結果から、日本語母語話者が異文化間コミュニケーションの場面で公的スピーチを行う際には、以下の3点に配慮する必要があるとの結論を得た。

1. 異文化間コミュニケーションはロー・コンテキスト・コミュニケーションであることを認識する。
2. 平易で分かりやすい話し方を心がける。
3. 格調を求める日本語母語話者にとっても違和感のない発話スタイルを工夫する。

今後は、音声ニュースだけでなくシンポジウムや討論会など多様な種類の発話を含んださらに大きなデータを取り、質的調査だけでなく量的調査も行うことで今回得られた知見の意義を確認したい。また、グライスの理論やポライトネスの原則などを異文化間コミュニケーションの側面から統合し、より大きな図式が描けるような理論的貢献をしたいと考える。

結び

本論文では、異文化間コミュニケーションの場面における日本語の公的スピーチの発話スタイルを、通訳を介してのコミュニケーションを切り口に分析し、日本語母語話者が音声言語メッセージに抱く期待を明らかにした。日本語母語話者の発話には、客観的な知識や情報を伝える目的に加え、聞き手が自分を好意的に受けとめ、良い人間関係を結ぶことにつながるという期待がこめられている。それは、聞き手との距離の短い個人的な会話だけでなく、公的なスピーチや客観的事実の伝達を目的とする音声ニュースにも当てはまる。日本語母語話者はただ情報を獲得するだけでは満足せず、話し手の示す敬意や好意を期待する。一方、アメリカ人の英語母語話者は、情報の伝達性を重要視する。相手から情報を引き出すためには単刀直入に尋ね、事実を伝える発話に対しては内容が分かるかどうかにもっとも大きな関心を寄せる。

本論文で得られたこのような知見が、日本語母語話者とアメリカ人英語母語話者の一般的傾向を物語っているとすれば、両者が同席した討論会で経験するであろう戸惑いは想像に難くない。日本語母語話者は相手の発言を「木で鼻をくくったような言い方」と感じ、英語母語話者は相手が重要な情報を後回しにするのを「回りくどい」「不誠実」と感じる。それは、表面的には似たような行為でも両者の間では「話をするに対する期待」が根本的に異なっているからである。

グローバルなレベルで異文化間コミュニケーションを論じるときは、より多くの言語や文化的背景を持つ人々の交流を考えなければならない。日本語母語話者とアメリカの英語母語話者の間と同様、またはそれ以上の相違があることを前提として、どのようにすればより良い相互理解につながるコミュニケーションができるか。本論文では、異文化間コミュニケーションに参加する日本語母語話者が心がけるべきこととして、ロー・コンテクストの認識、分かりやすい話し方、発話の格調を維持するスタイルの選択の三つを提案した。今後は、異文化間コミュニケーションにふさわしい発話スタイルの確立を目指してさらに研究を深めたい。

本論文を執筆するに当たり、日本語ニュースの吹込みをしてくださった浅見忠司氏、英語ニュース原稿の製作を引き受けて頂いた石川園子氏、英語ニュースの吹込みをして下さった高橋百合子氏、アラスカ大学での調査でご協力頂いた **Helena Spector** 氏、また、調査協力、情報提供など多方面でお世話になった大垣嘉彦氏に心から感謝する。

また、大学院で 2 年間に渡りご指導を頂き、論文執筆について常に厳しくか

つ温かいご指導を頂いた末田清子教授、多くの学問的刺激を頂いた本名信行教授、そして、いつもの確で率直なご助言を頂いた抱井尚子助教授に心からの尊敬と感謝を捧げたい。

文献目録

引用文献

- Bakhtin, M.M. (1981). *The Dialogic Imagination*. (Edited by Michael Holquist, translated by Caryl Emerson and Michael Holquist.) Austin, TX: The University of Texas Press.
- Bardovi-Harlig, K.(2001). Evaluating the empirical evidence. In Rose, K.,&Kasper, G.(eds) *Pragmatics in Language Teaching*. 13-32, Cambridge, MA:Cambridge University Press.
- Barnlund, D.C. (1973). *Public and Private Self in Japan and the United States: Communicative Styles of Two cultures*, Tokyo: The Simul Press, Inc.
- Bernstein, B. (1990).*Class, codes and Control, Volume IV: The Structuring of Pedagogic Discourse* . London: Routledge.
- Bernstein, B. (1996). *Pedagogy, Symbolic Control and Idendity*. London&Bristol, PA.: Taylor&Francis.
- Brown, P.,& Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage* (Studies in Interactional Sociolinguistics 4). Cambridge, MA.: Cambridge University Press.
- ブルーナー. J. (1990). 『意味の復権—フォークサイコロジーに向けて』(岡本夏木、中渡一美・吉村啓子訳). 東京：ミネルヴァ書房.
- Chafe, W.L. (1976). Givenness,contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view. In Charles N. Li.(ed.) *Subject and Topic*, (pp.27-55). New York, NY.: Academic Press.
- 土居健郎(2001). 『「甘え」の構造』. 東京：弘文社.
- Downing, Angela.(1991). An alternative approach to theme: A systematic-functional perspective. *WORD*, 42, 2, 119-143.
- 江川泰一郎(1964). 『英文法解説』. 東京：金子書房.
- Ensink, T.,& Sauer. (2003). Social-functional and cognitive approaches to discourse interpretation-The role of frame and perspective. In T. Ensink & C. Sauer.(eds.), *Framing and Perspectivizing in Discourse, Pragmatics & beyond: new series V.III*,(pp.1-21). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Flesch, R. (1963). *How to Write, Speak and Think More Effectively*. New

- York, NY: The New American Library of World Literature, Inc.
- 藤井章雄(1996). 『ニュース英語の翻訳プロセス－異文化間コミュニケーションとしての一考察』. 東京：早稲田大学出版部.
- 藤沢晃治 (2002). 『「分かりやすい説明」の技術』. 東京：講談社.
- フリー百科事ウィキペディア.(2004年10月27日). 『NHK手話ニュース』.
<http://ja.wikipedia.org/wiki/NHK> (2004年11月27日).
- Giddens, A. (1999). *Runaway World: how globalization is reshaping our lives*. London: Profile Books.
- Gomez, M. A. (1994). The relevance of theme in the textual organization of BBC news reports. *WORD*, 45, 293-305.
- Grice, H.P. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Gumperz, J.J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge & New York: Cambridge University Press.
- Hall, E. T., & Hall, M. R. (1987). *Hidden Differences: Doing Business With the Japanese*. New York, NY.: Anchor Press/Doubleday & Company.
- Hinds, J.(1986). 『Situation vs. Person Focus.日本語らしさと英語らしさ』(西光義弘注). 東京：くろしお出版.
- 本名信行(1999). 『アジアをつなぐ英語－英語の新しい国際的役割』(アルク新書14). 東京：アルク.
- 池上嘉彦(1982). 「表現構造の比較－＜スル＞的な言語と＜ナル＞的な言語－」.
 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』. 東京：大修館書店.
- 抱井尚子 (2004). 「21世紀の大学教育における批判的思考教育の展望－協調型批判的思考の可能性を求めて」. 『青山国際政経論集』63号、抜刷.
- 川喜多二郎(1967). 『発想法－創造性開発のために』(中公新書136). 東京：中央公論社.
- 国際観光振興機構 (JNTO) 調査情報室. 『平成16年訪日外客数・出国日本人数』.(2004年3月26日). <http://www.jinto.go.jp/info/pdfs/040326stat.pdf>
 (2004年4月2日).
- Kotani, M.(2001). Expressing Gratitude and Indebtedness: Japanese Speaker's Use of "I'm sorry" in English Conversation.
Research on Language and Social Interaction., 35(1):39-7.
- Kowner, R. (2002). Japanese communication in intercultural encounters: the barrier of status-related behavior, *International Journal of*

- Intercultural Relations*, 26,339-361.
- 松田徳一郎 (1999)『リーダーズ英和辞典一第2版』. 東京：研究社.
- Maynard, S. K. (1997). *Japanese Communication-Language and Thought in Context..* Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- メイナード・泉子 (1997).『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』. 東京：くろしお出版.
- メイナード・泉子 (2000).『情意の言語学―「場交渉論」と日本語表現のパトス』. 東京：くろしお出版.
- 宮智宗七 (1998).『いま、なぜビジネスコミュニケーションか』(アルク新書 1). 東京：アルク
- 水谷修 (1979).『話しことばと日本人』. 東京：創拓社出版.
- 直塚玲子 (1980).『欧米人が沈黙するとき』. 東京：大修館書店.
- 中根千枝 (1967).『タテ社会の人間関係』(講談社現代新書 105). 東京：講談社.
- 中右実 (1994).『認知意味論の原理』. 東京：大修館書店.
- 新村出(1991).『広辞苑第4版』. 東京：岩波書店.
- 野田尚史 (2004).「見えない主語を捉える」.『月間言語』2004年2月号. 東京：大修館書店.
- 大橋まりこ (1995).「日本語から英語へのプラグマティック・トランスファー―「断り」行為の場合―」.『青山国際コミュニケーション研究第3号』. 東京：青山学院大学大学院国際政治経済学研究科・国際コミュニケーション学会.
- 大塚容子 (1999).「テレビ討論における前置き表現―「ポライトネス」の観点から―」.『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部外国語学部』vol.37, 117-131.
- サピア、E,ウォーフ、B・L、他 (1995).『文化人類学と言語学』(池上嘉彦訳). 東京：弘文堂.
- Scheff, T.J.(1990). *Shame and Conformity: The Deference Emotion System. Microsociology: Discourse, emotion, and social structure.* Chicago, IL.: The University of Chicago Press,(pp.71-95).
- Schiffrin, D.(1987). *Discourse Markers.* Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- 柴田実、最上勝也、塩田雄大 (1999).『ニュースの英語放送通訳に関する調査報告書―在日外国人にどう受けとめられているか』(NHK放送文化研究所、文部省科学研究費(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」). 東京：国立国語研究所・新プロ「日本語」事務局.

- 司法制度改革審議会. (2001 年 6 月 12 日)『司法制度改革審議会意見書—21 世紀の日本を支える司法制度—』.
- <http://www.kanteri.go.jp/jp/sihouseido/report/ikensho/index.html>
(2004 年 11 月 22 日).
- 染谷泰正 (1986).『ライティングマラソン・テキスト』(第 3 巻). 東京:アルク.
- Sueda,K. & Wiseman, R. L. (1992). Embarrassment Remediation in Japan and the United States. *International Journal of Intercultural Relations*, Vol. 16, 159-173.
- 末田清子・福田浩子 (2003).『コミュニケーション学—その展望と視点』.
東京:松柏社.
- 鈴木孝夫(1975).『閉ざされた言語・日本語の世界』(新潮選書). 東京:新潮社.
- 高橋純一・渡辺文夫・大淵憲一 (1998).『人間科学研究法ハンドブック』.
京都:ナカニシヤ出版.
- Ting-Toomey,S., & Oetzel,J. G.(2002). Cross-Cultural Face Concerns and Conflict Styles: Current Status and Future Directions. In.Gudykunst, W.B. and Mody, B. (Eds.,) *Handbook of International and Intercultural Communication* (2nd. ed.), (pp.143-163). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- 徳永美暁 (1994).「言語表現と文化「日本語と英語」」.『異文化コミュニケーション研究第 7 号』(pp.97-116). 東京:神田外語大学異文化コミュニケーション研究所.
- Tokunaga,M.(1996). External Control in Causatives of English and Japanese. *The Third LACUS Forum*. Linguistics Association of Canada and the United States.
- 外山滋比古 (1976).『日本語の個性』(中公新書 433). 東京:中央公論社.
- 通訳翻訳ジャーナル.「第三回世界水フォーラム特別報告」2003 年 6 月号.
東京:イカロス出版.
- 和田吉剛 (1995).『マキシム高校英語』. 京都:美誠社.
- Watanabe, S. (1993). Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. In Tannen, D.(ed), *Framing in Discourse*(pp.57-113). New York/Oxford: Oxford University press.
- Wertsch,J.V.(1991). *Voices of the Mind: A Sociocultural Approach to Mediated Action*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- 山下秀雄 (1986).『日本のことばと心』(講談社学術文庫 757). 東京:講談社.
- Yule, George.(1996). *Pragmatics*. Oxford:Oxford University Press.

参考文献

- バーンランド、D.C.(1979).『日本人の表現構造』(西山千・佐野雅子訳). 東京：サイマル出版会.
- バーンステイン、B.(2000).『＜教育＞の社会学理論、象徴統制、＜教育＞の言説、アイデンティティ』(久富善之・長谷川裕・山崎鎮親・小玉重夫・小澤浩明訳). 東京：法政大学出版局.
- ギデンズ、A.(2001).『暴走する世界・グローバリゼーションは何をどう変えるのか』(佐和隆光訳). 東京：ダイヤモンド社.
- Goffman, E. (1986). *FRAME ANALYSIS: An Essay on the Organization of Experience*. Boston, MA.: Northeastern University Press.
- 橋内武(2003).『ディスコース—談話の織りなす世界』. 東京：くろしお出版.
- 板場良久(1993).「公的な場でのコミュニケーション」. 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔(編)『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(pp.69-72). 東京：有斐閣.
- 入谷敏男(1965).『ことばの心理学』(中公新書 85). 東京：中央公論社.
- 金田一春彦(1991).『日本語の特質』(NHK BOOKS 617). 東京：日本放送出版協会.
- 鹿島(村上)恵(2000).『日本語母語話者と非母語話者の接触場面における談話形成プロセスの研究』. 平成 9-11 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書.
- 川喜多二郎(1970).『続・発想法—KJ 法の展開と応用』(中公新書 210). 東京：中央公論社.
- Leech, G.N.(1983). *Principles of Pragmatics*. London and New York: Longman.
- リーチ, G.N.(2000).『語用論』(池上嘉彦・河上誓作訳). 東京：紀伊国屋書店.
- メイナード、S.K. (1992).『会話分析』. 東京：くろしお出版.
- 三宅初穂(2002).『要約の技術—話しことばの要約 II —』. 東京：杉並区要約筆記者の会「さくらんぼ」.
- 大堀壽夫(2002).『認知言語学』. 東京：東京大学出版会.
- 鈴木孝夫(1973).『ことばと文化』(岩波新書 C98). 東京：岩波書店.

添付資料（１）予備調査２：コミュニケーションスタイルに関するインタビュー調査
事前ヒアリング記録

１．M.Y. 50 歳 高校教師 （雑誌記者としてのインタビュー）

三つの質問と理由

- ① 拉致された瞬間から解放されるまでに、イラクやイラク人に関する感想がどう変わったのか。

（地に足のついているボランティア、貢献のあり方に興味がある。皆が熱くなっている時の人道主義はよく見られるが、何かがきっかけで退潮する傾向がある。それなら最初からしない方がいいという議論もある。死と隣り合わせになってボランティアとしての意識がどう変わったか。刃を突きつけられた時に考え方が変わったかどうか。命と引き換えにしてでも続けるか。命を大事にするか。ボランティアの究極の選択について知ること、将来ボランティアを目指す人たちの参考になる。ボランティアはどこかで喜んでもらうというのがボランティアではないか。それが崩れた時にもボランティア足りうるのか。解放後「私はイラク人を嫌いになれない」とおっしゃったが、それは最初からまったく変わらない信念なのか、それとも紆余曲折を経た上での感想なのか。）

- ② 解放後の自己責任論についてどう思うか。

（言いにくいところがあるのは分かるが、本音で話をしてほしい。堂々たる反論を聞きたい。世論に対する正しい指針になるのではないか。）

- ③ 日本の国が世界に果たすべき役割について。

（平和憲法を持っている日本の役割とボランティアなどによる個人的貢献が組み合わさって世界貢献になる。自衛隊派遣が平和貢献と言う人もいる。お金だけ使えば貢献になるという人もいる。日本が果たすべき役割について、自衛隊を派遣する、またはNGOにお金を回すなど具体策を聞きたい。個人がボランティアをするからそれでよいという議論は、日本の役割は何ぞやという議論から逃げていると思う。）

インタビューの記録

質問の番号は、読みやすさを考えて付け加えたものである。予備調査では調査者が高藤さんの役割を演じていないので質問のみであるが、当初本調査として行ったアメリカ人教授へのインタビューでは調査者が答えている。

（あいさつ部分）

はじめまして。この度はインタビューを受けていただきありがとうございます。お

身体の方はいかがですか。長時間に及ばないようにしますので。イヤだと思われたらいつでも中断しますのでそうおっしゃって下さい。手短かに3点ばかり伺いますが、お答えにくいことはそのように言ってください。

質問1.

まず、最初にお聞きすることですが、拉致されて数日間、拘禁されたのですが、イラクにボランティアとして入られた時の気持ちと、拘留され、ビデオを撮られた時の気持ち、拉致された時から解放されるまでの間にお気持ちは変わりましたか。それとも全く変わらないのでしょうか。段階、段階でイラクおよびイラク人への印象は様々に変化したのでしょうか。

今はどのように思われますか。これからボランティアする人の財産として聞きたいと思います。私も記者として「イラク人を嫌いになれない」とおっしゃったことが記憶にのこっています。時間経過を追って細かく教えてください。

質問2

長いインタビューになっていますが、調子が悪ければいつでも言ってください。それでは、続けさせていただきます。

解放後、いろいろなことをお聞きになったと思いますが、自己責任論が日本国内ではずいぶん論議をされました。かなり厳しい意見もあります。あなたの率直なご意見、できれば反論があればぜひ聞きたいと思います。

こういうインタビューですが、記事にするかどうかを気にせず、後で相談しますので、率直に、できれば反論を聞かせて欲しいと思います。

質問3

休憩を取らなくてもいいですか？それでは続けさせていただきます。最後の質問です。高遠さんを始めとして多くのボランティアがイラクその他で活躍しています。貴重な存在だと思いますが、それとは別に日本の国として、世界の平和に対し何ができると思いますか。経済支援や人的貢献という大まかなことではなく、具体的なことを教えてください。自衛隊派遣の是非を聞いているわけではありません。大きな枠組みで、他に何ができるか。平和憲法を持つ唯一の国として何ができるか。率直なご意見を聞かせてください。

調査後のコメント

この被験者には「雑誌記者として」と「友人の立場で」のふたつの場面を設定してインタビューをお願いしたが、「友人の立場」のインタビューは難しいということで、記

録には残さなかった。以下は調査後のコメントである。

「個人的に質問するのは遠慮があるので一定の線を踏み越えて質問ができない。また、高遠さんをあまりよく知らないなので、友人の立場を想定するのは困難だった。記者には質問する特権が与えられているので聞きやすい。今回はかなり相手の気持ちに配慮した。相手に対して思いやりを示す言葉を使っているが、それには答えを引き出すための手段という意味合いもある。」

2. K.S. 75歳 主婦

三つの質問と理由

- ① 今後、再びイラクに行きたいと思われませんか。

(その心境を聞きたい。)

- ② イラクで人質になっている時は(日本)祖国の皆さんが心配していたことを想像しておられましたか。

(同じ国民として国民達は皆、大変に心配していました。解放された時は自分のことのように喜んだのです。それを聞かれて、驚いて喜ばれたことと思いますが・・・)

- ③ 人質解放された直後にイラクの仕事を続けたいと言っておられたが、今、日本の様子をいろいろ聞いてどんな風に思われますか。

(仕事熱心のことはよく分かります。でも、外国へ行って仕事をすることの意義を考えて、今後の参考にしていただきたいと思います。)

インタビューの記録

質問1.

大変難儀なさいましたね。私らがそういう目にあってたらどんなにかと思いましたよ。イラクで子供さんに接してね、ボランティアでいいお仕事をされていたと聞いていましたが、落ち着いたら、また行きたいと思いませんか？

質問2.

人質になっておられた時に、日本の様子は知らなかったと思いますが、想像していましたか？みんな心配しているんじゃないかと考えていましたか？国民は、大変、自分のことのように心配していたんですよ。今日は解放されるかと、一喜一憂していました。本当に心配していたことを聞いて、びっくりなさったと思いますが、同胞としての感情に喜んで下さったと思います。国内での様子なんか、人質になっているときに

想像していましたか？

質問 3.

あの、解放された直後に「イラクの仕事が続けたい。また子供さんらと一緒に過ごしたい」と言っておられましたが、日本国内の心配の様子を聞いて、今はどんな風に思われますか。平和な時ならいいのだけれど、こういう時にみすみすね。時と場合を考えて行動してもらわないとね。

3. Y.S. 82 歳 元会社員

三つの質問と理由

- ① イラクへ行かれた目的は？
(女性の身で厳しい状況下にあえて行動された動機は？)
- ② 3 人で人質になった状況。
(色々なつらいことが多くあったのでしょうか、特に女性として特に苦しかった事情、特別な感情などは？)
- ③ 日本へ帰られて家族と会われた感動は？
(最初は弟さんが迎えに行かれたそうですが、その最初の顔を合わせた瞬間の感動は？家へ帰ってご両親と会われた時は？)

インタビューの記録

質問 1.

はじめまして。高遠さん、新聞などでいろいろ苦勞したことを見聞きしましたが、お目にかかって聞きたかったのは、女性の身なのにあえてイラクという厳しい場所にボランティアとしておいでになった特別な動機は何でしょうか。

質問 2.

3 人の方々が不幸にして人質になっていろいろと苦勞したんですが、特に女性として、どんな苦勞がありましたか。また、その体験以外にどう思われたのか、気持ちも教えてください。泣いてくれとか、自分から自衛隊を・・・国民の中から自衛隊を引き揚げするような環境を作るようなことを 3 人が訴えて、そういう環境を作って欲しいと真剣にやってもらったら、その結果で（人質としての）待遇が変わるということだったのですか。

質問 3. 解放されたあと家族と再会されましたが、弟さんと最初に会われた時のお気

持ちはどうだったですか。日本に帰ってご両親と会われて時の気持ちも聞かせて欲しいですね。

4. **R.E.** 48 years old American University Professor

Three questions and rationale

(1) What was it like being held as a hostage?

(I want to know more about her personal experience first.)

(2) Do you believe that you did the right thing?

(I want to know her stand on this controversial point.)

(3) What are your plans for the future?

(I want to know the experience affected her future life.)

Interview records

(greetings)

It's very nice to meet you. Thank you very much for coming. (It's my pleasure.)

Question1.

May I ask you a few questions? How was it like being taken as hostage?

Answer:

I was shocked. I don't remember well.

Question2

Were the guards kind to you?

Answer:

Yes. But in the beginning, they were hard on us, but gradually they changed.

Question 3.

Were you able to talk with other hostages?

Answer:

Yes.

Question 4:

Do you think you did the right thing going to Iraq?

Answer:

Yes, I think so.

Question5:

Why do you think so?

Answer:

I have helped children in Iraq. There are many children who need me.

Question6:

What was your reaction to the criticism of media after you came back to Japan?

Answer:

I was very shocked to hear that. In the beginning, I didn't understand what was going on. I gradually came to realize that they are criticizing me and other hostages.

Question7:

So what's your plan for the future?

Answer:

I'd like to go back to Iraq as soon as possible, but I can't do that. For the time being, I'll just stay at home and be with my parents, and seek a chance to return to Baghdad, because there are a number of children who are waiting for me.

Question8:

So, you still are strongly committed to doing something to help people in Iraq?

Answer:

Yes.

(Greetings)

Thank you very much. (Thank you.)

調査用紙

(2) ー1 調査用紙日本語版

日本語コミュニケーションスタイルに関するインタビュー調査

調査者 新崎隆子

実施日時：

協力者ご氏名：

ご年齢： 性別：

ご職業：

日本で暮らした年数：

外国で暮らした年数：

Part I

以下の人物に会ってインタビューをするとしたらどのようなことを尋ねますか。
尋ねたい質問を3つ書いてください。何故、その質問をしたいのかという理由も簡単に
書いてください。インタビューをするあなたの立場は「個人として」「雑誌記者として」
「友人として」など、ご自由に想定して頂いて結構です。

想定インタビューの対象者と状況設定

高遠菜穂子さん（34歳）

人道活動家。アフガニスタンやイラクでストリート・チルドレンなどの支援をしてきた。イラクで2人の日本人男性と共に武装グループの人質となり、7日後に解放された。解放直後の記者会見で「イラクでの活動を続けたい」と発言。日本国内で批判が高まった。共に人質となった2人はすでに記者会見を行い、「自分たちは信念を持って行動した」と発言した。事件後PTSDと診断され自宅に閉じこもっていたが、今では心身ともに回復し、主治医の許可も出たのであなたのインタビューを受けることを承諾した。

高遠さんに聞きたいこととその理由

1.

(理由)

2.

(理由)

3.

(理由)

Part II

調査者を高遠さんだと思って、実際にインタビューをしてください。その際どのような立場でインタビューするかを教えてください。

インタビューは高遠さんが部屋に入ってきてあなたの前に座ったところから始まります。

なお、インタビューの様子は記録のためにテープに録音しますが、研究以外の目的では一切使用いたしません。

ご協力ありがとうございました。

(2) -2 調査用紙英語版

Survey by interview on communication style

Researcher: Ryuko Shinzaki

Date:

Name:

Sex:

Age:

Occupation:

The number of years you have lived in Japan:

The number of years you have lived abroad:

Part I.

If you interview the person described below, what would you like to ask? Please write three questions you would like to ask and reasons for doing so. You can freely imagine your position as an interviewer. You can raise questions personally, as a friend, or a magazine reporter.

The interviewee:

Ms. Nahoko Takato 34 years old.

Humanitarian activist. She has helped street children in Afghanistan and Iraq for some years. She was recently taken hostage together with two Japanese men by an armed group in Iraq, and was released 7 days later. Soon after she was released, she told reporters that she would like to continue her work in Iraq. Her comment caused a sharp criticism in Japan. The two Japanese gentlemen who were released with her held a press conference after they returned to Japan. In response to domestic criticism against former hostages, they said that they only did what they believed to be right.

Ms. Takato suffered PTSD, post traumatic stress disorder and had to stay at home for some time. Fortunately she recovered from the shock completely. With her doctor's permission, she accepted an interview with you.

Your questions to Ms. Takato and reasons to ask them.

The first question:

Reason:

The second question:

Reason:

The third question:

Reason:

Part II

Please have a simulated interview with Ms. Takato, assuming the researcher (Shinzaki) is Ms. Takato. Before you start, please describe your position as an interviewer.

The interview starts when Ms. Takato enters the room and sits in front of you.

The interview will be recorded but will be used only for a research purpose.

インタビュー記録

1. Y.O. 59歳 元放送記者

三つの質問と理由

- ① 今後もイラクでの活動を続けますか。
(人質事件で考えが変わったのかどうかを知りたい)
- ② 今回何か反省することがありますか。
(戦闘が激しくなっていたファルージャで人道活動ができると考えていたのか聞きたい)
- ③ 事件後、日本国内で高まった批判をどう受け止めていますか？
(いわゆる「自己責任」をどう考えているかを聞きたい。)

インタビュー記録 (放送記者として)

質問の番号は読みやすさを考えて追加した。また、答えの部分は調査者が高遠さんになったつもりで答えたものである。

質問1.

あの高遠さん。あの、PTSDもようやく回復されたということで、あの、今回、インタビューさせて頂くことになりましたけども、まず、始めに、あの、あの、イラクで解放された後にですね、あの、今後も、こういった人質事件があったにも拘わらず、将来イラクでですね、あの、人道支援活動を続けたいという主旨のことをおっしゃったんですが、今もそういうお考えで変わらないかどうかを聞きたいんですけれど。

(答え)

はい、あの、色々批判もありましたので、あの、実は発言を控えているんですけども、私の本音はイラクに帰りたい、子供達が待っていますので、ぜひ早く帰って支援活動を続けたいと思っています。

質問2.

分かりました。しかし、今回、結果的にああいう事件に巻き込まれたといいますが、ま、事件の被害者になったわけなんですけれども、あの、ま、それはラッキー、アンラッキーな面、いろいろあると思うんですけれども、ま、ご自身で、現時点でですね、何か反省、こうすれば良かった、ああすれば良かったという反省すべき点があったら

聞きたいんですけれども。

(答え)

実は、たしかに計画に甘さがあったなという風に思います。で、私はイラクで長いこと活動していますので、自分自身の中に、イラクのことはよく知っているという、そういう気持ちはありましたので、ある程度自信があったということはあると思うんですね。それで、あの、誘拐されました時も、最初はそんな風には思っていなくて。あの、実際に、中にいた時にも、そんなに、こう、ひどい扱いをずっとされていたわけではないので。ですから、私の頭の中では、もちろん誘拐されたんだっていうことはありましたけれども、彼らが私達と引き換えに何を要求しているかってことは分からなかったものですから。ですから、ま、ひとつには自分に過信があったかな。

質問 3

ま、あの、特に解放されてからですね、また、日本にお帰りになってから、あの、マスコミ、まあ、新聞紙上、雑誌などでね、自己責任という言葉が、まあ、いっぱい使われてですね、今回人質になられた人たちのやっぱり責任を、ま、一体、どこにどうあるんだかと、政府がそこまで面倒を見るのはどうのこうのといったような批判の声がありましたけれども。あの、やはりニュースの取材、あるいはこういった人道活動とか、この件の、何と言うんですか、いわゆる本当に意味のある活動をするためには、そういったところにも飛び込んでいかなければいけないというような面もあるとは思いますが、そういう自己責任を追及する批判の声。これにたいして、という風に思われていますか。

(答え)

そうですね、あの、実は帰ってきて、とてもびっくりしまして。

(質問者：ええ)

最初は批判があるということについても全く気がつかなくて。で、あの、それをどう受け止めたらいいのかということが分からなかったので、それで、そのために、精神的に非常にダメージを受けてしまったというところがあったんですけれども。今振り返って考えると、ま、そういう受け止め方を日本の皆様がなさったのは心配してくださったことの裏返しかなあというふうに、そういうふうにプラスに受け止めているんですが、ただ、一緒に人質になった方ともよく話し合ったんですが、やはり、こういうところに思い切って個人の立場でですね、飛び込んでいくことには危険が伴うし。私達自身は、もしそれで危険なことになって、あの、死亡するようなことがあっても、それは、もう、あえて仕方ないと覚悟を決めて実際みなさん、そういう気持ちでやっているといます。ですから、ま、人道的な配慮から私達のことをほうっておけないという風に、皆さんが思ってくださいるのはとても嬉しいんですけれど、だからといっ

て、じゃ、そういう活動は全くしないということは言えない。ですから、もちろん慎重にはしようと思いますし、あえてそういう、あの、危険なことはしないようにはしますけれども、かといって、全くそういうことを諦めてしまうことはできないと思います。

質問 4.

ま、あの、これからも人道支援活動っていうのは続けていくと？

(答え) はい、そうです。

インタビュー後のコメント

「高遠さんは人質になった後に日本国内の批判にさらされているので、いわば二重の被害を受けている。あまり、刺激したくないという気持ちがあった。」

(質問：日本人記者の質問はアメリカ人記者の質問に比べて、yes/no を聞く closed question が少ないように思いますが、何故でしょうか。)

「日本人から発言を引き出すには工夫が必要だ。マイクロフォンに向かって積極的にしゃべってくれる人は少ない。Closed Question では「はい」とか「いいえ」と言うだけで、それ以上は何も話してくれない。できるだけ、話しやすいようにもっていく必要がある。たぶん、アメリカ人の場合は、ほうっておくといくらでもしゃべるので、インタビューの方向性をコントロールするために、Closed Question が多くなるのではないか。」

2. **S.M.** 49 years old, English, Photo-journalist

Three questions and rationale

(1) In the Vietnam War, the reports of independent journalists, photographers, aid workers and observers played a vital role in bringing about the end of the war.

Do you think that citizens and non-affiliated individuals should stay in Iraq?

(The question is intended to compare the current situation in Iraq with previous conflicts and to determine to what extent the subject has reflected on the contemporary historical context.)

(2) On your release you expressed some sympathy for your captors, calling them “soldiers” and “resistance fighters”. Would you care to comment on that?

(The question is attempting to probe whether the subject has/had any underlying political ideology that might have influenced her thinking about this war, and whether that has undergone any change since being released.)

(3) If you had been more successful in your mission, continuing your work without incident, do you think the Japanese public would have been more sympathetic?

(The question is intended to elicit a view on the capriciousness of a public conditioned to respond to success and failure.

Interview records

Answers were given by the researcher.

Question 1:

Let's begin the interview. Here is the first question. In the Vietnam War, the reports of independent journalists, photographers, aid workers and observers played a vital role in bringing about the end of the war. Do you think that citizens and non-affiliated individuals should stay in Iraq? Japanese non-affiliated citizens in Iraq?

Answer:

It depends on the purposes of their stay. Where there is a special need for help, it can be extended by non-affiliated people. If possible, they should do their work in Iraq or in other places.

Question 2.:

The second question. On your release you expressed some sympathy for your captors, calling them “soldiers” and “resistance fighters”. Would you care to comment on that?

Answer:

When I was taken hostage, I was very scared. They were very hard on me, and very fearful. But as the situation developed, they came to change their attitude. They started acting normally. Actually, they took a good care of us. I think they had their own cause to resist the war and they were forced to take us as hostage. So I share some sympathy with them.

Question 3:

You seemed to have some insights there. During this ordeal, did you glean any insights into psychology of the kidnappers? Difficult question?

Answer:

It was a very extraordinary situation. Frankly speaking, I don't very much remember what happened during the period. I can't give you a proper answer.

Question 4:

You said something you'd be able to formulate in future when you have time to look back on the situation. I'll go to the last question, my last structured question No. 3. If you had been more successful in your mission, three of you in fact, continuing your work without incident in Iraq, do you think the Japanese public would have been more sympathetic? Japanese public like other public seem to be conditioned to respond to success and failure.

Answer:

Yes. I think so. Actually, our activities in Iraq were not very much known to the Japanese public. They didn't care about it at all. All of a sudden, they became very much interested in what we were doing there, simply because we were taken hostage. They'd have been very, very appreciative of what we've been doing, if we hadn't been taken hostage.

Question 5:

President Bush and Dick Cheney, and some others commented that there hasn't been enough coverage of positive stories, rebuilding, opening schools, successful relationships, bonding taking place between allies and Iraqis. Perhaps this question is...Do you think they respond more to the failure?

Answer:

Yes. I think so. Japanese public and general public tend to be swayed, depending on how things develop. When they are successful, they tend to applaud. If they fail, all of a sudden, they become very critical.

Question 6:

More drama in failure?

Answer:

Yes. I think so.

Question 7:

OK. Thank you for your time.

Post-interview comment

This is my usual interview style. However, I tried not to give too much pressure on the interviewee.

3. **B. S.** 50 years old, American, Journalist

Three questions and rationale

(1) In spite of your traumatic experiences, why do you want to continue performing humanitarian work in the Middle East?

(This question would be of interest to readers and gets to the heart of Takato's motivation.)

(2) The Japanese public has described your efforts in the Middle East as selfish, since with the potential for you to become a hostage, they place in jeopardy the larger mission of Japan. How would you respond to such criticism?

(This is perhaps the question of greatest interest to readers.)

(3) Do you think you were making a difference in Iraq? If so, what was your contribution?

(It would give balance to news story to give her side in a positive light.)

Interview records

(Greetings)

Miss Takato? I am Bure Sabin, from the Nork Daily News. Nice to meet you. I am very appreciative of your taking time for busy schedule to meet with me today. I just have a few very simple questions. It won't take much time, ah, just ten minutes. OK?

And I'm recording this, OK? This is simply to help my memory. OK? Later on, this'll appear on paper, probably later in the week. I may call you or send you a fax to confirm your comments. Please relax and here's the first question.

Question1:

In spite of your traumatic experience in Iraq, why do you want to continue performing humanitarian work there?

Answer:

Well, you know I've been working in Afghanistan and Iraq, and have been helping street children. There are many street children waiting for me coming back. So I have to go. That's what I think.

Question 2:

They may need you. But there are certain individuals in Iraq who sent a very clear signal that they didn't need you. How do you reconcile with them? Ah, children need you, but certain individuals don't want you there. How do you feel about that?

Answer:

Of course there are many different people who have different opinions about humanitarian aid. But as far as there are some people who need me, I think there is a need for me to go there.

Question3:

OK. Very basic question. Wouldn't you be afraid of return?

Answer:

Well, frankly speaking, I was very much hurt by being taken hostage. I suffered a lot from deep mental stress. I've recovered, not completely, but to certain extent. And there is a need. The need is greater than my fear. So I want to go back to Iraq.

Question4:

When you return, would you take cautions which you didn't take before?

Answer:

Yes, of course. This time I want to be more careful about my security. Maybe I have to admit I was too careless in the previous time. I didn't predict well what'll happen to myself. So this time, I'll be more careful about it.

Question5:

Thank you. Next question. The Japanese public has described your efforts in the Middle East as selfish, since with the potential for you to become a hostage, they place in jeopardy the larger mission of Japan. How would you respond to such criticism?

Answer:

Well, actually I didn't think about anything while I was in captivity. I was scared. Actually I didn't expect that this has spread as a very serious news topic in Japan. I

was very shocked to know Japanese reaction to me and other two hostages. Some say that we were too selfish or maybe, it was not appropriate that my family members asked Japanese government to withdraw Self Defense Forces from Iraq. But I don't think our actions were out of self-centered, or selfishness. I think that we did what we believed to be quite right and correct. As a result, yes we were held in captivity and many people worried about that. But this has nothing to do with selfish acts or anything.

Question6:

Weren't you aware that the Japanese government had warned Japanese nationals not to go to Iraq?

Answer:

Of course, yes. I knew. I knew. But there were a lot of humanitarian aid workers working there, knowing that it was a very dangerous place. A lot of reporters were there, they have been very active. Actually there were a lot of people acting there for their own causes, or for what they believed correct. They know it's a dangerous place, and I knew that it was a dangerous place and I might have very, very serious experiences there, although I didn't estimate the size or seriousness of the danger. I have to admit it. Yes. We knew that it was dangerous, but the need we had to go was greater than the fear.

Question 7:

But you said earlier you are trying to go back? But now, when for the first time you were there, you weren't aware of that. You said that you didn't stay there for a selfish reason, because you thought there was a need and now, though you were taken captive, there calls for withdrawal of Japanese humanitarian mission because you were a hostage. Despite that fact Japanese mission was jeopardized because you were taken captive, you still go back with potential, once again that Japanese mission in jeopardy?

Answer:

I said I want to go back. But maybe, I will choose the right timing to do so. Maybe, now, for the time being, I think it'd be too dangerous for me to go back and jeopardize Japanese mission going on there. So maybe I have to wait for some time. But my feeling is that I want to go back.

Question8:

So you'll go back once there is a stability, once there is a new Iraqi government, and terrorists acts subsided?

Answer:

Yes. I'll choose the correct timing.

Question9:

OK. I think many Japanese people get impression, or have impression that you plan to go back in near future. But this is not the case though? Once the things calm down, and the new government and law and order being restored and then you'll return?

Answer:

I think I want to be more careful about it. I want to make a plan in advance considering many things.

Question10:

All these things...Iraq becomes stable and democratic, and law and order become stable, then there'll be less need for people like you.

Answer:

I don't think so. Always there is a need, however the government is democratic and they are caring people, always there are people who are forgotten.

Question11:

But there are people forgotten right here in Japan. Why do you go to Iraq?

Answer:

Maybe it's a matter of chance. I've been working in Iraq and Afghanistan, and other developing countries. I have more experience there. So my expertise can be fully utilized there than in Japan.

Question12:

How do you describe your expertise?

Answer:

Maybe I have a lot of friends in Iraq and Afghanistan. I think I know more about their culture than other aid workers working for instance in South America or Africa.

So I think I can make the best use of my experience there.

Question13:

OK. Thank you. Final question. Do you think you were making a difference in Iraq? If so, what was your contribution?

Answer:

It's a rather difficult question, because I was working alone. I don't belong to any kind of organization. So maybe my scope is very narrow, I have to say. I know the very small world, street children I was taking care of, their family members, and poor people there. So within that very narrow scope, and within a very, very narrow world, I am confident to say I made some contribution to them. I helped them, and they are very grateful. I am confident to say I did something good to them.

Question 14:

Concretely, what was your contribution?

Answer:

For instance, I made some arrangement for finding homes for some homeless street children. For sick children, I tried to contact other people living in Iraq to find a doctor for them. There are many things although you may feel that they are very, very tiny things, but very important for individual people.

Question15:

Finding home for children, isn't that something Iraqis could do? Why does that require some people from Japan to find home through Iraqis?

Answer:

Maybe in such a country in disarray, very, very disorganized, there is no system like welfare system or social security system. Those were the people...I was associating with people from broken family, they didn't have any job, they couldn't take care of themselves. Therefore, there was no room for them to help others. All

these people were forgotten by the government, or, there was no government. CPA was so busy to do many things then. They couldn't take care of them. Although it was a very small contribution I could make, but it was a great one for individuals. I think it was a very needed efforts for them.

Question 16:

But you said you were not with an organization. What was your source of funding?

Answer:

Well, individual contribution I could collect.

Question17:

Individuals, where?

Answer:

In Japan, and also some in the US.

Question18:

How you got these contribution?

Answer:

Through personal contacts. I am a sort of freelance aid worker, but I have a lot of friends working for certain aid organizations. They helped me.

Question 19:

The one you were concrete about was to find home through Iraqis. Anything else?

Answer:

Maybe those are the things I did. The period I was working in Iraq was rather limited or shorter than the period I stayed in Afghanistan. I couldn't do many things.

(Greetings)

OK. OK. I think those were the questions I wanted to ask you and I think this was a very good interview. Thank you for your time. When you do return, please be

careful. I hope you'll get better. Thank you very much.

音声ニューススタイルの比較調査

国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻 新崎隆子

実施日時：2004年6月16日

実施場所：青山学院大学青山キャンパス 15502教室

参加者： 年齢： 性別： 氏名：

1. 調査の主旨

本日は音声ニューススタイルの比較調査にご参加頂きありがとうございます。この調査は、異文化間コミュニケーションに関する研究の一環として行われます。幾つかの質問が用意されていますが、正解はありませんので、ご自分の感想をありのままお答えください。この調査結果を研究以外の目的で使用することはありません。参加者の氏名は、調査後に確認する必要がある場合に備えて記入して頂きますが、書きたくないという方はあらかじめお申し出下さい。

2. 調査のやりかた

これから、ふたつの話題に関するニュースを聞いて頂きます。それぞれの話題について、同じ内容を伝える二つのスタイル（Aタイプ、Bタイプ）で作られたニュースが用意されています。

Part I.

まず、最初に話題①のニュースを2本聞いてください。

A タイプ

B タイプ

1. 二つのニューススタイルの違いを感じましたか： 感じた 感じない
2. 違いがあると感じた人は、何故そう感じたのか、理由を述べてください。

Part II.

次に、話題②に関するニュースを聞いてください。今度は、Bタイプを先に聞いて頂きます。

Bタイプ

Aタイプ

1. 二つのニューススタイルに違いががあると感じましたか： 感じた 感じない
2. 違いがあると感じた人は何故そう感じたのか、理由を述べてください。

3. BタイプとAタイプを比べてどちらの方が好きですか：

B A どちらも同じ

好きだと思う理由はなんですか。

ご協力をありがとうございました。

添付資料（5） 本調査に使用した日本語のニュース

Part I. A タイプ

きのう投票が行われた 長野県知事選挙は 県議会の 不信任を受けて職を失う 失職となった 前の知事の田中康夫氏が 他の候補を大差で引き離し、当選しました。

長野県知事選挙は すべて開票が 終了しています。

前の知事の田中氏が 有権者の多い 松本市や上田市で 次点となった長谷川氏の 3 倍の 票を獲得したほか、 前回、おととしの知事選挙では 票が伸びなかった郡部でも 60 パーセントを超える 大量の票を集め、 当選しました。

田中氏は 46 歳。 今年 7 月、 ダムの建設計画の中止や 県政の運営方法などをめぐって 県議会の不信任を受け、 知事の職を失う 失職となりました。

選挙戦では、 田中氏は 「改革を後戻りさせる わけにはいかない」として 県内各地をくまなく回り、 有権者に直接、 訴える方法で選挙戦を展開し、 県内全域に支持を広げました。

そして 不信任に賛成した 多くの県議会議員や市町村長、 それに労働団体などの 支援を受けた弁護士の長谷川敬子氏ら（はせがわ・けいこ） 他の候補を寄せ付けず 圧倒的な強さを見せました。

長野県知事選挙の投票率は 73.78 パーセントで、 おととしの知事選挙を 4 点 21 ポイント 上回りました。

Part I. B タイプ

日曜日に行われた長野県知事選挙で、前知事の田中康夫さんが再選されました。この選挙は、県議会が田中さんに対して不信任決議をしたために行われたものです。

田中さんは 46 歳で、小説家から政治家に転向した人ですが、他の 5 人の候補に勝ちました。長谷川敬子さんという長野県初の女性弁護士に大差をつけて勝ちました。長谷川さんはほとんどの県議会議員、多くの市長、そして主要な労働組合が支持していました。

投票率は 73.78 パーセント、前回の選挙より 4 ポイント高くなりました。

ほとんどの県議会議員は田中さんに投票しませんでした。それは田中さんの「ダム建設中止宣言」のためです。増えつつある県の借金を押えるため、いくつかのダム建設計画を中止するという公約です。

選挙運動期間中、田中さんは120の市町村すべてを訪れ、20ヶ月続いた県行政を支持するよう県民に訴えました。その中には、大規模な公共事業を縮小するという公約も含まれていました。

長野県は、1998年の冬季オリンピックが開かれたところで、現在、巨額の赤字に苦しんでいます。

一兆6000億円、ドルにして130億米ドルになっており、オリンピック施設の多くが使われないままになっています。

(最後の2パラグラフは外国人の理解を助けるためにライターが付け加えたもの)

Part II. B タイプ

太平洋の小笠原諸島が、観光産業から自然環境を守るための対策に乗り出しました。

小笠原村の宮沢昇一村長は、火曜日、東京都の石原慎太郎知事とエコ・ツーリズム協定を結びました。

30以上の島からなる小笠原諸島は、東京の中心部から1000キロメートル南にあり、都知事の管轄です。

観光産業は小笠原村にとって大切な収入源ですが、旅行者は最近、新種の植物や動物を持ち込み、地形の変化をもたらしています。

この協定により、観光客は、ガイドがいなければ二つの指定された地区に入れないことになりました。また、そこでは、観光客の数と訪れる期間も制限されます。

そのひとつは、無人島の南島（みなみじま）です。この島は石灰岩の侵食でできたカルスト地形でできています。もうひとつは母島（ははじま）の石門（せきもん）地区

です。ここには独特の植物があります。

小笠原村は日本で初めてエコ・ツーリズム制度を取り入れた自治体になります。

Part II. A タイプ

世界的にも貴重な 小笠原諸島の自然の保護と 観光を両立させようと 東京都と小笠原村は 人数や期間などを制限したうえで 指定した地域への 観光客の立ち入りを認める

全国でも初めての制度を 設けることになりました。

小笠原諸島は 東京から南に およそ千キロの父島を中心に 太平洋上に点在する 30 余りの島々からなり、世界的にも貴重な動植物が 多く見られます。

ところが、最近では 訪れる人が増え、 本来、島にはない動植物が 持ちこまれたり 特徴ある地形が 変化したりといった問題が 起きています。

一方で 観光は 島の基幹産業にも なっていることから 東京都と小笠原村では 自然保護と観光の 両立を目指す制度を 来年4月から新たに 設けることにしたものです。

今日は 小笠原村で 東京都の石原知事と 宮沢村長が 協定書に調印しました。

新たな制度では 石灰岩が侵食されてできた カルスト地形が広がる 無人島の 南島（みなみじま）と 世界でも この地域にしかない植物が見られる 母島（ははじま）石門（せきもん）地区の 二つの地域を指定し、 東京都が認定するガイドの同行を義務付けるほか、 区域や人数、それに期間などを 制限したうえで 観光客の立ち入りを認めます。

北海道の知床岬など、 地元の人たちが 自主ルールで 観光客の立ち入りを 制限している例はありますが 自治体がこうした制度を設けるのは 全国で初めてです。

添付資料（6） 本調査：日本語ニュース聞き取り調査生データ¹

¹ 原文は手書き。判読不能箇所はそのまま。文字の間違いも訂正していない。

	性別	年齢	Part I	理由	Part II	理由	好み	理由
1	男	20	感じた	Bの方が文章が短い。	感じた	Bは文章短い。Aでの文の補足説明部分をBでは分けてひとつの文にしている。	A	Aの方が話の流れをつかみやすい。
2	男	20	感じた	Bの方が聞きやすい。Aは淡々として単に情報を伝えているだけのように思え、意識して聞かなければ分からないかも。	感じた	Aの方が淡々と情報を言っているだけのような意識しなければ分からないかも。	B	Bの方が何か聞きやすい。Aは少し気が重い。学生の自分からするとBだが、年齢が上がるにつれ、Aの方が聞きやすくなる気がしなくもない。
3	男	21	感じた	Bは文が短くて、簡単な単語を使っている。	感じた	Aは「言いたいこと」(point)を回りくどくいつている感じで、気を抜いて聞いていると何のニュースか分からなくなってしまう気がした。	同じ	比べてみて初めて分かる程度のことなので好きとかはありません。
4	男	21	感じた	Aは格式ばった言い回しだが、Bは大衆レベルに下げて誰にでも分かりやすくしている。田中氏の呼び方が気になった。これはAタイプが好き。	感じた	Bは詳しく物事を伝えているがAは短くできるところは短い漢字言葉になおして伝えている。	A	NHKらしい。長々と説明されるよりは、端的に伝えられた方がさっぱりする。格式ばった言い方の方が雰囲気がありスタイリッシュ。
5	男	23	感じた	抑揚のつけ方が微妙に違う。Aの方が聞きやすい。Bの方が文章が短い。	感じた	Aはリラックスした状態で聞けた。理解度はどちらも同じ。	A	自然と耳に入ってくると感じた。
6	男	23	感じた	Bは文がブツブツ切れていて、文脈の順番が面白くない。	感じた	文脈、リズムが違う。	A	結果と順番がちゃんとされていてわかりやすい。Bは情報が羅列してあったように思う。

7	女	20	感じた	Aは「田中さんが当選した」という事実の焦点を当てているのが分かるが、Bは結局何が言いたいのかが明確でない。	感じた	Bはロジカルでなく、ニュースというよりもむしろドキュメンタリー番組やディスカバリーチャンネルを見ているような気がした。	A	Aの方が流れがスムーズかつロジカルで、頭に内容が入って来やすい。ニュースは事実のみを明確かつ迅速に知りたいので、Bはすこしうっとうしさを感じる。ただ、もしかすると、単に聞きなれているからそう感じるというのも少しはあるかも。
8	女	20	感じた	Aは長野県知事の紹介を長々としていたが、選挙においては重要。Bは長野県についての紹介が主にされていて、選挙についてあまり言及していない。	感じた	Bは場所の説明ばかりで、Aは協定を結ぶことについて、その目的や対象が明確で分かりやすい。	A	Aはある事柄についての論点をはっきりしていると感じたから。
9	女	20	感じた	イントネーションが違った。Aは文の前の方にアクセントがあり、Bは後ろの方で、Bの方が落ち着いていて標準語に近かった。	感じた	Aの方が説得力があった。	同じ	
10	女	20	感じた	Bの方が一文一文が短く、わかりやすい言葉や表現でニュースを伝えていた。Bの方が内容を理解しやすい。	感じた	Bの方が分かりやすく具体的。	B	分かりやすいから。Aは抽象的で難しい言葉を使っているので、ニュース内容がいまいちつかみにくい。Bはあまり難しい表現は使わずに、具体的にニュース内容を伝えているのでとても分かりやすかった。
11	女	20	感じた	Aは間が多く、ひとつひとつの話が短いため途中で集中力が切れてしまい内容が頭に入っていない。Bは聞きやすかった。	感じた	Aは助詞で文を切っていて、文が切れている感じ。Bはもっと大きな内容で区切っていて頭に入りやすい。	B	Aは理解するのに集中力を要するが、Bはすっと頭に入ってくる。Bの方がテンポがよい。
12	女	22	感じた	Bの方が分かりやすかった。最初に結論を述べているからかと思う。	感じた	Bの方が理解しやすい。Aは難しい言葉が比較的多く使われている。	B	理解しやすい。
13	女	23	感じた	言葉遣いや説明の仕方が、Bの方が易しく分かりやすい。（「田中さん」や、熟語を使わずに「勝ちました」など）	感じた	言葉の表現の難しさが違う。Bは冒頭に「村長」や「都知事」といった「人」が主語になっているため、主観が入れやすい。Aの方が無機質的。	A	NHKのような堅さが今は逆にレアで好きだから。

14	女	21	感じた	Aは選挙活動の中継。Bは田中氏の経歴に関わる内容のように感じた。	感じた	Aは石原知事のやりとりが行われるバックグラウンドに重点がおかれている。	A	事実を端的に伝えるだけでなく、至った経緯を筋道を立てて述べているように思う。考えさせられることが多いのはAだと感じる。
15	女	20	感じた	Bの方が柔らかい、優しい。Bは田中さんの側からしゃべっていると感じた。	感じた	AはBに比べて文章が長い。	A	Aの方が自然。耳に入ってきて意味も理解しやすい。
16	女	20	感じた	Bの方が田中氏や長野県の財政の背景が耳に入ってきたややすい印象を受けた。	感じた	Aは細かい情報をBよりも含めたニュース。しかし、その分、堅苦しいスタイル。	B	耳で聞いた言葉が頭に入ってくる感じを受けたからいつまでも聞いていられそう。必要最小限の情報を的確に伝えているところが良い。
17	女	20	感じた	Aは堅い文章。Bは柔らかい。Aの方が堅く難しく感じた。Bは内容が子供に話すような感じ。やさしくかみ砕かれていた。内容も一回で理解できる。	感じた	Aは言葉が難しい。しかし、Bから聞いたので、内容が先に分かっているため、Aの言葉のほうが簡潔でわかりやすく感じた。	B	Bの方が聞いてすぐ内容が理解できるので最後まで聞きやすい。
18	女	22	感じた	Bの方が親しみを感じる。Aはとても客観的で感情のないニュース、白黒のイメージ。Bは話題となっている人の動き、人の温かさが伝わってくる、カラーのイメージ。	感じた	A: 文語体のよう。一文が長く頭の中で整理しにくい。客観的。人の感情、意見、見解が入っていない。B: 文が短く、整理しやすい。人のアナウンスという気がする。	B	アカデミックにニュースを聞きたい時は(日本語の学習など)、Aタイプのほうが好きである。しかし、短時間で何が起こったかをざっと知りたい時はBの方が好き。
19	女	20	感じた	Bの方が聞きやすい。論理的だから。でも、Aよりくだけた印象も受けた。	感じた	Aの方が一文が長い。形容詞が前に来ているからだと思う。	B	聞いていて分かりやすい。Aは要点をつかみにくい。
20	女	20	感じた	Bの方が普段の話しことばに近いので分かりやすかったが、ニュースという観点から言えば間延びしている気がした。Bは接続詞が多く使われすぎと思う。	感じた	Aの方が聞きやすい。Bは一文一文が切れていて内容を把握しづらい。	A	聞きなれているから。内容を把握しやすいから。
21	女	20	感じた	Bは分かりやすく丁寧な感じ・印象「(田中さんは…されました)」という点から？」柔らかい雰囲気。Aは堅い雰囲気。文をつなげすぎていて聞き取りづらい。	感じた	Aの方が一文が長い。Bの方が短い文をたくさん話している感じ。	同じ	政治の話題の時はBの方が良いと思ったけれど、環境問題の方はAの方が好き。きっと内容で、すでに私の中で身構えてしまって、堅くて暗い印象があるAだと苦手意識があったのだと思う。

22	女	21	感じた	Bの方が分かりやすかった。最初に結論を述べているからかと思う。	感じた	Aは主文の前にある接文が長すぎて分かりにくい(特に第一文)。	B	Bの方が分かりやすい。Aの方は注意して聞いていないと要旨がつかみにくい。
23	女	21	感じた	Bの方がさっぱりと一文が短く感じた。その分、動詞の繰り返しが多いと思う。Aだと、ひとつの単語を修飾する言葉が多いように思う。	感じた	Bの方が一文が短い。Aの文は長く様々な情報を含んでいる。	B	何が言いたいのかがすぐに分かり、聞いていて頭の整理がしやすい。
24	女	22	感じた	Bの方が声が明るい。また、話の展開がひとつの流れを持っており、内容が記憶に残りやすいのがBだった。	感じた	Aは最初の一文でニュースの全体が要約されている。その後部分を説明していく感じ。	B	内容をつかみやすい。Aは箇条書きのように感じるが、Bにはストーリー性を感じる。
25	女	20	感じた	Bの方が聞きやすかった。先に結論を述べているように伝えられ、口調も聞きやすかった。発声もはっきりしていた。	感じた	Aは一文が長い。	B	Aは一文が長く、長すぎると主語を忘れてしまったり、つながりが分からなくなってしまうから。Bの方が明確で聞きやすい。Bは結論、言いたいことが分かりやすいから。
26	女	21	感じた	Bの方が文末が聞き取りづらいような気がした。たまに、声が小さいような...Bの方が抑揚がある。	感じた	さっきと同じ。	A	文頭から文末まで全部聞き取りやすいから。
27	女	21	感じた	Bは言葉がかみくだかれていた。内容も易しくまとめられていた。そのため、Aよりも子供向けに感じた。	感じた	Bは言葉がかみ砕かれていた。Aには熟語が多かった。Bの方が情報量が多かった(?)。	A	ニュースらしい、詳しく述べられている気がした。慣れているからかもしれないが聞きやすい。
28	女	21	感じた	Bの方が文章がやさしく感じた。一文が短い気がした。	感じた	Bの方が誰にでも分かりやすいような言葉使い。	同じ	
29	女	20	感じた	Aは分節で細かく区切った読み方。文節ごとでかなりイントネーションが下がっていた。ラジオのような感じ。BはAより抑揚がついていて一文が短い。説明が後ろの文になっていた。Aは形容詞節で説明。	感じた	Aの方がスピードが速いが文と文の間の間が長い。Bはゆっくりだが、それほど間がない。他はPartIと同じ。	B	聞いていて情報を整理しやすいから。Aは耳に入ってからそのまま通り抜けてしまう感じがする。
30	女	21	感じた	Bの方が分かりやすい。	感じた	Aの方が大人に対して、Bの方が子供に対して話しているように感じた。	B	細かく話をきりながら話していたから。
31	女	20	感じた	Bの方が一文が短いので分かりやすかった。Aは英文を関係代名詞で長くしたような日本語だった。	感じた	Aの一文が長すぎて前半の内容すら忘れてしまう。	B	分かりやすいから。スラスラ頭に入れることができる。Aは集中していないと内容を理解できない。
32	女	20	感じた	Aは先に誰がどういう人かということを説明していたので、Bの誰が当選したか知らせてからどんな人か知らせていたのに比べて、話題性に重点を置いているように感じた。	感じた		A	ひとつの文から次の文へ論理だつて組み立てられているように感じるから。

33	女	20	感じた	AはいつもTVやラジオで聞くものと変わらない。Bは英文を直訳した感じ(日本語らしく変える前)。一文が短い。(田中さんの「さん」)	感じた	Bの方がすこし幼稚だと思った。	B	興味の湧く情報を付け加えているから。Personalな話など。簡潔でよい。
34	女	20	感じた	Bの方が分かりやすかった。最初に結論を述べているからかと思う。	感じた	Bの方が簡潔に聞こえた。	B	何のニュースだか、最初の二、三言で分かったから。
35	女	20	感じた	Bの方が簡潔で、言葉もAより分かりやすく感じた。Bは始めに事実(田中氏が当選したこと)をはっきり述べ、その後で経過について話していたが、Aは初めから経過について話し出し、最初は何がトピックなのか分かりにくかった。全体的に見て、Bの方が分かりやすかった。	感じた	PartIと同じで、Bは最初に事実、トピックをはっきり述べているのに対し、Aは全体的に文章も長いし、トピックを述べるまでの時間が長く、理解しづらい。	B	簡潔ではじめにトピックがはっきり述べられていて、その後の理解がしやすい。
36	女	20	感じた	Aは堅い感じがしてBは分かりやすい、親しみやすかった。AはNHKとかでBはお昼のワイドショーの中でのニュースのコーナーという感じ。	あまり感じない		同じ	それぞれのタイプにあった話題があると思う。ニュース番組でも政治や社会の話題はAのような堅い感じだが、スポーツや娯楽になると音楽もセットも変わり分かりやすさを重視する気がする。
37	女	20	感じた	Bの方が一文が短くて分かりやすい。Aは名詞にかかる言葉が長すぎる。	PartIよりは感じない		B	文章はAの方がきれいだけど、分かりやすさ、聞きやすさで見るとBの方が好き。Aは文の構成を頭の中で組み立てていると、聞いているだけで疲れてしまう。
38	女	20	感じた	Bの方がニュースというよりは丁寧な会話のように聞こえた。	感じない		同じ	
39	男	21	感じた	Bの方が分かりやすかった。Aは堅い？というか。Bは簡単な言葉で話している気がした。	感じない		B	Bの方が聞き取りやすい。PartIではAを先に聞いたのでAとBの内容の理解度が明らかに違いました。PartIIでは先にBを聞いたため、内容を把握している部分が大きいせい、Aを聞いても特に違和感(内容を理解する意味)はなかった。
40	男	21	感じた	A:選挙重視。Aはニュースの中で主に対立候補田中氏と長谷川氏を取上げているように思った。B:現状重視。長野県の政治、経済の現状報告。	感じない		B	現状認識が正確。退屈しない。どちらかというと市民より。
41	女	20	感じない		感じた	Bの方がトーンが高く感じ、逆にAは低く感じられた。	A	落ち着いている感じがして聞きやすかった。自然だった。
42	女	20	感じない	Aは無機質に感じた。Bは分かりやすく述べられていて心遣いが感じられる。	感じた	Bの方が子供っぽく感じられた。Aはテンポがいい。	A	Aの方がテンポがよく、聞きやすかった。Bは主旨がずばっと述べられてないのでイライラした。
43	女	20	感じない		感じない		同じ	

ニュース聞き取り調査詳細インタビュー

実施日：2004年6月16日

実施場所：レストラン・ランチャン

参加者：7番、10番、25番、33番、40番、42番

43名の学生に対するニューススタイルの比較調査を行った後、6名に集まってもらい、グループインタビューの後、ニュースの原稿を渡して改めてAタイプとBタイプの比較をしてもらった。

I. グループインタビュー

AタイプとBタイプに関する印象を聞いたところ、2名が強くBタイプを支持した。

33番：Bの方が好きである。何の情報かよく分かる。田中知事の個人情報が入っているのでよく理解できた。

25番：Bが好きである。Aは結論が見えてこない。

2名はBタイプに批判的であった。

42番：文法が気になった。

10番：文法的に変である。

残り2名はそれぞれのタイプの長所と短所を述べていたが、全体としてはややBタイプに批判的だった。

40番：Bは結論を最初に述べているのは良いが、日本語らしくない。長野県知事選挙のニュースでは、Aの方が選挙に直結した情報を伝えている。

7番：Aタイプは主語の部分が長いBはそれぞれの文章の意味に強弱がなく、どれも対等の重さの文章という感じで、論理的ではない。

次に、国際会議など、日本語以外の言語を話す人たちが同席する場所での発言という視点から考えた場合にAとBのどちらの構成が望ましいかをたずねたところ、Bに批判的な4人からは「日本人なのだからきちんとした日本語を話すべきだ」（40番）という意見が多かったが、Bを支持した2人は「国際的な場面では、分かりやすさを最優先すべきである」という強い意見を述べた。（33番、25番）。

II. ニュース原稿を読んだ上での意見

グループメンバー間の意見交換を踏まえ、ニュース原稿を読んだ上で、参加者に詳細な感想を書いてもらった。

1. 33 番

国際会議などの場で、B のような日本語で話すべきであるという考えに賛成です。なぜなら、逆を考えた時（つまり A の直訳の英語）は理解することが不可能だと思うからです。

それは「英語に合わせている」という日本側の弱い態度を示すものでなく、もともと全く種類の違う日本語（ぼかしたり、あやふやであっても OK、結論は最後）と英語（簡潔に一つ一つに意味を持たせる）の特徴を考慮してのものである。

日本人なら B の日本語でも（多少違和感はあるが）理解できる。しかし、A の英語を果たして **English Speaker** が理解するだろうか。

確かに聞いていて B の日本語が幼稚に聞こえる部分もあるし、本来ニュースで聞くものとは違っているが、これはある程度の訓練または心がけで B の日本語で話すことは可能になると思うので、国際会議のような“国際的な場”であれば、日本語 B で話しても全く問題はないと思う。それに文句をつけるような人は日本語しか知らない人なのではないでしょうか。

でも、私自身、今日の新崎さんの話を聞くまでは、通訳は「日本語 A→日本語 B→英語」をやるのが仕事だと思っていたので「なんで日本人の私が変な日本語 B を話さないといけないんだ！それは通訳の仕事だ！」という人がいてもおかしくないなあとも思う。でも、現実問題、同時通訳ですべてのプロセスをこなすことは無理なので、**speaker** の配慮が欲しいですね。私が通訳ならそう思います。

ニュース原稿へのコメントの書き込み

Bの方が漢字の割合が少ない。

長野 B タイプ

小説家から政治家に転向した人ですが・・・（興味を引くことに成功）

5人の候補に勝ちました・・・大差をつけて勝ちました（繰り返し）

投票率は73.78パーセント、（いかにも英語風。日本語 A なら「で」と言うと思う）

まとめ

33 番は前段の聞き取り調査で「Bの方がすこし幼稚に聞こえる」とコメントをしており、B タイプが日本語として不自然であると認めている。しかし、異文化間コミュニケーションの場面では、何よりも発言が理解されることが重要であるとして、そのために相手の理解しやすい話し方を心がけるべきだという強い意見を持っている。

2. 25 番

A と B を比べると、一文の長さ、ニュース伝達の構造に加え、内容も異なっている。英語と日本語という文化背景が違う以上、何に重点を置いて伝えるかということが異なってくるんだと感じる。A を直訳して英語で伝えようとする、もしかしたら **native speaker** の人々はその情報に重要性を感じなかったり、他の情報を欲しがるかもしれない。それは長年、自分の母国語のニュース形式に慣れてきたからというものもあると思うが。

例えば、長野の記事のほうで、B タイプでは最後の2パラグラフでオリンピックのことを付け加えているが、A にはその記述がない。外国人の理解を助けるために補足したということだが、こういったように外国人に必要とされる知識もあるんだと思う。また、B の2パラグラフ目にある田中さんのエピソードなどは A には見られない。

小笠原の方で伝えられる情報に段落ごとに番号をふってみて、それと同じ内容を示す B の段落に番号をふってみたが、伝える情報の順序も全く違う。

また、A では接続詞が使われているのが目につく（ところが、一方で）。しかし B ではパラグラフの初めにそういった接続詞は使われていない。

どちらの形式をとってニュースを伝えるべきかという点では、**native speaker** にはその母国語の形式をとって伝えるべきだと思う（さっき話し合った国際会議などを除いて）。また、ある程度外国語を勉強した人には、母国語ではなく、その外国語の形式にのっとって伝えるべきだと思う。その理由は、外国語を学ぶ時はその形式で学んでいるはずだから。母国語を訳して外国語を覚えるのではなく、外国語そのものとして学ぶはずだから。

ニュース原稿への書き込みコメントは特になし

まとめ

25 番は前段の調査で「A は一文が長く、そのために主語を忘れてしまったり、つながりが分からなくなってしまう。B の方が明確で聞きやすい。B は結論、言いたいこ

とが分かりやすい」とBを強く支持している。

ニュース原稿を読んだ後では、ふたつの形式の違いをより深く理解し、「文化的背景が異なれば求める情報も異なるため、伝える形式は聞き手の文化や言語にもっともふさわしいものを選ぶべきである」と述べている。また、異文化間コミュニケーションの場面で、外国語で発言する時は、「その言語の形式にのっとった伝え方をすべきである」としている。

個人的には「Bの方が分かりやすく好きである」と言っているが、日本人同士のIntra-cultural なコミュニケーションとしてもBを支持しているかどうかは、ややあいまいである。

3. 42 番

日本語から英語に通訳するときは確かにBタイプの方が分かりやすい。でも、英語をしっかりと話せない日本人がBタイプのような原稿を書けるかどうかは疑問。どのようなコツがあるかなどを明示すればできるのでしょうか。

長野県知事のニュースで、Bが子供向けっぽいと感じたのは「田中氏」ではなく「田中さん」と呼んでいるからかもしれない。(細かいところですね)

Bの方が文全体が丁寧。

聞いている時の印象と違い、文章を読むとBの方が好印象。

ニュース原稿への書き込みコメント

長野 B タイプ

小説家から政治家に転向した人ですが (この説明が好印象)

田中さんに投票しませんでした (“知事”ではなく“さん”なので親しみやすい)

小笠原 A タイプ

最後から二番目のパラグラフ (長すぎる感じがする)

小笠原 B タイプ

エコ・ツーリズム協定 (これだけではイメージがわからない人もいるのでは・・・)

まとめ

42 番は前段の聞き取り調査で、A、B の順番で聞いた長野県知事選挙のニュースは

「Aは無機質、Bは分かりやすく述べられていて心遣いが感じられる」とBを評価しているが、次にB、Aの順番で聞いた小笠原のニュースでは「Bの方が子どもっぽく感じられた。Aはテンポがいい」としてAを支持。最後も「Aの方がテンポがよく聞きやすかった。Bは主旨がずばっと述べられていないのでイライラした」と「Aの方が好きである」と述べている。

しかし、原稿を読んだ後で「聞いている時の印象と違い、文章を読むとBの方が好印象。Bの方が文全体が丁寧」とコメントしている。

おそらく、長野県知事選挙のニュースは情報が込み合っているため、Bの方が分かりやすく感じたが、小笠原はニュースが単純でありかつ、Bを先に聞いて内容が把握できていたため、普段聞きなれたAタイプを支持したと思われる。つまり、情報の理解に問題がなければAの方が自然に感じられるということではないだろうか。

また、異文化間コミュニケーションのスタイルとしてのBタイプの可能性については「英語を話せない日本人にどのように訓練するのか」と戸惑いを見せている。

4. 10 番

種明かしをされた後に本文を読むと、確かに「英語を翻訳した日本語」という感じがし、日本語らしい文章ではない。

小笠原の記事に関して、AとBの記事の分量が違いすぎる。Bは省略が多い。

Aの原稿を初めて聞いた時、すぐにNHKのニュースだと分かった（言い回し、口調などで）。

Bの方が原因と結果の関係が分かりやすい。

Aの文章に慣れている日本人が、もし会議などの公の場で、何の説明もなしにBの文章を聞いたら、あまり良い印象を持たないだろう。Bの文章は稚拙で教養のある人が話している感じがしない。バカにされている気がする。もし、会議で外国人通訳のためにBの文章を用いるのであれば、あらかじめ何らかの説明をする方が違和感を与えずにすむかもしれない。

会議でBの文章を話すかは、会議の目的(goal)によると思う。テーマに対する知識や理解が乏しい時に理解を助けるためのtoolとしてAを用いるのは不親切だろう。逆に、お互いある程度の内容の理解（通訳者も含めて）があれば、Aの文章でも問題ないかもしれない。臨機応変に対応できるに越したことはないだろう。

ニュース原稿への書き込みコメント

長野Bタイプ

勝ちました・・・勝ちました （二回重なるのは変だ）

小笠原 A タイプ

島の基幹産業にもなっている（「基幹産業」は初めて聞いて通訳するには難しい気がする）

小笠原 B タイプ（島に関する情報が大幅に削られている）

まとめ

10 番は前段の聞き取り調査では、長野のニュースで「Bの方が一文一文が短く、分かりやすい言葉や表現でニュースを伝えていた。Bの方が内容を理解しやすい」、小笠原のニュースでも「Bの方が分かりやすく具体的」とBを支持し、「分かりやすいからBの方が好きである。Aは抽象的で難しい言葉を使っているので、ニュース内容がいまいちつかみにくい。Bはあまりあまり難しい表現は使わずに、具体的にニュース内容を伝えているのでとても分かりやすかった」と圧倒的にBを評価している。

しかし、グループインタビューの際は「Bは文法が変だ」とコメントしており、感想文からも「Bタイプが英語を翻訳したもの」と知らされて文章を読んでみて「日本語らしくない」ことに気づいたことが分かる。

10 番の反応からは、「正当ではない日本語」に対する強い抵抗感が読み取れる。全く予備知識がない状態で聞いた時は、Bタイプに「稚拙で教養が感じられない」という否定的な感想を抱いていない。「バカにされている気がする」というコメントには、「然るべきレベルの話し方」に対する期待感が表れている。

5. 40 番

小笠原のニュースについて補足。

Aはその周囲の説明から入って、なかなか本題に入らない。もちろん、ニュースだから結論を先に述べているが、内容が後回しである。

Aはとにかく長い。Bは簡潔で分かりやすく、日本人にとっても分かりやすいと思う。

全体を通して

Aタイプはいわば日本語上級コース向けの日本語であり、あえて国際会議などの場面で使うべきではない。日本人にとっては簡潔すぎると感じやすいかもしれないが、Bタイプを使うべきだ。

日本人にとっても、Aは修飾語をダラダラとつける日本語の悪癖に悩ませるものになるかもしれない。

日本人が持っている問題意識と、外国人のものは違うのではないか。よって、内容が異なっても仕方ないかもしれない。

ニュース原稿への書き込みコメント

長野 A タイプ

第 4 パラグラフ (B では削除)

田中氏は「改革を後戻りさせるわけにはいかない」として

(日本語的表現。英語なら発言よりも願望や意思、または方針を書く)

長野 B タイプ 最後の 2 パラグラフ (A で削除)

小笠原 A タイプ

設けることにしたものです。(日本語独自の表現)

最後のパラグラフ (B タイプでもこれぐらいは伝えるべきではないか)

まとめ

40 番は前段の聞き取り調査では、長野のニュースでは「A は選挙重視、B は現状重視で長野県の政治、経済の現状報告」とふたつのタイプの違いを感じたとしているが、次の小笠原のニュースでは「違いは感じない」と述べている。「Bの方が好き」としているが、その理由は「現状認識が正確。退屈しない。どちらかというと市民より」となっており、ニュースの表現スタイルよりもどのような情報が選択されているかで好き嫌いを決めたように思われる。

40 番はグループインタビューで「国際会議だからといって何故話し方を変えなければいけないのか」と強く主張し、B タイプ支持派から「自分の言いたいことが伝わらなければ何にもならないではないか」と反論を浴びた。そのためか、感想文では「A タイプを国際会議で使うべきではない」という結論を出している。修飾語をダラダラとつける日本語の特徴に対しては批判的だが、「日本人と外国人の問題意識の違いがあるので内容が異なるのも仕方がない」とした最後のコメントに、40 番が表現のスタイルよりも情報の選択を重視していることが伺える。

6. 7 番

国際会議で B タイプのような日本語を使用すべきであるという意見は理にかなったものだと思います。しかし、その際“B”はもう少し注意を払うべきだと思います。現

段階の B の最大の欠点は「論点がずれる」ということです。

長野県知事選の記事は、この論点のずれが顕著に表れています。A で最も言いたいのは M/C「長野県知事選に田中氏が当選した」という事実であり、あくまで田中さんが話題の中心だと分かります。B では、何だか、長野県を紹介している中のひとつの出来事に、選挙で田中さんが勝ったように聞こえます。そうすると、内容が全く違うものになります。英語は M/C が明確であることが特徴であるのに、B では生かされていないように思います。

もうひとつ気になったのですが、B が外国人向けと知らずにテープを聴いたとき、何だか私は侮辱されたような気分がしました。妙に短く、やさしい日本語で、分かりきったことまで説明して……。国際会議に出席する半分以上が日本人であるなら、そう感じてしまう人が少なからずいるかもしれませんね。学会などは知的なイメージを大切にしていって、表現が稚拙では……。？と少し疑問に感じることもありますが、国際化しつつある現在では、日本人のそういうプライドを変えるほうが正解かもしれないなと思いました。

ニュース原稿への書き込みコメント

長野 B タイプ

県議会が田中さんに対して不信任決議をしたために行われたものです。

(そんなことは日本語 A では書いてなかった)

長谷川恵子さんという……に大差をつけて勝ちました。長谷川さんは……

(メインは田中？長谷川？)

第4パラグラフ

(圧倒的に勝ったってことを言いたかったのでは？外国人なら余計困惑する)

最後の2パラグラフ

(結論なし。だから何なのか？)

ニュースは簡潔に分かりやすくが一番。

A は主語が一貫して「田中さん」だが、B は「選挙は」「田中さんは」「長谷川さんは」などたくさんありすぎる。

小笠原 B タイプ

2行目のエコ・ツーリズム協定と8行目の「この協定」は間がとびすぎる。「この協定」というがどこにも「協定」の説明がない。

A は積極的に観光客も呼び続けようという姿勢が見て取れる。B は観光客を遠ざけようとしているように聞こえる。

まとめ

7番は前段の聞き取り調査で、長野のニュースでは「Aは田中さんが当選したという事実」に焦点を当てているのが分かるが、Bは結局何が言いたいのかが明確でない」とし、小笠原のニュースでも「Bはロジカルでなく、ニュースというよりもむしろドキュメンタリー番組やディスカバリーチャンネルを見ているような気がした」と一貫してBに批判的で、「Aの方が流れがスムーズかつロジカルで、頭に内容が入ってきやすい。ニュースは事実のみを明確かつ迅速に知りたいので、Bはすこしうっとうしさを感じる」として明確に「Aの方が好きだ」と述べている。最後に「ただ、もしかすると、単に聞きなれているからそう感じるというのもすこしはあるかも」という柔軟な姿勢を示していたが、文章を読んだ後のコメントでは、Bに対する批判がさらに強まっている。

グループインタビューでは、「日本語は文章が長い」というコメントをしていたが、これは「国際会議などの異文化間コミュニケーションの場面におけるBタイプの可能性をどう思うか」というこちらの働きかけに、気を遣ったためと思われる。7番はNHKのニューススタイルを強く支持しており、異文化間コミュニケーションにおける配慮は必要としながらも、Bタイプについては「侮辱されたような気がした」と強い表現で否定的な気持ちを示している。

Comparative Survey of Broadcasting News Styles

Ryuko Shinzaki
Graduate Course in International Communication
Aoyama Gakuin University

Date: Month: Day: Year:

Place:

Participant: Name: Age: Sex: Mother tongue:

1. Purpose of the Survey

Thank you very much for participating in this comparative survey of broadcasting news styles. This survey is carried out as a part of research into intercultural communication styles. You are asked some questions. There are no right or wrong answers, so please feel free to give us your frank opinion. The survey results will never be used for any other purpose. You are asked to write your name in case we need to clarify some points later; however, if you do not want to give us your name, you may leave it blank.

2. Procedure

You will listen to broadcasting news on two different topics. Each topic will be presented in two different styles: Type A and Type B.

Part I

Please listen to two versions of Topic No.1

Type A

Type B

1. Did you notice a difference? Yes No
2. If you noticed a difference, please describe the difference briefly.

Part II.

Please listen to two versions of Topic No. 2. This time, you will listen to Type B first.

Type B

Type A

1. Did you notice a difference? Yes No
2. If you noticed a difference, please describe the difference briefly.

3. Which did you like better, Type B or Type A?

Type B Type A No preference

If you liked one better than the other, please tell us your reasons.

Thank you very much.

Part I. A タイプ

In a gubernatorial election held in Nagano yesterday, former governor Yasuo Tanaka, who had been ousted because of a no-confidence motion in the prefectural assembly, was re-elected with a wide margin.

Ballot counting has been completed in all places.

Former governor Tanaka, in populous cities such as Matsumoto and Ueda, won three times more votes than for his opponent Hasegawa. In addition, in the previous election in the year before last, his power base did not extend to the rural areas, but this time, he gained over 60 percent support in the rural areas, too, and he won the election.

Mr. Tanaka is 46 years old. In July this year, in opposition to his cancellation of dam construction projects and the way he was running the prefectural government, the prefectural assembly adopted a no-confidence motion against him, and he lost his job as governor.

In the election campaign, Mr. Tanaka said that he would not allow the reform to go backward. He visited every corner of the prefecture, appealed directly to voters and gained wide support all over the prefecture.

Many assembly members who supported the motion, mayors of towns and villages, and labor organizations supported Ms. Keiko Hasegawa, a lawyer. However, Mr. Tanaka overwhelmed her and other candidates. The voter turnout was 73.78 percent, 4.21 percentage points higher than in the previous gubernatorial election in the year before last.

Part I. B タイプ

In a gubernatorial election in Nagano on Sunday, former Governor Yasuo Tanaka has been re-elected after the prefectural assembly's adoption of a no-confidence motion against him.

Mr. Tanaka—a 46-year-old novelist-turned-politician—beat five other independent candidates. He overwhelmed Ms. Keiko Hasegawa—the prefecture’s first woman lawyer—who was supported by most prefectural assembly members, many mayors and the main labor organization.

The voter turnout was 73-point-seven-eight percent—over four percentage points more than the previous election.

Most assembly members voted against Mr. Tanaka for his “No Dam Proclamation”—a manifesto to scrap several dam projects to rein in growing local debt.

During the election campaign, Mr. Tanaka visited all 120 municipalities to drum up further popular support for his 20-month-old administration, which included a pledge to cut back on large-scale public works.

Nagano Prefecture—the site for the 1998 Winter Olympics—is now suffering from mountains of debt.

It owes one trillion 600 billion yen, or 13 billion U.S. dollars, and many of the Olympic facilities lie unused.

Part II.B タイプ

The Pacific island group of Ogasawara, or Bonin, has taken steps to protect its natural environment from tourism. The head of Ogasawara Village, Shoichi Miyazawa, signed on Tuesday an eco-tourism agreement for the island group with Governor Shintaro Ishihara of Tokyo.

The group of more than 30 islands is one-thousand kilometers south of the main part of Tokyo and falls under the governor’s jurisdiction.

Tourism is an important source of revenue for Ogasawara Village, but tourists have recently brought new species of plants and animals there, causing changes to the

landscape.

The agreement requires tourists to be accompanied by guides when entering two designated districts. The number of tourists and their visiting periods will also be restricted there.

One of the districts is the uninhabited island of Minamijima, which is made of karst created through limestone erosion. The other is the Sekimon district of Hahajima Island, which has some unique species of plants.

Ogasawara Village is Japan's first local authority to introduce an eco-tourism arrangement.

Part II.A タイプ

To protect the precious nature of the Ogasawara Islands and to promote tourism, the Tokyo Metropolitan government and Ogasawara Village will restrict the number of visitors and visiting periods, but will allow tourists to enter designated areas. This is the first system of its kind in Japan. They signed an agreement to this effect today.

The Ogasawara Islands are about one thousand meters to the south of Tokyo. With Chichijima Island in the center, they consist of more than 30 islands, which are home to many precious plants and animals. Some are rare in the world.

However, recently, the number of visitors has increased. They have brought plants and animals from the outside, or changed the unique terrain.

At the same time, tourism is a key industry for the island. So the Tokyo government and Ogasawara Village will try to promote both environmental protection and tourism at the same time, starting next April.

Today, in Ogasawara Village, Governor Ishihara of Tokyo and the village mayor Miyazawa signed the agreement.

According to the new system, limestone erosion created karst on uninhabited Minamijima Island, and plants only seen in Sekimon District on Hahajima

Island—these two districts were designated. Guides certified by the Tokyo government will accompany visitors, and the areas, the number of visitors, and visiting periods will be restricted, but tourists will be allowed to enter the areas.

In Hokkaido, on Shiretoko Peninsula, local people have made voluntary rules to restrict entry by tourists. But now, a local government has set up such a system for the first time in Japan.

添付資料 (10) 英語ニュース聞き取り・テスト調査データ

実施日：2004年7月27日

実施場所：青山学院大学青山キャンパス11号館

参加者：アメリカ人留学生4人（男性2人、女性2人）

異なるスタイルの音声英語ニュースを聞き取り、その差異について感想をのべてもらった。使用したテープは以下の通りである。

Part I：長野県知事選挙のニュース

A タイプ：NHK のニュース原稿を英語に同時通訳したスタイル。実際の同時通訳ではなく、言葉の流れにそって忠実に英語に翻訳し、プロ英語ニュースナレーターの経験豊富なバイリンガルの日本人が吹き込んだもの。

B タイプ：NHK の音声多重室で製作し、実際に放送で使用された英文原稿を同じナレーターが吹き込んだもの。

Part II：小笠原のエコツーリズムに関するニュース

Part I と同じように A タイプと B タイプを用意した。

両タイプとも英語のニュースであるが、A タイプは日本語の語順を維持したもの、B タイプは英語のニュースの構成になっているものと位置づけた。調査のやり方は日本語ニュースの聞き取り調査と同様、Part I は A タイプ、B タイプの順番、Part II は順序を入れ替えて B タイプ、A タイプの順に聞かせた。ニュースのタイプについては事前に一切予備知識を与えていない。

以下に参加者の感想を示す。日本語訳は筆者がつけたものである。

1. C. O. 21歳、男性、母語：英語

Part I: A と B の違いを感じたか：Yes.

その違いはどのようなものか：

There seemed to be a small difference between the two types. Type A was much more dry and factual stating only the news, while type B was more descriptive with statements such as “suffering from mountains of debt.”

「二つのタイプにはわずかな違いがあるように思った。A タイプはニュースだけを伝えており、無味乾燥で事実のみを述べているのに対し、B タイプは「巨額の負債に苦

しんでいる」などより描写的であった。」

Part II: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

This time, the difference I have noticed between the two types was the length and the amount of news being covered. Type B was more to the point, stating only the most important news relative points. However, type A described for more than type B with information such as the types of flowers that are rare to area and so forth.

「今度はニュースの長さや量について違いに気づいた。B タイプの方がニュースの中でもっとも重要なポイントをついていた。しかし、A タイプは B タイプよりも珍しい種類の花があるなどの情報を多く含んでいた。」

B タイプと A タイプのどちらが好きか : B タイプ

好きだと思う理由 :

The reason why I prefer type B is because it is more to the point and expresses the news more quickly with only the necessary points. Type A had too much unnecessary information and I found myself trying harder to keep my attention on the news.

「B のほうが好きだと思う理由は、ポイントをついており、必要なポイントだけを述べることでニュースを早く伝えるからだ。A タイプはあまりにも不必要な情報が多く、ニュースに集中するのに努力が必要だった。」

2. C. H. 23 歳、男性、母語 : 英語

Part I: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

The information in A seemed scattered about, and was unconnected...but very straightforward without giving much in the realm of “how” and “why”. B was more honest and even seemed vindictive in its reporting style, creating an image for the listeners and striving to create understanding why was he reelected, why he received vote of no confidence, problems in Nagano, etc.

「A の情報はばら撒かれているようで、つながっていない。しかし、「どのように」や「何故」にあまり立ち入らずにとっても率直だった。B の方が、レポートのスタイルがより誠実で主張を持っているとさえ思えるぐらい、リスナーにひとつのイメージを作り、何故彼が再選されたのか、何故不信任決議されたのかなどや、長野の問題について理解させようと努力していた。」

Part II: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

The two weren't quite as dissimilar this time, but I still felt a disconnectedness about the information the type A version. The way the broadcast switched from a story about enforcing regulations in the Pacific islands, then to Hokkaido, and back to the Tokyo regulation seemed misplaced and out of order, making broadcast confusing and hard to follow.

「今回はそれほど大きな差はなかったが、それでも A タイプの情報の不連続性を感じた。太平洋の島々に規制を実施するという話から北海道の話になり、また東京の規制に戻るのは場違いでふさわしくなく、放送を混乱させ理解を難しくする。」

B タイプと A タイプのどちらが好きか : B タイプ

好きだと思う理由 :

Type B felt more honest to me and even made me develop an opinion on the issues being reported. I found type A often hard to follow, as if there was not center to the report.

「B タイプの方が誠実に感じられ、報道されている問題について考えさせられるようなところがあった。A タイプはレポートの中心がないみたいで、しばしばついていくのが大変だった。」

3. J. W. 23 歳、女性、母語 : 英語

Part I: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

Orders were reversed in Type A and B. The debt of Nagano was emphasized in Type B, while the vote percentage was more prominent in Type A. The structure of type A seems more fragment than B, going from rural vote to the governor's age. Type B seems more connected as a whole, leaving out the unnecessary details of voting percentage.

「A タイプと B タイプでは語順が逆だった。B タイプでは長野の負債が強調されていたが、A タイプでは得票数の比率が目立っていた。A タイプは農村の得票数を述べたかと思うと知事の年齢を述べるなど、B に比べて構造にまとまりがなかった。B タイプは詳細な得票率に触れず、全体としてまとまりが良いように思えた。」

Part II: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

Type A sounded more casual than more news broadcast. It might be easier to comprehend by non-native speakers. I like how type A mentioned ecotourism rule was enforced by the government for the first time. I don't think type B even mentioned that. Type B seems more together as a whole, more like news broadcast, more articulate and less wordy. Both pieces are about the same topic, but framed differently. Type A focuses on ecological concerns and type B is more like an overview of the situation.

「A タイプはニュース放送よりもくだけた感じがした。英語を母語としない聞き手にはこちらの方が理解しやすいかもしれない。初めて政府によってエコツーリズムのルールが制定された点については A の伝え方が好きだ。B は触れもしなかったと思う。B タイプは全体としてはよりまとまっていて、明瞭で言葉数も少ない。同じトピックを遣っているが、捉え方が異なっている。A タイプは環境保護に関する懸念に焦点を当てているが、B タイプは全体の状況を伝えているようだ。」

B タイプと A タイプのどちらが好きか : B タイプ

好きだと思う理由 :

Type B is more interesting, it's direct, and to the point. Type A sounded like it was beating around the bush, not really structured well.

「B タイプの方が面白い。直接的でポイントをついている。A タイプは回りくどく、きちんとした構造になっていない」

4. H. M. 22 歳、女性、母語 : 英語

Part I: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

The second version, type B was clearer. It seemed like it was summarized well. Type A seemed like it directly translated the Japanese news into English without condensing and presenting it in the same style as native English speakers. For example, in type A, you didn't find out the personal information of the subjects till late in the story whereas in the second version, the moment the subject is introduced his or her personal information follows, ie: background and age.

「2 番目の B タイプの方がはっきりしていた。よく要約されているようだった。A タイプはまるで日本語のニュースを直接翻訳し、情報を煮詰めたり英語の母語話者のスタイルに整えたりせずに読んでいるという感じがした。たとえば、A タイプでは、登

場人物の個人的な情報が後の方になるまで出てこないが、2 番目のニュースでは人物が紹介されるとその後すぐに経歴や年齢が説明されていた。」

Part II: A と B の違いを感じたか : Yes.

その違いはどのようなものか :

It seemed that type A added more adjectives in its report. Also the commentator's tone was different. It was more relaxed, like she was telling a story. The first sentence or few lines of type A didn't make much sense if you were listening to the report for the first time but both articles/reports seemed very clear to me. I felt like I got more information from type A but don't know if it's because I was listening to the same information for the second time.

「A タイプの方がたくさん形容詞を使っているように思えた。また、読み手の声の調子も違っていた。まるで、物語を聞かせるようにリラックスしているようだった。A タイプの最初のいくつかの文章は初めてこの話を聞く者にはほとんど意味がなかったが、両方のタイプとも私にはとてもはっきりしていると思えた。タイプ A からの方がたくさんの情報を得たような気がするが、同じ情報を聞くのが二回目だったせいかどうかは分からない。」

B タイプと A タイプのどちらが好きか : 同じ (no preference)

好きだと思う理由 :

In Part I, type B was much clearer: The information was summarized well. In type A Part I, the information seemed scattered and was hard to follow. In Part 2, I thought both type A and B were clear and understood both easily so I had no preference as to which one I liked better.

「Part I では B タイプのほうがずっとはっきりしていた。情報がよくまとまっていた。A タイプは情報が散らばっていて、ついていくのが大変だった。Part II ではタイプ A、B ともにはっきりしていて、いずれも容易に理解されたので、どちらの方が好きということはなかった。」

添付資料 (11) 本調査：英語ニュース聞き取り生データ²

	性別	年齢	Part I	理由	Part II	理由	好み	理由
1	M	18	Yes	Type A used a lot more technical words and was very hard to follow. Type B described things a lot better and was easier to follow.	Yes	Once again Type A is telling you nothing but the facts and is hard to follow. Type B describes things better and is a lot easier to follow.	B	Type B described things better and was easier to follow.
2	M	20	Yes	First women lawyer 73.8% Type B. Type A – 4% more from the preview election. Tanaka visit 108 place. *Tourist/accompany by guide *Nokato Local Peninsula in Japan tourist were restricted to go to see the places.	Yes	They talk about tourist and natural minerals. They were saying they have a agreement that tourist are allowed to a designated area.	A	
3	M	22	Yes	The second part got straight to the point, easier to understand.	Yes	It seems that both present the same information, but Type A seems to focus on government activity rather than the area itself, not so in Type B.	A	The way they present the information.
4	M	21	Yes	Type A was more information in #Awaw. But the topic was quickly lost with the length. Type B was to the point.	Yes	Type B was Informative and to the point. The information seemed to be factual and quoted from papers. Type A repetitive saying different things many ways.	None	News/Story preference
5	M	42	Yes	Type B is more to the point and shorter. Type A is way to long, boring.	Yes	Type A tells me I can visit, but please be careful and don't destroy the land.	B	Type B is more friendly and easier to listen to.

² 原文は手書き。判読不能箇所はそのままを記述。スペルミスも訂正していない。

6	M	22	Yes	Mentioned Novelist carries. Described #Mannpalities rather than undescribed prefects. Also Type Broadcast two seems to hold more detail while being shorter. Type One Broadcast seems to be deceptive on smaller issues around the election.	Yes	Type A is more educational, while Type B is more based around facts delivered cut and short.	None	
7	M	18	Yes	The second version was more clear to me, and explained much more simply.	Yes	The second one was more understandable.	B	more understandable
8	M	18	Yes	Type B was easier to understand.	Yes	Type B had to much information, it was not organized well.	A	Type A was better because it gave you the most important facts.
9	M	18	Yes	B: Talks about the Olympics in the second and how much debt the cities in. A: Talked more about the souvenir.	No		None	
10	M	19	Yes	Type B has more explanation.	Yes	A is not to the point right away.	B	Lots to the explanation of things and is better.
11	F	19	Yes	The type B was spoken more clearly and in more detail.	Yes	Type B the information is more scattered than in type A it was more organized.	None	

12	F	38	Yes	Type B: It sounds as though she is speaking slower and more pronounced.	Yes	Type B: The language accent is more noticeable on 2 tape.	B	She spoke slower on tape and it sound better to my ears.
13	F	26	Yes	The first one was slow and boring. More pausing.	Yes	Different wording. Type A was slower and more pausing.	B	With the pausing and slower voice. A monotone voice. I was more interested in listening to Type B.
14	F	19	Yes	Type A was very wordy, and at some points I got lost and confused in the information. Type B was very clearly stated, and short, but still informative.	Yes	Lost in information in Type A. Main points clear in Type B.		
15	F	19	Yes	First women lawyer 73.8% Type B. Type A – 4% more	Yes	Type A starts with a more brief description to lead you in.	A	It sounded better.
16	F	19	No		Yes	They worded the details different from the first.	None	
17	F	18	Yes	B gave more description in the beginning.	Yes	I did notice a small difference but couldn't really put my finger on it!	None	It was good.

18	F	23	Yes	Different information was given the Olympic building were not mentioned in Type A. Also thing were in a different order.	No	Although the information was put better in B.	B	better information
19	F	18	Yes	Type B was more understandable, and more of a news brief. Type A sounded like a story.	Yes	The first one is simple and easy to understand. There is too much useless-info in the second one.	None	
20	F	31	Yes	Type B easier to understand. The speaker slowed down her reading.	No		None	
21	F	19	Yes	Second one easier to comprehend, straight to the point.	Yes	Type A is more explanatory, gives specific dates and places, and includes talk about government.	None	
22	F	18	Yes	Type A didn't speak very good English and not specific. Type B spoke English better/gave more detail.	Yes	Type B – Explained a little better. Type A – confusing	None	
23	F	19	Yes	In type B, the reporter didn't take as many breaks during her sentences. She also spoke faster. She was easier to understand.	Yes	Type A was harder to comprehend. She had more of an accent when reading.	B	I liked type B, because it was more fluent and easier to understand.

24	F	19	Yes	Type B: Some words were said slowly for better pronunciation.	Yes	Type B was more loud and spoke faster than type A.	None	
25	F	18	Yes	A few things were worded differently some diff. sub topics.	Yes	The Limestone, more about the tourists.	B	I understood it much better.
26	F	19	Yes	Part 2: It gives more details, and was easier to understand.	Yes	More details in part A shows more of a picture.	B	Easier to understand and made its able to got the point of speech!
27	F	18	No		Yes	Type A had more detail. It was longer.	None	
28	F	19	Yes	Type B was more informative.	Yes	The second type is more info and it really tries to get the peoples attention.	None	
29	F	18		Type B seemed informative in what it was saying not just telling like in Type A.	Yes	Type A is more of a list of things and not informative and friendly like type B.	B	B was more friendly and informative.
30	F	20	Yes	Type B was more informative than type A.	Yes	Type B wanted tourism but limit the visitors. Type A did not want to do tourism on the island.	B	Type B was more informative in part I and in part II it was a good idea to do tourism.